

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告13：箱崎遺跡

九州大学埋蔵文化財調査室

<https://hdl.handle.net/2324/7409288>

出版情報：九州大学埋蔵文化財調査室報告. 16, 2026-02-28. Archaeological Heritage Management Office, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



九州大学埋蔵文化財調査室報告 第16集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 13

箱崎遺跡

調査総括報告書



2026

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第16集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 13

箱崎遺跡

調査総括報告書



2026

九州大学埋蔵文化財調査室

序 文

九州大学埋蔵文化財調査室（以下、埋蔵文化財調査室と略称）は、1978年に九州大学春日原地区（現、筑紫キャンパス）開設に際して埋蔵文化財調査を実施するため、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室として始まった。1998年に春日原地区の埋蔵文化財調査が一応終了した後、2000年に全学の埋蔵文化財調査を担当する組織として改編された。しかし、伊都キャンパスの造成に伴う埋蔵文化財調査に関しては、福岡市土地開発公社が伊都キャンパス予定地を先行取得し、福岡市教育委員会文化財部が埋蔵文化財調査を実施したため、埋蔵文化財調査室では学内の埋蔵文化財調査を実施していなかった。この間、埋蔵文化財調査室は、春日原地区の埋蔵文化財調査の資料整理を継続していた。一方、伊都キャンパスの統合移転に際して、箱崎キャンパスは売却予定であったが、その前に建物の解体に伴う埋蔵文化財調査を行う必要があった。関係機関との協議の下、2015年、埋蔵文化財調査室を再編し箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を実施することとした。再編には、新たに助教2名（後3名に増員）、学術研究員1名を採用し、2016年から箱崎地区の埋蔵文化財調査を開始した。開始直後には、発掘調査により1276年創建の元寇防塁跡を発見し、箱崎遺跡内での元寇防塁跡の位置を確定することができた。また、元寇防塁の積石遺構が残っていた地点は、国の史跡として追加指定して保護している。この他、中世箱崎遺跡が箱崎キャンパス跡地の東南部に広がっていたが、この地区の発掘を行うことにより、古代末期から中世にかけての建物跡や井戸などの生活遺構ならびに寺院の可能性のある建物を発見した。また、それら居住区の北側にさらに中世の墓地、近世の墓地が続くことが分かった。特に近世墓地は人骨の遺存状況が良く、形質人類学的な調査も行うことができた。

さらに、2016年度から特別予算を計上して春日原地区埋蔵文化財調査の整理調査を本格的に行い、2020年度末までに総括報告書2冊を出版し、懸案であった春日原地区埋蔵文化財調査事業を終了することが可能となった。なお、春日原地区の遺跡は、御供田遺跡として命名されている。2024年には、九州大学総合研究博物館公開展示により、大野城心のふるさと館で「九大1万年史－発掘された九州大学筑紫キャンパス内の遺跡－」と題して、御供田遺跡の発掘資料が展示され市民に公開された。

一方、箱崎遺跡の埋蔵文化財の発掘調査は2021年度を以て終了した。この間、元寇防塁遺跡を中心に10冊の発掘調査報告書を刊行してきた。こうした発掘調査や報告書刊行に従事されてこられた福田正宏准教授、森貴教助教、三阪一徳助教、齋藤瑞穂助教、福永将大助教、石川健助教には衷心から感謝申し上げたい。発掘終了後の2022年度からは3年間の予定で、箱崎遺跡の遺物整理と発掘調査報告書の刊行を予定した。しかし、中近世箱崎遺跡の遺物出土量は予想外に膨大なものであるとともに、学術的に重要な資料が多く見られた。さらに、発掘調査に従事してきた教員の他大学・他部局への転出により、助教1名での作業には仕事量に限界が存在した。終了を予定していた2024年度末にほぼ中近世箱崎遺跡の発掘調査報告書をすべて刊行する目処がついたが、最後に最終総括報告書が残されることとなった。箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を完全に終了し、その学術的な意義を公開し、発掘資料を九州大学総合研究博物館に移管するため、埋蔵文化財調査室の運営を1年間延長することとした。箱崎キャンパス跡地の発掘調査終了前には、学術研究員として遺物整理ならびに発掘調査報告書刊行に尽力され、発掘調査終了後は助教として一人で埋蔵文化財調査室の運営ならびに発掘調査報告書作成にあたられた谷直子さんには深甚の感謝を申し上げたい。谷直子さんの御努力がなければ、埋蔵文化財調査室の任務を完了することができなかった。また、これまで埋蔵文化財調査室の運営ならびに発掘調査報告書の作成にご協力いただいた学内の考古学関係教員にも感謝するところである。

埋蔵文化財調査室再編後、これまで15冊の発掘調査報告書を刊行してきた。さらに、総括報告書を刊行することにより、箱崎キャンパス跡地の箱崎遺跡の学術的な価値を示し、箱崎遺跡の記録保存の任を完了するものである。九州大学が大学構内の埋蔵文化財調査に関して全力を尽くしたものと認識し、そのことを自負するところである。最後に、埋蔵文化財調査室再編後、様々な便宜を与えていただきご支援をいただいた九州大学統合移転推進本部ならびに九州大学執行部の各位、さらに福岡市経済観光文化局文化財活用部の各位にも感謝申し上げます。

埋蔵文化財調査室は、2025年度末を以て閉室し、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査の業務を終了する。埋蔵文化財調査室の資料は、九州大学総合研究博物館に移管され、研究や展示に供せられる。埋蔵文化財調査室が進めてきた九州大学での埋蔵文化財調査の学術的な成果が、九州大学総合研究博物館で開花することを期待するものである。

2025年3月25日

前九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地において2016年度から2021年度に実施した埋蔵文化財発掘調査に関する研究成果をまとめた総括報告書である。「跡地」までが正式名称だが、本書では煩瑣を避け、「箱崎キャンパス」と表記する。
2. 本書の内容はすでに刊行した『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1～12』の内容を基本としているため、本書と合わせて適宜参照していただきたい。
3. 調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室である。
4. 本書で使用した地形図は、2020年1月に調整した電子地形図25000「福岡」である。
5. 遺構図等におけるX・Yの数値は平面直角座標第Ⅱ系（原点：北緯33度0分0秒、東経131度0分0秒）における座標値（m）を、方位は同座標系の座標北を表す。標高値は東京湾平均海面を基準とする海拔高（m）で表す。
6. 本書で使用する遺構記号は、次のとおりである。
SD：溝、SK：土坑、SP：ピット、ST：墓、SX：その他性格不明遺構等
7. 本書第Ⅶ章で用いている木製品の樹種の同定と保存処理は、一般社団法人 文化財科学研究センターに依頼した。
8. 本書の執筆については、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ章を谷直子が担当したほか、Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ～ⅩⅢの各章については、以下の方々にご寄稿いただいた。ここに記してお礼申し上げます（敬称略）。
Ⅲ・Ⅴ章：福永将大（九州大学総合研究博物館）
Ⅶ章：舟橋京子（九州大学比較社会文化研究院）
Ⅷ章：米元史織（九州大学総合研究博物館）
Ⅸ章：菊地大樹（蘭州大学）
Ⅹ章：伊藤幸司（九州大学比較社会文化研究院）
Ⅺ章：梶嶋政司（九州大学記録資料館）
Ⅻ・ⅩⅢ章：宮本一夫（九州大学総合研究博物館）
9. 表紙デザインは、石井若香葉が担当した。
10. 本書に掲載した調査記録・写真および出土遺物は、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。
11. 本書の編集は、宮本監修のもと谷が担当した。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿図・表目次

I	箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について	谷 直子	
1.	2024・2025年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制		1
2.	2025年度の調査および報告地点について		3
II	箱崎遺跡の地理的・歴史的環境	谷 直子	
1.	はじめに		8
2.	箱崎遺跡における近世の調査		8
III	中世における箱崎砂州先端部	福永将大	
1.	九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡における中世期の調査成果概要		13
2.	特筆すべき遺構		17
3.	箱崎砂州先端部の中世期における土地利用史		26
IV	遺物からみた中世の箱崎キャンパス遺跡の特徴	谷 直子	
1.	はじめに		30
2.	出土瓦について		30
3.	板碑について		36
4.	まとめ		36
V	近世における箱崎砂州先端部	福永将大	
1.	九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡における近世期の調査成果概要		39
2.	特筆すべき遺構		40
3.	箱崎砂州先端部の近世期における土地利用史		51
4.	近世墓地のその後		57
VI	遺物から見た箱崎キャンパス出土近世墓地の特徴	谷 直子	
1.	はじめに		60
2.	九州大学箱崎キャンパス出土の特徴的な遺物		60
3.	まとめ		67
VII	箱崎遺跡近世墓における葬送行為と墓地造営集団の諸特性	舟橋京子	
1.	はじめに		70
2.	方法と対象		70
3.	葬送行為に見られる諸特性の分析		75
4.	箱崎遺跡近世墓における葬送行為の特性と造墓集団の諸特性		83
5.	おわりに		86

VIII	箱崎遺跡出土人骨の研究	米元史織	
1.	はじめに		89
2.	性別・年齢構成		89
3.	頭蓋骨の形質的特徴		90
4.	四肢骨の検討		99
5.	筋骨格ストレスマーカー		100
6.	ハリス線 (Harris Lines)		110
7.	おわりに		112
IX	箱崎遺跡 (HZK2006地点 A 区) 調査出土馬について	菊地大樹	
1.	はじめに		120
2.	A 区 SX01出土馬		120
3.	おわりに		120
X	中世の箱崎	伊藤幸司	
1.	箱崎津		123
2.	宮崎宮をめぐる諸勢力		124
3.	宮崎宮と博多綱首		125
4.	蒙古襲来と箱崎		126
5.	箱崎と博多		127
XI	近世の地蔵松原	梶嶋政司	
1.	地蔵松原の濫觴と地蔵・地蔵堂の由来		131
2.	地蔵松原の変遷		132
3.	地蔵松原の用益		134
XII	箱崎遺跡からみた元寇防塁	宮本一夫	
1.	はじめに		141
2.	元寇防塁の発掘事例		142
3.	箱崎キャンパス跡地の元寇防塁		143
4.	発掘調査からみた元寇防塁		145
XIII	箱崎遺跡埋蔵文化財調査を終えて	宮本一夫	
1.	はじめに		147
2.	調査の経過		147
3.	遺構の変遷		150
4.	おわりに		165

挿図・表目次

I 箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について	
第1図	箱崎遺跡とその周辺…………… 4
第2図	九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド…………… 5
第3図	本報告書の調査地点…………… 6
II 箱崎遺跡の地理的・歴史的環境	
第1図	福岡市による近世の発掘調査地点…………… 9
III 中世における箱崎砂州先端部	
第1図	箱崎キャンパス内遺跡 調査区配置図…………… 14
第2図	箱崎キャンパス内遺跡 井戸分布図…………… 19
第3図	火葬土坑分類案…………… 24
第4図	HZK2006・2007地点 火葬土坑分布図…………… 25
第1表	箱崎キャンパス内遺跡 中世期遺構一覧…………… 15
第2表	箱崎キャンパス内遺跡 井戸分布図…………… 18
第3表	HZK2101地点 掘立柱建物を構成する「柱穴」一覧…………… 20
第4表	箱崎キャンパス内遺跡 火葬土坑一覧…………… 23
IV 遺物からみた中世の箱崎キャンパス遺跡の特徴	
第1図	箱崎キャンパス出土の軒丸瓦…………… 31
第2図	箱崎キャンパス出土の軒丸瓦…………… 32
第3図	箱崎キャンパス出土の軒平瓦…………… 32
第4図	箱崎キャンパス出土の軒平瓦…………… 33
第5図	箱崎キャンパス出土瓦の類例…………… 34
第6図	箱崎キャンパス出土の雁振瓦…………… 35
第7図	箱崎キャンパス出土の鬼瓦…………… 36
V 近世における箱崎砂州先端部	
第1図	箱崎宿とその周辺…………… 40
第2図	HZK1801・2007地点 遺構分布図…………… 41
第3図	HZK2007地点 土坑墓・木棺墓の人骨出土状況…………… 45
第4図	甕棺サイズ分類と例外的な小甕・中甕…………… 46
第5図	甕棺属性バリエーション…………… 47
第6図	甕棺属性相関表…………… 49
第7図	甕棺頭部傾斜角度…………… 50
第8図	甕棺墓出土の銭の種類と出現頻度…………… 51
第9図	HZK1801・2007地点 甕棺分類単位別分布図①…………… 52
第10図	HZK1801・2007地点 甕棺分類単位別分布図②…………… 53
第11図	江戸における埋葬施設の構造と被葬者…………… 55
第12図	庶民墓の埋葬形式…………… 56
第1表	箱崎キャンパス内遺跡 土坑墓・木棺墓一覧…………… 42
第2表	箱崎キャンパス内遺跡 甕棺墓一覧…………… 48
写真1	甕棺口縁部の目跡…………… 47

VI 遺物から見た箱崎キャンパス出土近世墓地の特徴	
第1図	近世副葬品の割合…………… 61
第2図	箱崎キャンパス出土の煙草入れの金具・火入れ容器…………… 62
第3図	箱崎キャンパス出土の火打金…………… 62
第4図	箱崎キャンパス出土の煙草入れに関連する玉…………… 62
第5図	煙草入れ金具の類例と推定復元図…………… 63
第6図	箱崎キャンパス出土の七星板…………… 65
第7図	七星板の類例…………… 66
第8図	位号の割合…………… 67
第1表	樹種同定結果…………… 66
VII 箱崎遺跡近世墓における葬送行為と墓地造営集団の諸特性	
第1図	圓應寺模式図…………… 71
第2図	骨盤が墓の上位から出土している例…………… 71
第3図	HZK1801・2007地点の頭位・軀体正面方向…………… 73
第4図	屈葬における頭位方向…………… 76
第5図	坐葬における軀体正面の方位…………… 76
第6図	調査区と出土人骨の年齢・性別…………… 79
第7図	副葬品保有墓の空間分布1…………… 80
第8図	副葬品保有墓の空間分布2…………… 81
第1表	再開口墓の諸属性…………… 78
第2表	副葬品と性別…………… 79
第3表	副葬品と年齢…………… 79
第4表	歯冠計測値…………… 82
第5表	個体間の相関係数…………… 82
VIII 箱崎遺跡出土人骨の研究	
第1図	頭長幅示数／頭長高示数（男性）…………… 94
第2図	頭長幅示数／上顔示数（男性）…………… 94
第3図	頭蓋10項目主成分分析結果（男性）…………… 95
第4図	頭長幅示数／頭長高示数（女性）…………… 96
第5図	頭長幅示数／上顔示数（女性）…………… 96
第6図	頭蓋9項目主成分分析結果（女性）…………… 97
第7図	上腕骨と大腿骨の長厚示数の比較（男性）…………… 98
第8図	脛骨と大腿骨の長厚示数の比較（男性）…………… 98
第9図	上腕骨と脛骨の長厚示数の比較（女性）…………… 98
第10図	MSMs 対象部位19部位…………… 101
第11-1図	箱崎遺跡出土人骨のMSMsパターン…………… 102
第11-2図	比較資料（縄文と弥生、男性）のMSMsパターン…………… 103
第11-3図	比較資料（中世と近世、男性）のMSMsパターン…………… 103
第11-4図	比較資料（縄文と弥生、女性）のMSMsパターン…………… 104

第11-5図	比較資料（中世と近世、女性）のMSMs パターン……………	104
第12図	19部位のカテゴリカル主成分分析の結果(男性) ……………	106
第13図	19部位のカテゴリカル主成分分析の結果(女性) ……………	106
第14図	カテゴリカル主成分分析の結果（男女）…	107
第1表	箱崎遺跡出土人骨の年齢・性別構成……………	89
第2表	頭蓋骨計測値の比較（男性）……………	92
第3表	頭蓋骨計測値の比較（女性）……………	93
第4表	頭蓋10項目主成分負荷量（男性）……………	95
第5表	頭蓋9項目主成分負荷量（女性）……………	97
第6表	推定身長の比較（男性）……………	97
第7表	推定身長の比較（女性）……………	98
第8表	カテゴリカル主成分分析負荷量（男性）…	106
第9表	カテゴリカル主成分分析負荷量（女性）…	106
第10表	カテゴリカル主成分分析負荷量（男女）…	107
第11表	ハリス線の検討を行った集団……………	110
第12表	ハリス線の出現頻度……………	111
IX 箱崎遺跡(HZK2006地点A区)調査出土馬について		
第1図	HZK2006地点A区SX01出土馬骨……………	122
第1表	HZK2006地点A区SX01出土馬計測値…	121
XI 近世の地蔵松原		
第1表	文化3年の箱崎村抱御山改……………	133
第2表	明治5年の箱崎村抱御林……………	133

Ⅻ 箱崎遺跡からみた元寇防塁		
第1図	元寇防塁の残存地点……………	141
第2-1図	元寇防塁の断面比較……………	142
第2-2図	元寇防塁の断面比較……………	143
第3図	箱崎キャンパス HZK1805地点 ……	144
第1表	元寇防塁と分担国……………	141
Ⅻ 箱崎遺跡埋蔵文化財調査を終えて		
第1図	箱崎キャンパス跡地における元寇防塁推定線と トレンチ配置図……………	149
第2図	箱崎キャンパス跡地における埋蔵文化財調査地 点……………	151
第3図	HZK2006・立試1859地点の木棺墓と土壙墓 ……………	153
第4図	HZK1603地点出土元寇防塁跡 ……	154
第5図	元寇防塁の模式断面図……………	155
第6図	HZK1805地点の元寇防塁と区画溝 ……	155
第7図	中世箱崎遺跡第3段階の区画溝……………	157
第8図	HZK2006・2007地点の火葬土坑 ……	160
第9図	HZK1801・2007地点の甕棺墓・桶棺墓・木棺墓 ……………	162
第10図	九州大学埋蔵文化財調査室全調査地点と史跡元 寇防塁指定範囲……………	164

I 箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について

谷 直子¹⁾

1：九州大学埋蔵文化財調査室

1. 2024・2025年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制

九州大学埋蔵文化財調査室では、本学キャンパスの統合移転事業に伴って、箱崎キャンパスにおける埋蔵文化財発掘調査を2016年度から継続的に実施し、2021年度に発掘調査を完了した。その間30件の発掘調査を行い、2021年度までに元寇防塁の総括報告を含む5冊の発掘調査成果報告書を公開した。

一方、箱崎キャンパスの調査によって見つかった中世箱崎遺跡の北縁部分や近世の墓地については、2022年度から未報告地点の報告書作成作業を始め、2023年度には中世箱崎遺跡の北縁部分に当たる地点の発掘調査成果報告書2冊を刊行している。2024年度には近世を中心とした墓地群の発掘調査成果報告書を作成することとし、出土人骨編も含め3冊の発掘調査成果報告書を刊行した。

ただし、2022年からの助教1名体制で業務がひっ迫したこと、中世箱崎遺跡や近世墓地の発掘調査の成果が当初の予想よりも大きく、整理作業に時間を要したことなどにより、近世墓地の1地点と、総括報告書の刊行が2024年度中に間に合わず、整理作業の進捗などの関係から掲載に至らなかった資料の中にも重要な成果が含まれていることも判明した。

そのため2025年度には未刊行となっていた近世墓地の発掘調査成果報告書1冊、未掲載資料の中から重要なものを報告した発掘報告書の補遺編1冊、中近世の箱崎キャンパスの調査成果について各分野から論考・総括するための総括報告書1冊の合計3冊の報告書を刊行することとした。この総括報告書を以って、九州大学箱崎キャンパスの発掘報告は終了となる。

2024・2025年度の九州大学箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制は以下の通りである。

2024年度

九州大学キャンパス計画及び施設管理委員会

委員長	福田 晋	理事・副学長（キャンパス整備・管理）
副委員長	坂井 猛	キャンパス計画室副室長
委員	徳本 譲	法学研究院長
	横尾 真	システム情報科学研究院長
	中村 雅史	病院長
	寒川 義裕	応用力学研究所長
	尾本 章	芸術工学研究院長
	石橋 達朗	理事（事務局長）
	中村 栄作	企画部長
	武井 久幸	総務部長
	伊藤 宏明	研究・産学官連携推進部長
	下田 力	財務部長
	小林 正浩	施設部長

I 箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について

後藤 成雅	学務部長
中本 浩司	統合移転推進部長
田上 健一	副理事（キャンパス整備）

文化財ワーキンググループ

WG 長	田尻 義了	比較社会文化研究院教授
委 員	清水 和裕	人文科学研究院教授
	藤岡健太郎	大学文書館教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	渡辺 敦史	農学研究院教授
	鶴崎 直樹	キャンパス計画室准教授
	山下 孝宣	施設部施設企画課長
	佐竹 晃佳	総務部総務課長
	安東 裕之	財務部資産活用課長
	今川太一郎	統合移転推進部統合移転推進課長
	鶴岡 洋介	企画部社会共創課長

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委員長	辻田淳一郎	人文科学研究院教授・埋蔵文化財調査室長
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院教授

九州大学埋蔵文化財調査室

室 長	辻田淳一郎
助 教	谷 直子

2025年度

九州大学キャンパス計画及び施設管理委員会

委員長	谷本 潤	理事・副学長（キャンパス整備・管理）
副委員長	坂井 猛	キャンパス計画室副室長
委 員	大西 俊郎	経済学研究院長
	日下部宜宏	農学研究院長
	中村 雅史	病院長
	伊藤 一秀	総合理工学研究所長
	尾本 章	芸術工学研究院長
	吉田 和幸	理事（事務局長）
	中村 栄作	企画部長

武井 久幸	総務部長
永尾 正和	研究・産学官連携推進部長
中田 幸志	財務部長
小林 正浩	施設部長
奥 啓介	学務部長
中本 浩司	統合移転推進部長

文化財ワーキンググループ

W G 長	田尻 義了	比較社会文化研究院教授
委 員	清水 和裕	人文科学研究院教授
	藤岡健太郎	大学文書館教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	渡辺 敦史	農学研究院教授
	鶴崎 直樹	キャンパス計画室准教授
	初井 照寿	施設部施設企画課長
	佐竹 晃佳	総務部総務課長
	北原 和隆	財務部資産活用課長
	今川太一郎	統合移転推進部統合移転推進課長
	鶴岡 洋介	企画部社会共創課長

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委 員 長	辻田淳一郎	人文科学研究院教授・埋蔵文化財調査室長
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	伊藤 幸司	比較社会文化研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院教授
	福永 将大	総合研究博物館助教

九州大学埋蔵文化財調査室

室 長	辻田淳一郎
助 教	谷 直子

2. 2025年度の調査および報告地点について

(1) 調査対象範囲と調査地点

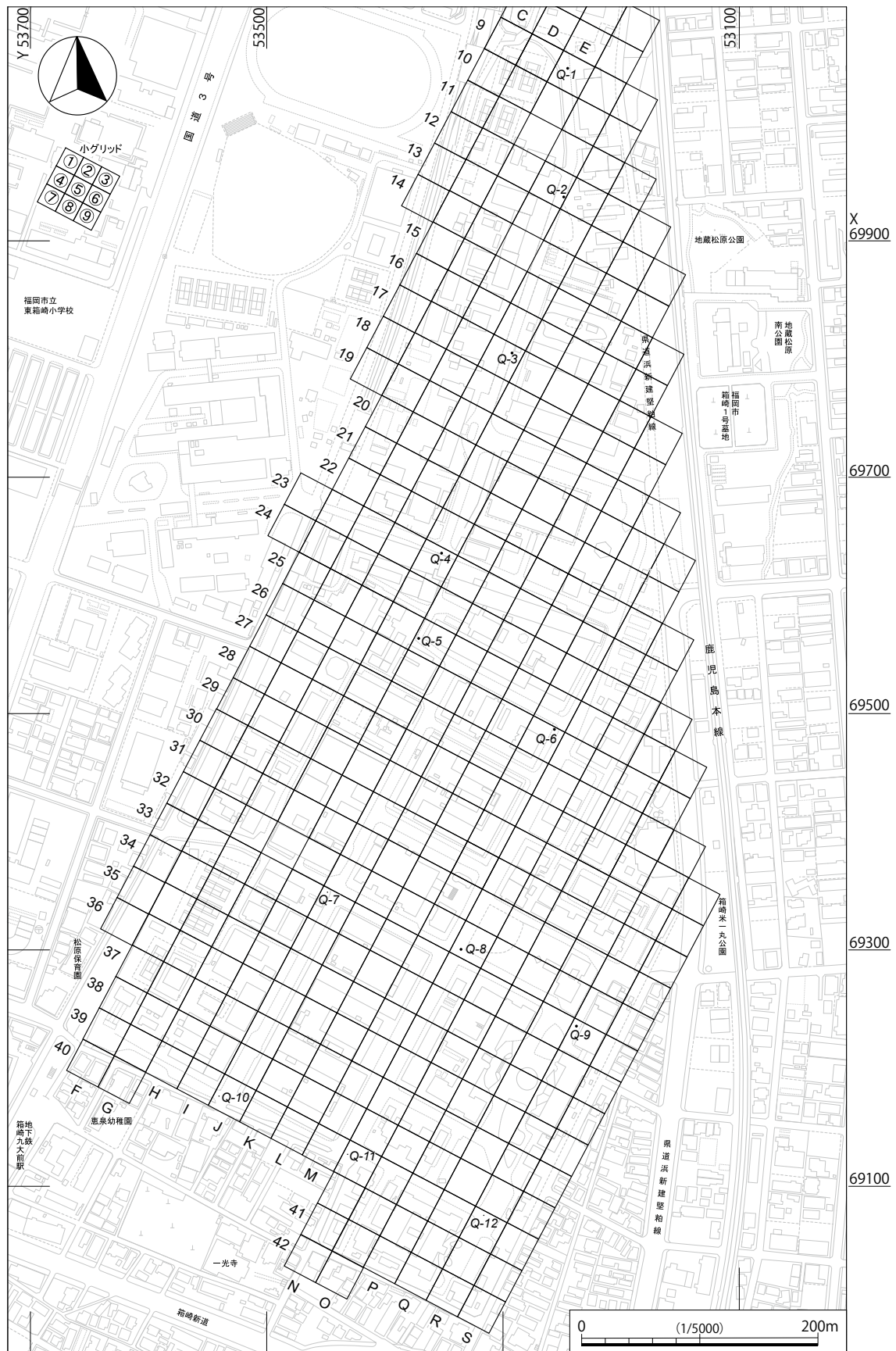
調査対象範囲は箱崎キャンパス東側の理系地区である（第2図）。すでに当該地区には、世界測地系対応の2級基準点3点（Q-1、Q-10、Q-12）3級基準点9点（Q-2、Q-3、Q-4、Q-5、Q-6、Q-7、Q-8、Q-9、Q-11）が確保されており、これらを用いて正確な位置情報の記録を行ってきた。

I 箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について

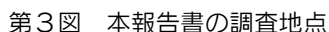


第 1 図 箱崎遺跡とその周辺（『1：25000電子地形図 福岡』を改変）

2. 2025年度の調査および報告地点について



第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド



理系地区全体には西鉄貝塚駅北東に原点を置く30m メッシュの大グリッドが設定されている。北から東に27.767385° 傾くタテのラインと、それに直交するヨコのラインとで形作られており、原点から東へ A ～ S の記号、南へ 1 ～ 42 の数字が与えられている。大グリッドは10m メッシュの小グリッド9つに分割される。北西を起点として上段に①・②・③区、中段に西から④・⑤・⑥区を、同じく

下段に⑦・⑧・⑨区を置く。以下位置を説明する場合 R36-⑨区、R37-③区のように表現する。

調査地点名はこれまで、「箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス」の略号 HZK を頭文字とし、事業年度の下2桁と各年度の調査番号2桁の計4桁の番号からなる名称を与えている。また、箱崎キャンパスにおける解体前の建物群との位置関係を別称として添えてきた。これを踏襲して、本報告書内での調査地点名とする。

(2) 箱崎キャンパスにおける2025年度の埋蔵文化財調査

発掘調査は2021年度で終了しており、2025年度は、立会調査や試掘調査も行われなかった。

(3) 2025年度報告の調査地点

2025年度は、元寇防塁に関する発掘調査地点以外の、総括報告を行うこととした。それに先立ち、既刊の報告書を補うものとして、未掲載の資料のなかで九州大学の歴史に関わる近現代の資料と、既に報告した墓地遺跡に深くかかわる板碑・墓石などの石造物、年代測定や樹種同定の分析結果、紙幅の関係で掲載できていなかった HZK2007・1801地点（九州大学埋蔵文化財調査室報告第12・13集）の遺構・遺物写真を掲載した補遺編を作成した。総括報告書では、主として HZK1602・1703・1801・1804・1903・1904・2003・2006・2007・2101地点を対象とし、これらの地点の発掘成果である中世の集落域・中世から近世にかけての墓域について多角的な視点で検討した論考を掲載し、九州大学箱崎キャンパスにおける埋蔵文化財調査報告の集大成とすることとした。

引用・参考文献

- 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡— HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2023a『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告6 箱崎遺跡— HZK1703・1804・2003地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第9集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2023b『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告7 箱崎遺跡— HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2024『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡— HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告8 箱崎遺跡— HZK1602・2006地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第11集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告9 箱崎遺跡— HZK2007地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告10 箱崎遺跡— HZK1801地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福田正宏・森貴教（編）2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡— HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡— HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2022『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡— HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集 九州大学埋蔵文化財調査室

Ⅱ 箱崎遺跡の地理的・歴史的環境

谷 直子¹⁾

1：九州大学埋蔵文化財調査室

1. はじめに

九州大学埋蔵文化財調査室では箱崎遺跡の報告書をすでに11冊刊行している。箱崎遺跡の歴史的環境については各報告書にその都度記載され、三阪一徳「周辺の遺跡」(福田・森編 2018)、齋藤瑞穂「箱崎遺跡の歴史的環境」(三阪・谷編 2019)、齋藤瑞穂「元寇前夜の北部九州・概観」「元寇時における箱崎の諸相」(齋藤編 2020)、福永将大「箱崎地区における元寇防塁研究」(福永編 2021)として報告されている。また、発掘調査の過程で元寇防塁が発見、国指定史跡に追加指定され、その成果については『箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』(福永編 2022)として刊行された。中世の調査と地理的変遷に関しても谷直子「中世の箱崎遺跡」(谷編 2023a)として報告している。すでに行われた報告を踏まえ、新たに地理的・歴史的環境について記述することは困難であり、上記の報告に不足している近世の箱崎遺跡の発掘調査について、簡潔に述べることにする。

2. 箱崎遺跡における近世の調査

箱崎遺跡における発掘調査は、九州大学埋蔵文化財調査室による箱崎キャンパスの調査を除くと、福岡県教育委員会によって福岡県粕屋合同庁舎建設に伴う発掘調査が実施されたほか、福岡市埋蔵文化財課による調査が第125次まで行われている。そのうち近世の遺構が検出されたのは、26地点である。井戸や土坑・溝などが検出された近世の集落と思われる地点と近世墓地の地点とがある。近世と報告されている遺構や遺物が出た地点以外にも、近世陶磁器に関する報告は省略されることもあるので、近世の遺物が出土した地点は、実際にはもっと多いと考えられる。

1) 近世集落と思われる地点 (第1図)

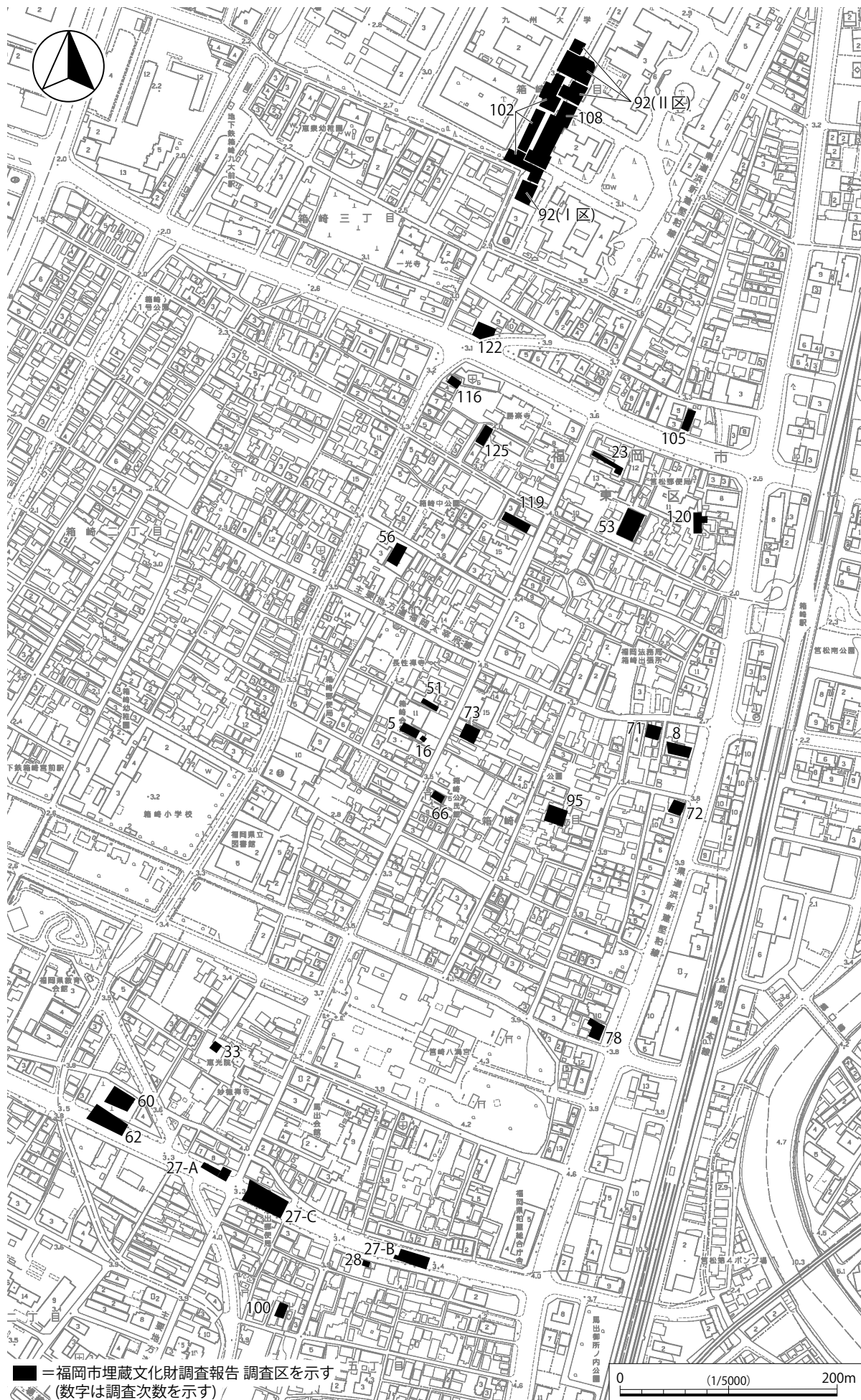
近世集落と思われる調査地点は福岡市調査の、第5・8・10・16・23・27・28・33・53・56・66・71・72・73・78・92・95・100・102・108・116・119・120・125次調査地点である。

井戸

このうち、第5・8・10・23・27・53・73・78・92・102・108次調査地点からは井戸が検出されている。井戸は瓦組井戸が多いが石組井戸や木製の井筒のみが確認されたものもある。井戸の中からは唐津焼や肥前染付などの肥前系陶磁器が出土していることが多い。第78次調査地点のSE001からは現川焼が出土しており、17世紀から18世紀前半頃の遺構である。時期が判明しているものは17世紀から江戸後期、あるいは近代まで存続していたものもある。

溝

第8・27・53・78・95・116・120次調査地点からは溝が検出されている。多くの溝が現在の町割りと平行と報告されている。第8次調査地点の溝からは18世紀代の肥前陶磁器などの遺物が出土している。第53次調査地点では、近世の溝が2条検出されている。他の浅い溝から出土している遺物も近世



第1図 福岡市による近世の発掘調査地点

のもので、2条の溝に平行かあるいは直交すると報告されており（藏富士編 2008）、第120次調査地点ではSD-001が検出され、第53次調査地点の近世溝SD065と時期・方向・位置・規模が類似し、連続あるいは関連する溝と見られる（赤坂編 2024）。これらの溝は現在の今福町の北境にほぼ重なり、江戸時代初めの唐津街道付け替え（1663年）以降、宿場町「箱崎宿」として整備されたことと、時期的に一致する（赤坂編 2024）と指摘されており、現在の町割りとの関係性や近世の箱崎宿の様相を明らかにするうえで重要である。

土坑・竪穴遺構

第5・8・10・23・27・28・53・56・71・92次調査地点からは土坑・竪穴遺構が検出されている。いずれも肥前系陶磁器が出土することが多い。第56次調査地点の廃棄土坑SK035からは陶磁器が一括出土しており、上野焼・波佐見焼・肥前系染付碗など19世紀に使用された陶磁器の組み合わせの好例と報告されている（赤坂編 2009）。

道路・敷居遺構

第78次調査地点では、道路状遺構が検出されている。この道路状遺構は井戸SE001の上面を整地して構築している。SE001は現川焼が出土しており、17世紀から18世紀前半頃の遺構と考えられ、その上面の道路状遺構は近世以降の遺構と判断されている（中尾編 2018）。

第125次調査地点からは、敷石遺構が検出され、肥前系染付碗・皿が出土している。

ピット・その他

第8次調査地点からは肥前系染付碗の出たピット、第92次調査地点からは17世紀後半のピットが報告されている。

第16・33・72・100次調査地点からは近世の遺構・遺物が検出されたことが報告されている。

2) 近世墓地（第1図）

第51・60・62次調査地点は近世墓地の調査である。

第51次調査地点では近世墓2基が検出されており、甕棺には須恵質の甕を用いている。上面が削平されており、甕の全形は分からない。この調査区は戦前まで寺域であり、調査区内には素掘りの掘込みが集中しており、骨片が混在していたため、土壙墓が多くあったと考えられる。第51次調査地点の南側には第5・16次調査地点があり、墓地に隣接して生活域があったことが分かる。

第60・62次調査地点は妙徳禅寺の共同墓地の調査である。道路の供用に伴い墓地の改葬が必要となったための調査で、墓地移転が行われている。第60・62次調査地点は本来一つの墓域であったが、工事の進捗や墓地の移転のため2地点に分けて調査されている。

第60次調査地点からは216基以上の墓が報告されている。江戸後期から明治初期の集合墓地で、埋葬形態は箱形の木棺墓1基のほか、桶棺墓、甕棺墓がある。甕棺墓の甕の形態は、箱崎キャンパスの発掘調査HZK1801・2007地点で出土するものと同様で、土師皿・六道銭・鉢・毛抜・キセルなど、副葬品も良く類似している。報告によると六道銭6枚副葬が多く、216基中94基と約半数の墓に副葬されている（小林編 2012）。

第62次調査地点からは、400基以上の土坑・ピットが検出され、そのうち29基が確実な土壙墓として報告され、40基前後の甕棺墓も検出されている。墓地の時期は大部分が18世紀以降の造営とされ、土師皿2枚セットの副葬が多くみられ、毛抜・鉢など金属製品を副葬する墓もある。一部に柄鏡や銅鉦（仏具）が副葬された墓も検出されている（久住編 2010）。

近世の箱崎遺跡は井戸や土坑など生活に関わる遺構が残存しており、溝や道路状遺構など「箱崎

宿」を示唆する遺構も見られる。近世墓の調査からは当時の人々の社会階層や生活習俗の一端が明らかにされている。また、こうした近世の様相の解明も今後の重要な課題と考えられ、その問題意識のもと、九州大学埋蔵文化財調査室も近世墓の調査を行い、多大な成果をあげている。

引用・参考文献

- 赤坂亨（編）2009『箱崎37—箱崎遺跡第56次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1047集 福岡市教育委員会
- 赤坂亨（編）2024『箱崎71—箱崎遺跡第120次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1515集 福岡市教育委員会
- 阿部泰之（編）2022『箱崎64—第92次・第102次・第108次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集 福岡市教育委員会
- 荒牧宏行（編）2018a『箱崎53—箱崎遺跡第71次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1343集 福岡市教育委員会
- 荒牧宏行（編）2018b『箱崎54—箱崎遺跡第72次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1344集 福岡市教育委員会
- 井上繭子（編）2017『箱崎49—箱崎遺跡第73次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1316集 福岡市教育委員会
- 今井隆博（編）2023『箱崎69—箱崎遺跡第116次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1486集 福岡市教育委員会
- 岩熊拓人（編）2024『箱崎74—箱崎遺跡第125次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1518集 福岡市教育委員会
- 久住猛雄（編）2010『箱崎40—第62次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集 福岡市教育委員会
- 藏富士寛（編）2008『箱崎32—箱崎遺跡第53次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第996集 福岡市教育委員会
- 小林義彦（編）2012『箱崎44—箱崎遺跡第50・60次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1163集 福岡市教育委員会
- 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 田上勇一郎（編）1998『箱崎6—箱崎遺跡第10次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集 福岡市教育委員会
- 田上勇一郎（編）1999『箱崎7—箱崎遺跡第8次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集 福岡市教育委員会
- 田中健（編）2024『箱崎70—箱崎遺跡第119次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1514集 福岡市教育委員会
- 田中壽夫（編）1992『箱崎3—箱崎遺跡群第5次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集 福岡市教育委員会
- 谷直子（編）2023『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告6 箱崎遺跡—HZK1703・1804・2003地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第9集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2023『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告7 箱崎遺跡—HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2024『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡—HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告8 箱崎遺跡—HZK1602・2006地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告11集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告9 箱崎遺跡—HZK2007地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告10 箱崎遺跡—HZK1801地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 中尾裕太（編）2018『箱崎56—箱崎遺跡第78次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1346集 福岡市教育委員会

II 箱崎遺跡の地理的・歴史的環境

- 中村啓太郎（編）2004『箱崎18—箱崎遺跡第27次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集 福岡市教育委員会
- 中村啓太郎（編）2011『箱崎42—箱崎遺跡第28次・第33次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1127集 福岡市教育委員会
- 長家伸（編）2002『箱崎12—箱崎遺跡第17次・第23次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第704集 福岡市教育委員会
- 福田正宏・森貴教（編）2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2022『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 三浦悠葵（編）2021『箱崎62—箱崎遺跡第100次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1427集 福岡市教育委員会
- 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 山崎龍雄（編）2012『箱崎45—箱崎遺跡第66次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1164集 福岡市教育委員会
- 屋山洋（編）2007『箱崎31—箱崎遺跡第51次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第952集 福岡市教育委員会
- 屋山洋（編）2021『箱崎60—箱崎遺跡第95次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1425集 福岡市教育委員会
- 力武卓司（編）2002『箱崎11—箱崎遺跡第16次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第703集 福岡市教育委員会

Ⅲ 中世における箱崎砂州先端部

福永将大¹⁾

1：九州大学総合研究博物館

1. 九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡における中世期の調査成果概要

箱崎遺跡は、延長元（923）年に創建された筥崎宮を中核として、中世には港町として博多湾の国際性の一翼を担ったとされる集落遺跡である。これまで福岡市教育委員会が実施してきた発掘調査により得られた考古学的データは膨大であり、それらに基づいた調査研究によって、当該遺跡の時空間的変遷が明らかにされてきた（池崎 1988；榎本 2003・2008；佐藤 2013；中尾 2018・2024；福永 2022a）。

本稿で対象とする九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡（以下、箱崎キャンパス内遺跡）は、この箱崎遺跡の北端部に位置している。第1表は、箱崎キャンパス内遺跡で確認された中世期の遺構をまとめたものである。九州大学埋蔵文化財調査室が実施した発掘調査成果だけでなく、福岡市教育委員会が実施した発掘調査成果（阿部編 2022；本田編 2023）も加えた（各調査地点の位置は第1図参照のこと）。この表をもとに、中世期の箱崎砂州先端部における土地利用史について概観しておきたい。なお、箱崎キャンパス内遺跡の元寇防塁については、既に総括報告書を刊行して、その調査研究成果をまとめている（福永編 2022；福永 2024）。ここでは、元寇防塁以外に関する調査研究成果について論じることとする。

まず、箱崎キャンパス内遺跡で検出された遺構の多くは、12世紀後半以降の所産であることがわかる。それより古い時期の遺構として報告されているものは、HZK1903地点 C2区 SK57（11世紀後半～12世紀前半）、同地点同区 SX88（12世紀前半以前）、同地点同区 SE140（12世紀後半以前）、HZK2101地点 SK210（11世紀後半～12世紀前半）、の4つの遺構のみであり、その数は極めて少ない¹⁾。包含層から11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる玉縁口縁の白磁碗なども見つかったが、箱崎砂州先端部において人々の活動が活発化するのには、12世紀後半以降になってからとみなすべきであろう。

12世紀後半以降になると遺構は増加し、土坑・柱穴・井戸・溝・墓などその種類も多岐にわたる。HZK1804地点 C区や HZK2003地点 D区などでは、遺構検出面が複数確認されており、遺構の構築と整地が複数回にわたって繰り返し行われた可能性が指摘されている（谷編 2023a）。また、HZK2101地点では559基もの遺構が確認されており（谷編 2023b）、活発な土地利用のあり様が窺える。

12世紀後半～13世紀前半の比較的古手の遺構は、遺跡南側に偏っており、遺跡中央付近に位置する HZK2007地点より北側では確認できない。13世紀後半以降になると、遺跡中央付近や元寇防塁周辺（HZK1805地点など）といった、それまで見られなかったエリアにおいても遺構が確認されるようになる。しかし、遺構の分布が遺跡南側に偏る傾向は、13世紀後半以降においても引き続き認められる。そもそも、遺跡北側では元寇防塁以外の遺構検出例は稀で、北に行くほど遺物の出土量も減少する。箱崎砂州先端部における人々の活動は、その南側を中心に展開し、北側にはあまり及んでいなかったものと考えられる。

以下、箱崎キャンパス内遺跡で確認できた中世期の遺構のうち、当該地域の土地利用を考える上で重要と思われる、井戸、掘立柱建物、土坑墓・木棺墓、火葬土坑について詳述する。



第1表 箱崎キャンパス内遺跡 中世期遺構一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考	地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考
HZK1703	SK93	土坑	12世紀後半～13世紀初頭		HZK1903 B区	SE59	井戸	15世紀	木桶（スギ）
	SK04	土坑	12世紀後半～13世紀前半			SE62	井戸	15世紀	木桶
	SK51	土坑	13世紀		HZK1903 C1区	SX25	土坑	13世紀～14世紀前半	
	SX67	土坑	13世紀～14世紀前半			SK06	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK65	土坑	13世紀前半～14世紀初頭		HZK1903 C2区	SK57	土坑	11世紀後半～12世紀前半	
	SP103	ビット	13世紀後半～14世紀初頭			SX88	土器集積	12世紀前半以前	
	SK10	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SE140	井戸	12世紀後半以前	SD62形成以前
	SK48	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SK90	土坑	12世紀後半	
	SK49	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SK31	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	
	SX20	石組	15世紀後半～16世紀			SK65	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	
HZK1704	SK01	土坑	14世紀～15世紀中葉			SK73	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	
	SK02	土坑	14世紀～16世紀			SK51	土坑	12世紀後半～13世紀前半	
	SK03	土坑	14世紀～16世紀			SD55	溝	12世紀後半～13世紀前半	
	SK05	土坑	14世紀～16世紀			SD62	溝	12世紀後半～13世紀前半	
	SK06	土坑	14世紀～16世紀			SK49	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
						SK50	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
HZK1802	SD122	溝	12世紀後半～13世紀前半	※年代注意		SK59	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SD103	溝	13世紀後半～14世紀前半		HZK1904	SK101	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
HZK1803	SD02	溝	中世後期			SK29	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
HZK1804 B区	SD30	溝	12世紀後半			SK79	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK09	土坑	12世紀後半			SK123	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK12	土坑	12世紀後半			SK89	土坑	14世紀以降	
	SK08	土坑	13世紀前半			SE55	井戸	13世紀後半～14世紀	
	SK06	土坑	13世紀前半以降			SK02	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK11	土坑	13世紀？			SK07	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK20	土坑	15世紀～16世紀	SK19・SK21に切られる		SK14	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
						SK21	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
HZK1804 C区	SK35	土坑	12世紀後半			SK31	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK44	土坑	12世紀後半			SK01	土坑	14世紀以降	
	SK49	土坑	12世紀後半			SP25	ビット	14世紀後半以降	
	SE14	井戸	12世紀後半～14世紀	2基が切り合う。木桶（スギ）		SK09	土坑	15世紀後半以降	嘉祐通寶（初鑄1056年）
					HZK2003 D区	SK45	土坑	15世紀後半以降	
HZK1805	SD53	溝	14世紀前半			SK4070	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	
	SK13	土坑	14世紀前半	SE14を切る		SP4142	ビット	12世紀後半～13世紀初頭	
	SD24	溝	14世紀後半以降			SD4073	溝	12世紀後半～13世紀前半	
	SD15	溝	14世紀			SE4015	井戸	12世紀後半～14世紀後半以降	3基が近接。いずれも木桶（スギ）
	SK06	土坑	14世紀以降			SE4161	井戸	12世紀後半～15世紀前半	3基が近接。井戸枠なし
HZK1901 A区	SK04	土坑	14世紀末以降			SK4158	土坑	13世紀後半～14世紀初頭	
	SD13	溝	15世紀			SD4144	溝	13世紀後半～14世紀前半	
	SP05	ビット	中世後半代			SK4059	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SK06	土坑	13世紀以降			SI4048	竪穴	13世紀後半～14世紀前半	
	SK01	土坑	15世紀			SK4153	土坑	13世紀	
HZK1901 B区	SK10	土坑	13世紀以降			SK4022	土坑	14世紀以降	
	SK16	土坑	13世紀後半以降	SK17に切られる		SP4033	柱穴	14世紀以降	礎石
	SK18	土坑	13世紀中頃～14世紀前半			SI4004	竪穴	14世紀後半以降	土師器大量廃棄
	SK17	土坑	14世紀以降	SK16を切る		SK4018	土坑	14世紀後半以降	
	SK09	土坑	14世紀～15世紀			SD4075	溝	14世紀後半以降	
HZK1901 C区	SK13	土坑	14世紀～15世紀		HZK2003 E区	SK21	土坑	12世紀後半	
	SK15	土坑	14世紀～15世紀	SK14に切られる		SK63	土坑	12世紀後半	
	SK14	土坑	14世紀～15世紀	SK15を切る		SK51	柱穴	13世紀以降	礎石
	SD033	溝	15世紀～16世紀	SD046を切る		SK65	土坑	13世紀後半～14世紀前半	
	SD046	溝	15世紀～16世紀	SD033に切られる		SK49	柱穴	14世紀	礎石
HZK1901 E区	SD069	溝	15世紀～16世紀	SK019に切られる		SK70	土坑	14世紀以降	
	SK019	土坑	15世紀～16世紀	SD069を切る		SK31	土坑	14世紀後半以降	
	SK081	土坑	15世紀～16世紀	SK082・SK094・SK080を切る		SK61	土坑	14世紀後半～15世紀以降	SK60・62・75を切る
	SX031	石組	15世紀～16世紀？			SK60	土坑	14世紀後半～15世紀	
	SK11	土坑	14世紀後半～15世紀中頃	貝出土		SK62	土坑	14世紀後半～15世紀	
HZK1903 A区	SE19	井戸	15世紀～16世紀	大正・昭和まで残置？		SK75	土坑	14世紀後半～15世紀	
	SK14	土坑	15世紀～16世紀	貝出土		SD69	溝	16世紀後半以降	近世陶磁も出土
	SD01	溝	15世紀後半～16世紀	SK02に切られる	HZK2006 A区	ST02	木棺墓	12世紀後半～13世紀初頭	
	SK02	土坑	15世紀後半～16世紀	SD01を切る		SK12	土坑	13世紀後半～14世紀初頭	
					HZK2006 G区	SK18	土坑	14世紀	
HZK1903 B区	SK07	土坑	13世紀後半以降			ST35	木棺墓	14世紀前半	
	SE003	井戸	13世紀後半以降	木桶		SK02	土坑	14世紀前半	
	SE006	井戸	13世紀後半以降	木桶	HZK2007	ST45	木棺墓	14世紀後半以降	洪武通寶（初鑄1368年）、天禧通寶（初鑄1017年）
	SE001	井戸	13世紀後半～15世紀	木桶					元祐通寶（初鑄1086年）、祥符元寶（初鑄1008年）、洪武通寶（初鑄1368年）
	SE005	井戸	15世紀～16世紀	木桶		ST110	土坑墓？	14世紀後半以降	
	SK55	柱穴	12世紀	礎石					
	SE64	井戸	12世紀後半～13世紀前半	木桶（スギ）	HZK2101	SK210	土坑	11世紀後半～12世紀前半	
	SK71	土坑	13世紀～14世紀前半			SK23	土坑	12世紀後半	
	SP25	ビット	13世紀後半			SK518	土坑	12世紀後半	
	SE67	井戸	13世紀後半	木桶（スギ）		SK520	土坑	12世紀後半	掘立柱建物SB-H構成要素
	SE68	井戸	13世紀後半	木桶					
	SE65	井戸	13世紀後半以降	木桶					
HZK1903 B区	SE58	井戸	13世紀後半～15世紀後半	木桶（スギ、針葉樹）					
	SE60	井戸	14世紀～15世紀	木桶					
	SK72	土坑	14世紀～15世紀以降	SE62を切る					
	SK73	土坑	14世紀～15世紀以降	SE62を切る					
	SK74	土坑	14世紀～15世紀以降	SE62を切る					
	SE66	井戸	14世紀後半～15世紀前半？	木桶（スギ）					

第1表 箱崎キャンパス内遺跡 中世期遺構一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考	地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考
市92次 I 区	SK63	土坑	12世紀後半～13世紀初頭		市92次 I 区	SD159	溝	12世紀後半	天聖元寶（初鑄1023年）
	SK209	土坑	12世紀後半～13世紀初頭			SD177	溝	12世紀後半	祥符元寶（初鑄1008年）
	SK364	土坑	12世紀後半～13世紀初頭			SE195	井戸	12世紀後半～13世紀後半	スギ板目材結構。SE193に切られる
	SK391	土坑	12世紀後半～13世紀初頭			SP141	ビット	13世紀前半	
	SP553	ビット	12世紀後半～13世紀初頭	掘立柱建物SB-K構成要素		SP074	ビット	13世紀前半	
	SI148	竪穴	12世紀後半～13世紀初頭	掘立柱建物SB-K構成要素		SP075	ビット	13世紀前半	
	SK452	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	掘立柱建物SB-K構成要素		SK153	礫敷土坑	13世紀前半	板碑（人物像彫込）
	SK540	土坑	12世紀後半～13世紀初頭	掘立柱建物SB-K構成要素		SE190	井戸	13世紀前半	スギ板目材結構
	SK18	土坑	13世紀			SK160	土坑	13世紀前半	
	SK22	土坑	13世紀	貝溜り		SP085	ビット	13世紀前半？	
	SK295	土坑	13世紀			SP046	ビット	13世紀中頃	
	SD03	溝	13世紀前半	貝溜り		SE191	井戸	13世紀中頃	スギ板目材結構
	SK86	土坑	13世紀後半以降	掘立柱建物SB-A構成要素		SK135	不定形土坑	13世紀後半～14世紀初頭	
	SK531	土坑	13世紀～14世紀前半			SK49	方形土坑	13世紀後半～14世紀初頭	
	SP539	ビット	13世紀～14世紀前半			SR152	木棺墓	13世紀後半～14世紀初頭	陶磁器、鉄製短刀。幅58×長さ168cm
	SD09	溝	13世紀後半～14世紀前半			SE193	井戸	13世紀後半～14世紀初頭	スギ板目材結構
	SK21	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SE155	井戸	13世紀後半～14世紀初頭？	スギ板目材結構。硯
	SK36	土坑	13世紀後半～14世紀前半	熙寧元寶（初鑄1068年）		SK137	土坑	13世紀後半～14世紀初頭？	SE035・155の掘り方。慶元通寶（初鑄1201年）、紹定通寶（初鑄1228年）
	ST58	墓坑	13世紀後半～14世紀前半	骨片。掘立柱建物SB-A構成要素		SE035	井戸	13～15世紀初頭	スギ板目材結構。永樂通寶（初鑄1408年）が下限？
	SK89	土坑	13世紀後半～14世紀前半	礫。銅還。掘立柱建物SB-A構成要素		SK023	不定形土坑	14世紀	
	SE93	井戸	13世紀後半～14世紀前半	木桶		SK026	円形土坑	16世紀中頃	寛永通寶（初鑄1636年）
	SK117	土坑	13世紀後半～14世紀前半		市92次 II 区	SK044	土師器埋納遺構	12世紀中頃	
	SK489	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SP077	ビット	13世紀中頃	
	SK275	土坑	13世紀後半～14世紀前半	掘立柱建物SB-E構成要素		SP075	ビット	13世紀後半	
	SK50	土坑	14世紀			SE064	井戸	13世紀後半	4基切り合い。いずれもスギ板目材結構
	SD235	溝	14世紀以降	出土遺物は12世紀後半～13世紀初頭だが、SE367を切る		SE039	井戸	13世紀後半～14世紀初頭	スギ板目材結構
	SK245	土坑	14世紀以降			SP012	ビット	14世紀	
	SK252	土坑	14世紀以降	瓦多い		SP078	ビット	14世紀後半	
	SE367	井戸	14世紀以降	石組。SD235・SK380に切られる		SK046	土坑	15世紀	
	SP466	ビット	14世紀以降			SK042	土坑	15世紀後半～16世紀	
	SK508	土坑	14世紀以降			SK040	土坑	15世紀後半～16世紀初頭	
	SK528	土坑	14世紀以降			SK020	土坑	16世紀	
	SP409	ビット	14世紀以降	掘立柱建物SB-H構成要素		SE063	井戸	16世紀	上部石組、スギ板目材結構。板碑・五輪塔・宝篋印塔
	SK421	土坑	14世紀後半以降			SK038	土坑	16世紀初頭	
	SK507	土坑	14世紀後半以降			SK036	土坑	16世紀初頭	
	SK417	土坑	14世紀後半以降	掘立柱建物SB-I構成要素		SK022	円形土坑	16世紀前半	巴文軒丸瓦
	ST33	墓坑	15世紀			SP055	ビット	16世紀前半？	
	SE37	井戸	15世紀～16世紀	石組	市102次 1区	SK1002	土坑	16世紀	
	SK360	土坑	15世紀後半			SK1004	石組土坑	16世紀	
	SK200	土坑	15世紀後半以降	石組	市102次 2区				柱穴群
	SK323	土坑	15世紀後半以降		市102次 3区	ST3115	木棺墓	12世紀後半	礎石あり
	SK338	土坑	15世紀後半以降			ST3116	木棺墓	12世紀後半	
	SK543	土坑	15世紀後半以降		市102次 4区	SD4035	溝	16世紀	
	SK416	土坑	15世紀後半以降	掘立柱建物SB-I構成要素		ST4005	木棺墓	16世紀	平面円形。墓坑底面に礫。ST4004を切る
市92次 I 区	SK228	土坑	15世紀後半～16世紀	掘立柱建物SB-D構成要素	市102次 4区	ST4006	木棺墓	16世紀	平面長方形。墓坑底面に礫。ST4008に先行。埋土に炭・焼土・粘土塊・被熱痕跡のある石材→火葬土坑か？
	SK390	土坑	15世紀後半～16世紀			ST4007	木棺墓	16世紀	平面隅丸長方形。墓坑埋土中に礫。ST4005・4006に切られる
	SK413	土坑	15世紀後半～16世紀						
	SP444	ビット	15世紀後半～16世紀	掘立柱建物SB-H構成要素					
	SK491	土坑	15世紀後半～16世紀	掘立柱建物SB-K構成要素					
	SP069	ビット	12世紀後半						
	SK031	不定形土坑	12世紀後半						
	SK106	不定形土坑	12世紀後半						
	SK094	不定形土坑	12世紀後半						
	SE196	井戸	12世紀後半	SE195・193・192に切られる（切り合いでは最も古い）					
市92次 I 区	SD162	溝	12世紀後半						
	SD163	溝	12世紀後半						

第1表 箱崎キャンパス内遺跡 中世期遺構一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考	地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	備考
市102次 4区	ST4008	木棺墓	16世紀	平面隅丸長方形。磔なし。ST4006・4009を切る（木棺墓中最も新しい）	市108次	SE01	井戸	15世紀前半	木桶
	ST4009	木棺墓	16世紀		市113次 2b区	SK209	木棺墓	12世紀後半	不整形。湖州鏡、刀子、鉄製鉄
市102次 5区	ST5040	木棺墓	12世紀後半	平面長方形		SD208	溝	14世紀後半～15世紀	
市108次	SR03	木棺墓	12世紀後半	平面隅丸長方形		SK207	土坑	14世紀後半～15世紀	
	SK13	土坑	13世紀後半～14世紀前半			SK205	池状遺構	15世紀～16世紀	板碑多数
	SE03	井戸	13世紀後半～14世紀前半？	木桶	市113次 3区	SX321	土坑墓？	13世紀代	磔
	SE02	井戸	14世紀末～15世紀初頭？	木桶。SE01に切られる	市118次 9区	SD9010	溝	中世後期～近世初頭	

2. 特筆すべき遺構

(1) 井戸

第2表は、箱崎キャンパス内遺跡で検出された井戸を一覧表にしてまとめたものである。全部で53基見つかった井戸のうち、桶組の井戸が圧倒的多数を占めるが、5基の石組井戸（HZK2101地点 SE367・SE37、市92次Ⅱ区 SE063、市102次3区 SE3001、市102次6区 SE6010）と、4基の瓦組井戸（市102次2区 SE2117、市102次4区 SE4070、市108次 SE04、市113次1区 SE01）も確認できる。九州大学埋蔵文化財調査室が実施した発掘調査において、井戸主体部の木桶が残っていたものについては、木材を採取して放射性炭素年代測定と樹種同定を実施しており（谷編 2023b）²⁾、その結果は第2表にも示している。桶に用いられた木材の樹種はいずれもスギのようで、福岡市教育委員会が調査した木桶もスギ材と報告されている（市92次Ⅰ区・Ⅱ区、阿部編 2022）。

箱崎キャンパス内遺跡で見つかった井戸のうち、最も古いものは HZK1903地点 C2区の SE140である（谷編 2023b）。時期を特定できる遺物は出土していないものの、12世紀後半～13世紀前半の SD62に切られている。そのほか12世紀後半以前の可能性がある井戸は、HZK1903地点 B区の SE77で、木桶の放射性炭素年代測定の結果、10～11世紀代の年代値が出ている。この2基以外は全て12世紀後半以降の井戸であり、15～16世紀まで継続的に掘られているようだ。

遺跡内での井戸分布を示したものが第2図である。市113次1区の SE01（瓦組井戸）のみ遺跡北側から見つかっているが、それ以外は全て第2図に示した遺跡南側に分布していることがわかる。また、第2表・第2図からは、狭い範囲に時期の異なる井戸が複数切り合って検出される状況を読み取ることができる。例えば、HZK1903地点 B区では、12世紀後半～15世紀にかけての6基の井戸（SE60・SE61・SE62・SE64・SE65・SE66）が、狭い範囲内で切り合って検出されている。

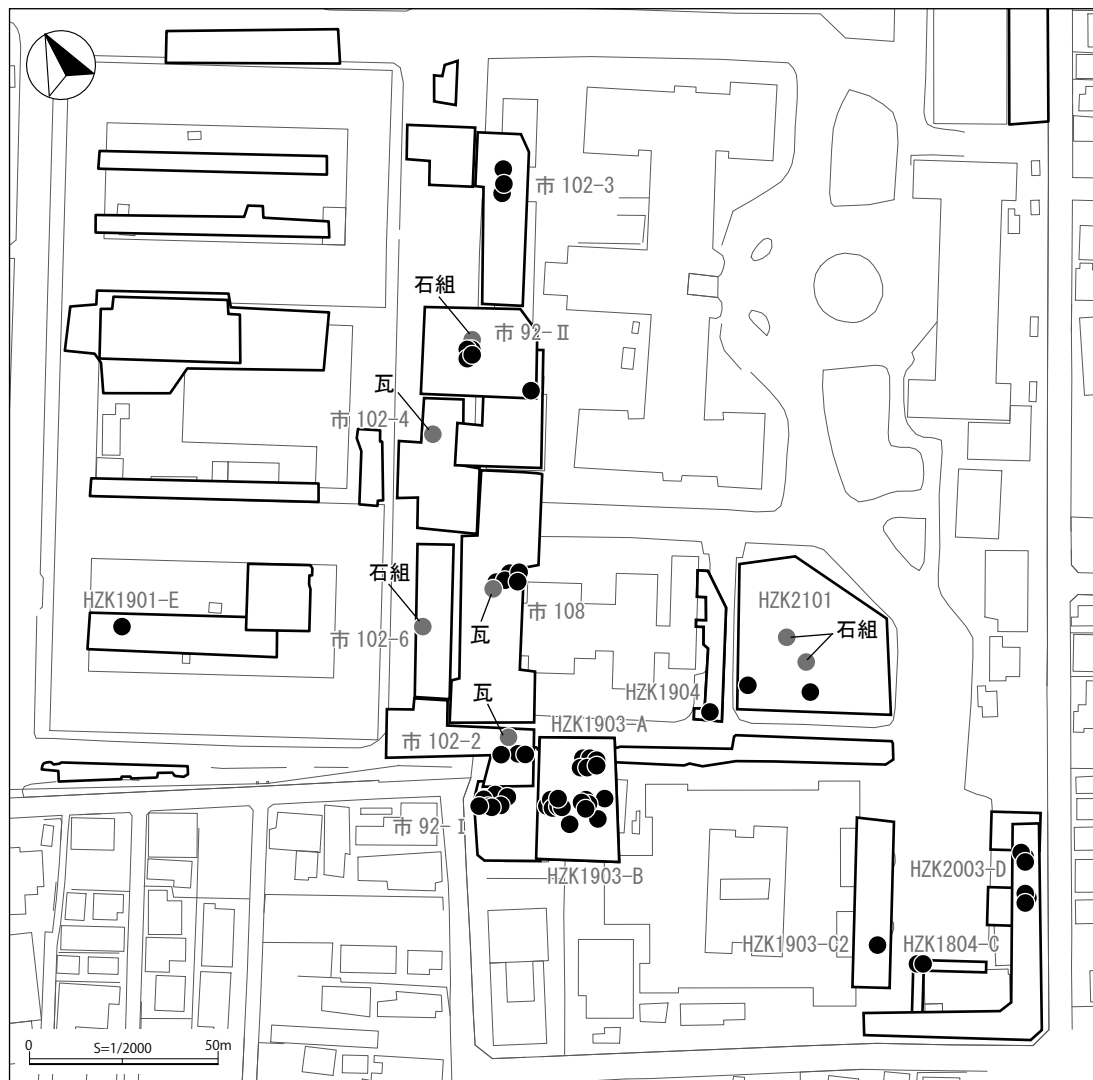
箱崎キャンパス内遺跡における井戸の状況を考える上で、大庭康時氏による博多遺跡群における井戸の分析成果は参考になる（大庭 1993）。博多遺跡群では、時代を異にする井戸が、狭い範囲に集中して切り合って検出されており、大庭氏はその状況を地理的環境から説明している。すなわち、博多遺跡群は海岸近くに位置しているため真水に恵まれず、数少ない真水が出る地点を選んだ結果、いつの時代でも一所に井戸を掘る羽目になった、と解釈した。また、大庭氏は井戸の分布状況の時期的変遷についても論じている。12世紀代は井戸が頻繁に掘られており、個々の屋敷ごとに井戸が繰り返し掘り直されていた状況が推察される一方、13世紀以降は井戸の分布が散漫になり、個人の屋敷地に付随した井戸というよりは、広義の共同井戸としての性格が強くなったと指摘した。

箱崎キャンパス内遺跡の状況はどうかであろうか。確かに箱崎キャンパス内遺跡でも13世紀以降、単独で検出される井戸が散見される。HZK1904地点の SE55（13世紀後半～14世紀）、HZK2101地点の SE93（13世紀後半～14世紀前半）、同地点 SE367（14世紀以降）、同地点 SE37（15～16世紀）、市92

第2表 箱崎キャンパス内遺跡 井戸分布図

地点名	遺構名	報告書記載時期	放射性炭素年代測定値 (2σ)	備考
HZK1804 C区	SE14	12世紀後半～14世紀	①1039-1111 cal AD (56.64%) 1112-1161 cal AD (38.81%) ②1156-1220 cal AD (91.74%)	2基が切り合う。SE14-cで木桶 (①・②ともスギ)
HZK1901 E区	SE19	15世紀～16世紀	—	大正・昭和まで残置?
HZK1903 A区	SE003	13世紀後半以降	—	木桶
	SE006	13世紀後半以降	—	木桶
	SE001	13世紀後半～15世紀	—	木桶
	SE005	15世紀～16世紀	—	木桶
HZK1903 B区	SE64	12世紀後半～13世紀前半	1158-1220 cal AD (95.45%)	木桶 (スギ)
	SE67	13世紀後半	1213-1268 cal AD (93.82%)	木桶 (スギ)
	SE68	13世紀後半	—	木桶
	SE65	13世紀後半以降	—	木桶
	SE58	13世紀後半～15世紀後半	①1356-1392 cal AD (56.33%) 1294-1323 cal AD (39.12%) ②1076-1156 cal AD (55.12%) 1011-1053 cal AD (34.26%)	木桶 (①スギ、②針葉樹)
	SE60	14世紀～15世紀	—	木桶
	SE66	14世紀後半～15世紀前半?	1394-1422 cal AD (69.50%) 1326-1352 cal AD (25.95%)	木桶 (スギ)
	SE59	15世紀代	①1156-1219 cal AD (89.65%) ②1204-1266 cal AD (90.39%)	木桶 (①・②ともスギ)
	SE62	15世紀代	—	木桶
	SE75	不明	1124-1215 cal AD (54.04%) 1046-1084 cal AD (39.00%)	木桶 (スギ)
	SE76	不明	①1161-1226 cal AD (95.45%) ②1303-1367 cal AD (75.61%) 1381-1398 cal AD (19.84%)	木桶 (①・②ともスギ)
	SE77	不明	①992-1027 cal AD (95.45%) ②892-991 cal AD (95.45%)	木桶 (①・②ともスギ)
	SE61	不明	—	木桶
HZK1903 C2区	SE140	12世紀後半以前	—	SD62形成以前
HZK1904	SE55	13世紀後半～14世紀	—	—
HZK2003 D区	SE4015	12世紀後半～14世紀後半以降	①1319-1360 cal AD (65.35%) 1389-1411 cal AD (30.10%) ②1401-1434 cal AD (95.45%) ③1306-1364 cal AD (76.52%) 1385-1402 cal AD (18.93%) ④1406-1437 cal AD (95.45%)	3基が近接。いずれも木桶 (①～④いずれもスギ)
	SE4161	12世紀後半～15世紀前半	—	3基が近接。井戸枠なし
HZK2101	SE93	13世紀後半～14世紀前半	—	木桶
	SE367	14世紀以降	—	石組。SD235・SK380に切られる
	SE37	15世紀～16世紀	—	石組
	SE217	不明	—	—
市92次 I区	SE196	12世紀後半	—	SE195・193・192に切られる (切り合いでは最も古い)
	SE195	12世紀後半～13世紀後半	—	スギ板目材結桶。SE193に切られる
	SE190	13世紀前半	—	スギ板目材結桶
	SE191	13世紀中頃	—	スギ板目材結桶
	SE193	13世紀後半～14世紀初頭	—	スギ板目材結桶
	SE155	13世紀後半～14世紀初頭?	—	スギ板目材結桶。硯
	SE035	13世紀～15世紀初頭	—	スギ板目材結桶。永楽通寶 (初鑄1408年) が下限?
	SE192	—	—	スギ板目材結桶
	SE158	—	—	スギ板目材結桶。SE190を切る
市92次 II区	SE064	13世紀後半	—	4基切り合い。いずれもスギ板目材結桶
	SE039	13世紀後半～14世紀初頭	—	スギ板目材結桶
	SE063	16世紀	—	上部石組、スギ板目材結桶。板碑・五輪塔・宝篋印塔
市102次 2区	SE2117	近世以降	—	瓦組。調査対象外で報告なし
	SE2095	—	—	—
市102次 3区	SE3001	—	—	石組
	SE3002	—	—	4基切り合い。いずれも桶組
	SE3003	—	—	桶組
市102次 4区	SE4070	近世以降	—	瓦組
市102次 6区	SE6010	—	—	上部石組み、木桶。宝篋印塔
市108次	SE03	13世紀後半～14世紀前半?	—	木桶
	SE02	14世紀末～15世紀初頭?	—	木桶。SE01に切られる
	SE01	15世紀前半	—	木桶
	SE04	近世以降	—	瓦組
	SE05	—	—	木桶。SE01に切られる
	SE06	—	—	木桶。SE05に切られる
市113次 1区	SE01	19世紀後半	—	瓦組

次Ⅱ区のSE039 (13世紀後半～14世紀初頭)、市102次4区のSE4070 (近世以降)、市113次1区のSE01、がそれである。しかし、13世紀以降もそれ以前と同じ場所で継続的に井戸を掘り続ける例も複数認められ、博多遺跡群で指摘されているような、個人屋敷付属の井戸→共同井戸といった性格の変化を見出すことは難しい。狭い範囲に集中的に井戸が掘られる場合と、単発的に井戸が掘られる場合の2者があることは読み取れるが (第2図)、その両者の性格の違いを明らかにできるだけのデータは乏しい。



第2図 箱崎キャンパス内遺跡 井戸分布図

(2) 掘立柱建物

箱崎キャンパス内遺跡では、礎石を有する土坑・ピットが複数検出されている（第1表）。HZK2101地点では、掘立柱建物の平面プランが復元されており、全部で11棟の掘立柱建物が報告されている（谷編 2023b）。第3表は、HZK2101地点の掘立柱建物11棟を構成する「柱穴」を一覧表にしてまとめたものである。これを見ると、1棟の掘立柱建物を構成する「柱穴」の中で、礎石を有するものと、有さないものが混在していることがわかる。「柱穴」とされた遺構に「ピット」や「土坑」が混在するように、同じ掘立柱建物を構成する「柱穴」においても平面プランは多様である。また、「柱穴」とされた遺構の掘り込みの底面レベル（礎石をもつ場合は礎石上面のレベル）を第3表に記した。各掘立柱建物において概ねレベルは揃っているようだが、中には20cm程度の比高差を有するものも存在している。

こうしたデータを踏まえると、HZK2101地点で報告された掘立柱建物の平面プランの復元案については、その妥当性について慎重に評価する必要があるように思う。しかしながら、礎石を有する土坑・ピットが存在する事実から、この一帯に掘立柱建物が存在したことは間違いない。HZK1903地点B区のSK55では、直径50cm程度、厚さ20cm程度の大型の礫が、二つ積まれた状態で検出されて

第3表 HZK2101地点 掘立柱建物を構成する「柱穴」一覧

遺構名	種別	報告書記載時期	礎石	底面 【礎石上面】 標高 (m)	備考
掘立柱建物SB-A 2間×5間					
SK44 土坑	—	×	×	2.29	
SP46 ビット	—	×	×	2.22	
SP53 ビット	—	×	×	1.95	
SP67 ビット	—	×	×	2.15	
SP68 ビット	—	×	×	2.22	
SK80 土坑	—	×	×	2.27	
SP81 ビット	—	○	×	2.26[2.35]	
SK95 土坑	—	×	×	2.1	
SK98 土坑	—	×	×	2.34	
(ST58) 墓坑	13世紀後半～ 14世紀前半	×	×	2.17	
(SK86) 土坑	13世紀後半以降	×	×	1.5	
(SK89) 土坑	13世紀後半～ 14世紀前半	×	×	1.72	
(SK90) 土坑	—	×	×	1.82	
掘立柱建物SB-B 2間×2間					
SK121 土坑	—	×	×	2.31	
SK124 土坑	—	×	×	2.27	
SK138 土坑	—	○	×	2.25[2.39]	
SK140 土坑	—	×	×	2.32	
SP145 ビット	—	×	×	2.29	
SP151 ビット	—	×	×	2.08	
(SK177) 土坑	—	×	×	2.2	
掘立柱建物SB-C 2間×5間					
SK128 土坑	—	×	×	2.38	
SP133 ビット	—	×	×	2.35	
SP147 ビット	—	×	×	2.33	
SP153 ビット	—	×	×	2.25	
SP159 ビット	—	×	×	2.39	
SP165 ビット	—	×	×	2.38	
SP167 ビット	—	×	×	2.33	
SP175 ビット	—	×	×	2.29	
SP184 ビット	—	×	×	2.25	
SP236 ビット	—	×	×	2.15	
(SE213) 井戸	—	×	×	—	底面検出していない
(SK222) 土坑	—	×	×	2.23	
(SK223) 土坑	—	×	×	2.33	
(SK237) 土坑	—	×	×	1.86	
掘立柱建物SB-D 1間×3間					
SK197 土坑	—	×	×	2.37	土師器出土
SP204 ビット	—	○	×	2.37[2.43]	
SK216 土坑	—	×	×	2.32	
SK227 土坑	—	×	×	2.28	
SK230 土坑	—	○	×	2.17[2.24]	
SP231 ビット	—	×	×	2.27	
SP239 ビット	—	×	×	2.39	
SP240 ビット	—	×	×	2.38	
(SK226) 土坑	—	×	×	2.04	
(SK228) 土坑	15世紀後半～ 16世紀	×	×	2.18	
掘立柱建物SB-E 1間×3間					
SP280 ビット	—	×	×	2.34	
SP304 ビット	—	×	×	2.25	
SP307 ビット	—	×	×	2.32	
SP325 ビット	—	×	×	2.1	
SP327 ビット	—	×	×	2.26	
(SK268) 土坑	—	×	×	1.98	
(SK275) 土坑	13世紀後半～ 14世紀前半	×	×	2.12	
(SK276) 土坑	—	×	×	2.14	
掘立柱建物SB-F 1間×1間					
SP332 ビット	—	○	×	2.24[2.43]	礎石二つ重ね
SK348 土坑	—	○	×	2.31[2.42]	
(SK334) 土坑	—	×	×	2.29	
(SK335) 土坑	—	×	×	1.87	
※(SK●●) など…柱の存在が想定される位置にある遺構					
遺構名	種別	報告書記載時期	礎石	底面 【礎石上面】 標高 (m)	備考
掘立柱建物SB-G 1間×1間					
SP310 ビット	—	×	×	2.24	
SP311 ビット	—	×	×	2.23	
SP317 ビット	—	×	×	2.28	
SP321 ビット	—	×	×	2.03	
掘立柱建物SB-H 3間×4間					
SP376 ビット	—	×	×	2.26	
SP409 ビット	14世紀以降	×	×	2.31	
SP422 ビット	—	○	×	2.26[2.34]	
SK429 土坑	—	×	×	1.86	
SP442 ビット	—	×	×	2.14	
SK431 土坑	—	○?	×	2.3[2.36]	
SK434 土坑	—	×	×	2.24	
SP444 ビット	15世紀後半～ 16世紀	×	×	2.02	
SP455 ビット	—	○	×	2.3[2.37]	
SP458 ビット	—	○	×	2.16[2.25]	
SP472 ビット	—	×	×	2.21	
SK494 土坑	—	×	×	2.22	
SP514 ビット	—	○	×	—	断面図面なし
(SK424) 土坑	—	×	×	1.98	
(SK425) 土坑	—	×	×	1.38	
(SK439) 土坑	—	×	×	2.24	
(SK500) 土坑	—	×	×	2.24	
(SK520) 土坑	12世紀後半	×	×	2.04	
掘立柱建物SB-I 2間×5間					
SP289 ビット	—	○?	×	2.03[2.25]	
SP336 ビット	—	×	×	2.17	
SP368 ビット	—	×	×	2.32	
SP340 ビット	—	○	×	2.34	礎石の断面図なし
SP355 ビット	—	×	×	2.24	
SP359 ビット	—	×	×	2.14	
SK365 土坑	—	×	×	2.12	
SK383 土坑	—	×	×	2.22	
SP448 ビット	—	○	×	2.26[2.39]	
(SK392) 土坑	—	×	×	2.19	
(SK408) 土坑	—	×	×	2.23	
(SK416) 土坑	15世紀後半以降	×	×	2.36	
(SK417) 土坑	14世紀後半以降	×	×	2.41	
(SK492) 土坑	—	×	×	2.19	
掘立柱建物SB-J 1間×1間					
SP474 ビット	—	×	×	2.16	
SP475 ビット	—	×	×	2.26	
SK477 土坑	—	×	×	2.39	
SP478 ビット	—	×	×	2.4	
掘立柱建物SB-K 2間×5間					
SK498 土坑	—	×	×	2.22	
SP511 ビット	—	×	×	2.32	
SK527 土坑	—	×	×	2.22	
SK544 土坑	—	×	×	2.28	
SK548 土坑	—	×	×	2.23	
SP551 ビット	—	×	×	2.36	
SP553 ビット	12世紀後半～ 13世紀初頭	×	×	2.32	
SP556 ビット	—	×	×	2.21	
SP557 ビット	—	×	×	—	底面検出していない
(S1418) 竪穴	12世紀後半～ 13世紀初頭	×	×	2.24	
(SK451) 土坑	—	×	×	2.21	
(SK452) 土坑	12世紀後半～ 13世紀初頭	×	×	—	断面図面なし
(SK491) 土坑	15世紀後半～ 16世紀	×	×	1.54	
(SK513) 土坑	—	×	×	1.42	
(SK534) 土坑	—	×	×	2.52	
(SK540) 土坑	12世紀後半～ 13世紀初頭	×	×	2.2	

おり、ある程度太くて堅固な掘立柱を有する建物が存在したことも想起される。

礎石を有する柱穴のうち、年代がわかるものは、HZK1903地点B区 SK55（12世紀代）、HZK2003地点D区 SP4033（14世紀以降）、HZK2003地点E区 SK51（13世紀以降）、同地点同区 SK49（14世紀代）、の4基である。なお、HZK2101地点で復元された掘立柱建物のうち、礎石を有する柱穴で年代がわかるものはないが、「柱穴」とされるビット・土坑で年代がわかるものは、SB-KのSP553（12世紀後

半～13世紀初頭）と、SB-H の SP409（14世紀以降）・SP444（15世紀後半～16世紀）の3基である。数が少なくて判断が難しいが³⁾、箱崎キャンパス内遺跡の存続期間の中で、特定時期に偏ることなく存在していた可能性が高いことが読み取れる。

これらの建物は居住施設だったのか、それともお堂などのような非日常的な機能を有する施設だったのか。土地利用史を復元する上で、掘立柱建物の性格を特定することは重要である。柱穴が検出される遺跡南側では、中世後期の丸瓦・平瓦が一定数出土する。屋根全面に葺けるほどの量は出土していないが、当該エリアに瓦葺きの建物が存在していたことは間違いなかろう。しかし、現状得られたデータから、掘立柱建物の性格を特定することは難しいと言わざるを得ない。

（3）土坑墓・木棺墓

箱崎キャンパス内遺跡で見つかった土坑墓・木棺墓の一覧を、第V章第1表に示している。第1表のうち、本稿の対象である中世期の年代で報告されている土坑墓・木棺墓は以下の18基である。

HZK2006地点A区 ST02（木棺墓、12世紀後半～13世紀初頭）

HZK2006地点G区 ST35（木棺墓、14世紀前半）

HZK2007地点 ST45（木棺墓、14世紀後半以降）

HZK2007地点 ST110（土坑墓？、14世紀後半以降）

HZK2101地点 ST58（土坑墓？、13世紀後半～14世紀前半）

HZK2101地点 ST33（土坑墓？、15世紀）

市92次I区 SR152（木棺墓、13世紀後半～14世紀初頭）

市102次3区 ST3115（木棺墓、12世紀後半）

市102次3区 ST3116（木棺墓、12世紀後半）

市102次4区 ST4005（木棺墓、16世紀）

市102次4区 ST4006（木棺墓、16世紀）

市102次4区 ST4007（木棺墓、16世紀）

市102次4区 ST4008（木棺墓、16世紀）

市102次4区 ST4009（木棺墓、16世紀）

市102次5区 ST5040（木棺墓、12世紀後半）

市108次 SR03（木棺墓、12世紀後半）

市113次2b区 SK209（木棺墓、12世紀後半）

市113次3区 SX321（土坑墓？、13世紀）

18基の多くは、遺構平面プランや鉄釘の出土から木棺墓と考えられるが、一部判断が難しいものがあるため、「土坑墓・木棺墓」と表現した。

市102次4区のST4005～4009を除いて、中世期の土坑墓・木棺墓は、特定区域に集中的に埋葬するようなあり方は認められず、その分布は散漫である。こうした分布状況は、第V章で論じるように、HZK1801地点やHZK2007地点といったある一定の範囲内に、土坑墓・木棺墓がまとまって埋葬される近世期の様相とは明らかに異なっている。土坑墓・木棺墓の分布状況から判断すれば、中世期の当該地域では、近世期に見られるような共同墓地的な墓域は形成されておらず、個別分散的に造墓がなされたものと考えられよう。こうした中世期の造墓のあり方を、いわゆる「屋敷墓」（勝田 1988；橋田 1991）的な性格として捉えることができるかについては、箱崎キャンパス内遺跡における同時期の居住地・屋敷地の存在やその区画範囲が明確ではなく、また、居住痕跡の可能性のある井戸や掘立

柱建物と土坑墓・木棺墓の関係性もはっきりしないため、その判断は難しい。

土坑墓・木棺墓の年代について、12世紀後半の木棺墓が最も古く、13世紀後半～14世紀前半期の墓も一定数認められる。14世紀後半以降に位置づけられるのは、HZK2007地点 ST45（14世紀後半以降）、同地点 ST110（14世紀後半以降）、HZK2101地点 ST33（15世紀）、市102次4区 ST4005・4006・4007・4008・4009（いずれも16世紀）の8基である。HZK2007地点の ST45・ST110は、銭が複数副葬されており、そのうちの洪武通寶（初鑄 1368年）の存在から、遺構の時期を14世紀後半以降と推定した。しかし、HZK2007地点の ST190では、洪武通寶と寛永通寶が共伴して出土しており、ST45・ST110の年代が近世期まで下る可能性を完全に排除することはできない。また、市102次4区の ST4005～4009は、墓坑が切り合っている点、棺を置く台石が据えられている点など、他の中世期の土坑墓・木棺墓とは様相が異なっている。HZK1801地点や HZK2007地点で見られる近世期の土坑墓・木棺墓とも異なっており、むしろ台石の存在や遺構平面プランから見れば、後述する火葬土坑との類似性が指摘できる。ST4006～ST4009埋土の所見において、炭化物や焼骨片など火葬土坑を示唆する内容は確認できないが⁴⁾、これらの遺構を土坑墓・木棺墓と判断するにはより慎重な検討が必要と考える。もし仮に、HZK2007地点の ST45・ST110、そして、市102次4区の ST4006～4009が中世期の土坑墓・木棺墓ではないとすると、箱崎キャンパス内遺跡において確実に14世紀後半以降と考えられる中世期の墓は、HZK2101地点の ST33のみとなる。

人骨は残っていない場合がほとんどであり、残っていてもその残存状態は良くない。市102次3区の ST3115と、市102次5区の ST5040は、比較的人骨も残っており、埋葬姿勢がわかる貴重な事例である（本田編 2023）。副葬されている陶磁器の年代から見て、両者はほぼ同時期に造墓されたと考えられるが、ST3115は仰臥屈肢葬、ST5040は仰臥伸展葬で埋葬姿勢が異なっている。

市102次4区の ST4006～4009を除いて、副葬品を確認することができ、青磁・白磁・土師器の副葬は多くに共通している。中でも、市113次2b区の SK209は副葬品が豊富で、完形の青磁碗・白磁皿・土師皿のほか、湖州六花鏡・鉄製鋏・鐏子状鉄製品・鉄製刀子が副葬されていた。湖州六花鏡に織物と鉄製鋏・鐏子状鉄製品が付着した状態で出土しており、これらは布に包まれた状態で副葬された可能性が指摘されている（本田編 2023）。市92次I区の SR152も比較的副葬品は豊富で、青磁碗・青磁皿・白磁皿・中国産陶器壺・鉄製短刀が出土している。

（4）火葬土坑

箱崎キャンパス内遺跡で検出された中世期の遺構のうち、最も特徴的なのは火葬土坑であろう。火葬土坑は、火葬を執行した場所、すなわち荼毘の場であり、火葬墓とは区別される（狭川 2011）。同様の遺構は、三重県菟上遺跡（穂積ほか編 2005）や同県岡村中近世墓群（伊藤編 2006）、山口県吉母浜遺跡（村田編 1985）、福岡県奈良尾遺跡（中間編 1991）、同県古田遺跡（池田・屋山編 1997）、同県薬師の森遺跡（上田編 2014）など、全国各地で事例を見出すことができ、特に福岡県の火葬土坑については、狭川真一氏によって詳細な検討がなされている（狭川 2011）。

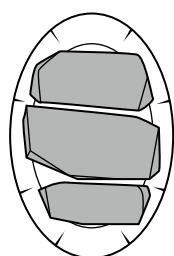
箱崎キャンパス内遺跡では全部で40基の火葬土坑が見つかった（第4表）。火葬土坑からは多量の炭化した木材と焼骨片が出土し、基本的に遺物の出土は認められない。出土炭化木材の中には、棺材と推定されるものも存在する。棺を置く台石が複数据えられているものもあり、台石の大きさや配置の仕方などにはバリエーションがある。第3図は、遺構平面プランと台石の大きさ・配置の仕方に着目して、箱崎キャンパス内遺跡の火葬土坑を分類したものである。平面プランで楕円形と円形の二つに大別した上で、台石の状況でそれぞれを細分し、全部で9つの分類単位を抽出した。

第4表 箱崎キャンパス内遺跡 火葬土坑一覧

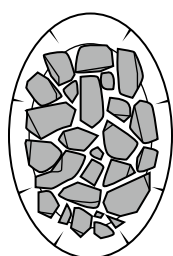
地点名	遺構名	種別	分類	報告書記載時期	放射性炭素年代測定値 (2σ)	年代測定値からの 推定年代	備考
HZK1805	SK07	火葬土坑	—	14世紀後半～ 15世紀前半	①1270-1299 cal AD (94.04%) ②1275-1300 cal AD (90.24%) ③1278-1303 cal AD (77.21%) 1367-1380 cal AD (18.24%)	13世紀後半	①ハンノキ属ハンノキ亜属、 ②・③コナラ属アカガシ亜属
HZK2006 A区	SK10	火葬土坑	円形Ⅱ類	—	—	—	—
	SK15	火葬土坑	楕円形Ⅱb類	—	①1413-1445 cal AD (95.45%) ②1410-1443 cal AD (95.45%) ③1408-1442 cal AD (95.45%)	15世紀前半	①・③クマシデ属イヌシデ節、 ②コシアブラ
	SK22	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	—	—	—	—
	SK23	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	—	—	—	—
	SK25	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	—	—	—	—
	SK30	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	—	—	—
	SK31	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	—	—	—
	SK36	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	—	—	—
	SK37	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	—	—	—
	SK41	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	—	①1308-1362 cal AD (73.80%) 1387-1406 cal AD (21.65%) ②1419-1452 cal AD (95.45%) ③1303-1367 cal AD (75.59%) 1381-1398 cal AD (19.86%)	15世紀前半	①・③スギ、②サカキ
	SK42	火葬土坑	—	—	①1310-1361 cal AD (71.86%) 1388-1407 cal AD (23.59%) ②1428-1460 cal AD (93.97%) ③1422-1452 cal AD (95.45%)	15世紀前半	①・③コナラ属アカガシ亜属、 ②クスノキ科
	SK44	火葬土坑	楕円形Ⅴ類	—	—	—	—
	SK55	火葬土坑	円形Ⅱ類	—	—	—	—
	SK13	火葬土坑	円形Ⅰ類	—	①1321-1358 cal AD (61.55%) 1390-1412 cal AD (33.90%) ②1396-1432 cal AD (93.17%) ③1409-1441 cal AD (95.45%)	15世紀前半	①サカキ、②ツバキ属、 ③クスドイゲ
	SK16	火葬土坑	—	—	—	—	—
HZK2006 G区	SK19	火葬土坑	円形Ⅰ類	—	①1306-1364 cal AD (76.58%) 1385-1402 cal AD (18.87%) ②1393-1420 cal AD (48.93%) 1324-1355 cal AD (46.52%) ③1318-1360 cal AD (66.95%) 1388-1410 cal AD (28.50%)	14世紀後半～ 15世紀前半	①ヒサカキ属、②サクラ属、 ③クマシデ属イヌシデ節
	SK33	火葬土坑？	—	—	—	—	—
	SK01	火葬土坑	円形Ⅱ類	—	—	—	—
HZK2007	SK03	火葬土坑	楕円形Ⅰb類	—	①1310-1361 cal AD (70.70%) 1388-1408 cal AD (24.75%) ②1310-1361 cal AD (66.00%) 1388-1412 cal AD (29.45%) ③1281-1310 cal AD (51.93%) 1361-1387 cal AD (43.52%)	14世紀	①コナラ属アカガシ亜属、 ②ツバキ属、③サカキ
	SK04	火葬土坑	楕円形Ⅰa類	—	①1303-1367 cal AD (75.76%) 1381-1398 cal AD (19.69%) ②1319-1360 cal AD (62.24%) 1389-1414 cal AD (33.21%) ③1354-1393 cal AD (55.01%) 1294-1325 cal AD (40.44%)	14世紀後半	①サカキ、②ミズキ属、 ③クスノキ科
	SK05	火葬土坑	楕円形Ⅱa類	—	①1310-1361 cal AD (70.08%) 1388-1409 cal AD (25.37%) ②1394-1424 cal AD (71.31%) 1326-1353 cal AD (24.14%) ③1306-1364 cal AD (74.25%) 1385-1405 cal AD (21.20%)	14世紀後半～ 15世紀前半	①・②サカキ、③クスノキ科
	SK06	火葬土坑	楕円形Ⅱa類	—	①1307-1363 cal AD (74.94%) 1387-1405 cal AD (20.51%) ②1354-1393 cal AD (54.45%) 1289-1325 cal AD (41.00%) ③1322-1357 cal AD (56.15%) 1391-1417 cal AD (39.30%)	14世紀	①・②ミズキ属、③クスノキ科
	SK14	火葬土坑	—	—	—	—	—
	SK20	火葬土坑	円形Ⅱ類	—	①1359-1389 cal AD (50.62%) 1284-1320 cal AD (44.83%) ②1303-1367 cal AD (75.28%) 1380-1398 cal AD (20.17%) ③1307-1363 cal AD (75.53%) 1386-1404 cal AD (19.92%)	14世紀	①スノキ属、 ②・③コナラ属アカガシ亜属
	SK22	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	①1338-1395 cal AD (55.58%) 1298-1395 cal AD (39.87%) ②1355-1392 cal AD (54.96%) 1290-1323 cal AD (40.49%) ③1338-1395 cal AD (55.05%) 1298-1327 cal AD (40.40%)	14世紀後半	①・②ツバキ属、③スダジイ
	SK40	火葬土坑	楕円形Ⅱa類	—	—	—	—

第4表 箱崎キャンパス内遺跡 火葬土坑一覧

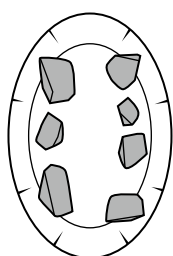
地点名	遺構名	種別	分類	報告書記載時期	放射性炭素年代測定値 (2σ)	年代測定値からの 推定年代	備考
HZK2007	SK24	火葬土坑	円形Ⅰ類	15世紀以降	①1492-1603 cal AD (75.66%) 1608-1639 cal AD (19.79%) ②1353-1394 cal AD (54.88%) 1294-1325 cal AD (40.57%) ③1457-1522 cal AD (57.88%) 1575-1624 cal AD (37.37%)	15世紀後半～ 16世紀	永楽通寶。 ①ハンノキ属ハンノキ節、 ②ヒノキ科、③ツツジ属
	SK25	火葬土坑	楕円形Ⅴ類	—	—	—	—
	SK35	火葬土坑	—	—	—	—	—
	SK36	火葬土坑	楕円形Ⅴ類	—	①1507-1594 cal AD (73.08%) 1618-1648 cal AD (22.37%) ②1550-1634 cal AD (56.93%) 1474-1528 cal AD (37.70%) ③1512-1591 cal AD (70.76%) 1620-1649 cal AD (24.24%)	16世紀後半～ 17世紀前半	①・②ツバキ属、③スノキ属
	SK38	火葬土坑	円形Ⅱ類	—	—	—	—
	SK42	火葬土坑	円形Ⅰ類	—	—	—	—
	SK53	火葬土坑	—	—	—	—	—
	SK54	火葬土坑	—	—	—	—	—
	SK56	火葬土坑	—	—	—	—	—
	SK57	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	15世紀以降	①1551-1634 cal AD (53.65%) 1469-1527 cal AD (41.25%) ②1458-1524 cal AD (51.16%) 1571-1631 cal AD (42.93%) ③1448-1519 cal AD (74.41%) 1590-1621 cal AD (21.04%)	16世紀後半～ 17世紀前半	永楽通寶。 ①クスノキ科、②スギ、 ③コナラ属アカガシ亜属
	SK58	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	—	①1254-1283 cal AD (83.80%) ②1221-1271 cal AD (95.45%) ③1252-1279 cal AD (68.48%) 1227-1249 cal AD (26.97%)	13世紀後半	①・②スダジイ、③クスノキ科
	SK61	火葬土坑	楕円形Ⅲ類	—	①1338-1395 cal AD (55.05%) 1298-1327 cal AD (40.40%) ②1398-1434 cal AD (95.45%) ③1407-1438 cal AD (95.45%)	14世紀後半～ 15世紀前半	①マツ属、②・③ミズキ属
	SK76	火葬土坑	楕円形Ⅳ類	17世紀以降	①1303-1367 cal AD (75.34%) 1380-1397 cal AD (20.11%) ②1353-1394 cal AD (54.18%) 1296-1326 cal AD (41.27%) ③1278-1305 cal AD (69.90%) 1365-1382 cal AD (25.55%)	14世紀	寛永通寶。 ①・②ミズキ属、③クスノキ科



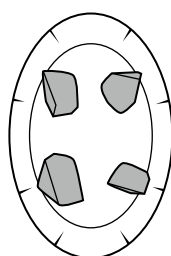
楕円形Ⅰa類
Ex. HZK2007 SK04



楕円形Ⅰb類
Ex. HZK2007 SK03



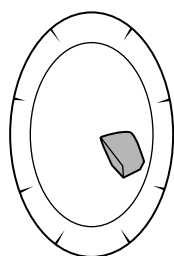
楕円形Ⅱa類
Ex. HZK2007 SK40



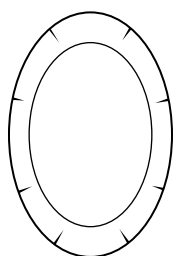
楕円形Ⅱb類
Ex. HZK2006 A区 SK15



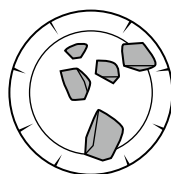
楕円形Ⅲ類
Ex. HZK2006 A区 SK30
HZK2007 SK22



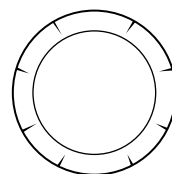
楕円形Ⅳ類
Ex. HZK2006 A区 SK23



楕円形Ⅴ類
Ex. HZK2006 A区 SK44
HZK2007 SK25・SK36



円形Ⅰ類
Ex. HZK2006 G区 SK13
HZK2007 SK24



円形Ⅱ類
Ex. HZK2006 A区 SK10
HZK2007 SK01・SK38

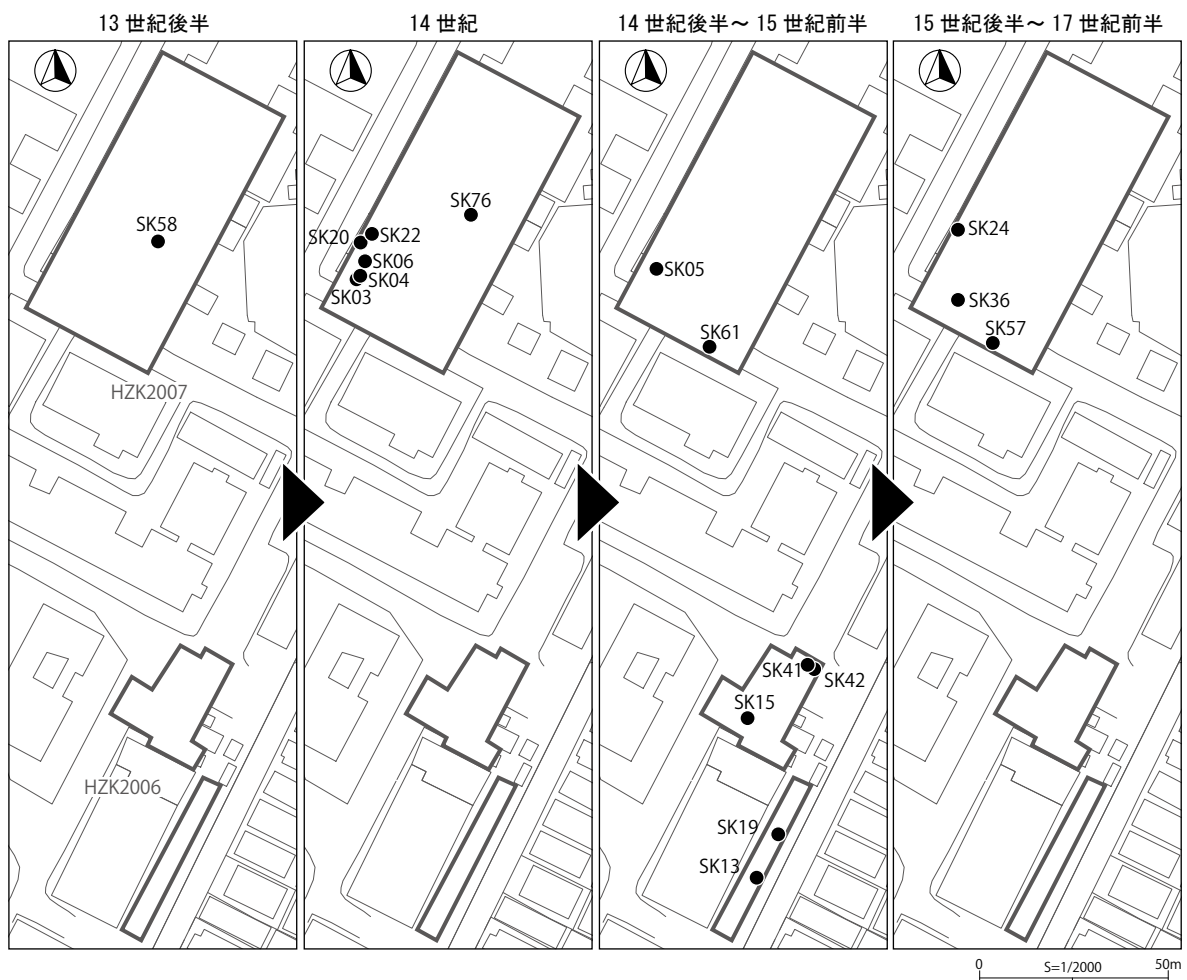
第3図 火葬土坑分類案

火葬土坑からは基本的に遺物が出土しないため、年代の手がかりは出土する炭化物の放射性炭素年代測定のみとなる。そのため、40基のうち18基から出土した炭化物を対象に、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した²⁾。その結果は、第4表に示している。分析の結果、13世紀代の年代値を示す一群と、14世紀の年代値を示す一群、14世紀後半～15世紀前半の年代値を示す一群、15世紀後半～17世紀前半の年代値を示す一群の、大きく4つの時期に分かれる状況が確認された。

第3図の分類単位と年代測定値の関係について見てみると、平面プランが楕円形で台石を規則的に配置するⅠ類・Ⅱ類は、14世紀代の年代を示す傾向が認められる。楕円形Ⅰ類・楕円形Ⅱ類は、火葬土坑の中でも比較的古手に位置づけられる可能性がある。

第4図は、HZK2006・2007両地点で検出した火葬土坑の時期別の分布状況を示したものである。最初はHZK2007地点だけに分布していたが、14世紀後半～15世紀前半になるとHZK2006地点まで分布が拡大し、15世紀後半以降になると再びHZK2006地点で分布がなくなる。箱崎キャンパス内遺跡において、茶毘の場として利用された空間に、时期的な差異が認められる可能性を指摘できよう。

なお、年代の評価について注意が必要な事例が存在する。HZK1805地点のSK07からは、14世紀後半～15世紀前半に位置づけられる土師器鉢形鍋が出土している。しかし、出土炭化物の年代測定値は13世紀後半の値を示しており、出土遺物の年代と齟齬が生じている。SK07からは火葬時に被熱したと考えられる小礫が出土しており、この小礫は、元寇防塁の石を後世の人々が資材として利用するた



第4図 HZK2006・2007地点 火葬土坑分布図

め砕いた際に生じたものとされている（齋藤編 2020）。文献史学による研究成果によって、元寇防塁は康永元（1342）年までは維持・管理されていたことが明らかになっており（川添 1971）、SK07の年代を13世紀代まで古く位置づけることはできない。土師器鉢形鍋が示す年代が、SK07の年代と考えるべきであろう。

また、HZK2007地点のSK76は、出土炭化物の年代測定値は14世紀の値を示すものの、遺構内から寛永通寶が出土している。HZK1805地点SK07と同様、年代測定値と出土遺物の年代に齟齬が生じている事例であり、遺構の年代としては寛永通寶の存在をもって判断すべきであろう⁵⁾。

これら二つの事例を踏まえると、出土炭化物の年代測定値を遺構の年代とすることには慎重を期すべきではあるが、火葬土坑から基本的に遺物が出土しない以上、年代の決定において放射性炭素年代測定に頼らざるを得ないのが現状である。

遺構の大きさや炭化物・焼骨片の出土状況から判断して、基本的には火葬土坑1基につき、1回の火葬行為が行われたことが推察される。しかし、HZK2007地点のSK58では、その堆積状況の検討から、複数回にわたる火葬行為が読み取れる（谷編 2025）。HZK2007地点のSK03・SK04やSK05・SK06など、火葬土坑が切り合って検出されているものは存在するが、SK58のように、同一遺構内で複数回の火葬行為が確認できる事例は他にない。SK58から出土した炭化物の年代測定値は13世紀後半で、他の火葬土坑よりも古い年代値が出ている（第4表）。火葬の作法に時期的な差異が存在する可能性、すなわち、古い時期には火葬土坑1基につき複数回の火葬行為を行っていたが、時期が下るにつれて火葬土坑1基につき1回の火葬行為を行うようになった可能性もあるが、データが不足しておりこれ以上の議論は難しい。

なお、HZK2007地点SK24は、火葬時の作法をある程度復元することができる貴重な事例である。板材を直角に組み合うように鉄製金具で固定した炭化材も見つかっていることから（谷編 2025）、遺体を入れていた木棺は方形であった可能性が高い。当該遺構の直径が1 m程度と小規模であることを考えると（本稿分類の「円形Ⅰ類」（第3図）、一辺70cm程度の方形木棺で、遺体は座った姿勢で入れられていたと想定される。出土した焼骨片はいずれも小片であることから、遺体を入れた木棺ごと火葬した後、主要な骨は拾骨したと考えられる。炭化材とともに炭化した縄も出土している。これは、遺体、あるいは木棺に巻かれていた縄ではないかと推察される。

狭川真一氏の分析によると、福岡県域で確認されている火葬土坑は、14世紀後半～16世紀代にかけて造営されており、15世紀代にその中心があるとされている（狭川 2011）。狭川氏は、火葬土坑の造営時期が、火葬墓出現時期とは一致せず、後出することに注目して、埋葬者の拡大と低層化により、これまでより下位の階層にまで火葬が浸透した結果、14世紀後半以降に火葬土坑が造営されたと指摘した。箱崎キャンパス内遺跡の火葬土坑の造営年代も、狭川氏の分析結果と整合的であり、その出現背景についても同様だった可能性が高いと考えている。なお、火葬墓は、箱崎キャンパス内遺跡やその周辺では確認できておらず、火葬後に拾骨したものをどこに納めたのか不明である。

3. 箱崎砂州先端部の中世期における土地利用史

中世期における箱崎キャンパス内遺跡の変遷をみると、二つの画期を見出すことができる。一つ目の画期は12世紀後半で、遺構が増加し、当該地域での人々の活動が活発化する時期である。12世紀後半という時期は、箱崎遺跡においても画期と認識されており、生活域が拡大して都市化していく時期と位置付けられている（榎本 2003・2008；中尾 2018）。12世紀中頃には、大宰府・国司が来航商戦

を一律に管理下に置き、天皇が貿易の許可・不許可を判断するという、これまでの貿易管理体制が変化したことが指摘されている（榎本 2010）。権門と海商が大宰府を飛び越えて個別に関係を結ぼうとする動きが見られ、12世紀後半頃から、いわゆる博多綱首と呼ばれる博多居留の宋海商は、博多周辺の寺社・荘園との関係を盛んに構築するようになるという（河辺 2007；榎本 2010）。筥崎宮も複数の宋海商との関係を有していたと考えられており、筥崎宮の神人であり、大宰府大山寺の寄人でもあった張光安（大庭 1994；佐伯 1988）は有名である。また、12世紀中頃前後における平氏政権の対宋貿易政策も見逃すことはできない（石井・村井 2010；大山 1984；島田 1974）。

こうした政治的・経済的背景のもと、博多の周縁に位置する箱崎でも、12世紀後半以降に貿易活動が活発に行われるようになり、当該地域において人や物資の流入が盛んになったことが推察される。そして、箱崎キャンパス内遺跡で認められる当該期の遺構増加も、箱崎遺跡の生活域拡大といった脈絡の中で理解できる現象と言えよう。なお、この箱崎遺跡北側への生活域拡大については、箱崎砂州先端部の地形発達史の理解が不可欠であることは、これまでも繰り返し論じてきた通りである（福永・齋藤 2021；福永 2022a・2022b）。

箱崎キャンパス内遺跡の南側では、掘立柱建物や多数の井戸が検出されており、掘立柱建物の性格をどう評価するかという問題はあるものの、日常的な居住・生活が営まれていた可能性が高いと推察される。土坑墓・木棺墓も確認できるが、共同墓地的な墓域の形成は認められず、個別分散的に造墓がなされていた様子が窺える。市113次2b区SK209のように、豊富な副葬品を有する墓も存在することから、当該地域ではある程度裕福な人々が活動していた可能性も指摘できよう。

こうしたあり方に変化が見られるのが、14世紀後半前後である。確実に14世紀後半以降と判断できる土坑墓・木棺墓はHZK2101地点ST33のみと激減する代わりに、HZK2006地点やHZK2007地点で火葬土坑が集中的に造営されるようになる。火葬土坑の周辺では、掘立柱建物や井戸といった居住・生活を示すと考えられる痕跡は認められず、HZK2006・2007地点周辺のエリアは、茶毘の場として特化していた可能性が高い。福岡県域で確認できる火葬土坑も、10基以上が群集して検出され、かつ、他の遺構と混在して検出される率が低いことから、火葬専用の場として認識・運用されていたと考えられている（狭川 2011）。おそらく、箱崎キャンパス内遺跡の火葬土坑も、同様の評価が可能であろう。

14世紀前半以前は、造墓行為が行われながらも、共同墓地的な墓域形成は認められなかった。その点を踏まえると、この14世紀後半以降に認められる、茶毘の場に特化した場の形成は注目に値する。第Ⅴ章で論じるように、近世期になるとHZK1801・2007地点周辺に墓域が形成され、葬送の場の特化した土地利用のあり方が認められるようになる。箱崎砂州先端部における中世から近世への土地利用史の変遷を考える上で、この14世紀後半前後に見られる変化は重要であり、二つ目の画期として当該期を位置づけておきたい。

中世後期以降、人々の墓に対する考え方の変化や葬送需要の高まり、葬送・造墓作業を担う集団・組織の変化、禅宗・律宗・時宗などの各宗派の関与など、葬墓制に係る様々な諸変化が指摘されてきた（大石 2004；勝田編 2012；狭川 2011；島津 2017；細川編 2001ほか）。当該期は博多遺跡群においても画期的現象が認められ、14世紀後半以降、明らかに墓と判断できる遺構が見られなくなり、市街地の外で造墓がなされるようになったことが指摘されている（大庭 1992）。中島恒次郎氏は、こうした墓地の寺院及び居住域近傍の特定地への整理統合という現象から、同祖を継承する「ウジ」墓から個人を継承する「イエ」墓へという祖先祭祀観念の変化を読み取った（中島 2009）。具体的な因果関係の特定は難しいが、箱崎砂州先端部における14世紀後半前後の画期も、こうした中世後期におけ

る葬墓制の諸変化を背景に生じたものと考えることができよう。そして、この二つ目の画期の延長線上に、近世期における箱崎砂州先端部の土地利用のあり方を位置づけることができるのである。

註

- 1) 遺構の時期決定について、注意すべき事例が存在する。HZK2101地点のSD235は、12世紀後半～13世紀初頭の遺物しか出土していないものの、14世紀後半以降の所産であるSE367を切っている（谷編 2023b）。出土遺物のみから遺構の時期を判断する場合、慎重な検討が必要であることを改めて認識させられる事例と言える。
- 2) 分析は株式会社パレオ・ラボに依頼した。放射性炭素年代測定値については、 2σ 暦年代範囲を示し、測定値は全て海洋リザーバー効果を補正した値である。後述する火葬土坑から出土した炭化物の放射性年代測定・樹種同定に関しても同様。
- 3) 柱穴の年代は出土遺物から判断したが、この年代が掘立柱建物の年代とイコールであるかどうかは難しい問題である。この点を検討する上で、柱穴内での遺物の堆積状況に関する情報は不可欠であるが、残念ながらそうした情報は乏しい。
- 4) SX4071という別遺構がST4006を切り込んでいると報告されている（阿部編 2022）。SX4071の埋土からは炭・焼土・粘土塊・被熱痕跡のある石材が混じっており、調査担当者は、近隣に何らかの焼成遺構があり、SX4071はその残滓の廃棄土坑である可能性を考えているようだ。
- 5) ただし、SK76は遺構の一部を後世の攪乱で乱されており、注意が必要である。周辺には近世期の墓が多数存在しているため、攪乱によって周辺の墓に副葬されていた寛永通寶が、SK76内に紛れ込んだ可能性を完全に排除することはできない。

引用文献

- 阿部泰之（編）2022『箱崎64―第92次・第102次・第108次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集、福岡市教育委員会
- 池崎譲二 1988「姿を現わした門前の町―箱崎・馬出遺跡群―」網野善彦・石井進・福田豊彦（監修）川添昭二（編）『よみがえる中世1―東アジアの国際都市 博多―』平凡社、49-51頁
- 池田祐司・屋山洋（編）1997『古田遺跡―古田遺跡第1次・第2次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第509集、福岡市教育委員会
- 石井正敏・村井章介 2010「通交・通商圏の拡大」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、1-28頁
- 伊藤裕偉（編）2006『玉城丘陵の中世火葬坑群』研究紀要第15-4号、三重県埋蔵文化財センター
- 上田龍兄（編）2014『乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書10 乙金地区遺跡群10～薬師の森遺跡第15・16・22・32・34・35次調査～』大野城市文化財調査報告書第115集、大野城市教育委員会
- 榎本義嗣 2003「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会 資料集』中世都市研究会2003年九州大会実行委員会、65-74頁
- 榎本義嗣 2008「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市 博多を掘る』海鳥社、52-55頁
- 榎本渉 2010「東シナ海の宋海商」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、30-59頁
- 大石雅章 2004『日本中世社会と寺院』清文堂出版
- 大庭康時 1992「博多遺跡群の埋蔵遺構について」『法哈噠』第1号、博多研究会、63-83頁
- 大庭康時 1993「聖福寺前一丁目2番地―中世後期博多における街区の研究（1）―」『法哈噠』第2号、博多研究会、1-28頁
- 大庭康時 1994「博多綱首殺人事件―中世前期博多をめぐる雑感―」『法哈噠』第3号、博多研究会、13-26頁
- 大山喬平 1984「中世の日本と東アジア」歴史学研究会・日本史研究会（編）『講座日本歴史3 中世1』東京大学出版会、1-45頁
- 勝田至 1988「中世の屋敷墓」『史林』第71巻第3号、史学研究会、41-76頁
- 勝田至（編）2012『日本葬制史』吉川弘文館

- 川添昭二 1971『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 河辺隆宏 2007「日宋貿易における年紀制管理と貿易形態の変化」佐藤信・藤田覚（編）『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、95-113頁
- 橘田正徳 1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会、245-280頁
- 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 佐伯弘次 1988「大陸貿易と外国人の居留」川添昭二（編）『よみがえる中世1—東アジアの国際都市 博多』平凡社、102-119頁
- 狭川真一 2011『中世墓の考古学』高志書院
- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、242-247頁
- 島津毅 2017『日本古代中世の葬送と社会』吉川弘文館
- 島田次郎 1974「平氏政権の対宋貿易の歴史的前提とその展開—十～十二世紀における国際的契機について—」中央大学経済研究所（編）『歴史研究と国際的契機』中央大学出版部、233-271頁
- 谷直子（編）2023a『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 6 箱崎遺跡—HZK1703・1804・2003地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第9集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2023b『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 7 箱崎遺跡—HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 9 箱崎遺跡—HZK2007地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 中尾祐太 2018「考古学からみた箱崎」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、10-23頁
- 中尾祐太 2024「箱崎遺跡」宮本一夫（編）『季刊考古学・別冊46 九州考古学の最前線 2 歴史時代編』雄山閣、64-67頁
- 中島恒次郎 2009「九州の中世墓」狭川真一（編）『日本の中世墓』高志書院、103-118頁
- 中間研志（編）1991『奈良尾遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第13集、福岡県教育委員会
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室、180-197頁
- 福永将大 2022a「箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用史」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5 箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、九州大学埋蔵文化財調査室、111-127頁
- 福永将大 2022b「九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁研究とその展開」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5 箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、九州大学埋蔵文化財調査室、180-192頁
- 福永将大 2024「元寇防塁跡」宮本一夫（編）『季刊考古学・別冊46 九州考古学の最前線 2 歴史時代編』雄山閣、68-71頁
- 福永将大（編）2022『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5 箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 細川涼一（編）2001『三昧聖の研究』碩文社
- 穂積裕昌・角正淳子・竹田憲治（編）2005『菟上遺跡発掘調査報告—本文編—』三重県埋蔵文化財調査報告227-7、三重県埋蔵文化財センター
- 本田浩二郎（編）2023『箱崎68—第102次・第113次・第118次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1485集、福岡市教育委員会
- 村田多津江（編）1985『吉母浜遺跡』下関市教育委員会

Ⅳ 遺物からみた中世の箱崎キャンパス遺跡の特徴

谷 直子¹⁾

1：九州大学埋蔵文化財調査室

1. はじめに

箱崎キャンパスにおける中世の遺構の代表的なものとして、元寇防塁が挙げられる。元寇防塁に関しては、『九州大学埋蔵文化財調査室報告 第7集』として総括報告がなされ、その中で多方面にわたる優れた論考が収められている（福永編 2022）。また本報告第Ⅻ章にも元寇防塁の論考を掲載している（宮本論文）。

元寇防塁以外の遺構については中世の集落域と中世から近世にかけての墓地があり、中世の集落については『九州大学埋蔵文化財調査室報告 第9・10集』（谷編 2023a・b）で、中世から近世の墓地については『九州大学埋蔵文化財調査室報告第11～14集』で報告されている。

また中世の遺構の変遷や特徴については本報告第Ⅲ章の福永論文で詳細な検討がなされている。

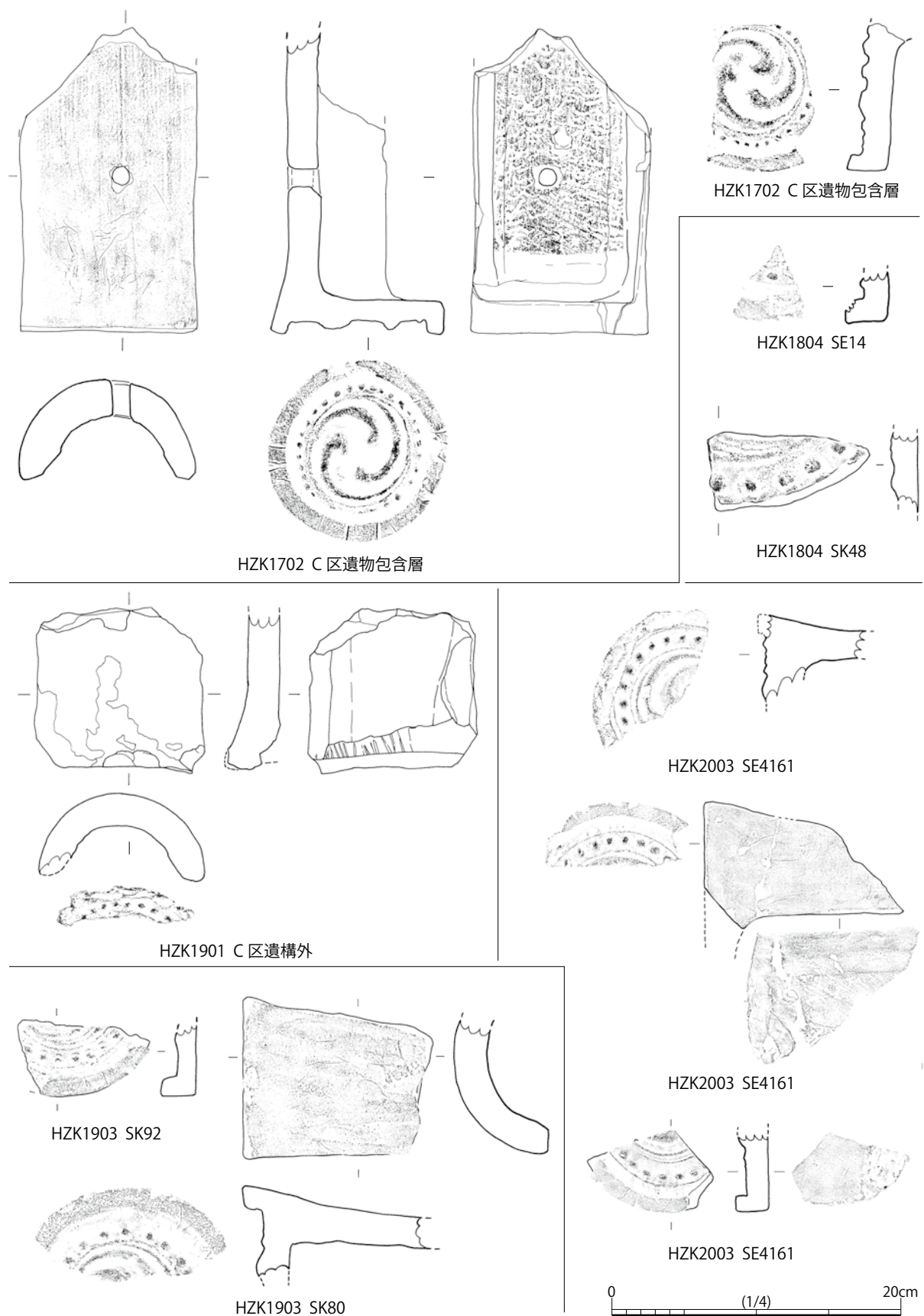
箱崎キャンパス出土の主な中世遺物については、貿易陶磁、中世須恵器、瓦質土器、土師器、瓦、板碑がある（谷編 2023a・b・2026）。貿易陶磁については、残りの良いものはほとんどが墓からの出土である。集落域からの出土例では、概ね13世紀から15世紀の範囲におさまると考えられる貿易陶磁、中世須恵器、瓦質土器、土師器とも完形に近いものは少なく、分析に耐えうる状況にない。

瓦と板碑に関しても出土状況や出土量などが特に良好というわけではないが、箱崎キャンパス内に地蔵の森と呼称される地区があり、そこにかつて北山重盛院還國寺あるいは勝軍地蔵堂と呼称される堂宇があったことから、瓦と板碑はこの地蔵堂との関係が深いと考え、今回その特徴について考察を加えることとした。

2. 出土瓦について

箱崎キャンパス出土の瓦はHZK1703・1804・1901・1904・2003・2101地点（本報告第Ⅰ章第3図参照）から出土しており、出土位置は箱崎キャンパスの北東側に偏っている。瓦の種類は、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・雁振瓦・鬼瓦がある（第1～4・6図）。とりわけ、HZK1703・2003・1804地点からは、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦の他に、雁振瓦や鬼瓦が出土しており、入母屋もしくは切妻造りの建物が存在していたと考えられる。HZK2003・2101地点からは建物の礎石と思われる石も検出されており、HZK2101地点では2方向の向きに分かれる建物群が存在していたと報告されている（谷編 2023b）。この建物群の想定に関しては柱穴の底面のレベルが揃わないことなどを根拠に否定的な意見もあるが（本報告第Ⅲ章 福永論文）、建物解体時に柱穴から柱を抜き去るときの影響や、柱穴内の礎石まで抜き去ったかどうかなどによって、柱穴底面のレベルの差異が生じた可能性がある。また柱穴の並ぶ方向が揃っていることや、瓦の出土状況から考えても、規模の大小は検討の余地があるにせよ2方向の建物群が存在していたと判断される。

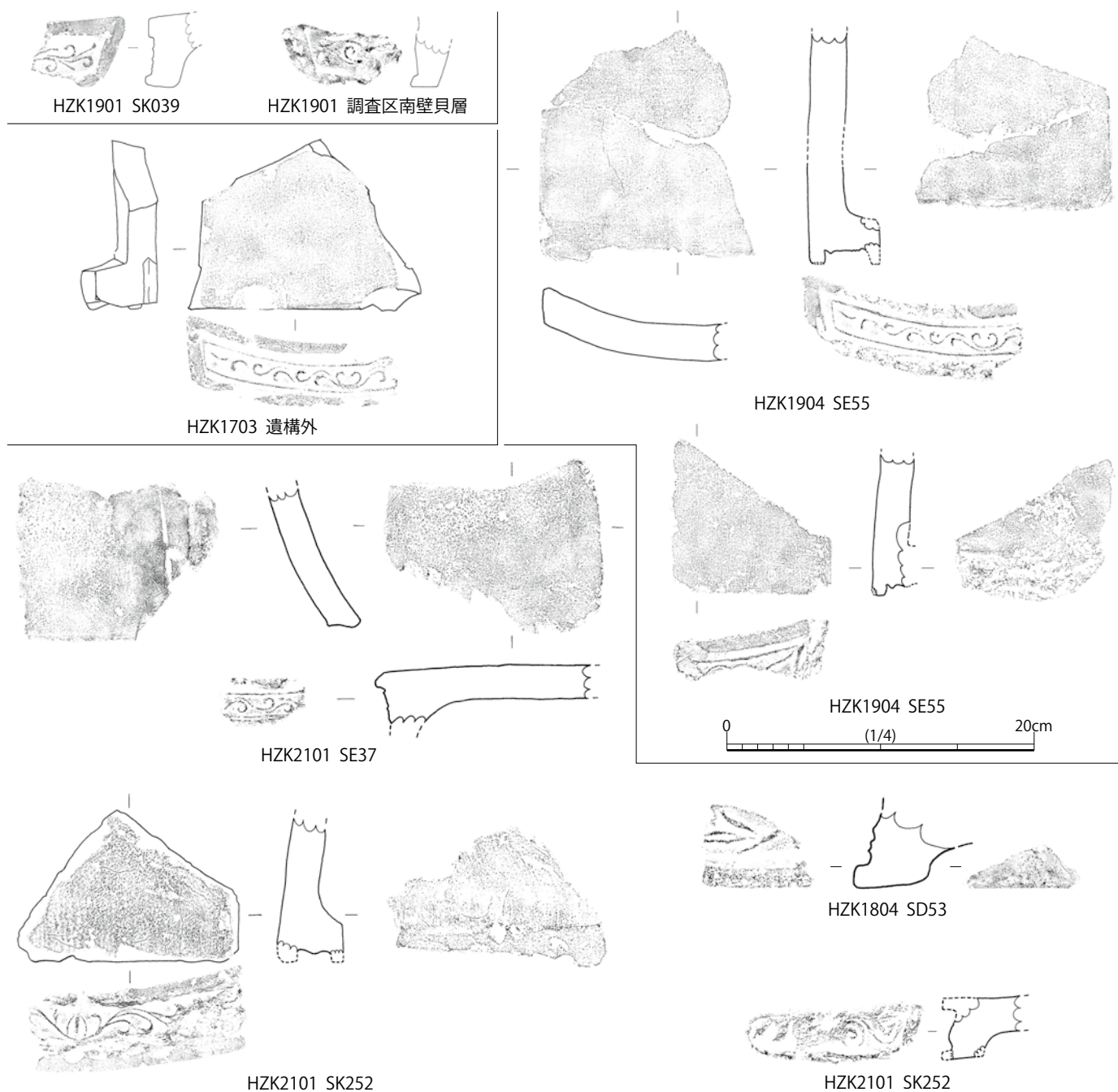
軒丸瓦は連珠文+圏線+三巴文の文様構成で、一部には連珠文の外側にも圏線がある。そのほかの文様構成の軒丸瓦は見られない。



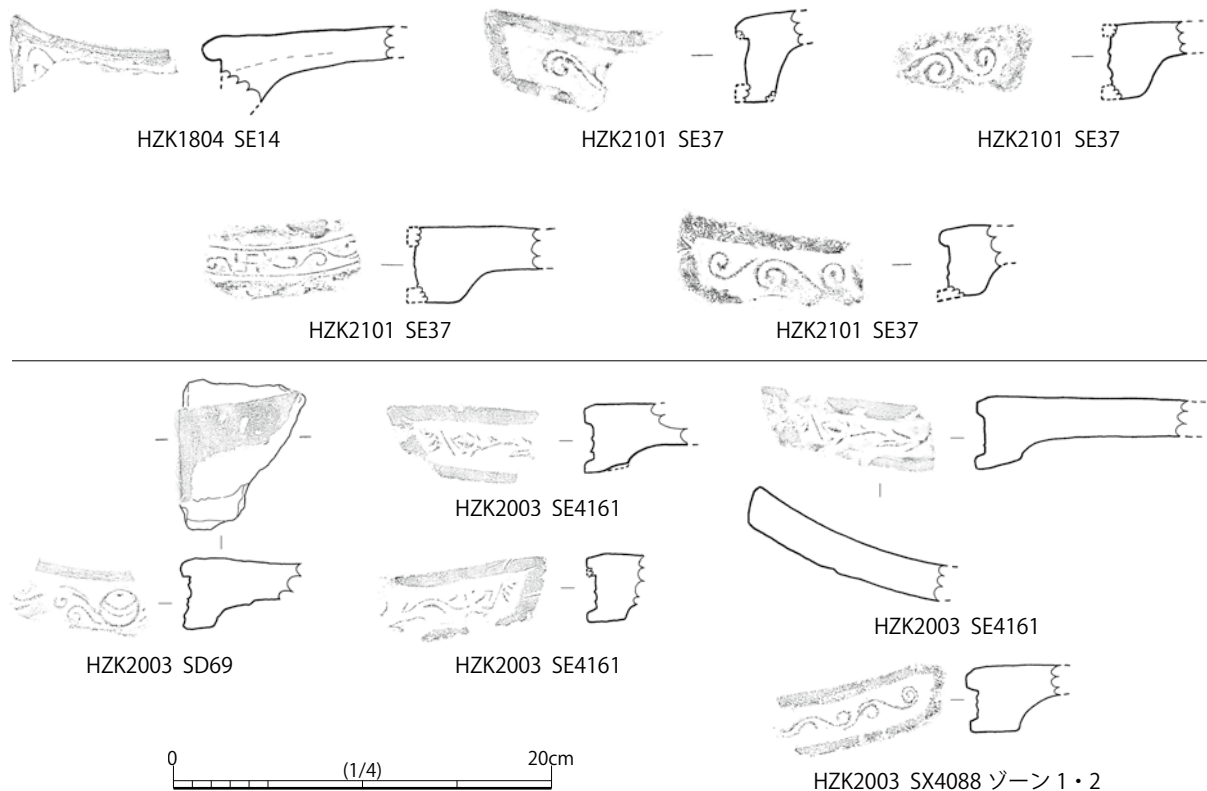
第1図 箱崎キャンパス出土の軒丸瓦



第2図 箱崎キャンパス出土の軒丸瓦



第3図 箱崎キャンパス出土の軒平瓦



第4図 箱崎キャンパス出土の軒平瓦

丸瓦には内面に吊紐痕が見られるものがある。この時期の吊紐痕には4本程度のものと、九州型で15本以内の2パターンがあり、前者が1300～1333年、後者が1333年以降とされているが（松田ほか 2019）、完形の丸瓦が少なく判別できなかった。

軒平瓦は蓮華唐草文が主体で、一部に宝珠唐草文も見られる。蓮華唐草文軒平瓦のバリエーションが豊富で、型式学的な先後関係が不明瞭であることはすでに指摘されている（松田ほか 2019）が、箱崎キャンパス出土の蓮華文軒平瓦も、唐草のバリエーションが豊富である。

蓮華唐草文軒平瓦は1300年前後から14世紀代末頃に位置づけられ、14世紀代が大部分とされ、宝珠唐草文軒平瓦は14世紀末頃から1573年とされる（松田ほか 2019）。箱崎キャンパス出土のものは、木島孝之氏の分類による横岳崇福寺出土瓦のV型に類似しており、V型は16世紀後半の所産という（木島 2007）。ただし宝珠唐草文軒平瓦の確実なものは、HZK2003地点SD69出土の1点で、箱崎キャンパスの軒平瓦の瓦当文様の大半は、蓮華唐草文段階に属する。

箱崎遺跡の軒平瓦に特徴的なものに、逆卍文を持つ瓦と唐草の先端に蕾があり、界線で区切った両端に半裁した宝珠文を配する瓦がある。

逆卍文を持つ軒平瓦は瓦当文様を囲む区画線の中に唐草を配し、中央に逆卍文を施す瓦である。HZK2101地点SE37から1点出土している。福岡市域で卍文を持つ瓦には、全く同一の文様を持つ瓦は見つからないが、名島城跡出土の軒平瓦は、宝珠唐草文の宝珠の横に丸で囲った中に卍文を配するもので、当該の瓦に一番近い。他には香椎B遺跡の軒丸瓦に逆卍文のものがある（第5図）。

界線で区切った両端に半裁した宝珠文を配する瓦は、HZK2003地点D区SE4161から3点出土している。福岡市域からは同様の瓦が博多遺跡群第137次調査（上角編 2003）、野芥遺跡（中村編 1998）、香椎B遺跡（瀧本編 2000・松田ほか 2019）から出土しており、同范瓦の存在から博多遺跡群第137



香椎B遺跡出土
逆卍文軒丸瓦 (瀧本編 2000 より)



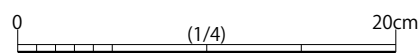
名島城址出土
宝珠に卍文軒平瓦 (荒牧編 2007 より)



野芥遺跡出土
文様の両端に内傾するラインを有する扁行唐草文の軒平瓦 (中村編 1998 より)

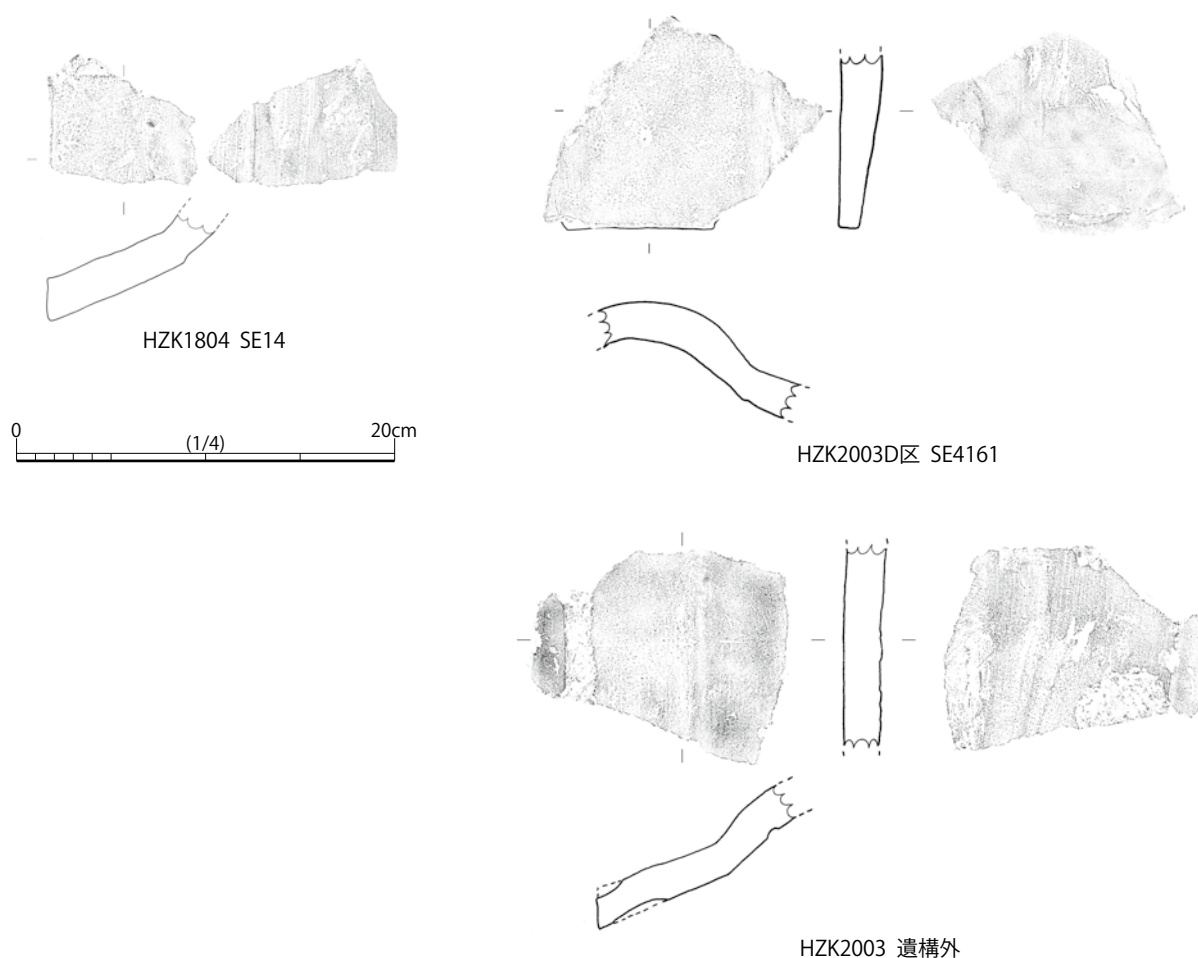


博多遺跡群出土
端部を界線で区切った中に宝珠文を配した唐草文の軒平瓦 (上角編 2003 より)



※写真は全て縮尺不同

第5図 箱崎キャンパス出土瓦の類例



第6図 箱崎キャンパス出土の雁振瓦

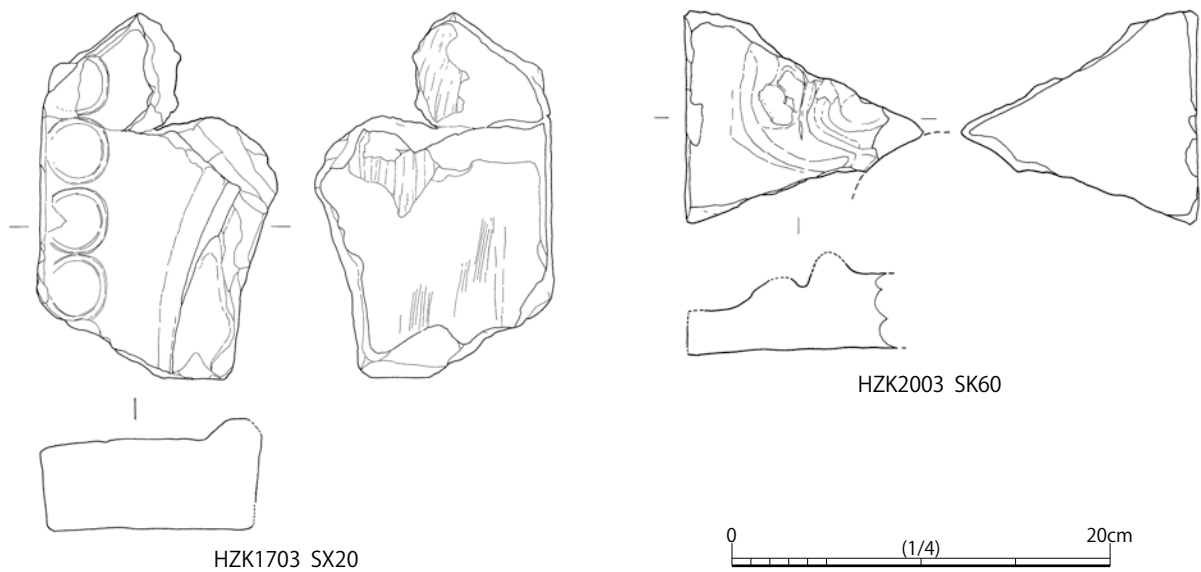
次調査出土瓦⇒野芥遺跡群・香椎 B 遺跡の変遷が指摘されている（松田ほか 2019）。

HZK2003地点 D 区 SE4161出土の瓦は、博多遺跡群第137次調査出土のものと比較すると、瓦当文様を囲む区画線もなく、端部の宝珠も半裁されており、野芥遺跡群・香椎 B 遺跡出土瓦に類似している。

雁振瓦は棟に葺く瓦で、熨斗瓦の上に丸瓦を置く形であったため、鎌倉前期はその形状が強く残るが室町中期にかけて形状が変化して段が弱くなり、室町後期には山形へ変化する（芦田 2019）。箱崎キャンパスでは、HZK1804・2003地点で出土しており、いずれも熨斗瓦と丸瓦の境の痕跡である屈曲が残っているため、室町中期（15世紀中頃）以前のもと考えられる。

鬼瓦は HZK1703地点 SX20と HZK2003地点 E 区 SK60から出土している。HZK1703地点 SX20の鬼瓦は縁をスタンプの円文で飾るもので、類似の瓦が野芥遺跡 4 次調査で表採されている（中村編 1998）。

以上のことから、箱崎キャンパス出土の瓦は、14世紀から15世紀中頃を主体としており、その頃箱崎サテライト南東側に建物群が建っていたことが示唆される。また瓦には博多遺跡群・香椎 B 遺跡・野芥遺跡との類似点が多くみられることが分かる。



第7図 箱崎キャンパス出土の鬼瓦

3. 板碑について

箱崎キャンパスからは板碑は24基出土している。出土地点が判明しているものは、HZK2003・2006・2101地点出土であるが、地点不明のものも、保管の間に出土地点が明確ではなくなってしまったもので、本来は HZK1801・2003・2006・2007・2101地点のいずれかから出土したものである。箱崎キャンパスの東側から出土しているが、HZK2101地点出土のものは、SE367の井戸枠に転用されていたもので、本来の場所から運ばれている。この板碑は紀年銘から文明3（1471）年建立であり SE367 はその後構築されたと考えられる。

箱崎キャンパス出土の板碑は、ほとんどが自然石の一部を加工したものであるが、一山形・二山形の定形化したものも少量見られる。いずれの形態も空に向かって先端が尖る形である。彫られた梵字はキリーク・サ・サクが多く、阿弥陀三尊像を表している。形態や彫られた梵字などは勝軍地藏堂板碑として報告されているものと同様である（谷編 2026）。

年号の分かるもので一番古いものは北朝年号の応安5（1372）年で、一番新しいものは文明3（1471）年である（谷編 2026）。一連の板碑群であったと考えられる勝軍地藏堂板碑の紀年銘は貞和2（1346）年から応永32（1425）年までであるから（三木編 1992a・b）、勝軍地藏堂板碑全体としては、貞和2（1346）年から文明3（1471）年が現状で確認できる存続範囲である。

板碑からは、14世紀後半から15世紀後半までの時間幅が得られ、江戸時代以前における北山重盛院還國寺あるいは勝軍地藏堂の隆盛期は、この時期であったと考えられる。

4. まとめ

上記の検討結果から、箱崎キャンパス出土の瓦の存続幅は、14世紀から16世紀であるが、14世紀から15世紀後半を主体としており、紀年銘のある板碑の時期と合わせると、江戸時代以前における北山重盛院還國寺あるいは勝軍地藏堂の隆盛期は14世紀後半から15世紀後半を中心とした時期であること

が判明した。また瓦の出土位置は、箱崎サテライトの南東側に偏っており、このあたりに中世の建物群が存在していたと考えられる。瓦の瓦当文様、鬼瓦の文様、雁振瓦の存在など類似点の多さからは、博多遺跡群、香椎 B 遺跡、野芥遺跡との関係性が示唆されている。

野芥遺跡の発掘調査の結果からは、出土した瓦の時期は15世紀頃とされている。鬼瓦のほか雁振瓦の出土から経堂のような性格の建物を想定するなら、寺院などの可能性が高いと考えられ、出土した遺構や瓦から『筑前国続風土記』に記載の野芥大聖寺の可能性があると指摘された（中村編 1998・松田ほか 2019）。野芥大聖寺は、臨済宗の寺院で、『筑前国続風土記拾遺』によれば片江神松寺の末寺で、承天寺の末々寺であるとされ、江戸中期にはすでに全く廃壊していたとされる（松田ほか 2019・桃崎 2013）。野芥大聖寺の本山である承天寺は仁治3（1242）年に聖一国師（円爾）を招いて創建された名刹であるが、聖一国師は竺崎宮との縁が深い。聖一国師は留学後、宋から帰朝の際に海難に遭うものの、竺崎八幡神の加護により無事であったことから、神恩感謝のため承天寺の僧侶が竺崎宮の神前で読経を行う承天寺一山報賽式が現在も行われている（竺崎宮ホームページ）。

博多遺跡群第137次調査地点は、この承天寺から北に1 km ほど離れており（上角編 2003）、現在では承天寺や臨済宗寺院との関連は分からないが、周辺に寺院が多く存在する地区であり、当時も寺域であった可能性が高い。

香椎 B 遺跡は香椎宮の北東に位置し、建久報恩寺に隣接する。報恩寺は建久3（1192）年に栄西が、香椎宮の側に創建した臨済宗の寺院で、「香椎宮中于報恩院寺」とも記され、香椎宮とともに日宋貿易に関与した可能性が高い（佐伯 2000）。また保延6（1140）年には、大山寺・香椎宮・竺崎宮の神人らが太宰府と対立し、太宰府を焼き払ったことから、香椎・竺崎両社は太宰府領になるが、その後時期はずれるが、両社とも鎌倉時代初期までには石清水八幡宮領になり、香椎宮は南北朝後期まで、竺崎宮は戦国末期まで続くなど、竺崎宮との関連が深い（佐伯 2000）。

箱崎キャンパスには北山重盛院還國寺という寺院（地藏堂）があり、赤幡坊に属していた（広渡 2003）。赤幡坊は竺崎宮の社僧で、宗派ははっきりと分からない。竺崎宮の座主坊は真言宗であるが、神宮寺には臨済宗の勝樂寺も含まれることから、臨済宗との関わりも深かったと考えられる。そのため箱崎キャンパス出土の瓦はこうした臨済宗や竺崎宮・香椎宮のつながりを示す遺物と考えたい。

一方でこれらの瓦を奈良・西大寺流の真言律宗との関係で論じる見解もあり（松田 2016・桃崎 2025）、慎重に検討する必要もあろう。

建武3（1336）年には箱崎キャンパスからほど近い多々良川付近で南北両朝の激しい合戦（多々良川の合戦）が起こり、貞治元（正平17・1362）年には香椎・立花付近で南朝方大内氏と北朝方大友氏の合戦が起こっている（佐伯 2000）。こうした凄惨な合戦が勝軍地藏堂板碑をはじめとした供養塔が箱崎に多く建てられる契機となり、寺社同士のつながりが強化される背景となった可能性がある。

軒平瓦や板碑といった断片的な資料だけで、14世紀から15世紀後半の箱崎の様相を明らかにすることは困難であり、今後の研究の進展に期待したい。

謝辞

本報告を行うにあたり、福岡大学人文学部教授の桃崎祐輔先生には、多くの御教示・御助言を賜りました。記して謝意を表します。

参考文献

芦田淳一 2019「大和一中世瓦とその資料的可能性―」『中世瓦の考古学』高志書院 169-182頁

IV 遺物からみた中世の箱崎キャンパス遺跡の特徴

- 荒牧宏行（編）2007『名島城跡2—第2次・第3次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第938集 福岡市教育委員会
- 上角智希（編）2003『博多95—博多遺跡群第137次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第766集 福岡市教育委員会
- 木島孝之 2007「九州大学工学部建築学科仮蔵 大宰府崇福寺跡出土瓦の資料的魅力」『大応国師と崇福寺』福岡市美術館学芸課編 76～77頁
- 佐伯弘次 2000「中世の香椎と香椎宮」『香椎B遺跡—香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集 福岡市教育委員会 346-357頁
- 関根達人 2018『墓石が語る江戸時代 大名・庶民の墓事情』歴史文化ライブラリー464 吉川弘文館
- 関根達人（編）2019『特集◎墓石の考古学』季刊考古学第149号 雄山閣
- 瀧本正志（編）2000『香椎B遺跡—香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集 福岡市教育委員会
- 谷直子（編）2023a『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告6 箱崎遺跡—HZK1703・1804・2003地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第9集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2023b『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告7 箱崎遺跡—HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2024『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡—HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告8 箱崎遺跡—HZK1602・2006地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第11集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告9 箱崎遺跡—HZK2007地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告10 箱崎遺跡—HZK1801地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2026『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告12 箱崎遺跡—補遺編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第15集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 中村啓太郎（編）1998『野芥遺跡2—野芥遺跡群第4次調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告第575集 福岡市教育委員会
- 宮崎宮ホームページ（www.hakozakigu.or.jp）2026年2月9日閲覧
- 広渡正利 2003『宮崎八幡宮史』宮崎宮
- 福永将大（編）2022『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 松田麻里 2016「中世瓦にみる同范関係とその意義—端部に宝珠文を伴う蓮華唐草文軒平瓦と梅鉢均整唐草文軒平瓦を対象として—」『九州考古学』第91号 九州考古学会 43-62頁
- 松田麻里・桃崎祐輔 2019「筑前・筑後・豊前・肥前」『中世瓦の考古学』高志書院 237-254頁
- 三木隆行（編）1992a『福岡市の板碑』福岡市教育委員会
- 三木隆行（編）1992b『福岡市の板碑（図版）』福岡市教育委員会
- 桃崎祐輔 2013「第I部 地域の遺跡・寺社・石塔からみた城南区の歴史」『城南区の歴史散策—「城南区歴史探訪講座」報告書—』福岡市城南区役所生涯学習推進課 7-18頁
- 桃崎祐輔 2025「野芥大聖寺の歴史と櫛田神社」野芥公民館シニアカレッジ歴史講座資料
- 山本隆一郎 2018「〔コラム〕箱崎の板碑」『アジアの中の博多湾と箱崎』勉誠出版 76-81頁
- 米倉秀紀（編）1998『野芥遺跡3—第7次・8次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告第576集 福岡市教育委員会

V 近世における箱崎砂州先端部

福永将大¹⁾

1：九州大学総合研究博物館

1. 九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡における近世期の調査成果概要

近世における箱崎は、唐津街道の沿線上に位置する宿場町であった。箱崎宿は、近世前期に福岡藩内の街道整備に伴って宿場となったものの、当時は博多側から進むと筥崎宮の手前で東に曲がり、街道は箱崎村の中を通っていなかった（有田 2018、第1図）。元禄六（1693）年になって、ようやく箱崎村の中心を通る街道が整備されて、本格的に宿場町として繁栄し始めたようである。第1図を見るとわかるように、箱崎村の中心を通過して北上する街道は、九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡（以下、箱崎キャンパス内遺跡）に至る直前で東に右折する。箱崎キャンパス内遺跡は、箱崎宿の北側のはずれに位置していることが読み取れよう。

箱崎キャンパス内遺跡において、近世期と報告されている遺構は、後述する土坑墓・木棺墓・甕棺墓を除くと、非常に少ない。各調査区の包含層から近世期の所産と考えられる陶磁器や泥面子などは一定量出土するものの、当該期の墓以外の遺構は以下の8つのみである。なお、調査区の位置については第三章第1図を参照のこと。

HZK1901地点A区 SK04（近世・近代）

HZK1901地点A区 SK05（近世・近代）

市92次I区 SP017（17世紀後半）

市102次2区 SE2117（近世以降、瓦組井戸）

市102次4区 SE4070（近世以降、瓦組井戸）

市108次 SE04（近世以降、瓦組井戸）

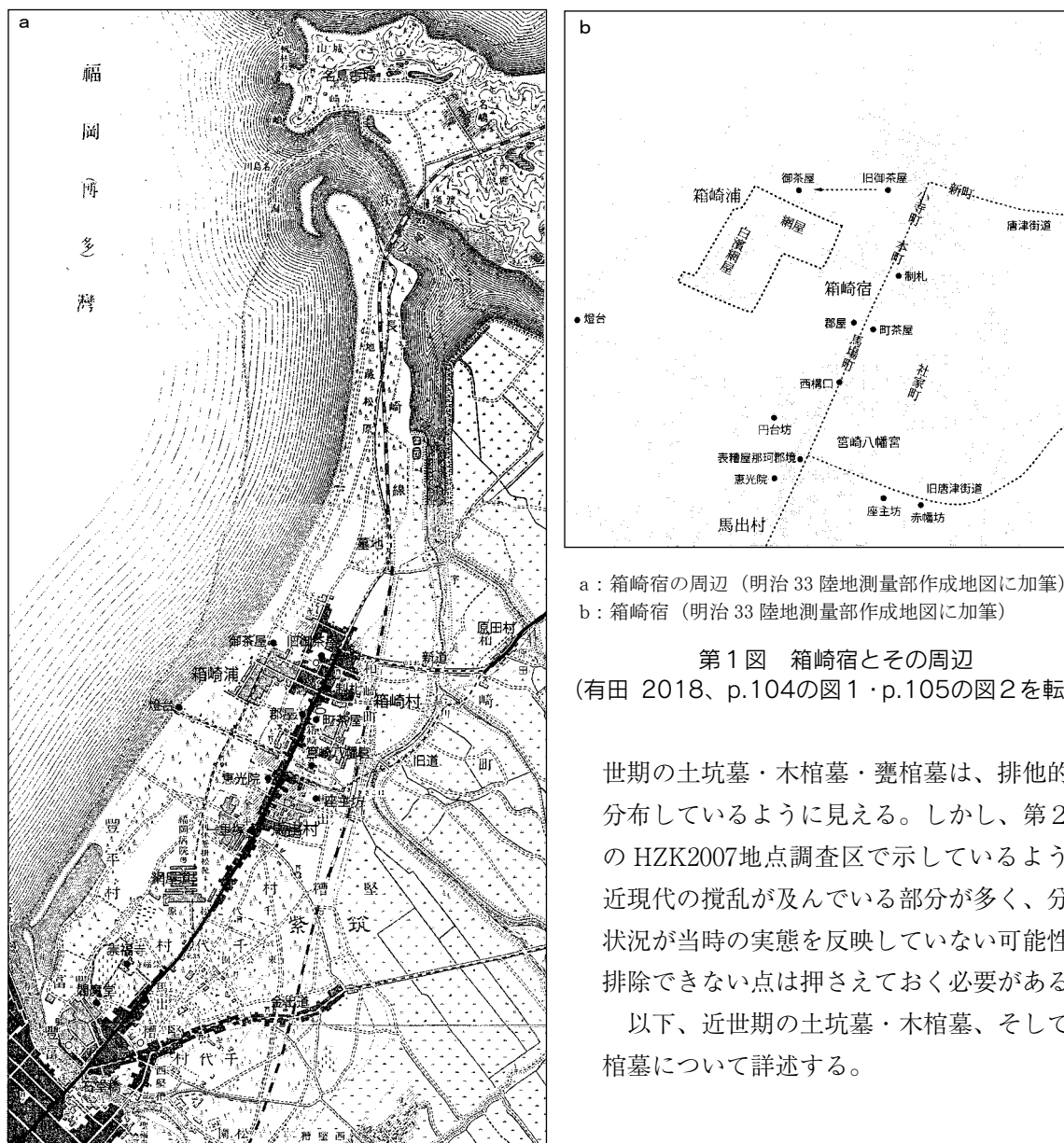
市113次1区 SE01（19世紀後半、瓦組井戸）

市118次9区 SD9010（中世後期～近世初頭）

中世期に遺構が多く分布していた遺跡南側において、瓦組の井戸が複数見つまっている（第三章第2図）。中世期の井戸と重複・近接して掘られていることから、中世期からの継続的な土地利用のあり様を窺うことができる。一方、それまで井戸の分布が認められなかった遺跡中央部よりやや北側においても、瓦組の井戸（市113次1区）が検出されていることは、近世期の新たな動向として評価できよう。

箱崎キャンパス内遺跡では、近世期の土坑墓・木棺墓・甕棺墓が多数検出されており、かつ、その分布はHZK1801地点とHZK2007地点に集中している。また、HZK1801地点とHZK2007地点では、火葬土坑・土坑墓・木棺墓・甕棺墓以外の遺構は確認できていないことは注目に値する。HZK1801・2007地点以外では、近世期の墓は確認できていないことを踏まえると、近世期においてHZK1801・HZK2007地点の一带には墓域が広がっており、葬送に特化した場が形成されていたと考えられる。

HZK1801・2007地点における遺構分布状況を示したのが第2図である。中世期の火葬土坑は、HZK2007地点の南西側に偏って分布しており、近世期の土坑墓・木棺墓・甕棺墓は、HZK2007地点北東側からHZK1801地点にかけて分布している。一部重複しているものの、中世期の火葬土坑と近



第1図 箱崎宿とその周辺
 （有田 2018、p.104の図1・p.105の図2を転載）

世期の土坑墓・木棺墓・甕棺墓は、排他的に分布しているように見える。しかし、第2図のHZK2007地点調査区で示しているように、近現代の攪乱が及んでいる部分が多く、分布状況が当時の実態を反映していない可能性を排除できない点は押さえておく必要がある。

以下、近世期の土坑墓・木棺墓、そして甕棺墓について詳述する。

2. 特筆すべき遺構

（1）土坑墓・木棺墓

第1表は、箱崎キャンパス内遺跡で見つかった土坑墓・木棺墓を一覧表にしてまとめたものである。第1表には、中世期の土坑墓・木棺墓も含まれているが、ここでは近世期とその時期の可能性が高い土坑墓・木棺墓を扱うこととする。第1表のうち、HZK1801地点とHZK2007地点で検出した土坑墓・木棺墓で、「報告書記載時期」に時期を掲載していないものは、近世期である可能性が高い。市113次2b区と3区にも時期を記載していないものが存在するが、これらは報告内容（本田編 2023）から判断して中世期の墓であると考えられる。

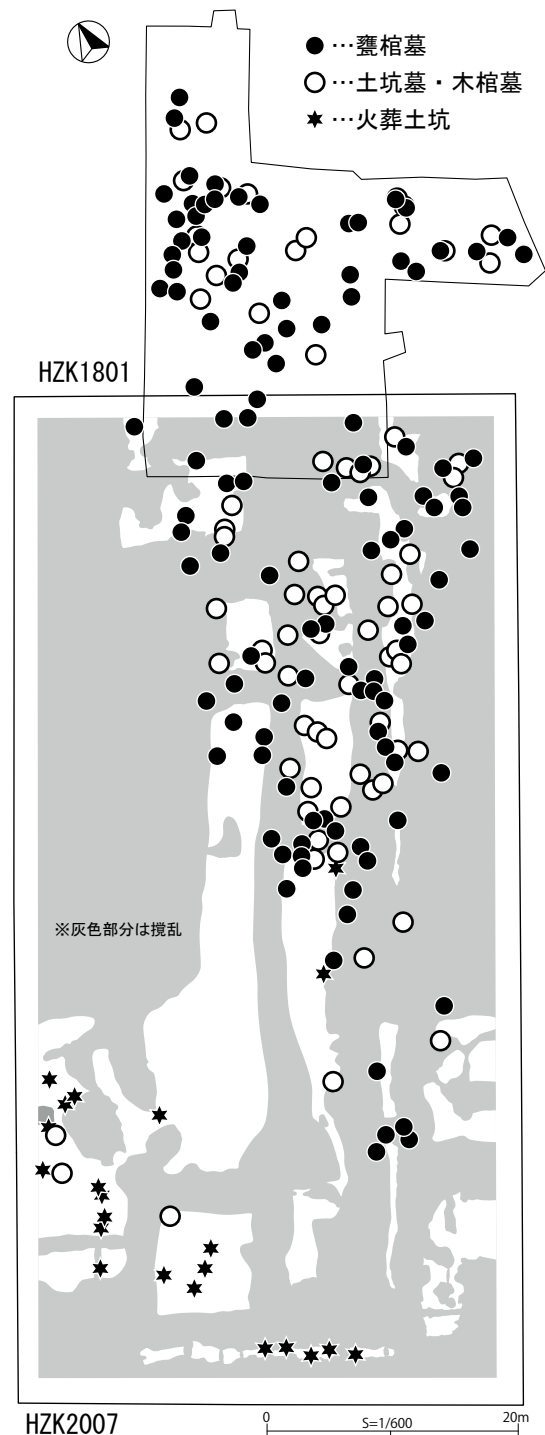
人骨の残りは良くないが、埋葬姿勢がわかる事例は複数認められる。遺構平面プランや人骨出土状況から判断して、仰臥・側臥屈葬と座葬に大きく二分することができる（第3図）。前者はHZK2007

地点の ST21・ST87・ST91・ST160、後者は HZK2007 地点の ST126・ST155・ST173 が好例である。埋葬姿勢の判断が難しいものも多々存在するが、仰臥・側臥屈葬よりも座葬のほうが量的には多い。

埋葬施設は残存していないものの、両者ともに鉄釘が出土する事例がある。仰臥・側臥屈葬例は長方形木棺、座葬例は正方形木棺あるいは桶棺に埋葬されていたものと考えられる。HZK2007 地点 ST173 は、その人骨出土状況から桶棺に埋葬されていたことがわかる貴重な事例である（第3図）。ただし、遺構平面プランが不明瞭で鉄釘も出土せず、木棺や桶棺の存在を積極的に支持し難いものも一定数認められる。これらについては土坑墓の可能性を排除できないため、本稿では「土坑墓・木棺墓」と表現することとした。

土坑墓・木棺墓の多くからは副葬品が出土しており、銭が副葬されている例も多数認められる。銭の初鋳年代から遺構の時期の上限を決めることはできるが、細かな時間的前後関係の特定はできない。そのため、上述したような仰臥・側臥屈葬と座葬の時間的前後関係の特定は困難である。同じ理由で、これら土坑墓・木棺墓と甕棺墓の時間的前後関係を特定することも難しい。土坑墓・木棺墓でも寛永通寶やキセル、鉄製銚など、甕棺墓と同じ副葬品組成をもつ例もあり、副葬品から見る限り、両者は併存していた時期もあると考えざるを得ない。一方、土師器しか副葬されていない、あるいは、副葬品をもたない土坑墓・木棺墓に関しては、銭を副葬する土坑墓・木棺墓などに比べて時期の特定が困難である以上、甕棺墓に先行して造墓された可能性も排除できない。後述するように、甕棺墓の年代的上限は古くても17世紀後半と考えられるため、甕棺墓が出現する前の17世紀前半に、こうした時期不詳の土坑墓・木棺墓を位置づけることができるかもしれない¹⁾。

土坑墓・木棺墓の時間的位置づけを考える上で、福岡県筑紫野市所在の原田地区遺跡群における近世墓の調査研究成果は参考になる（森山編 2003・2004・2006）。原田地区遺跡群では、長方形横棺（側臥屈葬、伸展葬）・正方形縦棺（立膝座葬）・桶棺（立膝座葬）・甕棺（立膝座葬）の大きく4つの埋葬施設が認められる。そのうち長方形横棺が最も古い棺形態で、上限は不明だが、下限は18世紀第3四半期頃、次に正方形縦棺と桶棺が18世紀第2四半期頃に出現し、しばらく長方形横棺と併存したのち、長方形横棺の消失後は、正方形横棺が主に使用されるという。なお、甕棺は一部18世紀代に使用されているものの、主体は19世紀代のような。



第2図 HZK1801・2007地点 遺構分布図

第1表 箱崎キャンパス内遺跡 土坑墓・木棺墓一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	放射性炭素年代 測定値 (2σ)	鉄釘	青磁・ 白磁	土師 坏・皿	陶磁器	キセ ル	鉄	寛永 通宝	その他 の銭	その他
HZK1801	ST01	土坑墓	17世紀以降	—	—	—	—	—	—	—	—	洪武通寶1、 慶長通寶1、 元豊通寶1、 祥符通寶1、 嘉祐通寶1	—
	ST94	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師坏2	—	—	—	1	不明5	青銅製品、 毛抜1
	ST112	土坑墓	17世紀以降	—	—	—	土師皿1	—	—	—	6	—	メガネ1、メ ガネ入れ1、 ボタン2、木 製玉4、櫛1 玉2、ガラス 片、石 棒状鉄製品、 銚金具
	ST115	木棺墓	17世紀以降	—	2	—	土師皿2	—	—	—	2	不明3	—
	ST119	木棺墓	17世紀以降	—	—	—	土師皿1	—	—	—	6	—	—
	ST130	土坑墓	17世紀以降	—	—	—	—	—	—	—	3?	不明1	—
	ST138	土坑墓	17世紀以降	—	—	—	土師皿	—	—	1	6	—	木片
	ST59	木棺墓	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿2	—	—	—	5	不明2	銚金具小片
	ST60	木棺墓	17世紀後半以降	—	5	—	土師皿2	—	—	—	5	無文銭1	刀子か?、 毛抜1
	ST83	土坑墓	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿3	—	—	—	6	—	毛抜2
	ST101	土坑墓?	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿3	—	—	—	5	嘉祐通寶1	石製玉1、毛 抜1、櫛?1 毛抜1、櫛1
	ST145	土坑墓	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿1	—	—	—	4	不明1	—
	ST122	土坑墓	18世紀前半以降	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST46	土坑墓?	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST47	木棺墓?	—	—	2	—	土師皿2	—	—	—	—	—	—
	ST114	土坑墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST118	木棺墓	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	鉄製刀子1、 鉄製品 (刀子 ?) 1、金銅 製飾り金具45
	ST120	土坑墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST128	土坑墓	—	—	—	—	土師皿2	—	—	—	—	—	銅製金具1
	ST129	木棺墓	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
	SX134	土坑墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	SK139	土坑墓?	—	—	—	—	土師皿1	—	—	—	—	—	—
	SK140	土坑墓?	—	—	—	—	染付茶 碗1、土 師皿1	—	—	—	—	—	石製玉
	ST149	土坑墓	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
HZK2006 A区	ST02	木棺墓	12世紀後半～ 13世紀初頭	—	5	青磁碗1	土師皿4	—	—	—	—	—	—
HZK2006 G区	ST35	木棺墓	14世紀前半	—	13	白磁碗 1・白磁 皿4	—	—	—	—	—	—	—
HZK2007	ST45	木棺墓	14世紀後半以降	—	—	—	土師器 坏1	—	—	—	—	洪武通寶1、 天禧通寶1 元祐通寶1、 祥符元寶1、 洪武通寶1、 祥符通寶1、 無文銭4、不 明1	毛抜1
	ST110	土坑墓?	14世紀後半以降	—	—	—	土師器 坏2	—	—	2	—	—	—
	ST114	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿2	—	—	1	5	無文銭1	櫛1、毛抜1
	ST126	木棺墓	17世紀以降	1430-1530 cal AD (76.77%) 1555-1626 cal AD (18.68%)	—	—	土師皿2	—	1	1	1	不明5?	銅製金具、毛 抜1
	ST129	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	—	ミニ チュア 白磁3	—	—	6	—	木片
	ST150	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿2	—	—	—	6	無文銭1	—
	ST151	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師坏2	—	—	1	6	—	櫛?1、毛抜1
	ST160	木棺墓	17世紀以降	—	1	—	土師皿1	—	—	1	2	—	釘状鉄製品、 毛抜1(半環状)
	ST163	木棺墓	17世紀以降	1427-1460 cal AD (95.45%)	—	—	土師皿2	—	—	1	2	—	—
	ST190	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿1	—	—	—	4	祥符元寶1、 至道元寶1、 洪武通寶1 不明5	毛抜1
	ST195	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿2	—	—	1	1	—	銅製飾り金 具、漆膜
	ST196	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	—	—	—	—	1	不明3	鉄片
	ST204	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	—	—	—	1	6	—	毛抜1
	ST205	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿1	—	—	1	6	—	櫛?1、毛抜1
	ST210	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿2	—	—	—	—	—	木製板材、ガ ラス玉、毛抜1
	ST211	土坑墓?	17世紀以降	—	—	—	土師皿3	—	—	1	4	紹聖元寶1	毛抜1
	ST198	土坑墓?	17世紀以降?	1395-1426 cal AD (79.46%) 1326-1351 cal AD (15.99%)	—	—	土師皿2	—	—	1	—	不明6	石製玉1、 毛抜1

第1表 箱崎キャンパス内遺跡 土坑墓・木棺墓一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	放射性炭素年代 測定値 (2σ)	鉄釘	青磁・ 白磁	土師 坏・皿	陶磁器	キセ ル	鉄	寛永 通宝	その他 の銭	その他
HZK2007	ST87	木棺墓	17世紀後半以降	1452-1530 cal AD (52.84%) 1542-1633 cal AD (42.61%)	有	—	土師皿1	—	—	1	3	紹聖元寶1、 元豐通寶1	扇の要1、筭1 櫛1
	ST125	土坑墓	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿2、 土師坏1	—	—	1	6	—	毛抜1
	ST146	木棺墓	17世紀後半以降	1632-1665 cal AD (64.67%) 1525-1558 cal AD (21.60%)	1	—	土師皿1	—	1	1	4	不明2	銅製金具2 毛抜1、櫛?1
	ST154	木棺墓?	17世紀後半以降	—	有	—	—	—	—	—	6	—	—
	ST194	?	17世紀後半以降	—	—	白磁小 鉢	土師皿2	船徳利	1	—	6	—	銅製金具、板 状鉄製品、 櫛?1
	ST207	土坑墓?	17世紀後半以降	—	—	—	土師坏1	—	—	1	5	無文銭1	—
	ST208	木棺墓?	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿2	—	—	1	6	不明5	銅製板1、毛抜1
	ST209	土坑墓?	17世紀後半以降	—	—	—	土師皿2	—	—	1	6	—	毛抜1、櫛?1
	ST155	木棺墓	18世紀前半以降	—	4	—	—	—	—	—	2	鉄銭6	鉄製刀子、玉1
	ST179	土坑墓?	18世紀前半以降	—	—	—	土師皿2	—	—	2	4	鉄銭1、不明1	毛抜1
	ST181	木棺墓	18世紀前半以降?	—	—	—	—	—	—	1	4	鉄銭?	—
	ST21	土坑墓	—	991-1059 cal AD (67.17%) 1075-1153 cal AD (28.28%)	—	—	土師坏1	—	—	—	—	—	—
	ST31	土坑墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST33	木棺墓	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST89	土坑墓	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST91	木棺墓	—	—	13	—	土師皿2	—	—	—	—	—	—
	ST116	木棺墓?	—	—	1	—	土師皿2	—	—	1	—	—	毛抜1
	ST121	土坑墓	—	—	—	—	土師皿2	—	—	1	—	—	櫛
	ST122	土坑墓?	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST124	土坑墓?	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST127	土坑墓?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST133	木棺墓	—	—	8	—	土師皿2	—	—	—	—	—	—
	ST134	木棺墓	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	木材 (銅製釘 付)、銅製銚 金具 鉄片
	ST147	木棺墓	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	銅製筭
	ST159	土坑墓?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST164	木棺墓	—	1420-1521 cal AD (93.40%)	—	—	土師皿2	—	—	—	—	—	—
	ST173	桶棺	—	1764-1799 cal AD (43.00%) 1645-1679 cal AD (39.05%)	2	—	土師皿1	—	—	—	—	—	—
	ST176	木棺墓	—	—	—	—	土師皿2	—	1	—	—	—	—
	ST177	木棺墓?	—	—	有	—	土師皿1	—	—	—	—	—	水晶製玉1
	ST186	土坑墓?	—	—	—	青磁碗1	土師皿2	—	—	—	—	—	—
	ST187	土坑墓?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST189	土坑墓?	—	—	—	—	土師皿1	—	—	—	—	—	銅製金具1
	ST199	土坑墓?	—	—	—	—	土師皿1	—	—	1	—	—	櫛1
HZK2101	ST58	墓坑	13世紀後半～ 14世紀前半	—	—	白磁皿1	土師坏 6、土師 皿2	陶器壺1	—	—	—	—	—
	ST33	墓坑	15世紀	—	—	青磁碗1	土師坏1	粉青沙 器1	—	—	—	—	—
市92次 I 区	SR152	木棺墓	13世紀後半～ 14世紀初頭	—	13	青磁碗2、 青磁皿3、 青磁坏1、 白磁皿1	—	陶器壺 1、陶器 大甕1	—	—	—	—	鉄製短刀1、 滑石製品1
市102次 3区	ST3115	木棺墓	12世紀後半	—	4	青磁碗1、 青磁皿1	—	—	—	—	—	—	—
	ST3116	木棺墓	12世紀後半	—	4	白磁合 子1	—	—	—	—	—	—	—
市102次 4区	ST4005	木棺墓	16世紀	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST4006	木棺墓	16世紀	—	2	青磁碗1	—	染付碗 1、染付 皿1、御 前焼播 鉢1	—	—	—	—	丸瓦1、滑石 製石鍾11、土 鍾1
	ST4007	木棺墓	16世紀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST4008	木棺墓	16世紀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ST4009	木棺墓	16世紀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第1表 箱崎キャンパス内遺跡 土坑墓・木棺墓一覧

地点名	遺構名	種別	報告書記載時期	放射性炭素年代 測定値 (2 σ)	鉄釘	青磁・ 白磁	土師 坏・皿	陶磁器	キセ ル	鉄	寛永 通宝	その他 の銭	その他
市102次 5区	ST5040	木棺墓	12世紀後半	—	—	青磁碗 1、青磁 皿1	—	—	—	—	—	—	青磁三足香 炉？
市108次	SR03	木棺墓	12世紀後半	—	—	青磁碗1	—	—	—	—	—	—	—
市113次 2b区	SK209	木棺墓	12世紀後半	—	2	青磁碗 1、白磁 皿2	土師皿7	—	—	1	—	—	湖州鏡、刀 子、鉄製鉄、 鎌子状鉄製品
	SX226	土坑墓？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
市113次 3区	SX321	土坑墓？	13世紀	—	—	—	土師皿 2、土師 坏1	—	—	—	—	—	—
	SX310	土坑墓？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	付近から湖州 鏡
	SX323	木棺墓	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
	SX324	木棺墓	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—

こうした埋葬施設の変遷から、屈葬の寝棺（長方形横棺）→座棺（正方形縦棺・桶棺・甕棺）という変化を読み取っており、その葬位の変革期を18世紀中頃に位置づけている（森山編 2006）。

箱崎キャンパス内遺跡においても、長方形木棺と考えられる仰臥・側臥屈葬例、正方形木棺・桶棺と考えられる座葬例は認められるものの、甕棺墓も含めて、それらの時間的前後関係の特定が困難であることは上述のとおりである²⁾。残念ながら、原田地区遺跡群で示された埋葬施設の変化について、箱崎キャンパス内遺跡では検証・追認できるだけのデータが不足している。

（2）甕棺墓

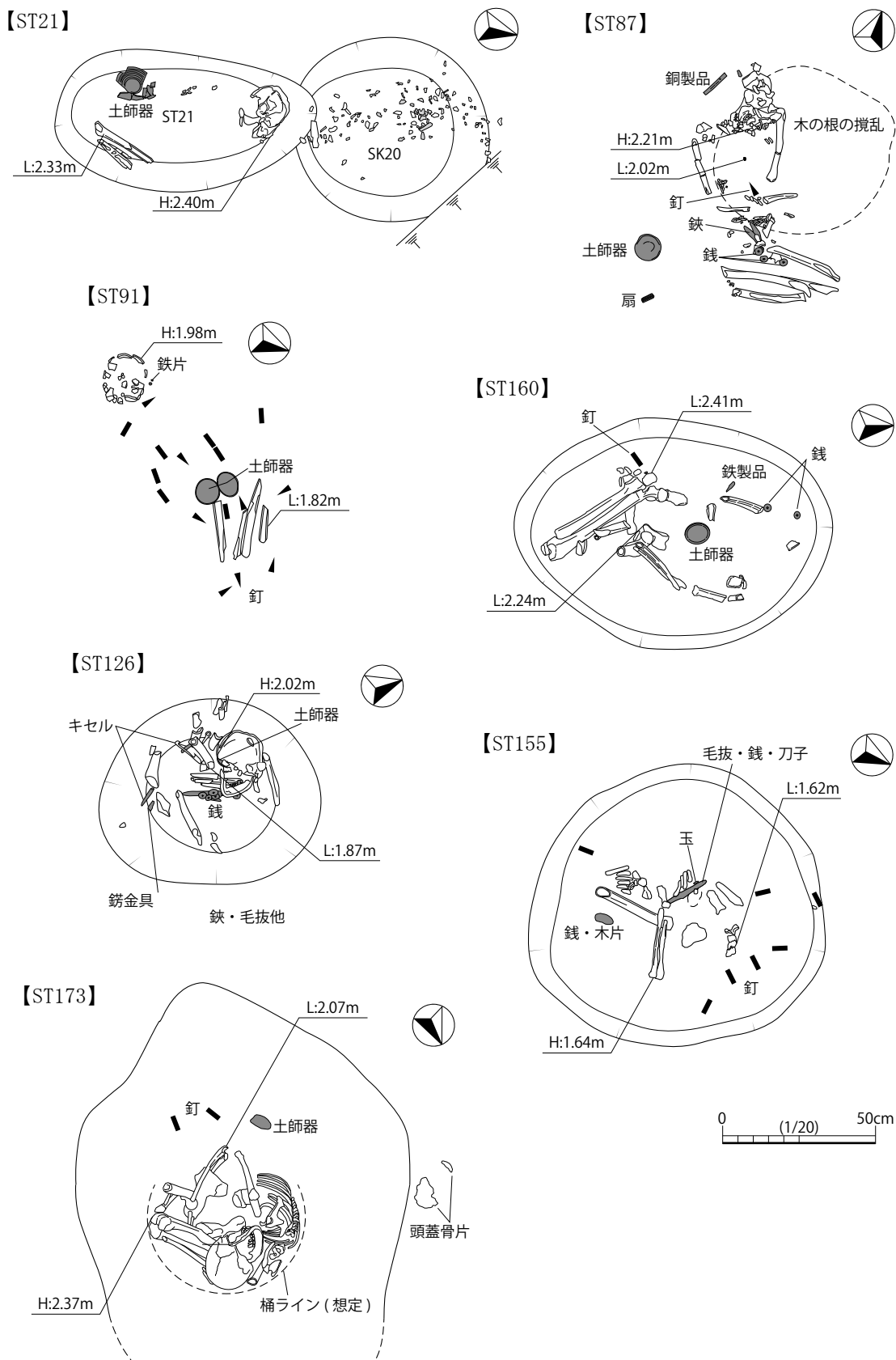
箱崎キャンパス内遺跡中央部に位置する HZK1801地点と HZK2007地点から、近世の甕棺が多数出土した。人骨が埋葬された状態で出土したものあれば、改葬によって人骨は認められないものの埋置された状態で出土したものもある。また、甕棺を墓坑から取り出したのち、複数個体をまとめて破壊・廃棄した状態で出土したものも確認できる。箱崎キャンパス内遺跡で出土する甕棺の大半は、肥前のハンズーガメと呼ばれる日用陶器（下村 1994；東中川 1987・2000）と考えられる。本稿では、出土した甕棺のうち、口縁部から底部あるいは胴部下半まで残存している134個体を対象として分析を行い、その時間的位置づけなどについて検討する。

出土した甕棺にはサイズバリエーションが存在する。器高を縦軸、口径を横軸にとって散布図を作成したところ（第4図左上）、器高30cm・口径30cm付近で一か所、器高60cm・口径40cm付近で一か所の計二か所において不連続を見出すことができた。この散布図をもとに、出土した甕棺を「小甕」（＝器高30cm未満・口径30cm未満）、「中甕」（＝器高60cm未満・口径40cm未満）、「大甕」（＝器高約60cm以上・口径約40cm以上）の3つに大別する。小甕・中甕・大甕の出土数を見ると、大甕が圧倒的多数を占めていることがわかる。また、小甕・中甕としたものの中には、大甕と形態的・装飾的特徴が異なるものが少数存在しており、第4図にそれら例外的な甕棺を示した³⁾。以下、甕棺の分析を行うが、第4図の例外的な甕棺は対象から除外している。

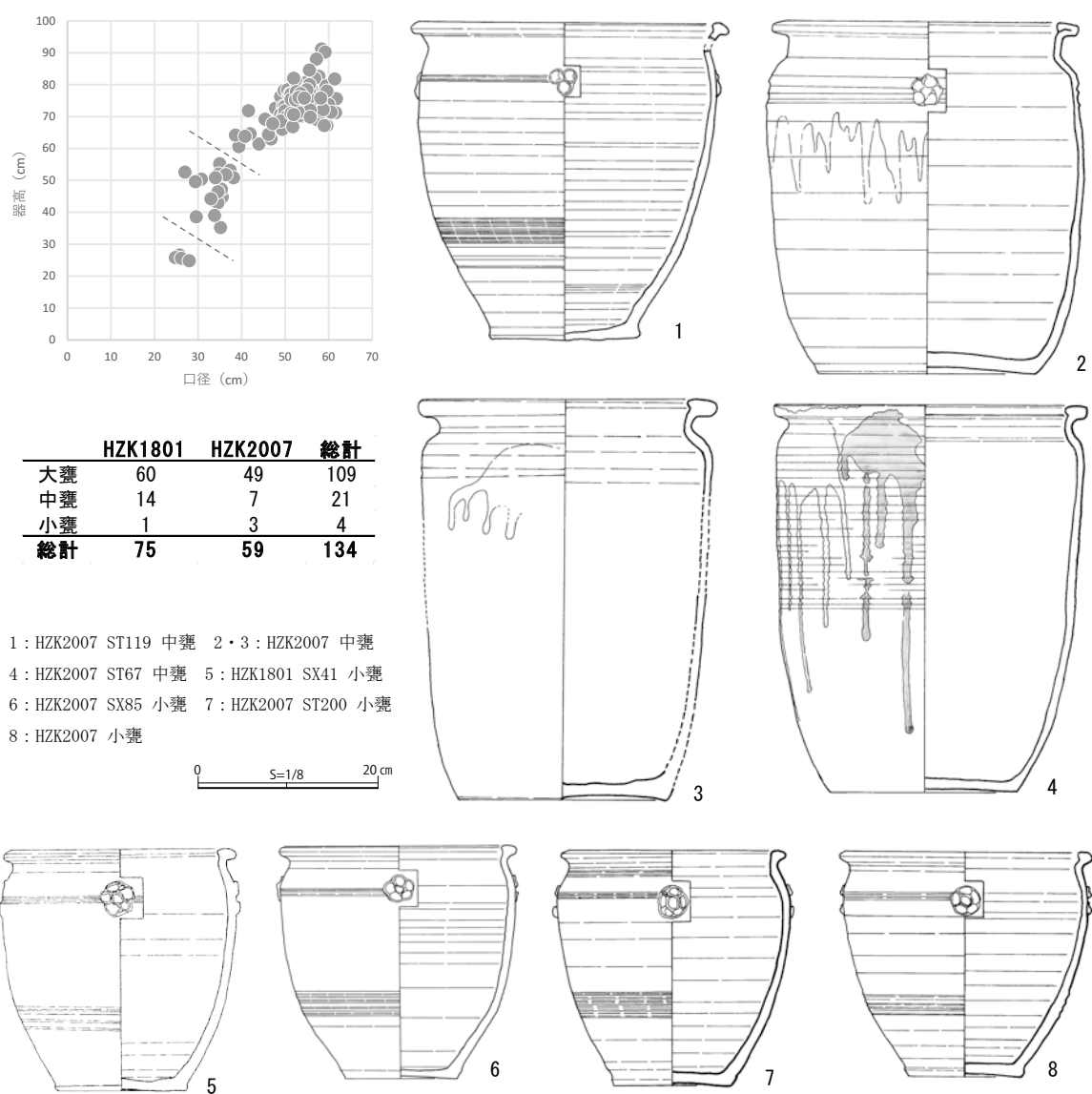
まず、出土した甕棺の分類を試みる。本稿では、甕棺が有する複数の属性の中でも「口縁部断面形態」を基準として、A類～F類の6つに大別した。さらに、形態的特徴の差異からD類とE類をそれぞれ2つに細分して（D1類・D2類、E1類・E2類）、全部で8つの分類単位を抽出した（第5図）。なお、第2表は、HZK1801・2007地点で出土した甕棺とその分類名、副葬品を一覧表にしてみたとめたものである。

A類…口縁端部の外面・内面ともに突出し、断面T字状を呈するもの。

B類…単口縁で口縁端部を肥厚させるもの。口縁部外面下端に突帯をめぐらせるものが多い。



第3図 HZK2007地点 土坑墓・木棺墓の人骨出土状況



第4図 甕棺サイズ分類と例外的な小甕・中甕

C類……口縁部外面が帯状に肥厚し、下端に段を有する。口縁部内面にも粘土を付加して肥厚させる。

D 1 類…口縁端部をコ字状に折り曲げる。口縁部外面が帯状に肥厚し、下端に明瞭な段を有する。

D 2 類…口縁部外面・内面をともに肥厚させる。外面は帯状に肥厚し、下端に明瞭な段を有する。

E 1 類…口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させる。

E 2 類…口縁部内面を肥厚させる。

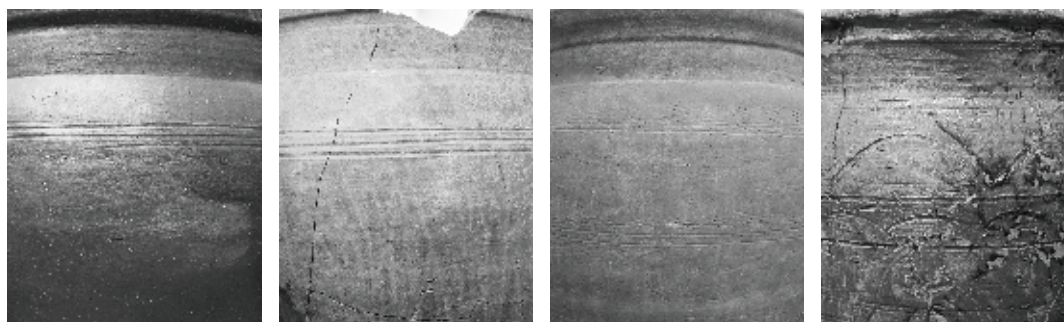
F類……口縁端部外面・内面をともに肥厚させる。

これら各分類単位と、他の属性との相関関係を見たのが第6図である。口縁部に認められる目跡(写真1)の有無、外面・内面・底部内面の器面調整のあり方(平行タタキ・格子目タタキ・ナデ)、外面・内面の施釉のあり方(第5図)、という全部で6つの属性変異との相関関係を見た。

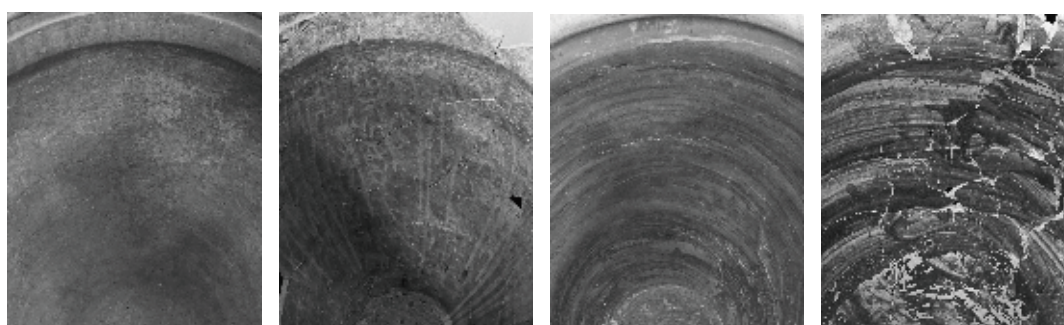
口縁部に認められる目跡は、甕の重ね焼き(横山 1982)が行われた証左と考えられる。重ね焼きを行うことで、より効率的に甕棺を大量生産できるようになったことが推察される。口縁部の目跡は



《口縁部断面形態》



《外面施釉》



《内面施釉》

第5図 甕棺属性バリエーション

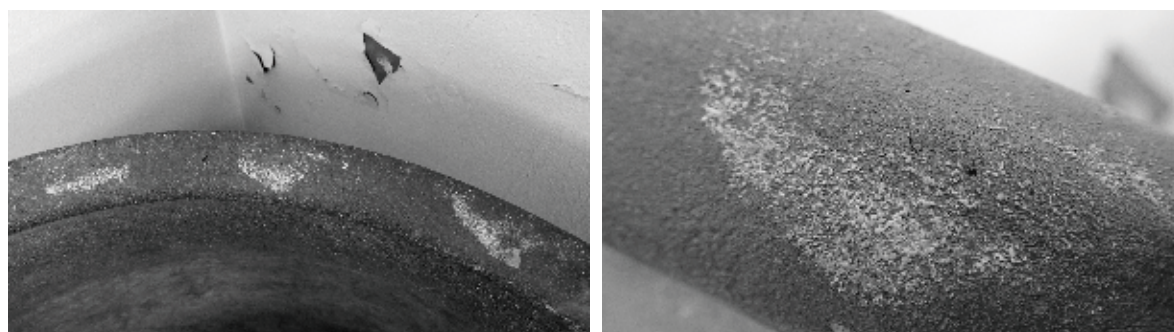


写真1 甕棺口縁部の目跡

第2表 箱崎キャンパス内遺跡 甕棺墓一覧

地点名	遺構名	分類	改葬	寛永通宝の銭	その他の銭	その他副葬品	地点名	遺構名	分類	改葬	寛永通宝の銭	その他の銭	その他副葬品
HZK1801	ST40	A類	○	—	—	—	HZK2007	ST73	—	—	2	—	—
	ST57	E2類	—	2	鉄銭3	鏡箱（蓋・身各1）、青銅製柄鏡1、七星板		ST74	E1類	—	—	—	木片、鉄鎌の刃部片
	ST58	E2類	○	6	—	—		ST75	E2類	○	1	—	—
	ST61	E2類	×	—	—	—		ST77	E2類	×	2	不明6	木片
	ST62	E2類	×	2	鉄銭2？	木製丸玉31、木製玉15		ST81	D2類	○	—	—	—
	ST63	E1類	—	6	—	玉		ST82	—	×	—	不明6	土人形、種子
	ST64	E2類	×	—	—	七星板		ST83	—	○	—	—	木片
	ST65	C類	×	5	鉄銭1	玉1		ST84	—	—	—	—	—
	ST66	D2類	×	5	鉄銭2	加工板		ST86	—	○	—	—	—
	ST67	D2類	×	—	—	—		ST88	—	×	—	—	木片
	ST70	F類	—	—	—	加工板		ST90	B類	—	—	—	鉄片
	ST71	D2類	×	—	—	陶器人形1		ST95	—	—	—	—	—
	ST72	B類	×	4	開元通寶1	—		ST99	—	○	—	—	—
	ST73	F類	×	4	鉄銭1	土師質鈴（オシドリ）1		ST100	—	—	4	鉄銭2	石製玉、木片
	ST75	D2類	—	6	—	—		ST101	—	×	—	—	—
	ST76	E1類	—	1	—	—		ST102	D2類	○	5	無文銭1	—
	ST78	—	○	—	—	—		ST104	E2類	○	—	—	—
	ST80	E2類	—	—	—	—		ST105	—	○	—	—	—
	ST81	D2類	○	6	—	木製玉、木片、七星板		ST106	D2類	○	—	—	—
	ST86	E2類	—	—	不明2	鉛製玉1、木製簀子3、樹皮、ガラス板、織物（布地）、銅製金具		ST107	D2類	—	6	—	—
	ST87	F類	×	—	大観通寶1	—		ST108	E2類	—	2	鉄銭2	扇の骨2
	ST89	—	—	6	—	—		ST109	E2類	×	—	—	煙草入れ金具5
	ST90	E2類	×	6	—	—		ST111	—	○	—	—	—
	ST91	B類	—	5	鉄銭2	—		ST112	—	○	6	—	—
	ST92	C類	○	—	—	—		ST113	D2類	○	—	—	—
	ST93	D2類	×	2	—	環状石製品		ST117	—	×	5	—	扇の骨3
	ST95	F類	×	6	—	玉6		ST118	D2類	○	3	鉄銭3	木製ボタン、ガラス玉3
	ST96	A類	—	—	—	—		ST119	—	○	—	—	蜜柑の飾り
	ST97	D2類	—	—	—	七星板		ST130	E1類	—	4	鉄銭2、無文銭1	煙草入れ金具3、木製品
	ST98	C類	—	—	—	—		ST131	D2類	○	—	—	—
	ST102	—	○	3	無文銭1	—		ST132	—	—	1	—	—
	ST103	—	—	4	鉄銭1	七星板、不明木製品23		ST137	E1類	○	—	—	小刀
	ST107	E2類	—	—	—	—		ST138	—	○	—	—	銅製筭、簪状製品、ガラス片
	ST108	E2類	—	—	政和通寶1	—		ST139	D2類	×	—	鉄銭複数枚	扇の一部
	ST109	C類	—	4	開元通寶1、不明1	—		ST140	D2類	×	—	—	漆器片、七星板
	ST110	D2類	—	—	—	—		ST141	—	—	？	銅銭2	—
	ST117	E1類	—	—	—	—		ST142	—	×	3	鉄銭4	—
	ST126	D2類	×	—	—	鉄製火打金		ST143	—	×	—	—	扇、鉄片
	ST127	F類	×	5	銅銭・鉄銭（枚数不明）	—		ST145	E2類	×	—	—	—
	ST133	—	—	—	—	印判手皿		ST149	B類	○	—	—	手水鉢
	ST137	E2類	—	—	—	—		ST152	E2類	○	—	—	陶器片
	ST141	E1類	×	—	—	—		ST153	E1類	○	—	—	—
	ST147	D2類	—	—	—	—		ST156	B類	○	—	—	—
	ST148	E1類	—	—	—	—		ST157	E2類	○	6	—	—
	ST151	—	—	—	—	—		ST165	—	○	—	—	—
	ST152	—	—	—	—	—		ST166	—	—	2	不明3	—
HZK2007	ST59	—	×	5	—	青銅製錫杖		ST167	E1類	×	2	鉄銭4	—
	ST62	F類	—	4	不明2、鉄銭1	銅製鈴2、銅製加工品、木片		ST169	E2類	×	—	—	—
	ST63	E1類	×	2	鉄銭4	—		ST170	E2類	○	—	—	—
	ST65	E2類	○	3	不明3	石蓋用？板石		ST171	B類	—	5	—	棺外から新寛永3・鉄銭3
	ST66	D2類	—	—	—	—		ST172	E2類	—	2	鉄銭5	板目板2、七星板、モミガラ、大形の礫
	ST67	—	—	4	無文銭2	—		ST174	D2類	×	6	無文銭2	—
	ST78	—	×	2	鉄銭3、無文銭2、不明1	柱目板、おがくず		ST182	—	○	4	不明3	—
								ST184	—	○	—	—	—
								ST185	E1類	○	—	—	—
								ST193	—	—	1	鉄銭4	—
								ST197	D1類	○	—	—	—
								ST200	—	○	6	不明1	石製玉
								ST203	—	○	—	—	—

後出の要素とされており（下村 1994）、甕棺の新旧を考える上で、有効な指標の一つとなり得る。A類・B類・E1類では目跡がないものが多数を占める一方、D2類・E2類・F類は目跡があるものが多数を占める（第6図）。前者は後者に対して相対的に古く位置づけられる可能性がある。

目跡の有無に関連して、頸部の立ち上がりの角度は注目に値する。第7図は、各分類単位における当該角度の出現頻度を示したものである。これを見ると、目跡がないものが多いA類・B類・E1類

《目跡》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
なし	3	8	2	2	3	11	15	1
あり	1	1	4	1	26	6	21	13
総計	3	9	6	3	29	17	36	14
《外面調整》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
平行					1	3	3	1
格子目	2	1	5	2	19	12	25	9
ナデ	1	8	1		11	2	9	4
総計	3	9	6	2	31	17	37	14
《内面調整》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
格子目、底部付近平行					1			
格子目	3	1	5	3	18	13	25	12
ナデ、底部付近平行					2			
ナデ		8	2		10	4	12	2
総計	3	9	7	3	31	17	37	14
《底部内面調整》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
格子目	3	2	5	3	20	11	23	9
ナデ		6	2		9	4	12	2
縄?								1
総計	3	8	7	3	29	15	35	12
《外面施釉》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
外A	2			2	11	3	13	11
外B		2	2	1	7	8	12	
外C		1	1		13	4	10	3
外D	1	6				2	2	
総計	3	9	7	3	31	17	37	14
《内面施釉》								
	A類	B類	C類	D1類	D2類	E1類	E2類	F類
内A	2		3	1	19	4	17	12
内B			2	1	11	1	10	2
内C		4	2	1	1	8	7	
内D	1	5				4	3	
総計	3	9	7	3	31	17	37	14

第6図 甕棺属性相関表

指摘されているが（下村 1994）、その変化の要因として重ね焼きの導入があることを、「目跡の有無」と「頸部傾斜角度」の相関が示唆していると考えられる。

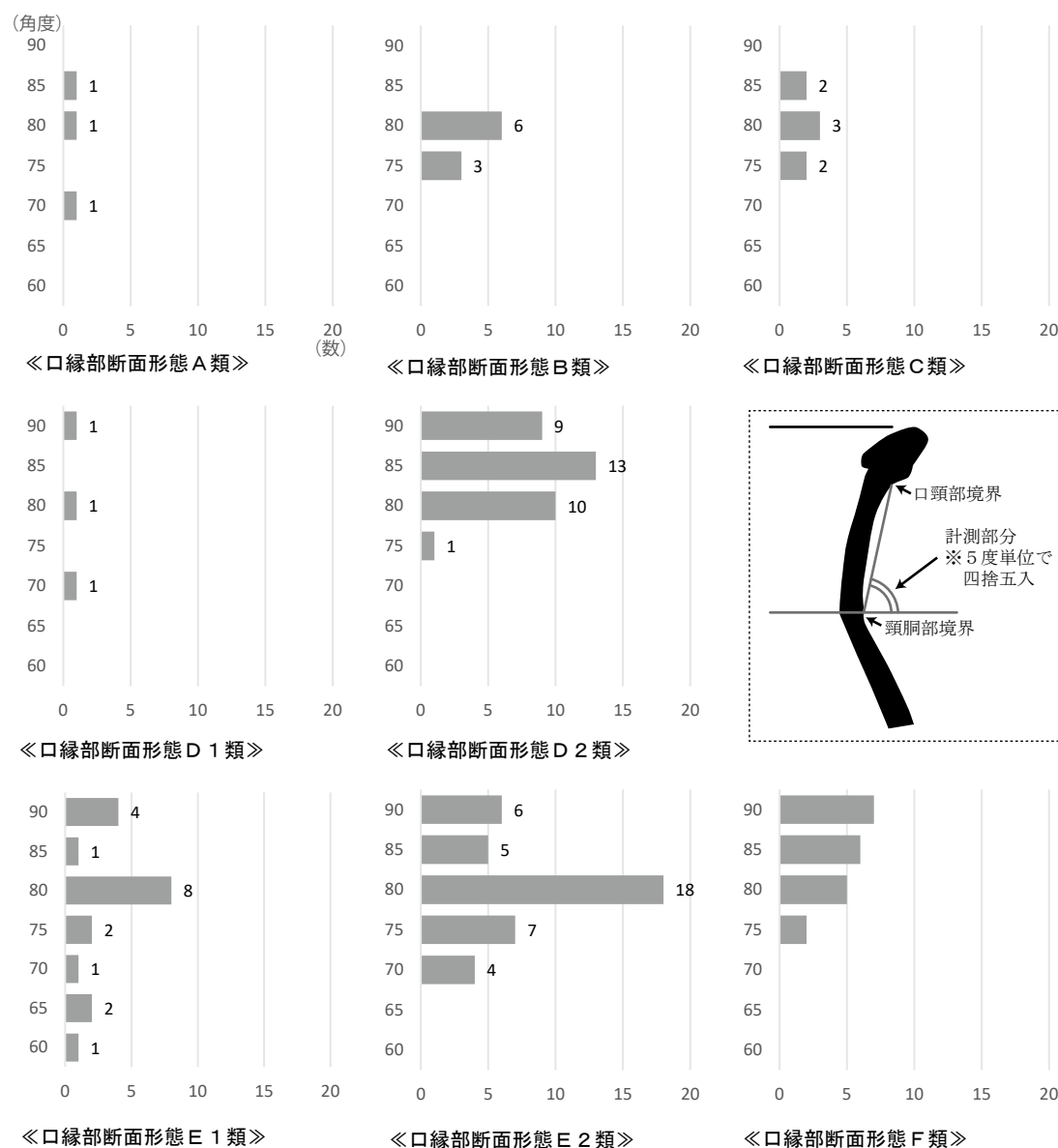
目跡以外の器面調整や施釉といった属性との相関関係を見ると、B類の異質性を指摘できる。外面・内面ともにナデ調整が主体で格子目タタキの痕跡は目立たず、施釉は「外D」・「内D」（第5図）との相関が認められる（第6図）。また、胎土を観察すると大粒の石英の混入が目立ち、器面調整や施釉と相まって、一見して他の甕棺とは異なる印象を受ける。B類は、下村智氏による分類のⅥ類に相当する（下村 1994）。下村氏もこのⅥ類の異質性に言及しており、その特徴は古い様相をもつとして17世紀代に位置づけている。B類から副葬品として鉄銭が出土しており（第2表、HZK1801地点ST91）、17世紀代まで古く位置づけることができるか判断は難しいものの、上述した目跡などの状況から比較的古手の甕棺である可能性は指摘できよう。

ここで、年代が判明している甕棺資料を参照して、上述の分類単位の時間的位置づけについて考えてみたい。A類は、福岡市博多に所在する天福寺跡で類似した甕棺が出土している。当該甕棺を分析した下村氏は、天福寺跡における近世墓の造営年代と、甕棺の口縁部形態の特徴、そして、出土した六道銭の分析結果も踏まえた上で、A類に類似する甕棺（下村氏のⅡ類）を17世紀中頃～後半代の所産と位置付けている（下村 1994）。

D1類は、佐賀県多久市梶尾家六代明全が埋葬されていた甕棺に類似する。明全は没年代がわかっ

では、頸部傾斜角度は小さく、頸部が外反する傾向が認められるのに対して、目跡があるものが多いD2類・E2類・F類では、頸部傾斜角度が大きいものが多く、頸部の立ち上がりが90°に近いものも目立つ。

横山浩一氏による現代の大甕製作に関する観察記録によると、重ね焼きをする際は、下甕を正立させて、その上に合口にして上甕を倒立させるようだ（横山 1982）。これは現代における観察記録ではあるものの、出土した甕棺の口縁部に残る目跡の存在から、おそらく近世においても同様の方法で重ね焼きが行われたと考えられる。合口で重ねることを想定すると、頸部が外反するような個体は、大甕の重みによって口縁部から頸部にかけての部分に負荷がかかり、破損する可能性が高い。一方、頸部の立ち上がりが直角に近い方が、大甕の重みに対する耐久性はより高いと推察される。新しくなるにつれて頸部の立ち上がりが直角に近くなる、という形態変化は先学においても

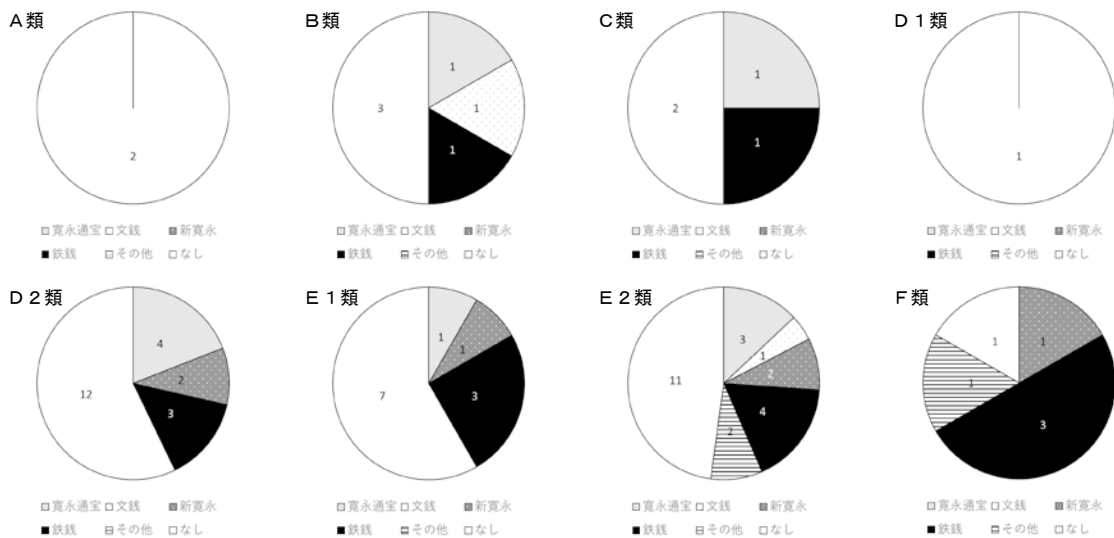


第7図 甕棺頸部傾斜角度

ており、元禄十（1697）年に亡くなっている（下村 1994；東中川 1987・2000）。また、小郡市高松家墓地で出土した、寛延元（1748）年に埋葬された高松興太郎妻壽の甕棺は、D 2 類に類似した口縁断面形態を有している。D 1 類・D 2 類の年代を考える上で、重要な事例と言えよう。D 1 類→D 2 類の口縁部断面形態の変化も型式学的に説明可能であり、上記年代によって示される時間的前後関係とも矛盾はない。

E 1 類に分類した HZK1801 地点 ST63 の口縁部には、「ヲシ川」という刻印が施されており、佐賀県押川窯で製作された甕棺だと考えられる。押川窯は明和三（1766）年に押川此右衛門が開窯した窯であり（東中川 1987）、E 1 類の製作年代の参考になる。

以上の検討より、A 類・B 類・E 1 類は比較的古手に位置づけられる可能性や、D 1 類→D 2 類と変化した可能性を指摘し得るものの、その妥当性については慎重な判断が必要である。第 8 図は、各分類単位別に、副葬されていた銭の種類と出現頻度を示したものである。古手と想定される A 類や D



第8図 甕棺墓出土の銭の種類と出現頻度

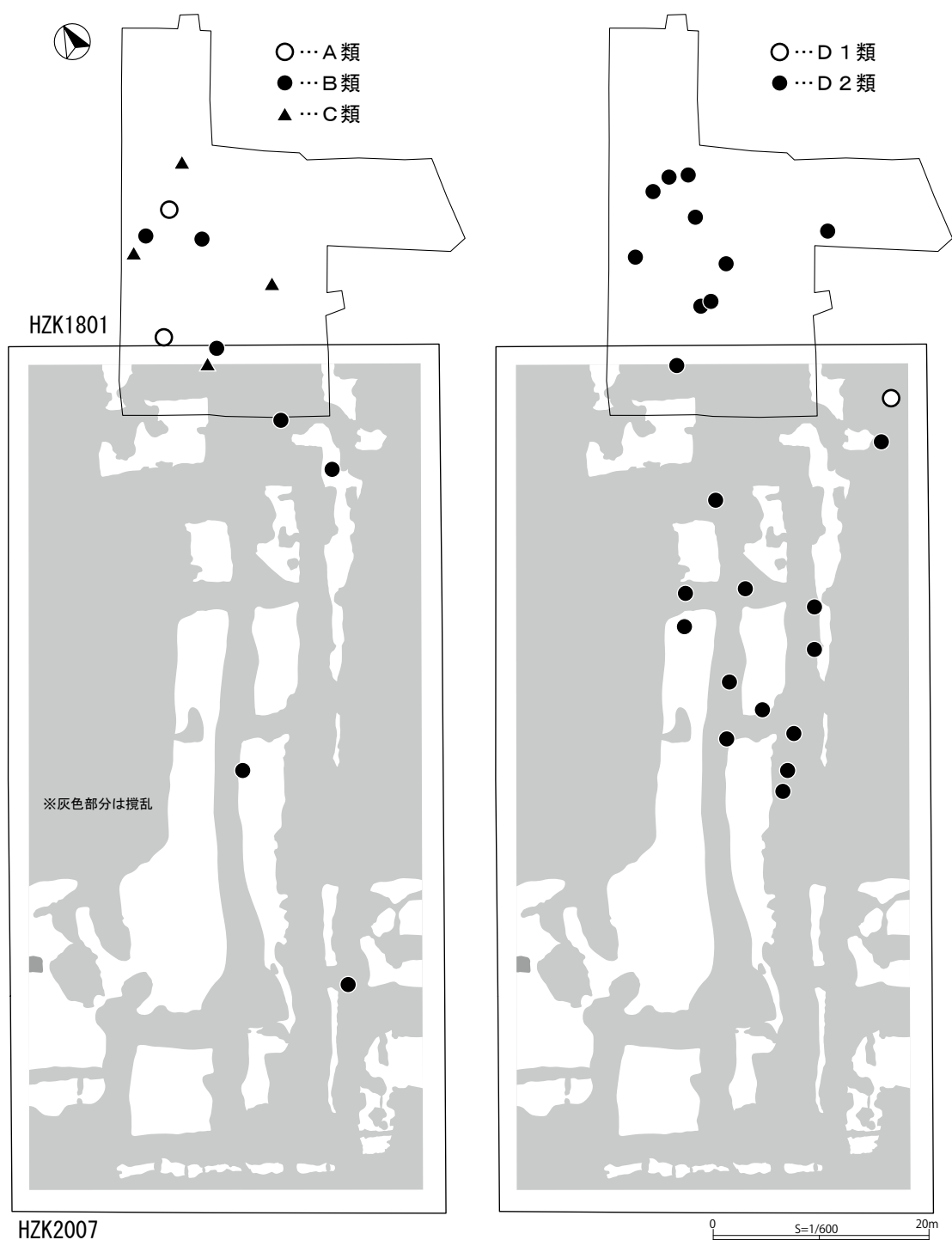
1類では銭がそもそも副葬されておらず、何らかの有意差を示している可能性もあるが、そのほかに
 ついて銭の副葬から時間的前後関係を見出すことは困難である。むしろ第8図を見る限り、A類・D
 1類以外に関しては明確な時間差を想定することは難しいと言わざるを得ない。ただし、銭を根拠に
 細かな時間的前後関係の検討はできないことは、土坑墓・木棺墓のところで述べた通りである。

視点を変えて、HZK1801・2007地点における各分類単位の分布状況を見てみる（第9・10図）。箱
 崎キャンパス内遺跡では、時期が下るにつれて遺跡北側に遺構が広がる傾向を指摘できるため（本書
 第三章）、HZK1801・2007地点においても、北側に行くほど新しい甕棺が分布する可能性を想定し得
 る。しかし、第9・10図から、A類・B類・E1類などの古手と想定した甕棺が調査区南側に、比較
 的新しいと想定したD2類・E2類・F類などが調査区北側に偏る、といった分布傾向は認めること
 ができなかった。各分類単位の分布に関しても、時間差や系統差を想定し得るような有意な状況を見
 出すことは困難である。

このように、箱崎キャンパス内遺跡から出土した甕棺について、いくつかの分類単位を抽出でき、
 かつ、それらの中で時間的前後関係を想定し得るものも存在するが、各分類単位間の関係性について
 は、いまだ不明瞭な部分が多い。年代的にはA類・B類・D1類が17世紀後半まで古くなる可能性は
 あるものの、そのほかについては18世紀以降に位置づけられると考えられる。年代的な下限につい
 ては不明だが、後述するように、九州帝国大学創立（1911年）直前まで墓地は存続していたようである。
 また、B類については、器面調整や施釉、胎土のあり方がほかと異なることも指摘した。産地や窯元
 の差異を反映している可能性もあり、近世期における大甕の生産・流通を考える上で注目される。今
 回はあくまでも基礎的なデータと可能性の提示に留め、その評価については今後の資料の蓄積と研究
 の進展に委ねたい。

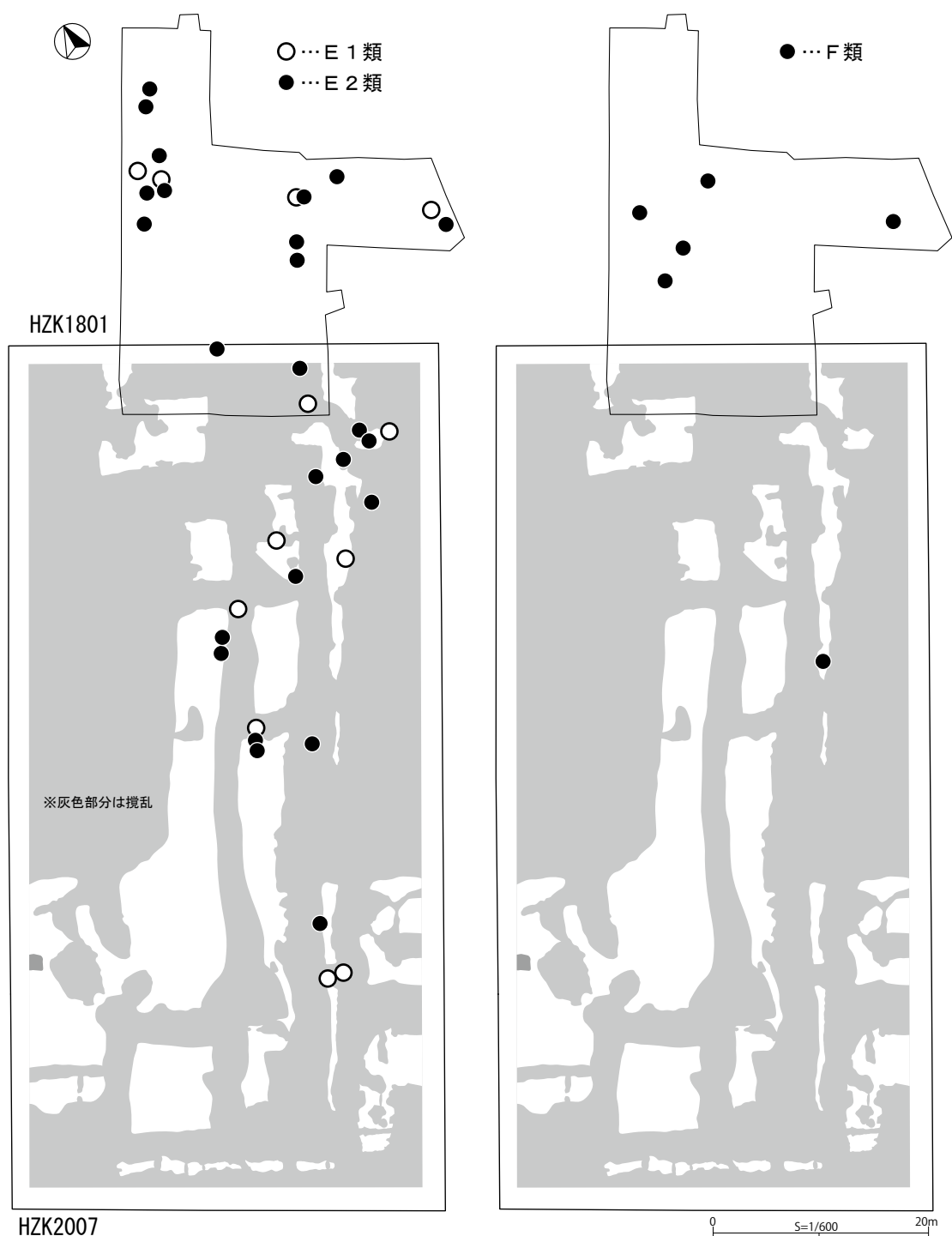
3. 箱崎砂州先端部の近世期における土地利用史

近世期の箱崎キャンパス内遺跡では、HZK1801地点とHZK2007地点で土坑墓・木棺墓・甕棺墓が
 多数見つかっているものの、墓以外の遺構の検出例は少ない。HZK1801・2007地点以外では、近世



第9図 HZK1801・2007地点 甕棺分類単位別分布図①

期の墓は確認できていないこと、そして、HZK1801・2007地点では、火葬土坑・土坑墓・木棺墓・甕棺墓以外の遺構は確認できていないことを踏まえると、近世期においてHZK1801・2007地点の一带には墓域が広がっており、葬送に特化した場が形成されていたと考えられる。こうした葬送の場に特化した土地利用のあり方は、14世紀後半以降の火葬土坑の造営に端を発する可能性があることは、本書第三章で論じた通りである。



第10図 HZK1801・2007地点 甕棺分類単位別分布図②

箱崎村の中心を通過して北上する唐津街道が、箱崎キャンパス内遺跡に至る直前で東に右折することは先述の通りである（有田 2018、第1図）。箱崎キャンパス内遺跡は、箱崎宿の北側のはずれに位置しており、宿場町の活気とはやや縁遠い場所だった可能性は十分考えられる。

近世期における箱崎砂州先端部の状況を窺い知ることができる文献資料が存在する。一つは貝原益軒の『筑前国続風土記』であり、該当箇所は以下の通り。なお、本書は宝永六（1709）年に成立して

いる。

地藏堂 松原附

箱崎町の外北の方にあり。此地藏佛は小松重盛公、育王山に砂金を送られし其歸船に載せ來りし佛と云傳へたり。地藏堂は寛永八年に 忠之公是を建立し玉ふ。此邊は砂原にて、松樹なかりしを、長政公慶長十年家臣竹森清左衛門に命し、博多の町中より、松を植させられしか、其後ほどなく松原となれり。地藏堂ある故、地藏松原と云。長さ七八町あり。西は海、東は斥なり。

[貝原益軒編『筑前国続風土記』巻之十八糟屋郡表（名著出版、1973年）]

この地藏堂は、明治42（1909）年に九州大学工学部が建設される際に移設されたようだ（現、勝軍地藏堂）。文献の記述から、少なくとも慶長十（1605）年までは、当該地は砂原だったことが読み取れる⁴⁾。地藏堂が建立された寛永八（1631）年には、周辺は松原になっていた模様。こうした記述を見る限り、当該地域が人々の日常生活の場として利用されていた様子は窺えない。

また、青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』にも、この地藏堂に関する記載がある。本書は天保八（1837）年前後に完成したと考えられている。該当箇所は以下の通り。

地藏堂

地藏松原に在。此所の庵を北山重盛山還國寺と云。赤幡坊に属す。今ハ修験者庵主也。此地藏の石像も宋國より贈りける由本編に詳也。堂後に野石の高五六尺斗巾四尺斗なる有。南無阿弥陀佛、左に觀世音菩薩、右に大勢至菩薩、貞和二年と彫たり。左方に沙門祐慶等の文字有。其餘ハ滅して見えす。同堂の西方に古き石塔数多有。其内に五重石塔有。臺座石に尼五人の名、左石ハ文安五年十一月二十一日と有。又一石に高式尺石面に塔形を彫て、下に尼妙居正平廿一春、中に梵字一ツ有。是を里人ハ米一丸か愛妾傾城村雲か墓と云フ。未詳。五重塔ハ昔堂後の藪の中に在しを、近代爰に移せしと云。又海門戸町人家の前に、高式尺餘巾壺尺六七寸斗の野石有。面の上に圈中に梵字を書、下に仁松居士

逆修道王應〇年八月十六と彫たる立り。いかなる人の墓石か由縁不詳。

[青柳種信編『筑前国続風土記拾遺』巻39糟屋郡上、箱崎村（下巻、文献出版、1993年）]

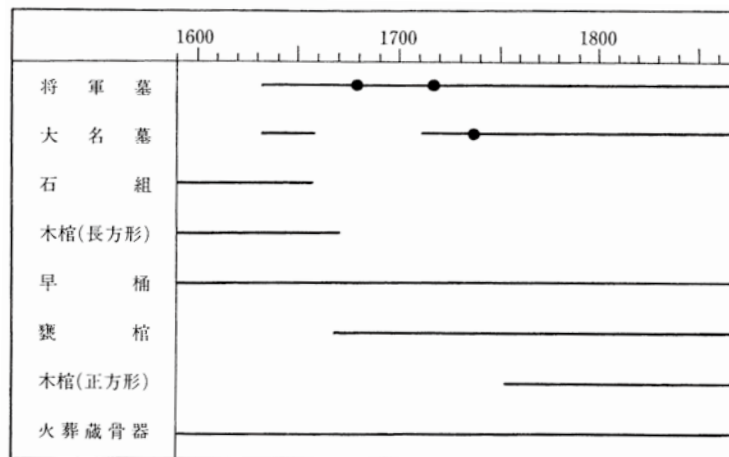
還國寺という庵が存在していたことが記されている。赤幡坊は筥崎宮南側にあった社坊であり、還國寺はそれに属していたとあるが、その規模や性格は不明である。「庵」という記載から、大規模な寺院ではなかったことが推察される。周辺には石像・石塔が多く存在していた様子が窺える。貞和二（1346）年や文安五（1448）年の年号が刻まれた石像・石塔の存在が記されており、当該地域では中世後期から石像・石塔が造立されるような場であったことが読み取れる⁵⁾。

こうした文献史料の記述や、先述してきた発掘調査成果を踏まえると、近世期における箱崎砂州先端部は、人々が日常生活を営む場ではなく、葬送の場に特化した利用がなされていたと考えられる。それでは、当該地域で埋葬されたのはどのような人々だったのであろうか。

埋葬された人々の社会的位置を探る上で、手がかりとされてきたのが埋葬施設の構造である。近世における埋葬施設の構造に関する研究は、江戸を中心に行われてきた。谷川章雄氏は、東京都新宿区の自證院遺跡や圓應寺跡の調査成果を踏まえて埋葬施設の構造を分類し、各埋葬施設の被葬者と時期的変遷について論じている（谷川 2004、第11図）。第11図を見ると、石槨石室墓→石室墓→木炭・漆

① 石槨石室墓	
銅棺・木棺 将軍〈増上寺〉	
木棺 将軍正室・側室〈増上寺〉	
② 石室墓	
木棺 下総結城藩主松平家 (15 万石) (榎木 1994)	
越後長岡藩主牧野家 (7.4 万石)〈済海寺〉	
上野館林藩主秋元家 (6 万石)〈寛永寺護国院 C 1・69〉	
甕棺 将軍側室〈増上寺〉	
紀伊和歌山藩主徳川家 (55.5 万石)〈寛永寺護国院 A 17〉	
出羽新庄藩戸沢家 (6.7 万石) (河越 1965)	
④ 木炭・漆喰(石炭)床・榎木槨甕棺墓	
上野館林藩江戸家老, 用人矢貝家 (700 石のうち 400 石)〈寛永寺護国院 C 61-1・2・5〉	
旗本大久保家 (5,000 石)〈寛永寺護国院 B II 19・23~25〉	
⑤ 方形木槨甕棺墓	
高家畠山基徳再室 (4,000 石) (港区立港郷土資料館 1987)	
上野館林藩江戸家老, 用人矢貝家 (700 石のうち 400 石)〈寛永寺護国院 C 61-3・4〉	
旗本大久保家 (5,000 石)〈寛永寺護国院 B II 10-1・13・26・31〉	
旗本秋元家 (4,000 石)〈寛永寺護国院 B II 9-1~4〉	
旗本三井家 (1,200 石) (東京都港区教育委員会 1992)	
播磨竜野藩士近藤甫泉 (120 石) (東京都港区教育委員会 1992)	
⑦ 甕棺墓	
旗本三枝監物守興(與) (400 俵)〈自証院 57〉	
旗本佐藤家 (300 俵)〈寛永寺護国院 B II 11-2・3・5〉	
旗本深見家 (200 俵)〈寛永寺護国院 C 103-1~3〉	
旗本犬飼家 (70 俵 3 人扶持) (港区立港郷土資料館 1989・東京都港区教育委員会 1992)	
館林藩士岡尾家 (100 石)〈天徳寺浄品院 144・145〉	
〈 〉内の数字は遺構番号	

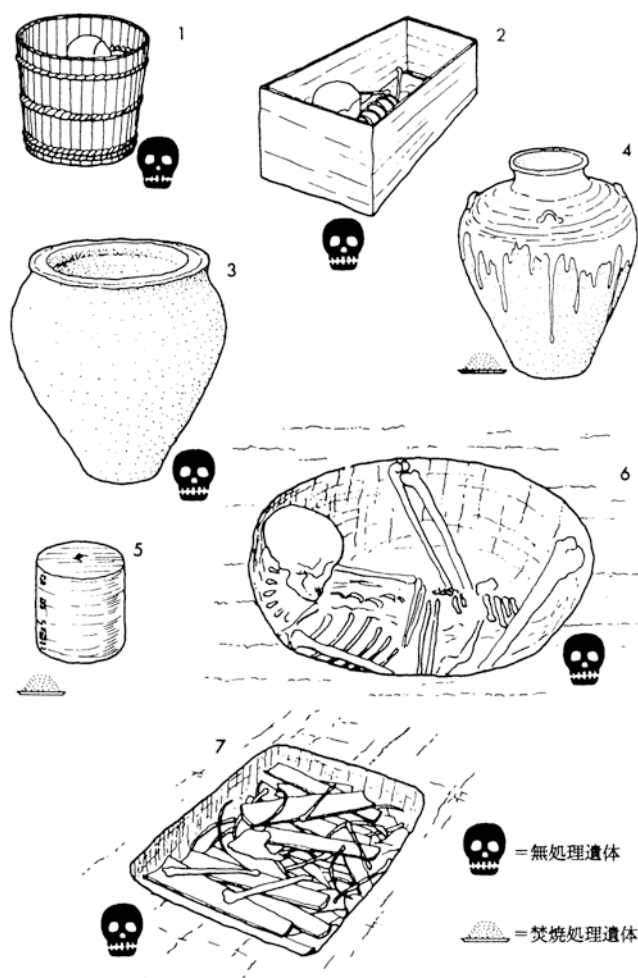
a 埋葬施設の構造と被葬者



b 埋葬施設の変遷

第11図 江戸における埋葬施設の構造と被葬者
(谷川 2004、p.230の表1・p.235の図2を転載)

喰(石炭)床・榎木槨甕棺墓→方形木槨甕棺墓→甕棺墓のように、身分階層に応じて埋葬施設に序列が認められる。また、長方形木棺や早桶は甕棺に先行して存在するが、正方形木棺は甕棺に後出して出現することがわかる。西木浩一氏は、東京都立一橋高等学校地点の調査成果に基づき、江戸庶民墓の埋葬形式を紹介しつつ(第12図)、圓應寺跡の調査成果から窺える都市下層民衆の埋葬について論じている(西木 1999)。甕棺は、18世紀以降旗本クラスの武士層の埋葬に用いられることが多く、圓



第12図 庶民墓の埋葬形式（西木 1999、p.7の図表1-3を転載）

應寺跡において都市下層民衆の埋葬場所とされたB区では、円形木棺（早桶）が圧倒的多数で、甕棺は1例も検出されなかったとする。すなわち、甕棺と円形木棺（早桶）という埋葬施設の差異を、時間的な差異ではなく、被葬者の身分階級の差異を反映するものと解釈した。

しかし、こうした近世の江戸における埋葬施設の研究成果を、箱崎キャンパス内遺跡に適用することはできない。箱崎キャンパス内遺跡で出土する甕棺は、肥前のハンズーガメと呼ばれる日用陶器（下村 1994；東中川 1987・2000）であり、江戸の武士階級の埋葬に用いられた常滑焼の甕棺ではない。福岡県筑紫野市原田地区遺跡群（森山編 2003・2004・2006）では、非武士階級の人々が甕棺に埋葬されており、江戸で見られるような甕棺被葬者＝武士階級という対応関係は、北部九州においては認め難いようだ。

甕棺から出土した副葬品の中には、箱入りの青銅製柄鏡（HZK1801地点 ST57）や青銅製錫杖（HZK2007地点 ST59）など、土坑墓・木棺墓の副葬品には認められないものも存在する（第1・2表参照）。また、HZK1801地点の ST57・ST64・ST81・ST90・ST97・ST103、HZK2007地点の ST140・ST172からは七星板が出土している。七星板の性格は不明であるが、筑前福岡藩4代藩主黒田綱政（1659-1711）の甕棺内から出土していることを踏まえると（齋藤ほか 2019）、被葬者はそれなりの身分階級に属していたことも想定し得る。しかし、多くの甕棺から出土した副葬品は、土坑墓・木棺墓から出

土したそれと大差なく、副葬品から見る限り、土坑墓・木棺墓・甕棺墓の被葬者に身分階級の差異を見出すことは難しい。

また、墓域内で土坑墓・木棺墓・甕棺墓は混在して見つかっており（第2図）、圓應寺跡の事例のように、被葬者の身分階級によって埋葬場所が定められていた様子は確認できない。上述したような副葬品が豊富な甕棺も、他の甕棺や土坑墓・木棺墓と埋葬場所は区別されていない。

このように、箱崎砂州先端部に埋葬された人々の社会的位置を特定することは難しいが、埋葬施設の構造や副葬品のあり方から判断する限り、上級武士層など高い身分階級の集団が埋葬されたような墓地ではなく、庶民層が埋葬された共同墓地だった可能性が高い。ただし、「庶民層」と一括りにした集団においても、従事する職業や裕福の度合いなどは様々だったことが推察される。土坑墓・木棺墓・甕棺墓といった埋葬施設の区別や、副葬品の種類・多寡などは、そうした集団の多様性を反映したものと考えられよう。

4. 近世墓地のその後

明治33（1900）年測量の地図を見ると（第1図）、九州大学箱崎キャンパスが建設されるエリアには墓地が広がっていたことがわかる。九州帝国大学が明治44（1911）年に創立される直前まで、当該地域は墓地として利用されていたようである。

九州帝国大学（正確には当時は福岡工科大学）の建設決定に伴って、墓地をどのように処理したのかについては判然としない。当該地域は良好な畑地で、その田畑の買い上げに伴う生活難の恐怖から地元の反対運動があったという記録は確認できるが（九州大学百年史編集委員会 2017）、こうした記録の中にも、建設予定地にあったはずの墓地に関する記載を確認することはできない。

昭和2（1927）年2月3日の福岡日日新聞に、「十五個の白骨を大學葬に附す 應用化學教室新築中に地下一丈の處から出た」という興味深い記事が掲載されている。工学部応用科学研究室（HZK2007地点南側）を建てる際に、人骨や甕が複数出土したため、いずれも丁寧に掘り出して地蔵松原の無縁墓地に埋葬し直したらしい。記事によると、工学部内で複数回の火災が起きており、それは人骨を粗末に扱ったことによる祟りだと町民が噂していたという。

こうした祟りの噂は別の記事でも確認できる。当時、教授・助教授複数名が病氣・自殺・事故などで相次いで亡くなったようで、これは工学部造船教室（HZK2007地点）のタンク工事の際に、多量に出土した人骨を放置した祟りだ、と言われていたようだ（九州大学大学文書館編 2014）⁶⁾。

この2つの記事は、大学建設前に当該地域に墓地が存在したこと、そして、建設工事で掘り起こされた人骨などを大学がどのように取り扱ったのか、について物語る貴重な資料と言えよう。

なお、HZK1801地点・HZK2007地点で出土した甕棺の調査において、後世の改葬・攪乱の痕跡を確認している。出土人骨の検討から、埋葬後の遺体の二次的な移動について、いくつかパターンが存在することが指摘されており（米元ほか 2024）、先述したように、甕棺の破損状況や出土状況にもいくつかのパターンが認められる。こうしたパターンの違いは、おそらく後世の改葬・攪乱のタイミングやその仕方の差異を反映しているものと推察される。先の二つの記事においても、出土した人骨を丁寧に改葬した場合と、そのまま放置した場合の二つのあり方を確認することができ、こうした推察の妥当性を裏付けている。

註

- 1) 甕棺墓と副葬品組成が共通する土坑墓・木棺墓と、土師器しか副葬されていない、あるいは、副葬品をもたない土坑墓・木棺墓では、出土人骨の埋葬姿勢などに差異は認められない。後者の土坑墓・木棺墓については、中世期、特に14世紀後半～16世紀代まで古くなる可能性もゼロではないが、確実に近世期と考えられる土坑墓・木棺墓と人骨から窺える埋葬姿勢が共通していることや、分布状況が中世期の土坑墓・木棺墓とは異なっており、近世期の墓域内に存在していることなどから、これらも近世期に造墓された可能性が高いと判断している。
- 2) HZK1801地点・HZK2007地点の土坑墓・木棺墓・桶棺墓・甕棺墓から出土した人骨を対象に、放射性炭素年代測定を実施した。しかし、人骨の残存状況は良好であったものの、コラーゲンの回収率が極めて悪く、良好な測定値を得ることができなかった。コラーゲンは、炭酸カルシウム由来の炭素が多いと潮解して、質の悪い炭素が含まれることが多いとされる。箱崎キャンパス内遺跡の埋没環境が影響して、コラーゲンの変質や外部由来の炭素の混入が生じたものと推察される（福永ほか 2005）。なお、土坑墓・木棺墓・桶棺墓から出土した人骨の年代測定値は、参考データとして第1表に示している。年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼しており、測定値は全て海洋リザーバー効果を補正した値である。年代測定にあたっては、九州大学令和5年度人文学部学際融合プログラムの助成を受けて実施した。
- 3) 第4図1・2・5～8のような貼花文を付す甕棺は17世紀前半、同図3・4の甕棺は17世紀後半の所産として報告されている（谷編 2025）。しかし、後述するように箱崎キャンパス内遺跡で出土した多くの甕棺は、18世紀以降に位置づけられる。一部17世紀後半まで遡る可能性がある甕棺も少数存在するものの、第4図に示した小甕・中甕（おそらく小児棺と考えられる）だけが、大多数の大甕・中甕に先行して17世紀前半～後半に埋葬されるものも不自然ではある。これら例外的な小甕・中甕の生産が18世紀以降も継続していた可能性や、17世紀に生産されたものを18世紀以降に埋葬した可能性も想定する必要があるだろう。
- 4) 以前、箱崎砂州先端部の地形発達史の観点から検討して、元寇防塁築造当時は当該地域に松原は存在していなかった可能性を指摘したことがある（福永・齋藤 2021）。
- 5) 箱崎地域に残る年号が刻まれた板碑は、14世紀後半以降のものが大半を占めるようだ（山本 2018）。
- 6) 福岡日日新聞の記事や『鬼頭鎮雄著 九大風雲記』の記事の存在は、九州大学大学文書館の中村江里氏にご教示いただいた。

引用文献

- 有田和樹 2018「箱崎宿と箱崎御茶屋」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、102-112頁
- 九州大学百年史編集委員会 2017『九州大学百年史』第1巻 通史編Ⅰ、九州大学
- 九州大学大学文書館編 2014『鬼頭鎮雄著 九大風雲記』、九州大学大学文書館
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・舟橋京子・石川健・谷直子・富田啓貴・宮本一夫 2019「近世甕棺と七星板―福岡市箱崎遺跡（九州大学箱崎キャンパス HZK1801地点）の調査成果―」『一般社団法人日本考古学協会第85回総会 研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会、62-63頁
- 下村智 1994「北部九州の近世墓に使用される棺甕について」『先史学・考古学論究』龍田考古学会、305-334頁
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告9 箱崎遺跡― HZK2007地点―』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷川章雄 2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、224-250頁
- 西木浩一 1999『都史紀要37 江戸の葬送墓制』東京都
- 東中川忠美 1987「肥前における近世の大甕」岡崎敬先生退官記念事業会（編）『東アジアの考古と歴史 下 岡崎敬先生退官記念論集』、同朋舎出版、749-770頁
- 東中川忠美 2000「陶器の編年 壺・甕」『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』九州近世陶磁学会、64-75頁
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡― HZK1901・1905・2001・2002・2004地点―』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室、180-197頁

- 福永将大・谷直子・宮本一夫 2025「九州大学箱崎キャンパス跡地から出土した近世人骨の年代測定」『日本文化財科学会第42回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会、194-195頁
- 本田浩二郎（編）2023『箱崎68―第102次・第113次・第118次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1485集、福岡市教育委員会
- 森山栄一（編）2003『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』筑紫野市文化財調査報告書第77集、筑紫野市教育委員会
- 森山栄一（編）2004『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』筑紫野市文化財調査報告書第79集、筑紫野市教育委員会
- 森山栄一（編）2006『原田第1・2・40・41号墓地 下巻』筑紫野市文化財調査報告書第90集、筑紫野市教育委員会
- 山本隆一郎 2018「箱崎の板碑」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、76-81頁
- 横山浩一 1982「佐賀県横枕における大甕の成形技術―現存する叩き技法の調査―」『九州文化史研究所紀要』27、53-91頁
- 米元史織・舟橋京子 2024「箱崎遺跡（HZK2007地点）調査出土近世人骨の埋葬状態と形態的特徴」谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡―HZK1801・2006・2007地点出土人骨編―』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集、九州大学埋蔵文化財調査室、69-142頁

Ⅵ 遺物から見た箱崎キャンパス出土近世墓地の特徴

谷 直子¹⁾

1：九州大学埋蔵文化財調査室

1. はじめに

九州大学箱崎キャンパスからは、HZK1602・1801・2006・2007地点において中世から近世にかかわる埋葬施設が検出された。それらには中世を中心とした火葬土坑、中世の木棺墓・土壙墓、近世の木棺墓・桶棺墓・土坑墓・甕棺墓がある（谷編 2024・2025a・b・c）。

これらの墓地は明治33（1900）年の陸軍による「二万分一地形図福岡」に掲載されているが、明治44（1911）年の九州帝國大學の設置に伴い移設が行われており、墓石の撤去や墓地の改葬のため破壊された部分も多い。それでも、残された多くの墓地から貴重な資料を得ることができ、墓地の変遷や埋葬時の状況、埋葬された人々の特徴について明らかになった（九州大学埋蔵文化財調査室報告第11～14集：谷編 2024・2025a・b・c）。

この墓地には副葬品として墓に納められていた遺物にも特徴があり、土師皿、六道銭、鋏、毛抜、キセルが多く出土している。また特徴的な遺物として、七星板、喫煙具のセット、扇、青銅製柄鏡と鏡箱などがある（九州大学埋蔵文化財調査室報告第12・13集：谷編 2025b・c）。こうした遺物の特徴について検討を加え、箱崎キャンパスの墓地に葬られた人々の様相を明らかにしたい。

2. 九州大学箱崎キャンパス出土の特徴的な遺物

1) 箱崎キャンパスの墓地で多く見られる副葬品

土師皿

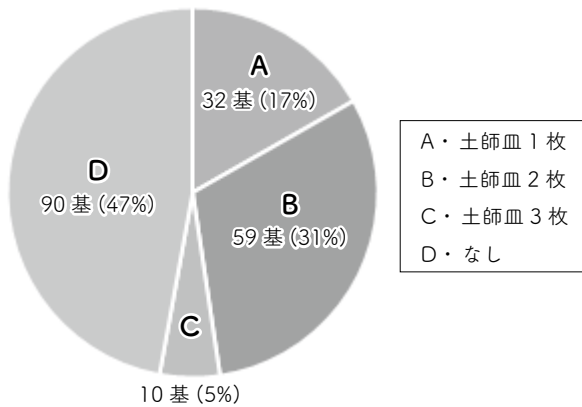
土師皿は HZK1801・2007地点ともによく副葬されている。土師皿の副葬が墓に占める割合は53%でほぼ半数の墓で見られる（第1図）。土師皿を持たない墓に改葬や収骨によって内容物が持ち去られた場合があることを考えると、土師皿を持つ墓の割合はより高くなると推察される。土師皿の副葬では、2枚副葬が6割ほどを占める（第1図）。

この土師皿の2枚副葬は福岡市埋蔵文化財課による箱崎遺跡第60・62次調査でも多く見られ（久住編 2010・小林編 2012）、2枚副葬では口縁部を合せ口にして出土することもあり、土師皿で供物を挟んで副葬したと考えられる。

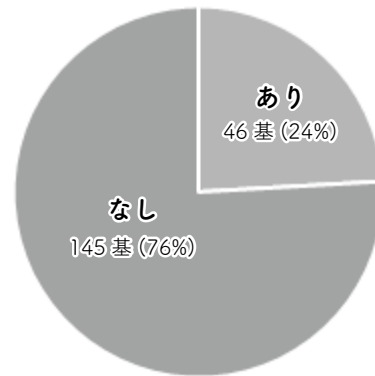
六道銭

六道銭も HZK1801・2007地点ともによく副葬されている。六道銭の墓に占める割合は48%で（第1図）、改葬や収骨の影響を考えると、土師皿と同様に六道銭を持つ墓の割合はより高かったと考えられる。副葬される六道銭の枚数は6枚前後が多く、この状況は箱崎遺跡第60次調査でも同様である（小林編 2012）。六道銭は鋏や毛抜と銹着し、櫛と考えられる木質、布状の繊維が付着する例も見られることから、六道銭・鋏・毛抜・櫛を1つの袋にまとめて棺に納めることがあったと考えられるが、箱崎遺跡第62次調査でも副葬品の多くは麻袋などに入れられて埋納との指摘がされており（久住編 2010）、箱崎の副葬品の納め方としては一般的だったと思われる。

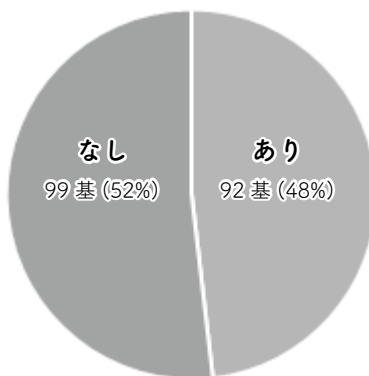
墓に占める土師皿の割合



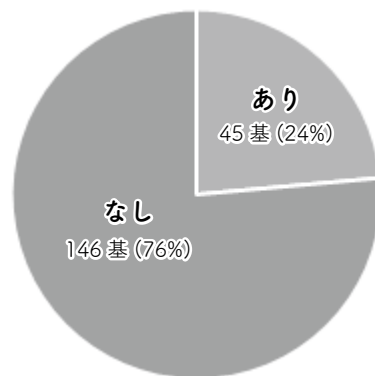
墓に占める鉄の割合



墓に占める六道銭の割合



墓に占める毛抜の割合



第1図 近世副葬品の割合

鉄・毛抜

鉄・毛抜の墓に占める割合は、いずれも24%である。本報告第Ⅶ章の舟橋論文によると、鉄・毛抜を持つ墓の空間分布、年齢、性別はいずれも偏りが無い。

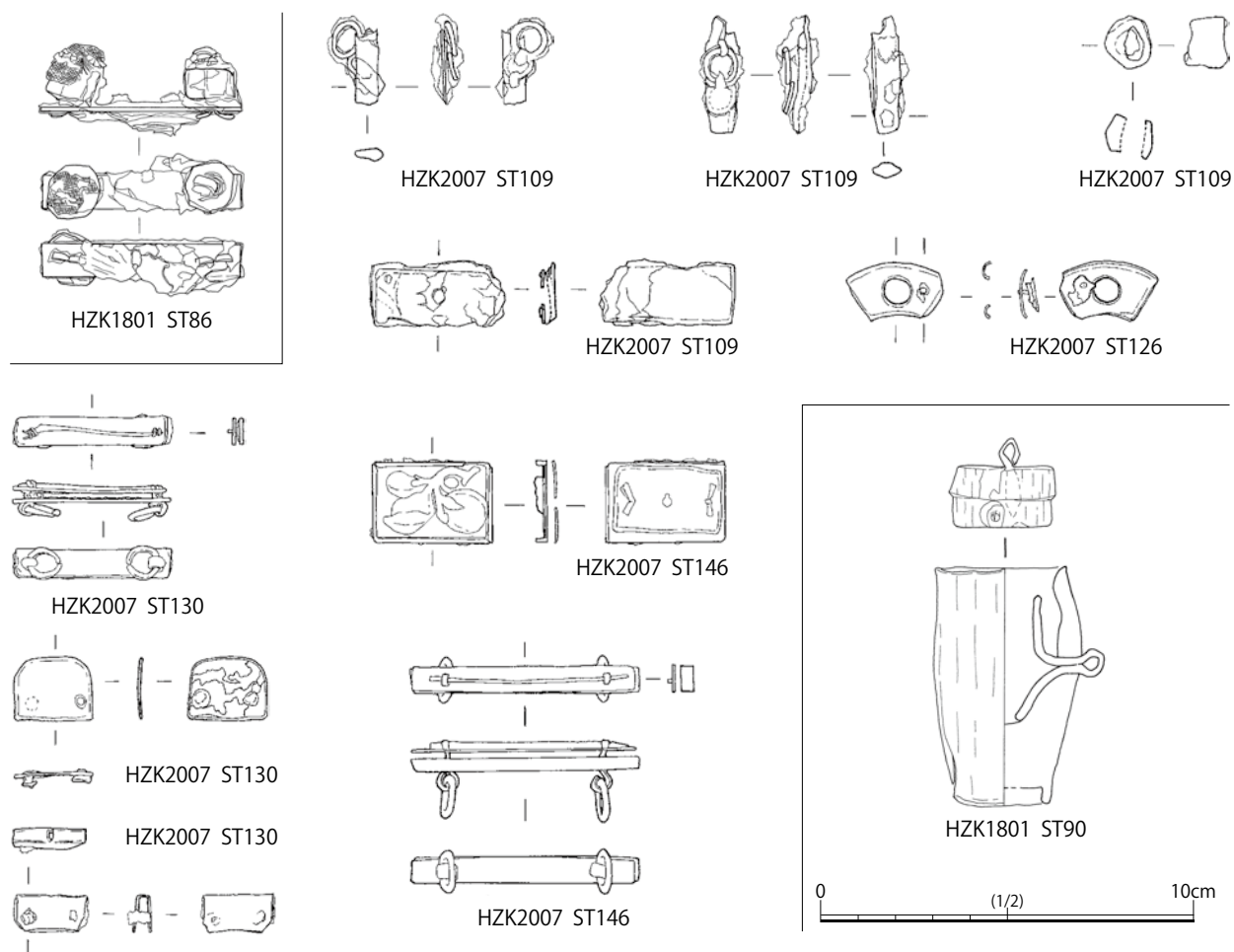
喫煙具

九州大学箱崎キャンパスの近世墓からは比較的高頻度でキセルが出土している。多くは雁首と吸口を羅字でつなぐものであるが、延べギセルも1点出土している。吸口部に模様を彫り込んだものや小松筋を持つものもあり、装飾的な特徴となっている。

キセルを持つ人の男女比・年齢構成は本報告第Ⅶ章の舟橋論文によると、男性の保有率（40.4%）がやや高く、年齢では熟年（40～60歳）から保有率が安定して高くなる（45%前後）。

火打金はHZK1801地点から3点出土し（第3図）、いずれも山形を呈し、キセルが共伴している。筑前における火打金は7世紀ごろから見られ、中世には、箱崎遺跡のほか、福岡市の博多遺跡群・吉塚祝町遺跡、宗像市の野坂ホテ田遺跡などで出土しているが、江戸時代の火打金は筑紫野市の原田遺跡や太宰府市の浦山遺跡で確認されているのみである（藤木 2025）。火打金は火打石とセットで使用するものであり、甕棺内から石も出土している。これらの石の中に火打石が含まれていると考えられるが、筆者の力量不足のため判別できなかった。

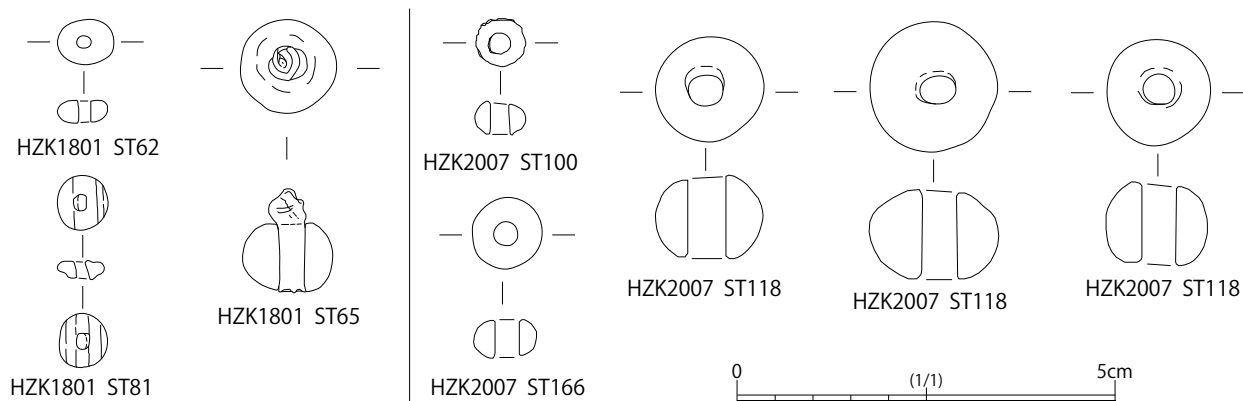
また火打石と火打金を用いて起こした火花は、火口に移して種火にする（たばこと塩の博物館編



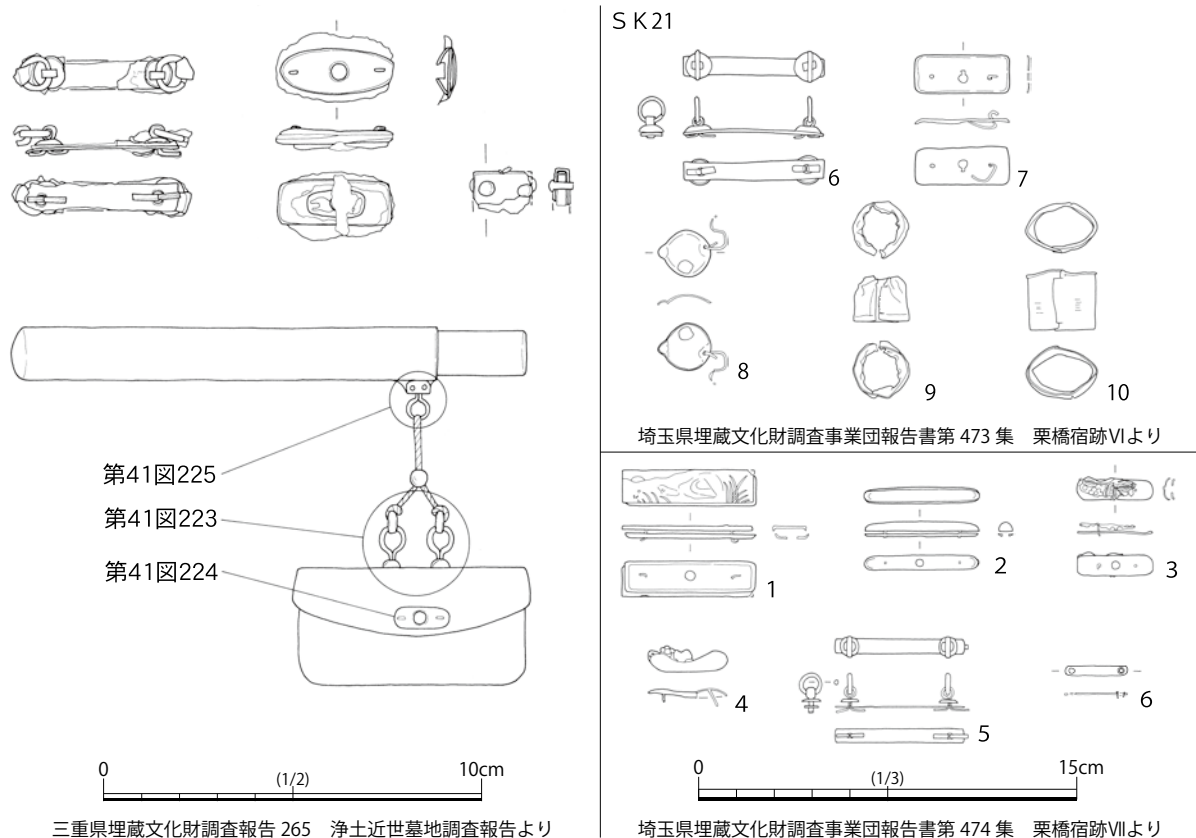
第2図 箱崎キャンパス出土の煙草入れの金具・火入れ容器



第3図 箱崎キャンパス出土の火打金



第4図 箱崎キャンパス出土の煙草入れに関連する玉



第5図 煙草入れ金具の類例と推定復元図

2015) が、第2図右下は、火打金やキセルとともに出土した蓋付の木製容器で、内部には炭化物が残存し、容器内面も焦げている。火口となる消炭を入れた容器と考えられる。容器胴部と蓋に金具が付いており、この金具の輪の部分に紐を通して、キセル入れや火打金と繋いでいたと考えられる。

金具類と玉は、これだけでは喫煙具かどうか判断できないが、キセルと相伴している場合、煙草入れの緒締め可能性がある(第2・4図)。提げ煙草入れは、第5図左のような形状をしており、紐と金具でつながった、根付と袋物が一体となる。キセル入れと紐や鎖でつないで、一体となることもある。玉は緒締めで使用されており、袋物の留め具にも意匠を凝らした金具が付くことがある。帯に挟んで携行し、袋の中には刻み煙草などを入れる。

HZK2007地点ST109・ST126・ST130・ST146、HZK1801地点ST86で出土している金具(第2図)は、類例が埼玉県栗橋宿址(水村編 2022・村山編 2022)・三重県浄土近世墓地(小山編 2006)で出土しており(第5図)、煙草入れの金具の可能性が高い。

箱崎キャンパスからは、キセル・火打金・火口と火口入れ・煙草入れが出土しており、煙草を出先に携行するための道具が一揃いある。煙草入れの金具や玉などから、喫煙具のセットとして時に意匠を凝らしたものを副葬品としていることが分かる。

2) 箱崎キャンパス出土の特殊な副葬品

七星板

箱崎キャンパスからは、七星板が少なくとも9枚出土している(第6図)。七星板は近世甕棺の中から人骨が解剖学的位置を保って検出された際に、寛骨の下から出土しており、尻の下に敷いていた

と判断される。甕棺はいずれも18世紀から19世紀の甕を用い、多くの場合七星板の下にはもみ殻が敷かれていた（齋藤ほか 2019）。

形状は、八角形のものや四角形のものがあり、端材や桶の板を転用したものも見られる。孔は7～8個で全て貫通するもの、一部の孔のみ貫通するもの、孔が貫通しないものがある。使用する木材は文化財科学研究センター（奈良）の樹種同定結果によると第1表の通りである。

所有者の性別は男性が多く、HZK1801地点側（墓域の北側）から多く出土する（本報告第Ⅶ章舟橋論文）。

七星板は本来、長方形木棺の底板に、北斗七星を模った孔を空けた板を敷いたもので、中国においては北齊の墓に用いられたのが始まりといい（岡崎 1964）、韓国においては現代でも北斗七星の形に孔を空けるか、墨で描いた板が用いられている（新納 1993）。日本においては、文献記録として、後桜町天皇の葬儀に際し、七星板が用いられた時の図がある。後桜町天皇は江戸時代における唯一の女性天皇であり、長方形木棺の下司板に七星板が用いられている（水野 1995）。この論考を受けて、藤澤典彦氏は近世の「家礼書」や儒葬記録に書かれた七星板の例や大阪府大念寺墓出土の近世甕棺の下司板の例を挙げ（第7図）、木棺墓の際には北斗七星を表現していたものが、甕棺墓になると円形板に七星を配し屍汁処理の機能が重視されたとした。さらにこの変化が儒葬文化の広がりや浅薄化が江戸時代中期に展開したことを示すとした（藤澤 2015）。

福岡では黒田藩主4代目の黒田綱政（1659–1711年）の墓に用いられている。綱政公は黒田家のお家騒動の後藩主となり、死去をしばらくの間幕府に内密にしておく必要があったため、遺体に防腐処理がなされ、「ミイラ」にされて陶器の甕に納め、外側に木槨を設けて葬られた。戦後復興住宅建設のため福岡市博多区の崇福寺にある綱政公の墓地を移動する際、九州大学医学部の奥村武氏が記録を残している。それによると陶器の甕棺の底部にもみ殻を敷き、その上に七星板を敷いている（第7図）。七星板は円形で、中心の1孔を取り巻くように6孔を配して7孔とする（大塚葉報編集部 1969）。

このように、七星板は庶民よりも身分の高い墓に、儒教的な思想を背景として納められたことがわかる。

鏡と鏡箱

HZK1801地点甕棺墓 ST57から鏡箱に納められた青銅製の柄鏡が出土している。鏡には鉄製の毛抜とツゲでできた櫛が銹着していた。鏡箱の中に一緒に納められていたものである。鏡箱は分析の結果ヒノキ製で、下地を塗布せずに漆が塗られていた。柄鏡は銹がひどく肉眼では文様などは観察されなかったが、CT撮影によって「衾村因幡守重歳」の銘があることが判明した（板倉ほか 2026）。

錫杖

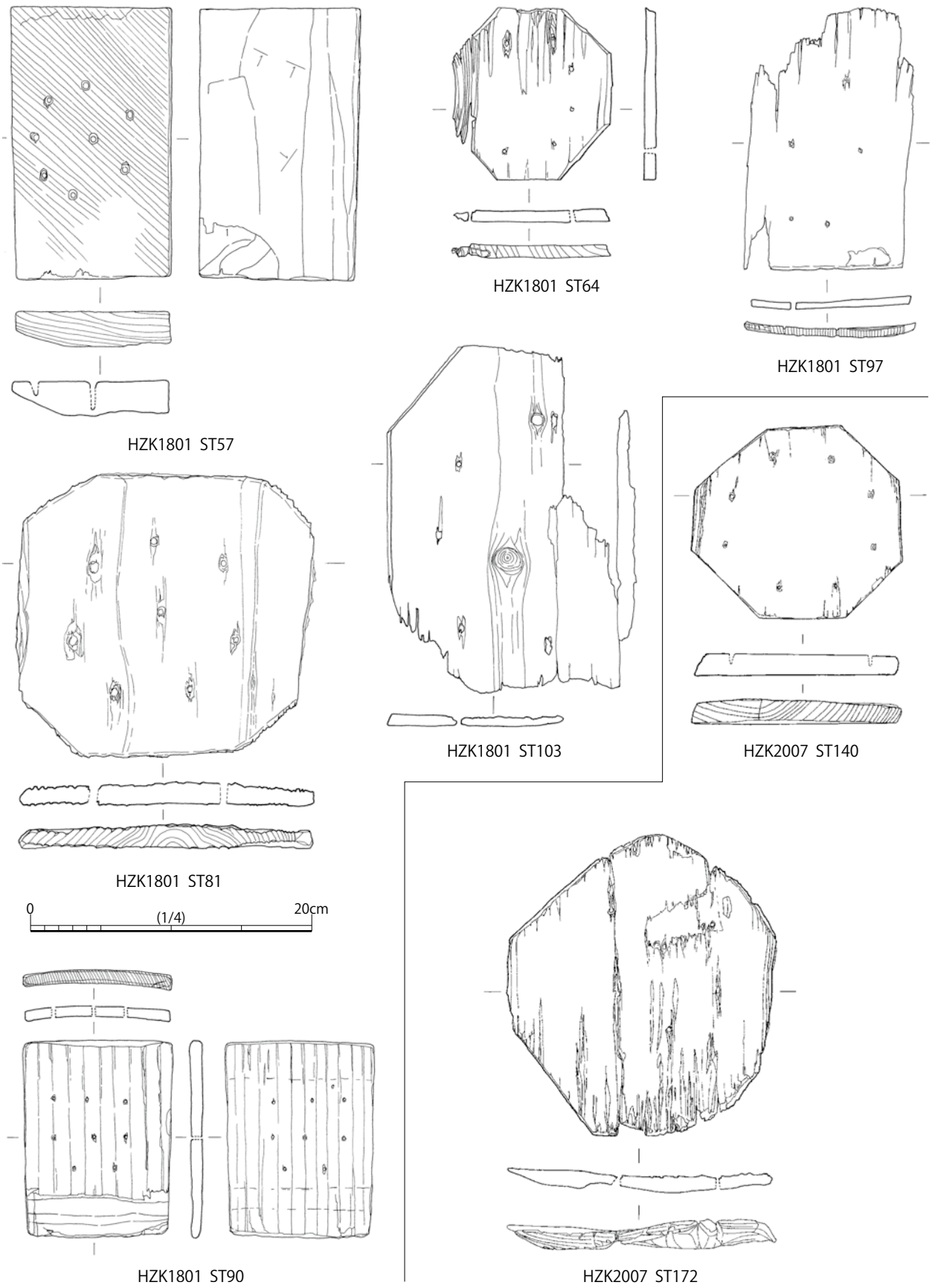
HZK2007地点甕棺墓 ST59から錫杖が出土している。同様の錫杖は福岡市では那珂遺跡でも出土している。錫杖は遊行僧が携行する仏具の一つであり、地点は異なるが同じ墓域に属する HZK1801地点で大法師の戒名を持つ墓石が出土していることと合わせ、僧侶の墓があったと考えられる。

扇

扇は HZK2007地点で4点、HZK1801地点で1点の計5点が墓内から出土しており、残りの悪かったものを含めるともう少し点数が増える。いずれの墓も共伴遺物に七星板などの特殊な遺物はなく、とりわけ副葬品を多く持つ墓でもない。

その他

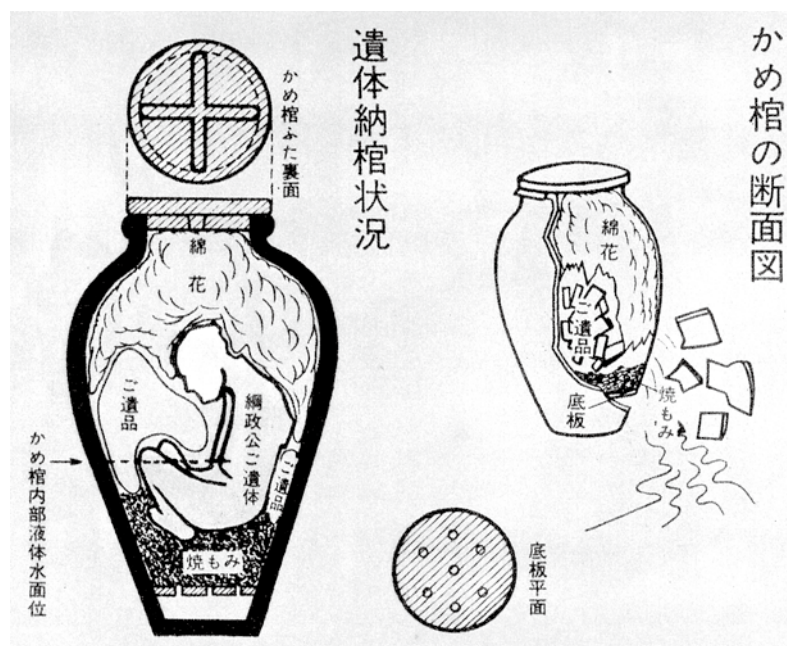
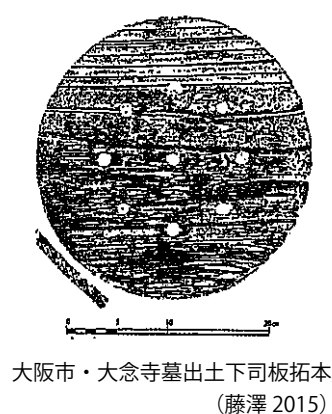
ほかには、サイコロ・メガネ・紅皿・人形などが出土している。



第6図 箱崎キャンパス出土の七星板

第1表 樹種同定結果

地点	遺構番号	遺物No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ/厚さ (cm)	結果 (学名/和名)	
HKZ1801	ST57	70001-1	柄鏡箱 (鏡蓋)	20	12	3	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
HKZ1801	ST57	70001-2	柄鏡箱 (箱)	18	11	2	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
	ST57		柄鏡箱 (杵)				<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
HKZ1801	ST90	70002	金属付属木製品	3	3	3	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ
	ST90			7	5	5	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ
HKZ1801	ST57	70003	七星板	20	12	3	<i>Abies</i>	モミ属
HKZ1801	ST64	70004	七星板	13	12	1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
HKZ1801	ST81	70005	七星板	22	21	1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
HKZ1801	ST90	70006	七星板	14	10	1	<i>Thujaopsis</i>	アスナロ属
HKZ1801	ST97	70007	七星板	19	13	2	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
HKZ1801	ST103	70008	七星板	25	18	2	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
HKZ2007	ST140	00569	七星板	16	14	2	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
HKZ2007	ST172	00573	七星板	22	20	2	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
HKZ1801	ST57	70010	櫛	4	4	1	<i>Buxus</i>	ツゲ属



黒田綱政公遺体納棺状況 (大塚葉報編集部 1969)

第7図 七星板の類例

3) 墓石

墓石は41基出土している (谷編 2026)。先に述べたように九州帝國大學の設置に伴い、墓地の移設が行われたことから、原位置を保って出土したものはないため、院殿号や格式の高い位号などをもつ墓石が運び去られている可能性は排除できない。箱崎キャンパスでは、院殿号や院号をもつ戒名は見られず、信士 (16)・信女 (13) が全体の69%、童子 (2)・童女 (5) が17%を占めており、他は居士 (1)、大法師 (1)、釈 (1)、釈尼 (1)、不明 (2) である。二名分の戒名が彫られた墓石が1基あるため、総数は42基となる。居士の院号をもつものは享禄5 (1532) 年の墓石で、他の墓石が元

禄5（1697）年から嘉永4（1851）年の間に納まるのに比べ古く、出土位置も少し離れている。位号は居士・大姉が格式高いとされ、信士・信女は一般層である。信士・信女が7割となる状況は、この墓地は一般庶民が多数を占める墓地であることを示唆している。

また墓石の形態は大小の差はあるが、いずれも自然石の下端部を少し削って平坦にしたのみで、定形化した墓石は見られない。また

一部に誉の文字をもつ戒名（浄土宗）や釈・釈尼をもつ戒名（浄土真宗）、大日如来を意味する梵字のアを持つ大法師の戒名（真言宗か天台宗）や阿弥陀如来を意味するキリーク（浄土宗か天台宗）など、多様な宗派の墓石が見られることから特定の宗派による墓地ではないと判断される。

また、HZK1801地点 SK44出土の墓石には、父が定意という名前であることが分かっているものが3基あり、それらは近い時期に亡くなった子供であることから、兄弟の墓石の可能性が高い。SK44は墓石や甕棺を廃棄した土坑であり、比較的近隣の残置物を集めて廃棄したとすれば、これらの墓石も、もともと近い位置関係に建っていたと考えられ、血縁者の墓同士が近くにまとまって建立されていた可能性を示唆している（谷編 2026）。

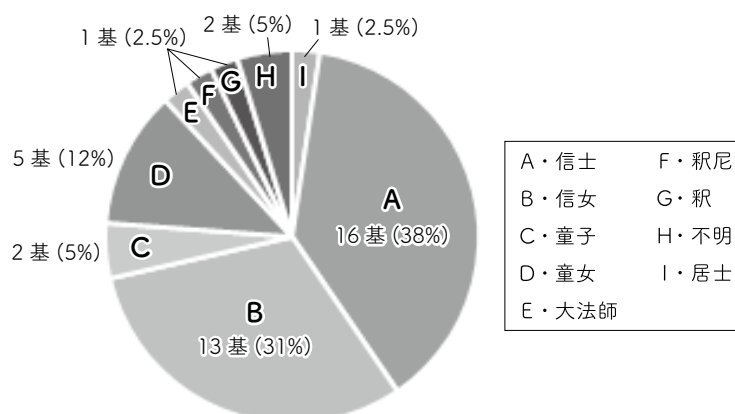
3. まとめ

上記の遺物の特徴から総合すると、九州大学箱崎キャンパス内の墓地に葬られた人々は、半数以上が六道銭を持ち、鋏・毛抜や喫煙具を持つ人々も多数いるなど、全体として極度に貧困ではない様相である。さらに一部に黒田家にゆかりのある七星板をはじめ扇や柄鏡・錫杖などを副葬されるなど、より特異的で裕福な様相を見せる。一方で墓石から見られる社会階層は一般庶民であり、血縁の近い者同士が近くに葬られる傾向にあるというものである。

また墓地の分析からは、副葬品の偏りが、箱崎キャンパスの墓地を造営した集団の年齢階梯制および家父長制の反映の可能性があることや、血縁関係にある人々が近接して埋葬され、近接して埋葬される人々の間で躯体正面が揃っている個体が散見されることから、「家」として括られる人々が埋葬されていたことが明らかにされた（本報告第Ⅶ章 舟橋論文）。

人骨の分析から、箱崎キャンパス出土の人骨は男女とも、日常的に高い身体的労働を担っており、特定の生業に特化した「専門的」集団ではなく、博多湾での漁撈を中心に、季節などに応じてそのほかの労働も行う多様な労働に、家族単位で関わっていた可能性が高く、栄養・健康状態は農村部と比較して相対的に悪いことが明らかとなっている（本報告第Ⅷ章 米元論文）。

これらの状況を整理すると、箱崎キャンパスの墓地の被葬者の多くは、漁民と思われるやや栄養状態の悪い庶民で、血縁の近い者同士がまとまりながら墓地を形成しているが、彼らの中には、宗教的・思想的な背景が窺える七星板を持つ者や、奢侈品を持つ者もそれなりに存在する。半分以上の墓から六道銭が出土していることから、経済的にひどく困窮した様相は見られないということになる。



第8図 位号の割合

九州大学箱崎キャンパスの位置するあたりは、筥崎宮の氏子の海門戸三町に含まれ、現在でも筥崎宮の神事の際には、神幸行事の運営に当たっている。筥崎宮の年中行事の中には、箱崎の漁民が海鼠の形をした餅を作って供えるというものがあり、祭事である玉せせりも陸側と浜側に分かれて玉を取り合うというもので、箱崎の漁民・農民が氏子として筥崎宮に深くかかわっていたことが分かる(佐々木 1986・広渡 2003)。

また福岡藩は江戸時代を通じて筥崎宮に五〇〇石の社領を寄進し、筥崎宮は藩の祭礼や祈祷を執行することで社役を全うしてきた(藤井 2018)ことから、黒田家と筥崎宮との深いつながりが読み取れる。

九州大学箱崎キャンパスには、現在「地蔵の森」と呼称される場所がある。ここには本来、北山重盛院還國寺という寺院があり、その安置された地蔵から後に勝軍地蔵堂と呼ばれる地蔵堂があったことが分かっている。勝軍地蔵堂あるいは還國寺に平重盛に関わる来歴が伝わることや、勝軍地蔵堂由来の板碑の紀年銘で一番古いものが貞和2(1346)年であることから、14世紀から存在した寺院であることは間違いない。紀年銘のある板碑で一番新しいものは寛正4(1463)年で、その後は享禄5(1532)年の墓石が一基出土したのみで、時期が継続する墓石は元禄5(1697)年以降となる。勝軍地蔵堂あるいは還國寺は14世紀から15世紀には安定して存続していたが、16世紀にはやや没落し、17世紀に再興したものであろう。地蔵堂の堂宇は、福岡藩2代藩主黒田忠之が寛永8(1631)年に建立しており、当初地蔵堂のそばに護摩堂と客殿も建立したが、明治期には廃絶し地蔵堂のみが残る状況であった(本報告第Ⅺ章 梶嶋論文)。17世紀以降、黒田家によるテコ入れがあったとみて間違いない。さらに還國寺は赤幡坊に属していたが、19世紀前半段階で修験者が庵主になっていたようである(本報告第Ⅺ章 梶嶋論文)。赤幡坊は筥崎宮の社僧の坊であることから(広渡 2003)、還國寺自体も黒田家や筥崎宮と密接なつながりがあったと考えられる。九州大学箱崎キャンパスの墓地は、この地蔵の森の北東に広がる墓地であることから、還國寺との関わりが推測され、引いては黒田家とのつながりがあったであろうことは、想像に難くない。

九州大学箱崎キャンパスの墓地に葬られていたのは、筥崎宮の氏子である漁民で、黒田家とのつながりの深い有力者が町内を取り仕切るような、庶民を中心とした人々であっただろう。

参考文献

- 板倉佳代子・尾座本洋子・谷直子 2026「X線CTによる箱崎遺跡出土銭貨および金属製品の調査」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告12 箱崎遺跡一補遺編一』九州大学埋蔵文化財調査室報告第15集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 大塚薬報編集部 1969「知ってもらいたい(第77回)黒田綱政のミイラ」『大塚薬報』第218号大塚薬報編集部 頁番号なし
- 岡崎敬 1964「南京・老虎山における東晋・顔氏の墳墓一『顔氏家訓』終制第二十・解一」『日本考古学の諸問題一考古学研究会十周年記念論文集一』河出書房新社 287-297頁
- 久住猛雄(編) 2010『箱崎40—第62次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集 福岡市教育委員会
- 小林義彦(編) 2012『箱崎44—箱崎遺跡第50・60次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1163集 福岡市教育委員会
- 小山憲一(編) 2006『浄土近世墓地調査報告 近世墓地の発掘調査と周辺文化財』三重県埋蔵文化財調査報告265 三重県埋蔵文化財センター
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・舟橋京子・石川健・谷直子・冨田啓貴・宮本一夫 2019「近世甕棺と七星板-福岡市箱崎遺跡(九州大学箱崎キャンパス HZK1801地点)の調査成果-」『日本考古学協会第85回総会発表要旨集』日本考古学協会 62-63頁

- 佐々木哲哉 1936「宮崎八幡宮の神幸行事」『福岡市立歴史資料館研究報告 第10集』福岡市立歴史資料館 1-26頁
- 谷直子（編）2024『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡—HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 8 箱崎遺跡—HZK1602・2006地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第11集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 9 箱崎遺跡—HZK2007地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告10 箱崎遺跡—HZK1801地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 谷直子（編）2026『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告12 箱崎遺跡—補遺編—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第15集 九州大学埋蔵文化財調査室
- たばこと塩の博物館（編）2015『たばこと塩の博物館 常設展示解説ガイドブック』たばこと塩の博物館
- たばこと塩の博物館（編）2024『時代とあゆむ袋物商 たばこ入れからハンドバッグまで』たばこと塩の博物館
- 新納豊 1993「葬儀：1. 韓国」『ASIA21基礎教材編 3号』大東文化大学国際関係学部現代アジア研究所広報出版部会 132-135頁
- 広渡正利 2003『宮崎八幡宮史』宮崎宮
- 藤井祐介 2018「近世の宮崎宮—社家と社僧の《攻防》史」『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 113-121頁
- 藤木聡 2025『火打石と火打金の文化史 考古学から見た火起こしの研究』吉川弘文館
- 藤澤典彦 2015「近世七星板の展開」『元興寺文化財研究所研究報告2015—水野正好所長追悼論文集』元興寺文化財研究所 179-182頁
- 水野正好 1995「紙魚想考（五）」『奈良大学紀要 第23号』奈良大学 139-148頁
- 水村雄功（編）2022『栗橋宿遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書473集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村山卓（編）2022『栗橋宿遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書474集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

Ⅶ 箱崎遺跡近世墓における葬送行為と 墓地造営集団の諸特性

舟橋京子¹⁾

1：九州大学比較社会文化研究院

1. はじめに

箱崎キャンパス跡地内遺跡における近世墓は、既に報告されている通り、土壙墓（木棺墓の可能性を持つものを含む）、木棺墓（円形木棺、方形木棺、長方形木棺）、甕棺墓が確認・調査されている。近世墓から墓を営んでいた造営集団の諸特性に関して言及した研究は江戸に関しては谷川章雄氏（谷川 2004など）や西木浩一氏（西木 1999など）の研究をはじめ諸報告や論考で盛んに行われている。一方で、九州の近世墓に関しても発掘は進んできており、少ないながらも上記のような視点から行われた研究もみられる（時津 2000；田中 1996）。そのような中であっても、葬制に関する情報の分析に出土人骨に関する情報を入れた研究はほとんど見られない。したがって、本章は人骨から得られる情報と葬送行為に関する諸情報の関係に基づき、箱崎遺跡における葬制から墓地の造営の背後にある諸側面に言及しようと試みるものである。使用する人骨および葬送行為に関する情報は、既報告のデータ（谷編 2024）を用いる。歯冠計測値のみ、本稿作成時に新たに採取した。

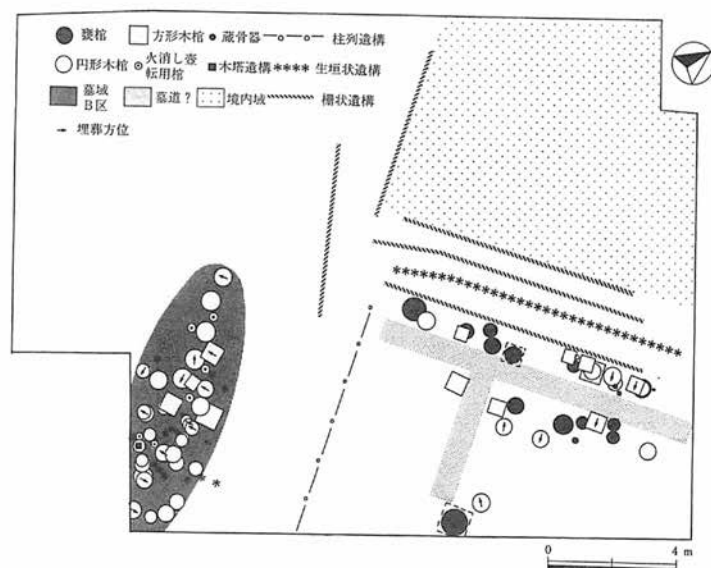
2. 方法と対象

本章で用いる情報は、人骨の出土状況および副葬品、人骨の年齢・性別および歯冠計測値を用いた相関係数である。以下これらの情報を用いた方法論および研究史に関して若干触れておこう。

i) 人骨の出土状況

人骨の出土状況に関しては、頭位あるいは躯体正面、および再開口に関して記述する。仰臥ないし側臥屈葬に関しては、体軸が墓壙底面と水平に近く、身体の向きの指標として頭位方向を用いる。坐葬に関しては頭位ではなく躯体正面に関して検討を行う。頭位に関しては、中世から「北枕西向き」が仏教信仰に根付くものであるとされている（斎藤 1978）。この点に関して、近世と推定される長方形木棺の埋葬でも類似した現象が認められる（岡ほか 1997；米元ほか 2022など）。したがって、屈葬の頭位は葬送における宗教的側面あるいはその遵守という墓地経営の在り方を探る一端になる。一方で坐葬は通常頭部を上にして座した状態であり、体軸は地面に対して垂直に近く、頭位は上方を指向した埋葬姿勢である。江戸の發昌寺においては、出土人骨の骨盤により判断される身体の正面が、内部施設の「前」など正面を記した記号と一致していることや墓道や墓地形成を探る手掛かりとなることが指摘されており（井汲 1991）、骨盤の向きを報告する必要性が指摘されている（谷川 2004）。さらに、これらの墓の正面の復元から、江戸圓應寺では同一の寺内でもランダムに埋葬されている地点と、墓道などが推定される地点があることが副葬品の出現率と併せて、同一寺院内で異なる経済状況・身分階層の被葬者が含まれることの証左の1つとなっている（西木 2004、第1図）。したがって、坐葬に関し躯体正面を検討することで箱崎遺跡における墓地経営の在り方を検討したい。

この他に、出土状況に関しては、埋葬後のある段階で墓を再度掘り返し、棺内の遺体の明瞭な取り



第1図 圓應寺模式図

去り痕跡は認められないものの二次的操作を加えた「再開口」に関して検討を行う。本遺跡においては既に事実報告の巻で指摘している通り、埋葬後に墓を再開口し二次的に操作を加えた様々な事例が確認されている（米元ほか 2024；米元・舟橋 2024）。このような二次的な操作のうち改葬行為自体は、本来祭祀が継承されており、家が存続していたことが判る非常に良い指標になる。例えば、江戸の東叡山寛永寺護国院墓地では最上位の埋葬である多重構造墓（石室+木棺／甕棺）は全て改葬されていたとされており（惟村 2004）、近世博多遺跡221次調査においても墓の密度が低いエリア程、丁寧に改葬（収骨）が行われていた（蓮田ほか 2025）。ただし、箱崎遺跡においては福永将大氏により本書の第Ⅴ章でまとめられている通り、近代の箱崎キャンパス内の建物建設時に墓そのものの破壊があり、出土した人骨があまり丁寧に扱われなかったと推定される記録が残る一方で、その行為への反省から丁寧な改葬（収骨）が行われたとの記録も残っている。2024年度の実事報告においては出土状況に関する記述の中で、遺体の二次的な操作にはいくつか種類があることを報告したところではあるが（米元ほか 2024；米元・舟橋 2024）、このような墓地経営終了後の土地利用の経過から、二次的な遺体操作が近世墓地経営の一環として行われたのか、九州大学の建物建設時のものかを厳密に判断することは困難である。一方で、遺体の二次的操作の中でも上述の通り収骨を伴わない事例が認められる。事実報告において「再開口」とされている行為であり、目立った収骨部位は確認できないが、骨盤（寛骨もしくは仙骨）が墓の中でも上位から出土している例が多い（第2図）。このような行為に関しては、近世の福岡県大野城市瑞穂遺跡および福岡市博多遺跡でも確認されている（米元

ST57



第2図 骨盤が墓の上位から出土している例

破壊があり、出土した人骨があまり丁寧に扱われなかったと推定される記録が残る一方で、その行為への反省から丁寧な改葬（収骨）が行われたとの記録も残っている。2024年度の実事報告においては出土状況に関する記述の中で、遺体の二次的な操作にはいくつか種類があることを報告したところではあるが（米元ほか 2024；米元・舟橋 2024）、このような墓地経営終了後の土地利用の経過から、二次的な遺体操作が近世墓地経営の一環として行われたのか、九州大学の建物建設時のものかを厳密に判断することは困難である。一方で、遺体の二次的操作の中でも上述の通り収骨を伴わない事例が認められる。事実報告において「再開口」とされている行為であり、目立った収骨部位は確認できないが、骨盤（寛骨もしくは仙骨）が墓の中でも上位から出土している例が多い（第2図）。このような行為に関しては、近世の福岡県大野城市瑞穂遺跡および福岡市博多遺跡でも確認されている（米元

ほか 2022；蓮田ほか 2025)。この再開口および遺体への二次的操作は、遺体の軟部組織の腐朽前に行われている事例を含んでおり、なおかつ甕棺の最下層まで到達し遺体の最下部を上部に引き上げるという手の込んだ行為である。したがって、この収骨を伴わない再開口および遺体の移動は、近代の攪乱・収骨と関係する可能性が極めて低く、近世の墓地経営時の行為の所産の可能性が高いと判断できる。したがって、この再開口事例に関し、本稿でも若干の検討を行う。

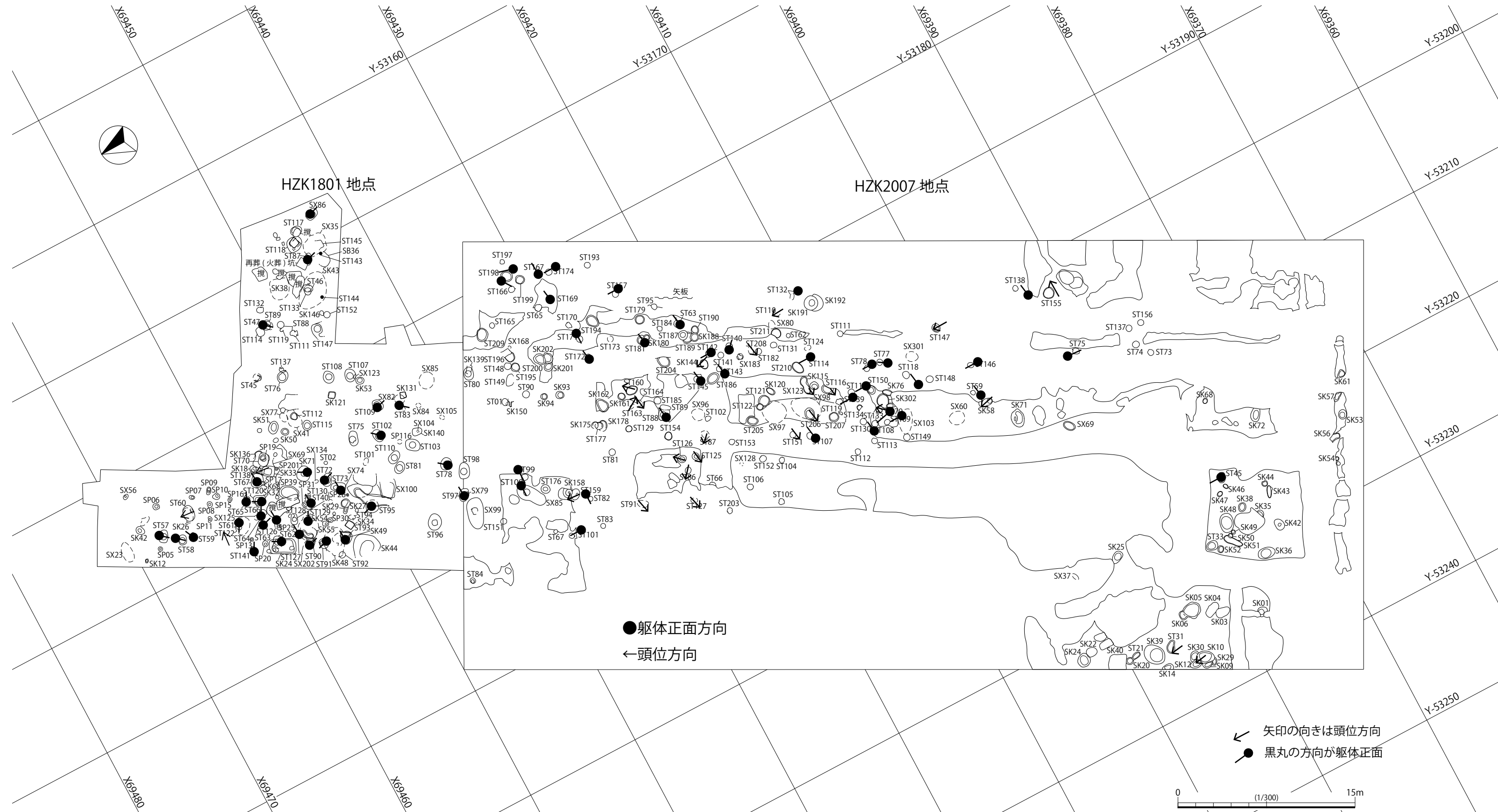
ii) 副葬品

近世の副葬品に関しては、谷川氏により（谷川 2004）、東京都の江戸の中小寺院である發昌寺および圓應寺の検討から、身分に関係のある属性として副葬品の「種類および量」の豊富さが指摘されている。加えて、副葬品を宗教的なもの個人的なものに弁別されており、前者として六道銭と櫛が、後者としてキセル、腰板、入れ歯、扇、柄鏡、磁器、漆器、簪などが挙げられている。本稿ではこの弁別に依拠して、個人的な副葬品とされるものの量・種類と年齢・性別の相関および墓域内での出土位置の検討から、墓域内における被葬者の経済状況と墓地形成の関係について検討を行う。

iii) 歯冠計測値を用いた親族関係の推定

近世墓地においては家ごとの墓地経営が広く知られている。江戸においては家および夫婦が墓の造営時の単位となっている事例が報告されており（新宿区發昌寺跡遺跡調査会 1991）、地方においても大分県女狐近世墓地において同様な指摘がなされている（田中 1996）。加えて、武士層においては特定の家が寺内を区画してその中に墓を築いていたことが知られている（北九州市教育文化事業団埋文調査室 1995）。したがって、本遺跡の様な上部構造たる墓石が全く下部構造と対応していない場合でも、墓が近接して営まれている、頭位方向ないし躯体正面が揃っている、甕棺の型式が同じである、というような条件が揃う墓に関してはある程度考古学的な同時期性が確保されており、なおかつ先行研究から何かしらの同一規範に従って埋葬されている墓であると推定される。したがって、本稿ではこれらの3条件が揃っている個体に関して、歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法を援用して被葬者間の関係を復元する一助とする。

歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法に関しては、計測は藤田恒太郎氏の方法（藤田 1949）、分析に関しては土肥氏らの方法（土肥ほか 1986）による。基準化のデータには男性・女性一定度の個体の計測データが得られている同時代の北部九州集団を用いる（九州大学医学部解剖学第二講座編 1988）。この歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法に関しては、現代人のデータを用いて血縁関係を推定するのに有効な方法であることが示されてきており（土肥ほか 1986；諏訪・洪 2006など）、古人骨の分析においても mtDNA 分析の結果との整合性がみられる（Adachi et al. 2003；Adachi et al. 2006）。一方で、血縁者と判断する Q モード相関係数の値に関しては、歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法の特性に由来する議論が行われている。その特性とは、他人でありながら歯の形態に類似のみられる個体の存在である。土肥氏らの方法において、意図的に作り出された他人同士のペアの間でも血縁者ペアと同様に類似性を示す他人の空似が認められることが指摘されており、この他人の空似に関しては方法論の特性上完全に排除することは困難であることが指摘されている。このため、他人の空似を高確率で排除する事よりも血縁者の抽出をより重視し、相関係数0.5をもって血縁関係があるとする見解（土肥ほか 1986）と、他人の空似の排除により重きを置き血縁者であると推定する相関係数の基準値を0.7と設定する見解がみられる（松村・西本 1996）。前者に関しては古墳時代の横穴墓という意図的に選択された個体でなおかつ同時期性が担保され、考古学的に世代復元仮説を作りうる遺跡出土個体群への応用を目的としている。一方で、後者に関しては縄文時代の貝塚遺跡というより範囲の広い社会集団および長い経営期間の墓地遺跡出土人骨群、即ちどの程度血縁者を含み込む



第3図 HZK1801・2007地点の頭位・躯体正面方向

かに関しての不確実性が横穴墓に対して相対的に高い個体群を対象としている。したがって、歯冠計測値を用いた血縁者の推定結果が適用される考古学的仮説において、どの程度他人の空似を想定しておく必要があるかが対象遺跡、即ち推定される墓地造営集団の性格によって大きく異なっていたため、基準とする相関係数の値の設定において意見の齟齬が生じたと推定される。また、縄文時代の合葬墓出土人骨の血縁関係の推定に際し、その遺跡で得られた歯牙の残存状況に基づく特定の歯種の組み合わせにおいて、相関係数0.7、0.8の出現頻度を他人群と血縁者群（一親等・二親等・三親等）で比較し、二親等以上になると他人群における出現率との間に有意差がないことを示し、0.8を超える非常に高い値が出た合葬個体を一親等以上の関係と推定した研究もみられる（Adachi et al. 2003）。これらの研究史を踏まえ、本論では0.5以上を血縁者の目安とし、それ以上の高い値に関しては適宜先行研究を参考としその値の評価を行う。

iv) 対象

以上の分析に基づき、箱崎遺跡 HZK2007地点及び HZK1801地点から出土した個体を中心に墓地経営の実態および造営集団の諸側面の解明を試みる。なお、HZK1801地点と HZK2007地点は隣接しており、これらをあえて別個に営まれた墓地であるとする根拠は無い。したがって、基本的にはこれらの地点を統合して分析を行う。ただし、箱崎遺跡の葬送としての場が中世から近世という時間の中で、南から北へ拡大していくという様相がみて取れる（本報告第V章 福永論文）。より南側に位置する HZK2007地点とより北側に位置する HZK1801地点の諸特性が葬送行為における時間差を反映している可能性も排除できないことから、必要に応じて地点ごとの分析を行う。また、未成人、なかでも乳幼児に関しては成人とは異なる葬法（棺・副葬品等）で埋葬される場合が多い（中山 2014など）。本遺跡においても、乳幼児はほとんどの個体が副葬品を有しており、成人以降の様相とは異なる。一方で、近世・近代においては、元服若者組への加入など10代半ば頃を境として労働参加可能な社会の一般成員への仲間入りをするとされている（尾形 1953）。したがって、本分析では、社会的な成人として認められていた個体が多く含まれる可能性が高い若年以降を検討の対象とする。分析に用いる年齢の表記に関しては、『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部解剖学第二講座編 1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。

3. 葬送行為に見られる諸特性の分析

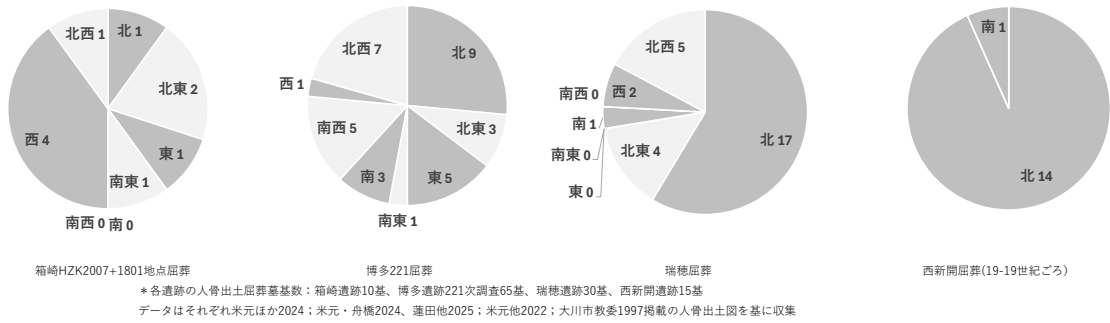
i) 方位の指向性における特性

箱崎遺跡における坐葬の躯体正面および頭位方向に関する分析結果に関して記述する。まず空間的な配置に関しては、全体的にみると一貫性が無いように見える（第3図）。ただし、部分的にみると特に HZK2007地点において近接する2-3基が同一方向を指向しているという様相が認められる。これは既報告の江戸發昌寺に類似した様相である。

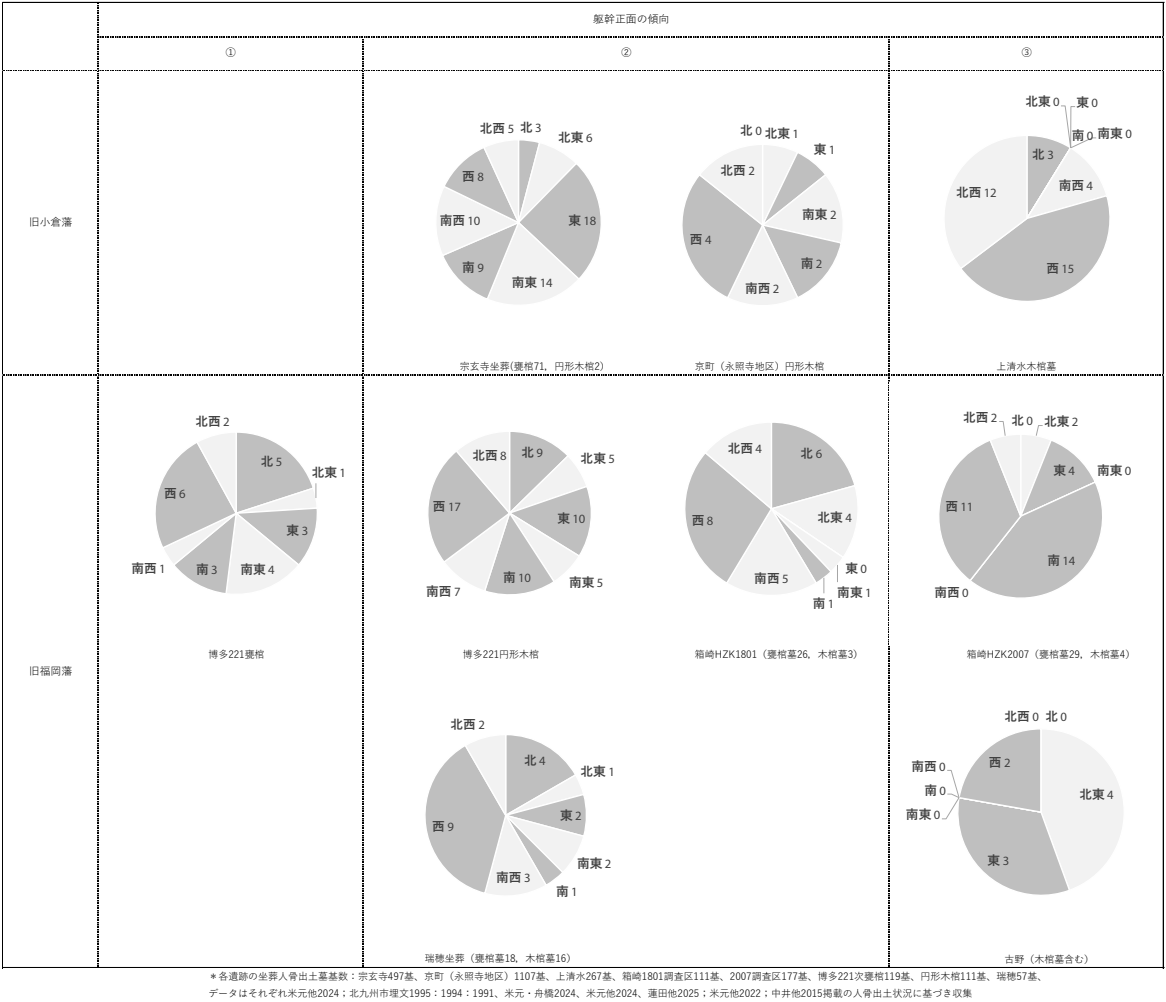
加えて、同一時期の福岡藩や近隣の小倉藩の頭位・躯体正面の在り方との比較検討を行う（第4・5図）。箱崎遺跡とこれら比較群においては改葬などの影響で頭位・躯体正面の明らかな個体の全人骨出土数に対する割合は低い。したがって、参考程度であるが葬送行為の指標として分析を行う。

まず、長方形木棺や土壙墓に相当する仰臥や側臥屈葬の頭位方向に関しては、大野城市瑞穂遺跡、大川市西新開遺跡の近世墓で頭位方向が揃って北ないし北を含む北東～北西を指向している。これら2遺跡ほど明瞭ではないが、博多遺跡では北を中心として北西～北東を指向する傾向はみられ、箱崎

Ⅶ 箱崎遺跡近世墓における葬送行為と墓地造営集団の諸特性



第4図 屈葬における頭位方向



第5図 坐葬における軀体正面の方位

遺跡においては事例数は少ないものの西を中心とした頭位方向が主流のようにみえる。

次に躯体正面である。箱崎遺跡の躯体正面に関しては、調査区ごとにみてもHZK2007地点においては西および南を指向しており、HZK1801地点に関しては、北西から南西を含む西側を指向しているという傾向が認められる。比較として、近隣の18世紀～19世紀の墓地遺跡である小倉藩領の宗玄寺、京町遺跡の永照寺相当区域および上清水遺跡、福岡藩領の博多遺跡、古野遺跡、瑞穂遺跡について比較を行った。宗玄寺に関しては躯体正面が明らかになった個体は2例を除きすべて甕棺であり、躯体正面は多様であるものの、北東～南東を含む東側を指向している墓が半数を占める。同じく小倉城下の京町遺跡の永照寺区域では、躯体正面は宗玄寺と同様多様な方位の躯体正面がみられるものの主要方位は逆の北西～南西を含む西側であり半数程度を占める。上清水遺跡では躯体正面の多様性は低く北西～南西を含む西側を指向する墓が9割を占めている。箱崎遺跡と同じく福岡藩の都市部である博多遺跡に関しては、より下層から出土しており甕棺墓に先行する円形木棺墓の躯体正面は多様ではあるものの、北西～南西を含む西側が半数を占めている。同遺跡の後出する甕棺墓の躯体正面は多様であり、半数を占める方位はみられない。福岡藩の都市縁辺部である古野遺跡および瑞穂遺跡をみると、古野遺跡では躯体正面の多様性は低く、北東および東が7割を占める。瑞穂遺跡に関しては躯体正面は多様であるものの、北西～南西を含む西側を指向した墓が半数を占める。

以上の全体の傾向をまとめると、屈葬に関しては、特定の頭位方向を指向した傾向が認められる。躯体正面に関しては、①躯体正面が多様であり傾向性が認められない墓地（博多遺跡甕棺）、②躯体正面が多様であるものの特定の方位が全体の半数程度ないしそれ以上を占める墓地（宗玄寺、博多遺跡円形木棺、京町遺跡の永照寺区域、瑞穂遺跡甕棺墓）、③躯体正面が特定の方向に集約される墓地（上清水遺跡、古野遺跡）、の3パターンが見られ、箱崎遺跡に関しては、HZK2007地点が③、HZK1801地点が②の様相に近い。

ii) 再開口に関する特性

再開口に関しては、既報告の通り、HZK1801地点5例、HZK2007地点で10例確認されている（第1表）。うちHZK1801地点の1例に関しては幼児である。乳幼児の骨は非常に薄くサイズも小さく軽いため、甕棺のように内部が空洞で保たれうるような棺に埋葬されている場合は水の流入などにより骨が非人為的営力で移動しやすいことから、本検討では除外しておく。HZK1801地点において確認された個体は、いずれも男性であるが、HZK2007地点で確認された事例は男性・女性いずれも含まれている。また、副葬品に関しても、キセル・ハサミ・ケヌキをセットで持つような個体と銭以外の副葬品を持たない個体があり、副葬品や性別に関しては本行為と相関は無いようにみえる。一方で、年齢を見ると、14例中11例が熟年以上で、年長の被葬者に多くみられるという指摘は可能であろう。

iii) 副葬品の保有に関する特性

副葬品と年齢・性別の相関および空間的分布に関して検討を行う前に、各地点および全体の年齢・性別について把握を行う（第6図）。これは近代の墓地造営において性別や年齢を重視するような墓制も認められることから（最上編 1979）、空間分布における出土人骨の年齢構成・性別の偏りが副葬品の空間的な出現に影響する可能性を排除するためである。まず、HZK1801地点は成年においては女性ないし女性の可能性が高い個体の比率が高く、逆に老年では男性の比率が高い。一方で、HZK2007地点は老年の中での男性の比率が高い。全体的にみると、HZK1801地点の若年～成年が多いことが目立つが、調査区の違いにおける年齢・性別の極端な片寄りはいみじくない。両地点を併せたデータを見ると、やはり成年ではやや女性が多く、老年では男性が多い。これらの年齢・性別の比率を考慮したうえで、以下副葬品の保有状況についてみてみよう。副葬品に関しては、比較的多く出土

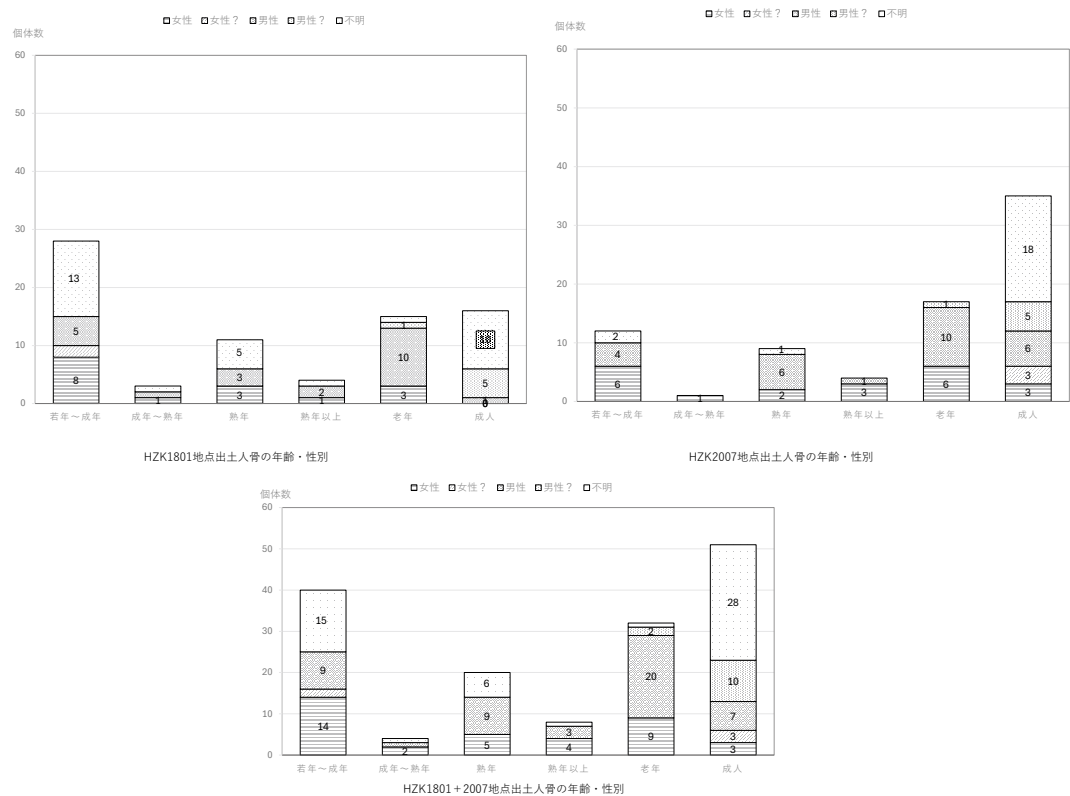
第1表 再開口墓の諸属性

地点	出土情報		人骨所見				鉄釘	甕棺年代	副葬品						銭	
	遺構番号	葬法主体	葬法	改葬など	年齢	性別			土器	キセル	ハサミ	ケヌキ	櫛	その他	寛永通寶	その他
1801	ST57	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	成年	男性	6		土師皿 (2)			1	1	鏡箱 (蓋・身各1), 青銅製柄鏡 (1), 七星板 (1)	2	鉄銭 (3)
	ST63	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	老年	男性	3	18~19世紀	土師皿 (2)	1					6	
	ST86	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年	男性		18~19世紀	土師皿 (2)	2		1		鉛製玉 (1), 木 製さいころ (3) 樹皮 (加工あり), ガラス板, 織物 (布地), 銅製金具 (煙草入れの可能 性) (各1)		不明 (2)
	ST109	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年	男性		18~19世紀		1					4	開元通寶 (私鑄銭) (1), 不明 (1)
2007	ST100	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年	男性	3	記載なし	土師器皿 (2)	1				石製の玉	4	鉄銭 (2)
	ST107	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	老年	女性	2	18~19世紀	土師器皿 (2)						6	
	ST108	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	老年	女性	4	18~19世紀	土師質鉢 (1)	1			1	扇の骨 (2)	2	鉄銭 (2)
	ST130	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年	男性		18~19世紀	土師器皿 (2)	1	2	1		煙草入れ金具 (3)	4	鉄銭 (2), 無文銭 (1)
	ST132	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	成人	不明	2	記載なし	土師器皿 (1)・坏 (2)・ 高台付坏 (5)	1					1	
	ST141	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	老年	女性		記載なし	土師器皿 (1)	1	1				?	銅銭 (3)
	ST166	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年 以上	女性		記載なし	土師皿 (2)	1	1	1			2	不明 (2)
	ST171	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	成年	男性	1	18~19世紀	土師器 (2)		1	1	1		8 うち文銭 (2)	鉄銭 (2か3)
	ST172	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	熟年	男性		18~19世紀	土師皿 (2)	1	1		1	板目板 (2), 七 星板, モミガラ, 大形の碟	2	鉄銭 (4)
	ST193	甕棺墓	甕棺	改葬不明 再開口有	老年	女性	3	記載なし	土師皿 (1)		1	1			1	鉄銭 (4)

しており、個人的副葬品とされるものについて検討を行う。

まず箱崎遺跡で多くみられる、キセル、ハサミ、ケヌキについてみる (第2・3表)。キセルのみ女性に比して男性の保有率がやや高く、女性で23.7%、女性の可能性がある個体群で20.0%なのに対し、男性では40.4%、男性の可能性が高い個体に関しては7.1%である。年齢で見るとやはり同様にキセルのみ熟年以上の年齢で安定して保有率が高く若年から成年で12.5%、熟年45%、熟年以上50.0%、老年43.8%である。なお、地点ごとで見ると、いずれの遺物も墓域内で偏りなく出土している (第7図)。一方で、各遺物の複数保有例 (キセル2本以上、ハサミ2本以上、ケヌキ2本以上) をみると、年齢・性別に関しては、キセルが熟年以上が1体、老年が3体であり性別の内訳は男性3体、女性1体である。キセルの複数本保有個体の各地点による内訳は、HZK1801地点は1例、HZK2007地点は3例である。ハサミに関しては熟年以上が4体、不明1体であり、性別は男性3体、不明2体である。なお、地点ごとでみると5例すべてがHZK2007地点に相当する。ケヌキに関して確実な複数出土例はハサミを複数本有するHZK2007地点のST179のみである。次に、これらの副葬品を3種セットで保有しているのは9個体である。その年齢・性別の内訳をみると、成年2体、熟年以上6体、成人1体でより年齢層が高い個体に多い傾向がある。性別に関しては男女各4体、性別不明1体で偏りはみられない。また、空間的な分布をみると7例がHZK2007地点に相当し、2例が

3. 葬送行為に見られる諸特性の分析



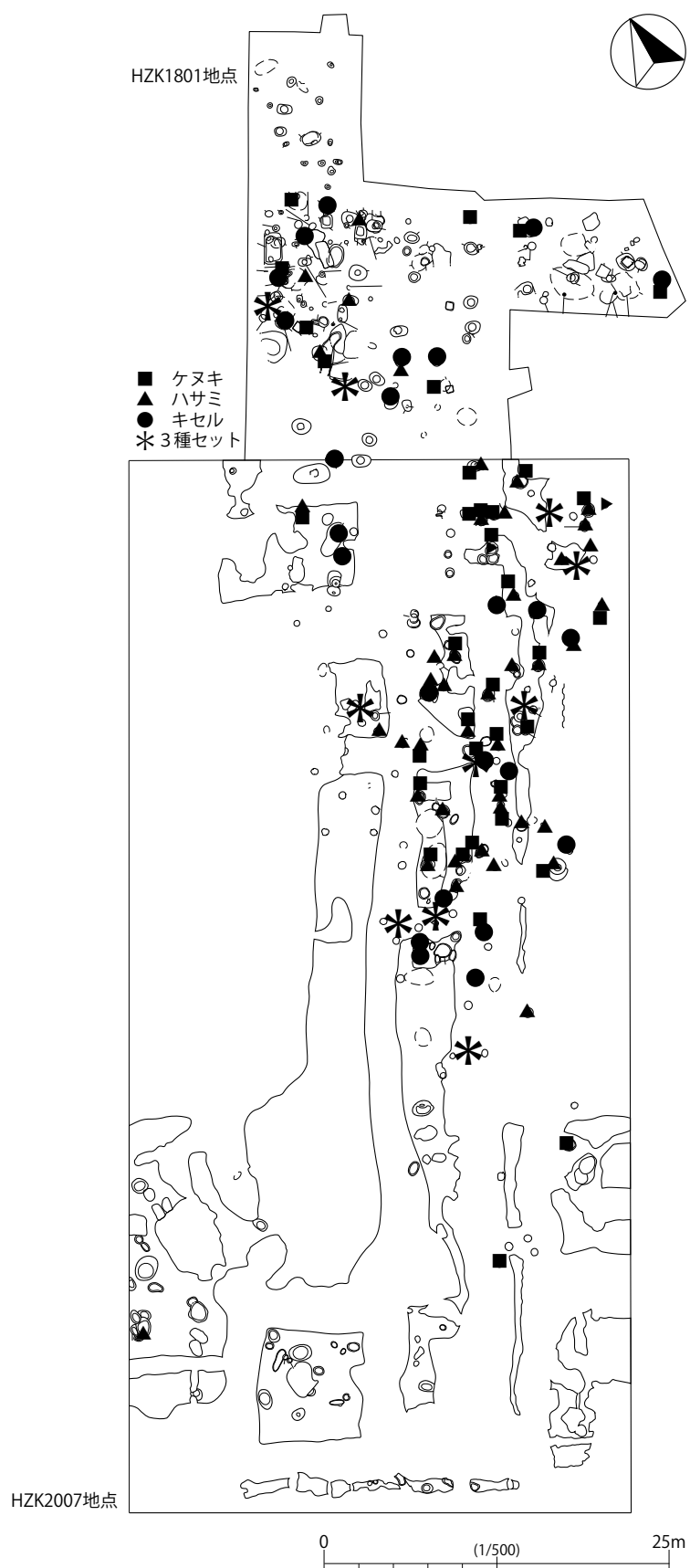
第6図 調査区と出土人骨の年齢・性別

第2表 副葬品と性別

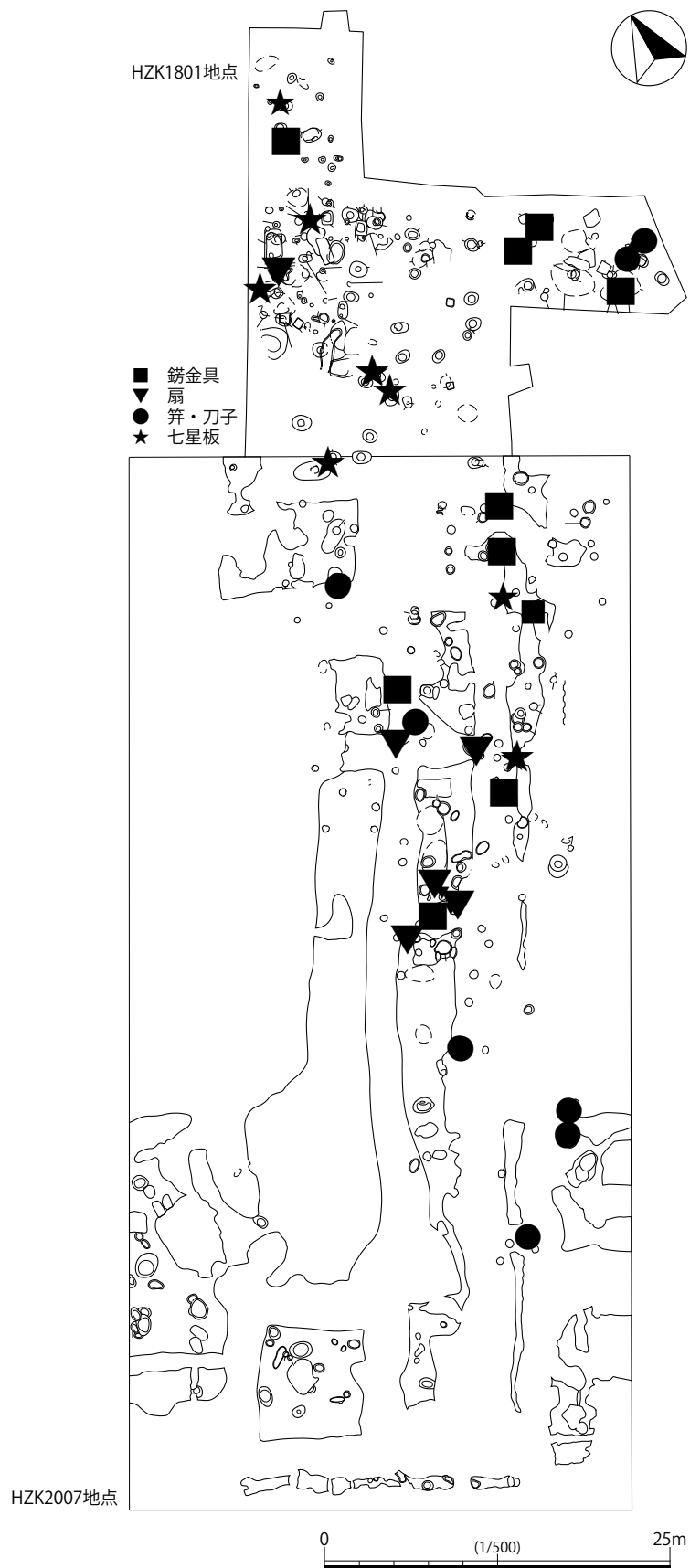
	個体数			キセル	ハサミ		ケヌキ		七星板		扇	鍔金具		筭：刀子	火打ち金	火入れ	さいころ	煙草入れ	青銅製柄鏡
女性	37	9	うち1例2本	12			10		1	2		2	1		1				
女性？	5			2			1					1	1						
男性	49	21	うち1例3本 2例2本	19	うち3例 2本		15		6	4		1	1		2	1	1	3	1
男性？	12	1					2												
不明	52	4		6	うち2例 2本	8	うち1例 2本	1				1	2						
合計	155	35		39		36		8	6		5	5	3		1	1	3		1

第3表 副葬品と年齢

	合計	キセル	ハサミ	ケヌキ	七星板	扇	鍔金具	筭：刀子	火打ち金	火入れ	さいころ	煙草入れ	青銅製柄鏡
若年～成年	40	5	9	12	3	1	2	1	1				1
成年～熟年	4		1					1					
熟年	20	9	うち1例2本	5	うち2例2本	4	うち1例2本	1	1		1	3	
熟年以上	8	4	うち1例2本	4	4				1				
老年	32	14	うち1例3本, 1例2本	7	うち2例2本	5	4	4	1	2	1	1	
成人	51	3	13	11		1	1						
合計	155	35	39	36	8	6	5	5	3	1	1	4	1



第7図 副葬品保有墓の空間分布 1



第8図 副葬品保有墓の空間分布2

第4表 歯冠計測値

		HZK1801-ST58		HZK1801-ST57		HZK2007-ST109		HZK2007-ST130	
		右	左	右	左	右	左	右	左
上顎	I1	8.74		8.55	8.32		8.8		8.49
	I2	7.52	7.51	7.26	7.13		7.62	7.42	7.12
	C	7.84	7.87	8.29	8.18	8.79	8.68	8.44	8.18
	P1MD	7.61	7.67	7.85	7.74	7.61	7.27	7.32	7.51
	P2MD	7.51	7.34	7.62	7.68		7.42	7.34	7.51
	M1MD	10.28	10.65	10.05	10.35	10.1		11.26	11.4
	M2MD	10.26	9.94	10.55	10.49	9.92	10.06	10.38	10.63
	P1BL	10.08	10.13	10.84	10.89	10.03	10.48	10.28	10.34
	P2BL	9.8	9.97	10.63	10.62		10.69	10.83	10.53
	M1BL	11.74	11.65	11.8	12	11.72		12.79	
	M2BL	11.78	12.1	12.28	12.24		11.7	12.86	12.67
下顎	I1				5.2	5.66		5.22	
	I2			6.29	6.15	6.53	6.64	6.56	
	C		6.89	7.54		7.8	7.67	7.57	7.52
	P1MD	7.79	7.7	7.66	7.76	7.32	7.56	7.18	7.43
	P2MD	7.75	7.59	7.91	7.8	7.61		7.48	8.11
	M1MD	11.17		11.24	11.33		10.83	11.87	12.01
	M2MD	11.22	11.59		11.66	11.29			
	P1BL	7.68	7.9	8.48	8.36	8.67	8.75	8.45	8.7
	P2BL	8.58	8.49	9.12	9.17	9.04		9.05	9.13
	M1BL	10.78		10.64	10.78		10.82	11.9	11.84
	M2BL	10.93	10.65		10.73	11.46			

第5表 個体間の相関係数

番号	歯種	HZK1801-ST58*ST57	HZK2007-ST109*ST130
3	ULP1P2M1M2	0.841	—
5	ULCP1P2M1	0.816	0.506
6	ULP1P2M1	0.842	0.523
9	ULP1M1	0.859	0.277
15	UCP1P2M1	0.942	0.515
16	UP1P2M1	0.949	0.635
23	LP1P2M1M2	0.952	—

他人の空似の出現率20%以下の組み合わせ

HZK1801地点に相当する（第7図）。以上のように本墓地で一般的にみられるキセル、ハサミ、ケヌキの保有に関しては空間的な偏り無く、性別・年齢との相関ではキセルのみ男性の保有率がやや高い傾向がみられる。一方で、同一遺物を複数保有している個体、およびキセル・ハサミ・ケヌキをセットで保有している個体に関しては熟年以上が多く、また HZK2007地点に偏っていると言える。

次に多くの出土例はないものの複数例出土している、七星板、筭・刀子、扇、鍔金具に関して、性別・年齢および墓地内における空間分布をみてみよう（第8図）。出土例自体がそれほど多くないため各年齢・性別での出現頻度での比較は行わないこととする。これらの遺物のうち七星板と扇は男性に多く、加えて扇に関しては老年に多い。墓域内での空間的な出現をみると、七星板は HZK1801地点即ち墓域北側から多く出土しているのに対し、筭・刀子、扇、鍔金具は HZK2007地点つまり墓域南側から多く出土している。

iv) 歯冠計測値を用いた被葬者間の関係の推定（第4・5表）

本遺跡において先述のような考古学的に同時期性が確保される可能性があり（甕棺が同一型式）、なおかつ頭位／躯体正面が揃っており近接して埋葬されているという考古学的に近世の造墓の際に単位となる「家」の構成員である可能性を仮定し得る個体は、HZK1801地点に相当する墓地北側から出土している ST57（成年男性）と ST58（成年女性）1 ペアのみであった。これらは共に福永氏分類の E2類（本報告第V章 福永論文）の甕に埋葬され、躯体正面が北西であり、隣り合う墓に埋葬されている。その結果、分析可能であった7つの歯種の組み合わせ全てにおいて0.8以上の高い相関係数が得られており、血縁関係が推定される。

また、頭位／躯体正面は揃っていないものの近接して埋葬されており、近縁の甕棺型式から出土している個体として HZK2007地点の ST109（熟年男性）と ST130（熟年男性）がある。これらの個体はそれぞれ E2と E1類の甕棺から出土しており、間に ST108を挟んで近接して埋葬されている。これらの個体は分析可能であった7つの歯種の組み合わせのうち5つで0.5以上の相関係数が得られているが、イトコ（四親等）になると相関係数の平均値が他人群と有意差が出ない歯種の組み合わせ、上下顎 P1P2M1M2、上下顎 P1M1に関しては、0.5以上の値は得られていない。

4. 箱崎遺跡近世墓における葬送行為の特性と造墓集団の諸特性

a) 箱崎遺跡における近世墓地のあり方

まず、躯体正面、頭位方向に関する分析結果を検討してみよう。屈葬に関しては、箱崎遺跡も含め比較群のいずれにおいても特定の頭位方向を指向した傾向が認められる。屈葬が坐葬に先行して用いられているような遺跡では、屈葬段階のほうが坐葬の時期に比べて葬法に関する規制が相対的に保持されていたという事は可能であろう。ただし、箱崎遺跡以外では一般的に言われる北頭位（北西～北東含む）西向きを指向しているのに対し、箱崎遺跡では頭位が西を向いている事例が主流である。この点に関しては注意が必要であろう。

躯体正面に関しては、比較群を含めると①躯体正面が多様であり傾向性が認められない墓地（博多遺跡甕棺）、②躯体正面が多様であるものの特定の方位が全体の半数程度ないしそれ以上を占める墓地（宗玄寺、博多遺跡円形木棺、京町遺跡の永照寺区域、瑞穂遺跡甕棺墓）、③躯体正面が特定の方向に集約される墓地（上清水遺跡、古野遺跡）、の3パターンが見られ、箱崎遺跡に関しては、HZK2007地点が③、HZK1801地点が②の様相に近い。③の上清水遺跡と古野遺跡では非常に企画性が高いように見えるが、これらの遺跡はそれぞれ斜面に面して墓地が形成されており、躯体正面は斜面の等高

線に直行した向き（下側向き）に統一されており、立地に左右されている、あるいは墓地の選定当初に方位を考慮し選地が行われた可能性が考え得る。一方で箱崎遺跡 HZK2007地点に関しては、平地にも関わらず躯体正面の規格性が比較的高い。HZK2007地点は大規模な攪乱で元々の堆積層が保存されている部分は非常に少ないため、どの程度全体的な様相を示しているかは不明であるが、現状では認識できないものの墓地経営当時は墓に対する墓道の位置がある程度定まっていた、あるいは宗教的な葬法がある程度守られていた可能性が考えられる。HZK1801地点に関しては博多遺跡の円形木棺同様に躯体正面が多様であり主要な方向も見い出せない。したがって、HZK1801地点の方が相対的に HZK2007地点よりも躯体正面に関する規範が緩んでいる状態と言える。

ここで、副葬品についてもみると、相対的に被葬者の経済的な豊かさを反映していると考えられる副葬品の種類、即ちキセル・ケヌキ・ハサミをセットで有する個体や同一副葬品（ケヌキ・キセル・ハサミ）の複数点保有個体は HZK2007地点に偏っている。また、複数例出土している扇、筭・刀子、鍔金具も HZK2007地点に偏って分布している。箱崎の葬地としての利用が南から北に拡大するという時間差の可能性を考慮すると、時間とともに副葬品が豊富な墓が少なくなっており、躯体正面に関しても時代が下るにつれ相応の規範が相対的に緩くなっているということが指摘できよう。このような事例の類例として、旧小倉藩の京町遺跡が挙げられる（北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室編 1994）。京町遺跡は被葬者が商家・近隣農民とされており、個人的な副葬品に関して17世紀中頃から18世紀中頃が多く18世紀後葉以降少なくなるとされる。本遺跡における副葬品の在り様も京町遺跡と同様な副葬品、即ち葬送行為における簡素化の流れの一端を示すものかもしれない。

一方で、甕棺の編年で見られたように甕棺の分類と HZK1801・2007地点における空間的な分布が相関しないことから、箱崎遺跡の近世墓地利用において空間的な配置に時間差が反映されていない場合についても考えておこう。葬地としての箱崎の中でも街道側に近い南側に還國寺が位置しており、近世墓域の中で HZK2007地点の中でもより南側の位置から錫杖等還國寺の修験者を想起させる副葬品も出土している。現代の寺付きの墓でも本堂に近い位置は、僧侶ないし檀家総代の墓が位置する等墓地の中でも相対的に優位な場所として認識されており、これと類すると考えられる本堂付近で比較的埋葬密度が低く、副葬品の豊富な墓が分布するという現象は江戸圓應寺や博多遺跡第221次調査においても認められる（新宿区厚生部遺跡調査会編 1993；福岡市教育委員会編 2025）。したがって、近世墓域のより南側が、北側に比べて相対的に墓地内の場の優位性が高く、墓地の経営に経済的に貢献の大きい経済状況に余裕のある人々が埋葬されていたために、墓の形成においても埋葬後の墓参りを想定した墓道などの空間を確保することができたとも考え得る。そのような視点で再度 HZK2007地点の個々の躯体正面の有り様を見ると、先述の通り HZK2007地点は近接して埋葬されている個体間で躯体正面が揃うものが比較的多い。その場合には副葬品の種類・量の指標において HZK2007地点と HZK1801地点での優劣に見える差は、墓域内での被葬者の経済状況の相対的な優位差を示している結果かもしれない。しかし、HZK1801地点相当の北端から、柄鏡など本遺跡内では比較的優品ともいえる副葬品を持つ ST57が検出されていることから、墓の空間的な配置が全体的に経済状況の違いを反映している場合であっても、必ずしも厳密なものではないことは考慮しておく必要がある。

以上みてきたように近世箱崎遺跡の墓地としての利用においては空間配置と時期差が相関していた可能性と、空間配置と被葬者の経済状況が相関していた可能性の両方が考えられる。ただし、箱崎遺跡は近代においてかなりの変更が加えられており、これらの現象が本来の墓地の様相を示すものではない。即ち上述の墓地内での南北差が時間的変化も経済状況の差も示していない偶然によるものである可能性も残しておく必要がある。

b) 葬制からみた箱崎遺跡近世墓における造墓集団の諸特性

箱崎遺跡の近世墓地の被葬者間の関係および造営集団に関しても若干言及しておきたい。副葬品についてみると、被葬者の経済的な優位性である豊かさの指標とされる副葬品の量・種類についても極端に突出した個人は確認できない。一方で、性別・年齢との相関を見ると分析の所で示した通り、本墓地で一般的に見られるキセル、ハサミ、ケヌキの保有に関してはキセルのみ男性の保有率がやや高い傾向が見られ、同一遺物を複数保有している個体およびキセル・ハサミ・ケヌキをセットで保有している個体に関しては熟年以上が多い。次に多くの出土例はないものの複数例出土している、七星板、筭・刀子、扇、鍔金具に関しては、七星板と扇は男性に多く、加えて扇に関しては老年に多い。なおキセルの保有者に関しては、旧小倉藩領の城下町内に位置した旧永照寺・東岸寺に相当すると考えられる京町遺跡において、男女ともに保有するとされている（谷口 1994）。ただし、その実数を見ると男性23点、女性4点、性別不明12点で男性が非常に多い。本遺跡とあわせて考えると、キセルが男性に偏る傾向は経済状況以外の要素を含み込んだキセル使用率の性差を示す可能性もある。なお、近世史においては19世紀初頭に女性の喫煙の広がり指摘されている（長島 2017）。ただし、女性と言っても特定職人集団に限定されており、一般的には女性の喫煙に非寛容であったとする意見（長島 2006）と、女性の喫煙は対人関係の規範の中では「あたりまえ」のものであったとする意見も見られる（中村 2011）。本遺跡のキセル保有率の性差は、女性への喫煙の広がり過渡期的様相を示す可能性と、女性に喫煙が広まった後の、女性の喫煙に対する社会的な寛容度の低さや箱崎集団の社会的立場づけなど様々な要因が想定されよう。

一方で、複数本キセルを保有している個体は老年男性に限られ、キセル・ハサミ・ケヌキのセットや扇の保有が熟年以上の年長者に偏るような副葬品の在り方と併せると年長者の経済的優位性が伺える。ただし、これらの副葬品はあくまで被葬者本人ではなく葬儀を行った生者により棺内に供えられたものである。したがって、年長者への相対的に豊富な副葬品の偏りは葬儀を執り行った人物の経済状況の優位性を示すとともに、葬儀において年長者がより丁寧な扱いを受けようとする社会的立場であったと想起される。これに関しては、箱崎遺跡の被葬者層と考えられるような非武士層においても、法史学を除いた各分野において、家父長制的性格を認める見解が大勢を占める（大竹 1981）。箱崎遺跡墓地造営集団が家父長制であったという前提に立つならば、より年長者にセットの副葬品保有者が偏り、中でも男性の若干の優位性が窺えるという点とは整合性がある。加えて、近世・近代の年齢階梯制についてみると、いわゆる「若者組」に属するのは10代半ばからであるが、その上限が西南日本では25歳ないし結婚まで、東日本では30代半ばから40歳となっている。その後に関しては、「中老」－「年寄り」などの区分がみられ（福田 2000）、長崎県下県郡や静岡県田方郡では中老以降の年齢階梯集団への加入が漁業権の継承条件になっている事例もみられる（江守 1976）。したがって、比較的种类・量の豊富な副葬品を有する個体が、熟年即ち40歳－60歳と推定される年齢層以降の個体に限られるという現象は、当時の年齢階梯制に基づく社会的地位の在り様を示すものかもしれない。

一方で、歯冠計測値を用いた血縁関係の推定結果を見ると、HZK1801地点から出土したペアに関しては0.8以上と非常に高い値の相関係数が得られている。歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法は他人の空似を完全に排除することはできないが、松村博文および西本豊弘両氏の研究によると、相関係数が0.8以上になると他人の空似による出現率は0.9%まで下がるとされている（松村・西本 1996）。加えて、この0.8という相関係数は一親等個体間でも5.9%の出現率、二親等でも1.9%の出現率である。したがって、このHZK1801地点から出土したST57（成年男性）とST58（成年女性）のペアはかなり近い血縁関係にあったと推定することは可能であろう。一方で、HZK2007地点のST109とST130

のペアの分析結果はイトコ同士（四親等）になると平均値と他人群と有意差が出ないような歯種の組み合わせ2種で0.5以上の値が得られていない。したがって、箱崎遺跡におけるこれらの分析結果、一親等に相当する被葬者や四親等に相当する被葬者が近接して埋葬されるという現象は、当時の「家」の在り様を示すものであろう。前者の事例に関しては世代的にも血縁的にも非常に近い被葬者オヤコ・キョウダイの近接埋葬を想定し得るし、後者の事例はイトコや高祖父と玄孫など世代的連続性、あるいは同一世代における血縁の広がりや墓地造営の在り方を示唆するものであろう。また、近世箱崎遺跡においては明瞭な墓道など、追善供養が行われていた痕跡を墓の空間分布から見てとることは現状では困難である。ただし、副葬品保有の分析に関する補助的な分析においてみたように、保有者は老年男性が多いものの全体として、男女比に大きな偏りはない。加えて、歯冠計測値を用いた本分析から明らかになったように、躯体正面即ち墓の正面が揃った血縁的に近い人が隣接して埋葬されている事例もある。以上の諸特性を総合すると、近世箱崎集団は西木浩一氏が江戸圓應寺B区の被葬者として推定した「日用」層のような家から切り離された人々（西木 2004）ではないこと、さらには「家」として括られ得る血縁関係を有する人々が近接して埋葬される場合があった事が箱崎遺跡においても確認されたという事は言えよう。

なお、収骨のみられない再開口および遺体操作の事例は、やや年長者に偏ってみられるが、性別の偏りはみられず、地点を問わず認められる。また副葬品の多寡とも相関しない。したがって、本遺跡でもその行為の意味を明らかにすることは困難であると言わざるを得ない。ただし、埋葬後遺体を動かすまでの時間にバラツキがあることから、その行為の意味付けについて推測の域を出ないが若干言及したい。埋葬後の追善供養に関しては、北原糸子氏により年忌法要一般化は近世に入ってからとされており（北原 1991）、下級武士小野直方の日記から1700年代半ばに、1～3回、7回、13、17、23、27、33、50回忌などが行われていたとされる。加えて發昌寺の卒塔婆ではこれらに加え25回忌の事例もあったとされる。再開口における遺体の操作も埋葬後再開口までの期間が軟部組織の腐朽前から軟部組織の腐朽が進んでいるものまであり、同一の祭祀行為に伴うものかどうかは検討が必要である。ただし、箱崎遺跡においては部分的ではあれ上述の様な家あるいは血縁を媒介とした被葬者集団の存在も想定されることから、こうした年忌における追善供養も可能であったと言えよう。

今回の検討に関しては報告における最低限のものであり、本稿では著者の力不足で叶わなかったが、今後副葬品それぞれの年代観や質の検討などより詳細な情報を明らかにし、近世墓制全体における箱崎遺跡の墓地形成の在り方を位置づけることが必要である。

5. おわりに

本章で明らかになった点は以下の通りである。

①箱崎遺跡においては、頭位・躯体正面・副葬品の種類・量に関する空間的な偏りがみられ、その背景には時間的な墓地の拡大の様相、墓地内での経済的な優劣差が想定されるが、このいずれにも当たらない可能性も考えられる。

②本遺跡においては経済的優位性を示す副葬品の種類・量において、熟年ないしそれ以上の個体に偏る傾向がみられることから、当時の箱崎遺跡造営集団における年齢階梯制および家父長制の反映である可能性が考えられた。

③本遺跡においては歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法から血縁関係にある人々が近接して埋葬されている例があること、近接して埋葬されている人々の間で躯体正面が揃っている個体が散見され

ることから、「家」として括られ得るような人々も埋葬されていたことが明らかになった。

《謝辞》本報告を執筆する機会を与えてくださった宮本一夫元九州大学埋蔵文化財調査室室長に心より謝意を表します。併せて、報告に必要な基礎データを提供してくださった同調査室の谷直子助教にも深謝いたします。加えて、本分析に必要な箱崎遺跡全体の土地利用、遺構に関する情報および近世に関する様々な情報をご教示くださった九州大学総合研究博物館の米元史織准教授・福永将大助教には重ねて深謝いたします。最後に、本報告にあたり人骨の発掘および整理作業に携わった、九州大学大学院地球社会統合科学府・人文科学府および文学部考古学研究室・共創学部 of 学生諸氏に心より感謝します。

【参考文献】

- Adachi N., Dodo Y., Oshima N., Yoneda M., Matsumura H., 2003, Morphologic and genetic evidence for the kinship from a 2,000-year-old double burial of Usu-Moshiri site, Hokkaido, Japan. *Anthropological science* 111 (3) 2003, pp.347-363
- Adachi N., Suzuki T., Sakaue K., Takigawa W., Oshima N., Dodo Y., 2006, Kinship analysis of the Jomon skeletons unearthed from a double burial at the Usu-Moshiri site, Hokkaido, Japan. *Anthropological science* Vol.114 (2006), No.1 pp.29-34
- 土肥直美・田中良之・船越公威 1986「歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用」『人類学雑誌』第94巻第2号 日本人類学会、pp.147-162
- 江守五夫 1976「村落社会における家と年齢集団」『日本村落社会の構造』弘文堂、pp.217-231
- 福田アジオ 2000「若者組」福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（編）『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館、pp.825-826
- 福岡市教育委員会（編）2025『博多202 博多遺跡群第221次調査 IV区・V区・Ⅷ区・Ⅸ区・Ⅺ区の概要』福岡市教育委員会発掘報告書第1539集、福岡市教育委員会
- 藤田恒太郎 1949「歯の計測基準について」『人類学雑誌』第61巻第1号 日本人類学会、pp.27-32
- 蓮田賀子・舟橋京子・米元史織・米山玲緒・高橋寛宇 2025「博多遺跡群第221次調査に伴う出土人骨の分析について」福岡市教育委員会（編）『博多202 博多遺跡群第221次調査 IV区・V区・Ⅷ区・Ⅸ区・Ⅺ区の概要』福岡市教育委員会発掘報告書第1539集 福岡市教育委員会、pp.225-276
- 井汲隆夫 1991「内部施設と葬法」新宿区南元町遺跡調査会（編）『發昌寺跡—社団法人金融財政事情研究会新館建設に伴う第2次緊急発掘調査報告書—』社団法人金融財政事情研究会・新宿区南元町遺跡調査会、pp.135-149
- 北原糸子 1991「江戸・東京寺院小史—發昌寺を中心として—」新宿区發昌寺遺跡調査会（編）『發昌寺跡』新宿区發昌寺跡遺跡調査会、pp.94-123
- 小方泰宏 1995『北九州市埋蔵文化財調査報告書172：宗玄寺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（編）北九州市芸術文化振興財団
- 惟村忠志 2004「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、pp.16-46
- 九州大学医学部解剖学第二講座（編）1988『日本民族・文化の生成2』九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版
- 松村博文・西本豊弘 1996「中妻貝塚出土多数合葬人骨の歯冠計測値にもとづく血縁関係」『動物考古学』第6巻、pp.1-17
- 最上孝敬（編）1979『葬送墓制集成 第4巻 墓の習俗』名著出版
- 中井歩・福永将大・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・早川和香子・藤井恵美・舟橋京子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之 2015「自然科学分析—古野遺跡第2次調査出土人骨について—」大野城市教育委員会（編）『乙金地区遺跡群—乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書12—』大野城市文化財調査報告書第123集、pp.53-90

- 中村文 2011「江戸時代の女性の喫煙の諸相」 館かおる（編）『女性とたばこの文化誌』世織書房、pp.83-110
- 中山なな 2014「近世江戸における子どもの墓制」 早稲田大学考古学会（編）『古代』136 早稲田大学考古学会、pp.125-155
- 長島淳子 2006『幕藩制社会のジェンダー構造』校倉書房
- 長島淳子 2017「江戸時代における農村女性の労働生活とジェンダー」『農業および園芸』92-7、pp.572-577
- 西木浩一 1999「江戸の葬送墓制」 東京都公文書館（編）『都史紀要』37 東京都、pp.1-123
- 西木浩一 2004「都市下層民衆の墓制をめぐる」 江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、pp.179-200
- 尾形裕康 1953「近世の元服と教育 庶民層を中心として」 日本教育学会（編）『教育学研究』20巻1号 日本教育学会、pp.60-73
- 岡美詠子・中橋孝博 1997『西新開遺跡－福岡県大川市所在遺跡の発掘調査報告書－』大川市文化財調査報告書4 大川市教育委員会（編）、大川市教育委員会
- 大竹秀男 1981「近世庶民家族秩序論再説－非家父長制説に対する批判に答えて－」 神戸法學會（編）『神戸法學雑誌』第31巻第2号 神戸法學會、pp.151-180
- 斎藤忠 1978「北首西顔」『日本史小百科4 墳墓』近藤出版、pp.64-65
- 新宿区發昌寺遺跡調査会（編）1991『發昌寺跡：公明新聞新刊建設工事に伴う発掘調査報告書』新宿区發昌寺跡遺跡調査会
- 新宿区厚生部遺跡調査会（編）1993『東京都新宿区圓應寺跡：新宿区立若葉高齢者在宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書』新宿区厚生部遺跡調査会
- 諏訪元・洪恒夫 2006『アフリカの骨、縄文の骨：遙かラミダスを望む』東京大学総合研究博物館
- 田中裕介 1996「Ⅳ 女狐近世墓地」 大分県教育委員会（編）『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群－九州横断自動車道（別府～大分間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 大分県教育委員会、pp.39-247
- 谷川章雄 2004「江戸の埋葬施設と副葬品」 江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、pp.224-250
- 谷口俊治 1994『北九州市埋蔵文化財調査報告書146：京町遺跡 西楽寺および町屋の調査』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（編）北九州市芸術文化振興財団
- 谷直子（編）2025『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡－HZK1801・2006・2007地点出土人骨編－』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室
- 田代郁夫 1993「鎌倉の「やぐら」：中世葬送・墓制史上における位置付け」 石井進・萩原三雄（編）『中世社会と墳墓：考古学と中世研究3』名著出版、pp.63-90
- 時津裕子 2000「近世墓にみる階層性：筑前秋月城下の事例から」 日本考古学協会（編）『日本考古学』第9号 吉川弘文館、pp.97-122
- 山口信義・木太久守・佐藤浩司 1991『北九州市埋蔵文化財報告書100：上清水遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（編）北九州市芸術文化振興財団
- 米元史織・足達悠希・松尾樹志郎・植野律子・Bai Yang・Stephen Nguyen・小高蒼大・田渕朱莉・松村祐奈・舟橋京子 2022「瑞穂遺跡第7・8次調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」 大野城市教育委員会（編）『大野城市文化財調査報告書200：瑞穂遺跡』大野城市教育委員会、pp.184-204
- 米元史織・足達悠希・松尾樹志郎・星野宙也・出見優人・植野律子・Bai Yang・Stephen Nguyen・James Loftus III・日高風海斗・森春奈・小高蒼大・吉村篤也・田渕朱莉・松村祐奈・舟橋京子 2024「箱崎遺跡（HZK1801地点）調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」 谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡－HZK1801・2006・2007地点出土人骨編－』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室、pp.1-54
- 米元史織・舟橋京子 2024「箱崎遺跡（HZK200 7 地点）調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」 谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡－HZK1801・2006・2007地点出土人骨編－』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室、pp.69-128

Ⅷ 箱崎遺跡出土人骨の研究

米元史織¹⁾

1：九州大学総合研究博物館

1. はじめに

福岡県福岡市東区箱崎遺跡（HZK）は2018年度に HZK1801地点が、2020年度に HZK2006地点・HZK2007地点が九州大学埋蔵文化財調査室によって発掘調査され、近世・近代に属する人骨が多数出土した。HZK1801地点および HZK2006地点、HZK2007地点から出土した古人骨資料に関する形質的特徴については先の報告において行っている（九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集）。

本研究では、箱崎遺跡から出土した人骨をまとめ、年齢・性別構成、頭蓋形質、筋骨格ストレスマーカー、ハリス線の検討を行った。各検討項目の背景や方法、対象資料については各節において詳述する。統計解析は IBM 社の統計パッケージ SPSS Statistics 及び Categories を用いた。

2. 性別・年齢構成

まずは箱崎遺跡出土人骨（HZK2007地点・HZK1801地点）の年齢と性別構成を示す。人骨の年齢推定は、恥骨結合面は Todd（1920）を、耳状面は Lovejoy（1985）、咬耗は 栃原（1957）を用い、性判定には、骨盤は Buikstra and Ubelaker（1994）を基準に、恥骨下角の角度・大坐骨切痕の角度・前耳状溝の有無、また Phenice（1969）の腹側弧、恥骨下陥凹、恥骨下枝内側面隆起に基づいて判定を行った。頭蓋は Buikstra and Ubelaker（1994）を基準に、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起で判定を行った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成 2』（九州大学医学部解剖学第二講座編 1988）記載の区分に従い、乳児 0－1 歳、幼児 1－6 歳、小児 6－12 歳、若年 12－20 歳、成年 20－40 歳、熟年 40－60 歳、老年 60 歳以上、成人は 20 歳以上（詳細は不明）とする。

箱崎遺跡出土人骨の年齢・性別の構成を第 1 表に示す。年齢構成については熟年以上老年が最も多く、未成人は全体の 8 % 程度と少ない。平本（2001）によると江戸市中の天徳寺遺跡（港区）の新生児～青年期（若年）は全体の 28.7%（54／188 体）を、一橋高校遺跡（千代田区）では 61%（61／100 体）

第 1 表 箱崎遺跡出土人骨の年齢・性別構成

HZK 全体	男女および性別不明個体含む		男性		女性	
熟年以上老年※	41	17%	25	45%	13	35%
熟年	25	10%	11	20%	7	19%
成年	36	15%	8	15%	13	35%
成人	49	20%	10	18%	3	8%
若年	4	2%	1	2%	1	3%
乳幼児小児	14	6%				
不明	73	30%				
総数	242		55		37	

※熟年か老年か判別できない個体を含めている。

と極めて高い割合を占める。また八丁堀三丁目遺跡では土壙墓162基から出土した239体の人骨のうち77%が未成人であった（梶ヶ山ほか 2003）。天徳寺のような寺格が高い墓域において未成人の比率はやや低いが、早桶が多数を占めるような墓域においては未成人の比率の高さが指摘され、階層によって死亡年齢の構成に差があることが指摘されている。さらに、中山（2017）によると、江戸市中全体で17世紀には609体のうち、419体が子ども（15歳以下）、18世紀以降は398体のうち、99体が子どもであるとされている。未成人の構成率に関して著しい時期差が検出されており、この点については明確な説明はないが、いずれにしても箱崎遺跡出土人骨の年齢構成における、未成人8%ははるかに低い。一方、筑紫野市の原田遺跡では、男性66体、女性54体、性別不明49体、そのうち未成人は29体（17.2%）、成年23体（13.7%）、熟年65体（38.5%）、老年21体（12.4%）であった。中橋・土肥（2006）は未成人の比率について不自然に低く、とくに乳幼児死亡率が5%に満たない状況は通常の死亡状況とは考え難く（鬼頭 1983）、何らかの社会的、人為的な要因が作用した可能性が高いと述べている。箱崎遺跡においても未成人の死亡率が極めて低かったことを反映しているというよりむしろ未成人の墓域の分離や改葬、墓地移転などの影響が示唆される。

福岡の都市部の博多遺跡（蓮田ほか 2025）は、残存状態の良い人骨60体（残存状態が良好ではなく検討対象外とした個体は229体）のみを母数としたものであるが、未成人は4体（7%）、成年7体（12%）、成年後半～熟年が3体（5%）、熟年13体（22%）、老年9体（15%）、不明4体（7%）、成人が20体（33%）、男女比は男性19体、女性15体、不明26体である。熟年以上の高齢個体が占める割合が多いという点は箱崎遺跡だけでなく原田遺跡や博多遺跡と共通しており、江戸という都市の年齢構造とはやや異なる。周辺からの単身労働力の流入が多くあった江戸との違いが大きいと考えられる。加えて近世の福岡藩内において平均寿命が延びている可能性も示唆される。浜野（2011）によると福岡は1721年から1846年にかけて人口がわずかに増加（0～5%）しており、これは比較的温暖で植物の生育に有効な気温の期間が長い地域ほど人口が増えやすかったことを示すとされている。乳幼児死亡率との関係が不明瞭であるため実態を明らかにすることはできないが、箱崎遺跡や原田遺跡、博多遺跡の被葬者における熟年から老年個体の多さから平均寿命が長くなっていた可能性を考えることもできよう。

性比に関しては江戸市中の遺跡では一橋高校遺跡で男性3：女性1、圓應寺（新宿区）B区では8：1、天徳寺遺跡では1.4：1である（平本 2001）。江戸市中に関しては単身労働力を周辺の地域から取り込んで発展したという都市としての発展過程と社会事情を反映しており、特に庶民が多く埋葬される寺院において性比の偏りが激しい。天徳寺という寺格が高い寺院において被葬者の性別構成が1：1に近くなるのは階層的に上位の人々の家族としての安定性を示すと考えられている。一方で福岡においては、古野遺跡は1：1に近く、原口遺跡は2：1、博多遺跡、瑞穂遺跡や原田遺跡もほぼ1：1に近い。判別可能な個体に関してはあるが箱崎は1.5：1であり、周辺遺跡と同様の傾向である（第1表）。江戸時代において、関東と近畿では明らかに都市化の影響として農村から都市への人口流入があったと指摘され、江戸では世帯の6割以上が借家層で生活が不安定な低賃金の都市労働者であったと言われている（鬼頭 2007）が、博多など福岡藩内の各地は江戸や京都・大阪ほど極端な都市化の影響を受けていない地域であり、性比についてもそのような状況を示すものといえる。

3. 頭蓋骨の形質的特徴

箱崎遺跡（HZK2007地点・HZK1801地点）出土人骨の頭蓋骨各計測項目の基礎統計量および比較

対象資料の基礎統計量に関しては第2表（男性）、第3表（女性）に示す。近世江戸時代に関しては鈴木尚（1985a,b）以来、大名家や将軍など名前のわかる個人を中心に研究が進められ、寛永寺谷中徳川霊園裏方墓所で調査された徳川将軍親族遺体の形態学的研究において「典型的貴族形質」の特徴が示されている（馬場・坂上 2012）。近年、さらに庶民層と中流程度の武士層の形質の違いが明らかにされるなど、階層と形質の関連を中心に研究が展開している（Sakaue 2012）。米元ほか（2024）、米元・舟橋（2024）において HZK1801地点・HZK2007地点の頭蓋形質の検討を行った結果、HZK1801地点・HZK2007地点出土人骨の大半は馬場・坂上（2012）で示されたようないわゆる貴族的な形質は示さないことが明らかになった。また、男性・女性ともに HZK1801地点と HZK2007地点の頭蓋形質の傾向は類似しており、福岡県内の各集団や江戸市中庶民層と共通し、集団の平均値としては、顔高の値も大きい、脳頭蓋の形態（長頭寄り）や眼窩のサイズが小さいという点で江戸時代の上位武士層とは明確に異なる傾向を示すことを指摘した（米元・舟橋 2024）。

この貴族形質以外にも、近世から現代にかけて都市化と関連すると推定される短頭化現象が指摘されている（Kouchi 1983；中橋 1987）。これは畿内が最も強く、この地域を中心として同心円状に生じたと指摘されている（Kouchi 1983）。その一方で、九州では天福寺集団（中橋 1987）や原田集団（中橋・土肥 2006）や開善寺集団（松下 2005）など長頭傾向にあることが指摘されている（中橋 1987）。蓮田ほか（2025）において、博多の寺院から出土した古人骨に関しても同様に、長頭傾向が指摘されており、HZK1801地点および HZK2007地点においても同様の傾向が明らかとなった（米元・舟橋 2024）。おそらく北部九州全体に共通する傾向であろうと考えられる。中橋（1987）は、近世人骨のみならず、近年の現代人骨の研究（現代日本人頭骨研究班 1983）でも、北部九州の人々が最も長頭に傾いていることを指摘、この現代の地域性が江戸時代に由来する可能性があることを天福寺の研究で指摘している（中橋 1987）。しかし、この頭型の地域差がいつ頃生じたのか、未だにわからないことは多い。そこで、本研究では箱崎遺跡出土人骨の頭蓋形質の再整理を行う。本稿では、HZK1801地点と HZK2007地点の頭蓋形質に大きな違いがないことを踏まえて、箱崎遺跡としてまとめて比較を行う。

比較対象として、江戸時代の福岡県内の各集団および馬場・坂上（2012）で対象とされた徳川家などの将軍・大名家、大分県竹田市の城下町の墓地である稲荷谷遺跡から出土した近世武家の人骨を用いる。稲荷谷遺跡の被葬者は畿内からの移住者の子孫と指摘されており（岡崎ほか 2004）、それが強い短頭・高狭顔傾向の要因として説明されている。また、短頭傾向についても検討するために縄文時代の津雲・吉胡、弥生時代の北部九州・山口地域、西北九州地域、古墳時代の九州地域の人々も含めて検討を行った。

まずは単変量での比較を行った。第1図は横軸に頭長幅示数を、縦軸に頭長高示数を示している。横軸は80を超えると短頭、75以下が長頭であり、縦軸は70以下が低頭、75以上が高頭である。箱崎遺跡の男性は頭長幅示数は長頭、頭長高示数では中頭であることがわかる。頭長高示数については明瞭な傾向はないが、頭長幅示数については江戸時代の将軍家など身分の高い集団と畿内現代人は短頭を示し、一方で福岡県から出土した近世人骨や江戸市中の町人層（早桶）の人々は中頭から長頭傾向を示すことがわかる。縄文時代の諸集団や弥生時代の諸集団、古墳時代の諸集団には地域的な傾向がなく、低顔の津雲・吉胡も高顔の北部九州弥生時代集団も中頭であり、古墳時代はえびの盆地のみ長頭、西諸県は短頭と近接した地域にもかかわらず頭型が大きく異なるが、それ以外は概ね縄文・弥生と同様で地域的な差は不明瞭である。一方で、中世はこれまで指摘されてきたように（中橋 1987ほか）どの地域も長頭性が強まる。江戸時代のみ階層によって頭型に差があるのである。資料に偏りはある

第2表 頭蓋骨計測値の比較（男性）（単位はmm）

Martin No.	箱崎 HZK2007・1801			江戸市中武士層 ¹⁾ (寛政) ¹⁾ (近世)		江戸市中庶民層 ¹⁾ (享和) ¹⁾ (近世)		原田 ²⁾ (近世)		開善寺 ³⁾ (近世)		稲荷谷 ⁴⁾ (近世)		天福寺 ⁵⁾ (近世)		宗玄寺 ⁶⁾ (近世)		京町 ⁷⁾ (近世)		牧野家 ¹⁰⁾ (近世)		将軍家 ¹¹⁾ (近世)		博多遺跡 ¹²⁾	
	N	M	S.D	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 最大長	19	187.58	5.34	50	177.4	131	181.5	25	185.3	6	185.2	14	175.4	38	182.6	36	180.8	37	180.3	9	174.8	6	183.5	7	183.2
8 最大幅	19	138.16	4.26	50	141.3	131	138.5	26	135.9	4	138.8	15	142.4	38	138.6	44	135.2	30	135.2	8	141.5	6	145.67	10	138.4
17 バジオン・プレグマ高	14	139.57	5.30	50	138.0	131	136.2	20	138.4	1	143.0	8	138.9	33	139.2	31	136.9	14	136.9	9	137.7	6	141.33	6	143.4
8/1 頭長幅示数	17	73.45	2.66	50	80.0	131	76.0	25	73.6	4	75.2	14	80.7	37	76.0	35	78.3	23	74.6	8	81.3	6	79.467	6	75.6
17/1 頭長高示数	13	74.24	2.31	50	78.0	131	75.0	19	75.0	1	75.7	8	79.7	33	76.2	26	75.1	11	75.7	9	78.8	6	75.767	5	78.3
17/8 頭幅高示数	14	102.10	3.50	50	98.0	131	98.0	19	101.0	-	-	8	96.9	33	100.8	29	96.9	12	101.8	8	97.6	6	97.05	5	103.6
45 頬骨弓幅	16	135.38	3.79	50	133.1	131	134.9	19	136.1	3	136.3	8	137.4	25	136.4	18	135.9	2	135.0	7	129.3	6	131.33	6	130.8
46 中顔幅	19	101.79	5.61	50	97.3	131	99.9	18	99.5	4	98.3	7	97.7	24	101.8	31	99.0	24	98.1	8	93.0	3	90	7	102.0
47 顔高	14	125.64	9.01	-	-	-	-	11	121.6	1	133.0	6	128.0	14	126.9	18	128.9	14	125.0	5	125.4	5	138.2	1	126.0
48 上顔高	15	75.10	6.71	50	73.7	131	72.2	17	72.8	3	71.0	7	75.6	18	74.5	17	73.3	19	70.3	5	73.0	6	79.833	5	72.0
47/45 顔示数 (K)	12	92.78	8.11	-	-	-	-	10	89.6	-	-	6	93.9	13	93.2	10	93.3	1	93.3	5	96.9	5	102.62	1	96.3
47/46 顔示数 (V)	14	122.67	9.80	-	-	-	-	9	122.5	-	-	6	131.1	13	123.9	17	130.1	8	127.1	5	132.3	2	150.3	1	125.2
48/45 上顔示数 (K)	14	55.46	6.02	50	55.0	131	54.0	14	53.3	2	51.4	6	56.1	17	54.4	8	54.4	2	52.6	5	56.4	6	61.117	1	55.0
48/46 上顔示数 (V)	14	74.31	7.00	50	76.0	131	72.0	11	73.4	2	72.4	6	78.3	17	73.1	16	73.5	12	70.2	5	77.0	3	87.8	3	71.6
51 眼窩幅	15	42.40	1.50	50	43.4	131	43.3	24	42.2	4	43.0	8	44.6	24	42.6	29	43.7	29	42.7	9	44.3	6	44.667	7	39.7
52 眼窩高	15	33.07	2.09	50	35.6	131	34.1	24	35.0	2	35.5	8	36.9	24	34.1	34	36.1	32	35.0	9	37.8	6	38.333	7	35.3
52/51 (L) 眼窩示数	15	78.08	5.67	50	82.0	131	79.0	24	83.0	1	78.7	8	82.7	24	80.9	29	83.1	26	81.2	9	85.3	6	86.867	7	88.8
54 鼻幅	18	25.50	2.60	50	24.5	131	25.6	23	25.6	2	23.5	7	26.1	24	26.5	28	25.4	32	25.5	9	22.9	6	24	7	25.9
55 鼻高	18	53.11	3.97	50	53.6	131	52.3	25	51.2	3	56.7	7	54.4	24	52.9	31	55.5	32	52.4	9	54.3	6	58.667	6	55.2
54/55 鼻示数	18	48.18	5.32	50	46.0	131	48.9	23	50.0	2	40.8	7	48.1	24	50.1	28	45.9	28	49.2	9	42.2	6	40.833	5	47.0
M50 前眼窩間幅	15	17.53	2.39	50	16.9	131	16.9	22	19.1	4	18.0	6	16.7	-	-	27	17.7	-	-	9	15.6	3	14.667	3	20.0
F 鼻根横弧長	15	23.53	2.80	-	-	-	-	22	21.9	4	22.0	6	19.5	-	-	-	-	-	-	-	-	3	19	6	20.4
50/F 鼻根湾曲示数	15	74.74	7.85	-	-	-	-	22	87.3	4	81.6	6	85.2	-	-	-	-	-	-	-	-	3	77.367	3	98.0
M57 鼻骨最小幅	15	6.93	2.15	50	7.2	131	7.3	26	8.2	4	8.3	6	8.6	-	-	29	7.4	-	-	9	6.2	-	-	6	7.0

1) Sakau (2012)、2) 中橋・土肥 (2006)、3) 松下 (2005)、4) 岡崎ほか (2004)、5) 中橋 (1987)、6) 松下 (1995)、7) 松下 (1993)、10) 加藤 (1991)、11) 馬場・坂上 (2012)、12) 蓮田など (2025)

Martin No.	山口地方 ¹⁸⁾ (弥生)		北部九州13) ¹⁾ (弥生)		佐賀 ¹⁹⁾ (弥生)		大友 ¹⁹⁾ (弥生)		西北九州 ¹⁹⁾ (弥生)		津雲・吉胡 ¹⁹⁾ (縄文)		福岡平野 三田地域 ¹⁹⁾ (古墳)		遠賀川流域 ¹⁹⁾ (古墳)		筑後 ¹⁹⁾ (古墳)		京都平野 ¹⁹⁾ (古墳)		中津平野 ¹⁹⁾ (古墳)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 最大長	61	182.9	118	183.7	26	183.0	24	183.7	21	182.8	60	184.2	9	184.9	11	183.1	9	180.6	17	180.1	9	182.0
8 最大幅	66	142	117	142.4	22	143.6	24	143.3	20	144.9	62	144.9	9	143.0	13	139.5	9	144.3	22	141.5	9	140.3
17 バジオン・プレグマ高	45	135.2	101	137.7	14	137.5	20	135.6	15	134.6	26	135.5	7	137.6	9	135.1	7	136.6	14	134.1	6	136.0
8/1 頭長幅示数	59	77.8	104	77.7	21	78.3	21	77.9	20	79.1	55	78.7	7	77.7	10	76.1	8	78.6	17	78.1	9	77.2
17/1 頭長高示数	43	74.3	91	75.3	14	75.1	16	74.5	15	74.1	25	73.3	6	73.6	8	73.5	7	75.3	11	74.1	6	74.7
17/8 頭幅高示数	45	94.8	91	97.0	13	95.4	18	94.4	14	93.1	26	93.6	7	95.3	8	96.7	7	96.9	14	95.7	6	96.1
45 頬骨弓幅	44	139.2	103	140.0	14	138.4	9	140.7	12	138.4	16	141.0	9	140.1	9	140.1	5	139.8	12	136.7	5	137.8
46 中顔幅	46	104.2	114	104.7	24	105.2	24	101.8	17	105.0	31	103.8	12	106.0	10	105.3	8	105.4	20	104.1	6	104.7
47 顔高	27	121.4	80	123.8	5	126.6	18	118.7	14	117.1	25	115.7	7	121.1	5	119.2	5	119.0	9	121.6	3	122.3
48 上顔高	38	72.7	114	74.8	23	73.9	16	66.6	17	68.1	28	66.3	12	71.6	9	71.9	8	72.9	18	71.7	6	71.7
47/45 顔示数 (K)	24	86.8	71	88.4	4	88.6	7	83.9	12	84.6	10	80.4	6	84.9	4	84.6	4	83.7	6	90.2	3	89.9
47/46 顔示数 (V)	27	115.4	74	118.4	5	118.6	17	116.6	14	111.8	18	110.4	7	112.3	4	113.7	5	112.9	9	115.5	3	118.3
48/45 上顔示数 (K)	34	52.1	95	53.3	13	53.3	7	47.6	12	49.3	10	47.0	10	51.0	7	50.8	5	51.7	10	53.5	5	52.1
48/46 上顔示数 (V)	37	69.4	105	71.5	22	70.5	15	64.5	17	64.8	22	63.1	12	67.6	8	68.3	8	69.3	18	69.0	6	68.5
51 眼窩幅	39	43.6	89	43.2	20	43.8	23	44.0	15	43.1	40	43.2	12	43.1	11	44.5	9	43.9	21	42.6	6	42.3
52 眼窩高	41	34.6	93	34.5	20	34.5	24	33.5	15	32.8	38	33.2	12	34.3	12	33.9	9	34.0	21	33.8	6	33.7
5 2 / 5 1 (L) 眼窩示数	38	79.4	86	79.9	20	79.0	22	76.5	15	76.2	32	77.5	12	79.7	11	76.4	9	77.5	21	79.4	6	79.6
54 鼻幅	43	26.9	117	27.1	20	27.0	25	27.4	16	27.7	36	26.5	12	26.5	9	26.6	9	26.6	18	26.1	6	27.0
55 鼻高	42	52.8	116	52.8	21	52.2	23	50.7	16	51.0	30	48.1	12	51.2	9	52.3	9	52.3	19	50.9	6	50.5
54/55 鼻示数	41	51.1	113	51.4	19	51.5	22	54.5	16	54.4	27	54.7	12	51.9	9	50.9	9	50.9	18	51.3	6	53.6

13) 中橋・永井1989 14) Doi and Tanaka1987、15) 松下1981、16) 内藤1971、17) 清野・宮本 (1926)、金高 (1928) 18) 高橋・米元2023

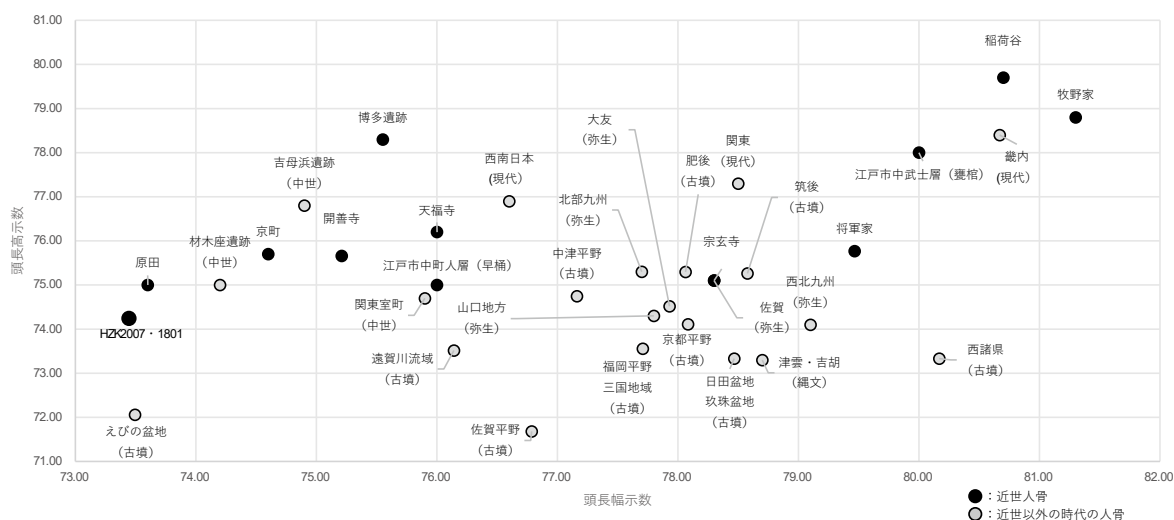
Martin No.		日田盆地 玖珠盆地 ¹⁹⁾ (古墳)		佐賀平野 ¹⁹⁾ (古墳)		肥後 ¹⁹⁾ (古墳)		西諸県 ¹⁹⁾ (古墳)		えびの盆地 ¹⁹⁾ (古墳)		関東室町 ¹⁹⁾ (中世)		材木座遺跡 ¹⁹⁾ (中世)		吉母浜遺跡21) (中世)		畿内 ²²⁾ (現代)		西南日本 ²³⁾ (現代)		関東 ¹⁹⁾ (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大長	11	181.9	4	184.5	10	182.5	7	182.7	24	176.1	67	183.6	170	184.2	16	181.8	37	177.3	108	181.4	143	178.9
8	最大幅	12	141.1	3	140.7	9	143.7	11	143.9	25	136.9	66	138.7	164	136.5	17	136.2	37	142.9	108	139.3	143	140.3
17	バジオン・プレグマ高	12	134.6	5	131.6	11	136.0	12	134.8	31	133.5	49	136.6	96	137.2	17	139.4	37	139.1	108	139.3	143	138.1
8/1	頭長幅示数	9	78.5	2	76.8	7	78.1	5	80.2	17	73.5	61	75.9	164	74.2	16	74.9	37	80.7	108	76.6	143	78.5
17/1	頭長高示数	9	73.3	4	71.7	9	75.3	9	73.3	18	72.1	48	74.7	94	75.0	16	76.8	37	78.4	108	76.9	143	77.3
17/8	頭幅高示数	9	95.5	3	93.4	8	95.2	8	96.1	23	93.9	49	97.9	93	99.8	17	102.5	37	97.5	108	100.1	143	98.6
45	頬骨弓幅	12	136.9	5	139.4	8	138.5	18	137.9	24	133.9	38	136.2	96	134.8	18	135.2	32	133.5	106	134.5	144	132.9
46	中顔幅	18	101.4	8	103.9	11	103.2	22	102.1	29	99.0	46	101.6	107	101.8	19	100.3	32	97.2	107	99.9	143	98.6
47	顔高	12	117.9	4	120.5	10	116.0	13	113.8	25	113.8	8	118.3	48	115.8	11	117.3	-	-	66	122.2	142	123.8
48	上顔高	19	69.0	5	71.4	10	67.4	21	64.4	28	66.4	44	68.7	119	64.7	15	69.8	30	69.9	92	71.8	144	70.7
47/45	顔示数 (K)	9	84.5	2	86.0	6	84.9	8	81.8	20	81.3	5	87.5	37	86.1	11	86.4	-	-	64	91.4	142	93.1
47/46	顔示数 (V)	11	114.3	4	117.0	9	113.7	12	110.6	22	111.6	7	115.3	43	113.9	15	116.5	-	-	65	122.2	141	125.4
48/45	上顔示数 (K)	12	50.3	4	52.5	7	48.7	13	46.2	22	47.6	34	50.7	87	49.6	11	51.7	27	52.3	90	53.5	144	53.3
48/46	上顔示数 (V)	18	68.1	4	70.3	9	65.6	17	62.3	25	65.1	41	67.7	97	65.6	15	69.9	28	72.1	91	71.8	143	71.8
51	眼窩幅	20	41.8	6	45.0	10	42.9	21	43.0	31	41.0	47	43.2	111	43.1	18	42.0	37	41.8	108	43.0	142	42.7
52	眼窩高	20	32.8	6	34.0	9	33.0	24	32.9	30	32.6	46	34.3	99	33.7	18	34.4	37	35.1	108	34.4	144	34.3
5 2 / 5 1 (L)	眼窩示数	20	78.4	6	75.7	9	76.7	21	76.8	30	77.2	46	79.3	96	78.2	18	82.1	37	84.0	108	80.2	142	80.4
54	鼻幅	18	25.6	8	27.1	10	26.3	26	26.8	25	26.3	51	26.2	122	26.6	17	26.0	37	25.0	108	25.9	144	25.0
55	鼻高	20	50.6	9	50.6	12	50.1	26	49.6	27	48.4	48	51.7	121	51.1	16	51.4	37	53.4	108	52.2	143	52.0
54/55	鼻示数	18	51.4	8	54.3	10	52.3	24	54.5	24	52.9	48	51.4	96	52.1	16	50.5	37	47.0	108	49.8	143	48.4

第3表 頭蓋骨計測値の比較（女性）（単位はmm）

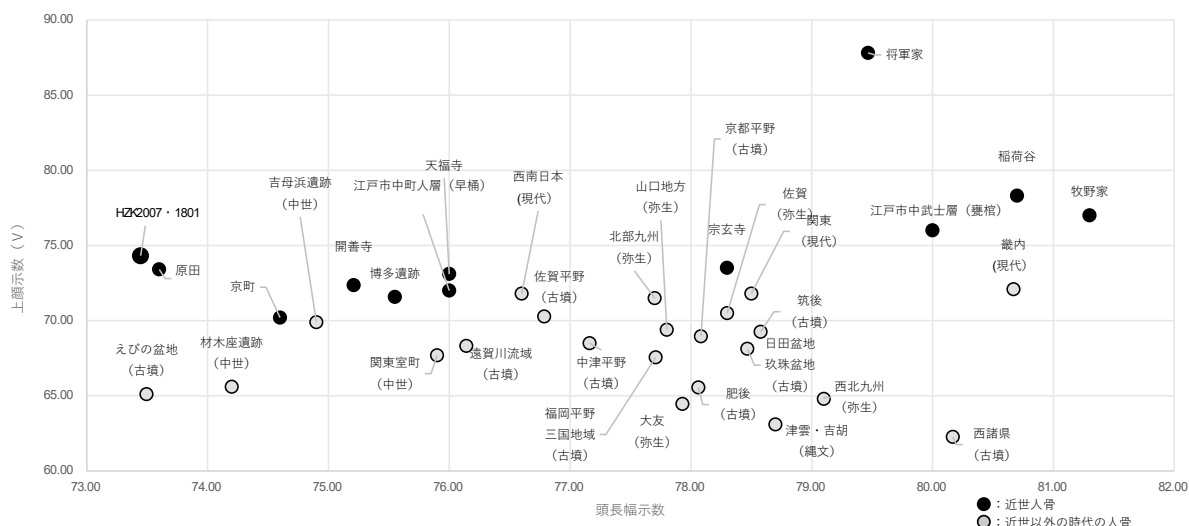
Martin No.	HZK2007・1801			寛永寺正室 ⁽¹⁾		寛永寺側室 ⁽¹⁾		増上寺正室 ⁽¹⁾		増上寺側室 ⁽¹⁾		博多 ⁽²⁾		江戸市中武士層 (墓棺) ⁽³⁾		江戸市中庶民層 (早稲) ⁽⁴⁾		原田 ⁽⁵⁾ (近世)		開善寺 ⁽⁶⁾	
	N	M	SD	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 最大長	7	176.7	2.3	3.0	165.2	8.0	169.5	4.0	172.5	5.0	170.2	8	179.75	48	169.1	70	172.3	26	172.8	6.0	172.3
8 最大幅	7	134.0	4.7	3.0	138.9	8.0	137.1	4.0	142.5	5.0	137.8	8	134.5	48	135.3	70	133.2	26	131.1	5.0	136.2
17 バジオン・プレグマ高	4	131.3	2.9	3.0	130.5	8.0	133.4	4.0	132.8	5.0	137.8	6	139	48	132.0	70	130.6	23	131.3	2.0	132.0
8/1 頭長幅示数	7	75.8	2.5	3.0	84.0	8.0	80.9	4.0	82.7	5.0	81.1	8	74.8425	48	80.0	70	77.0	24	75.5	5.0	78.7
17/1 頭長高示数	4	74.4	2.5	3.0	79.0	8.0	78.9	4.0	77.0	5.0	81.1	6	76.4322	48	78.0	70	76.0	22	76.1	2.0	77.4
17/8 頭幅高示数	4	98.8	4.4	3.0	93.7	8.0	97.4	4.0	93.2	5.0	100.1	6	102.391	48	98.0	70	98.0	20	100.9	2.0	102.3
45 頬骨弓幅	3	123.0	1.0	3.0	118.3	8.0	122.6	4.0	118.5	5.0	126.8	3	128.333	48	123.8	70	125.0	19	123.7	2.0	126.5
46 中顔幅	4	91.3	1.7	3.0	87.5	8.0	89.8	4.0	86.5	5.0	92.2	4	95.75	48	92.2	70	93.3	19	94.5	2.0	90.0
47 顔高	2	109.0	5.7	2.0	115.5	8.0	118.6	4.0	118.5	5.0	118.6	-	-	-	-	-	-	13	112.2	1.0	115.0
48 上顔高	2	65.5	2.1	2.0	68.9	8.0	71.1	4.0	67.5	5.0	68.8	2	68.5	48	68.5	70	66.7	16	67.1	2.0	64.5
47/45 顔示数 (K)	2	88.2	4.1	2.0	96.3	8.0	96.2	4.0	102.1	5.0	93.6	-	-	-	-	-	-	10	92.0	1.0	95.8
47/46 顔示数 (V)	2	53.0	1.4	2.0	133.2	8.0	129.2	4.0	137.8	5.0	128.6	-	-	-	-	-	-	8	118.1	1.0	127.8
48/45 上顔示数 (K)	2	118.5	8.0	2.0	57.5	8.0	57.9	4.0	57.0	5.0	54.3	-	-	48	55.0	70	53.0	12	54.6	1.0	51.7
48/46 上顔示数 (V)	2	71.2	3.4	2.0	79.5	8.0	77.8	4.0	78.0	5.0	74.6	1	68.3	48	75.0	70	72.0	11	71.6	2	71.7
51 眼窩幅 (L)	4	39.5	2.6	3.0	39.0	8.0	40.1	4.0	40.3	5.0	40.6	4	39	48	41.2	70	40.8	19	40.4	2	40.5
52 眼窩高 (L)	4	32.8	1.0	3.0	35.0	8.0	35.0	4.0	37.3	5.0	36.2	4	34	48	34.6	70	33.3	17	33.9	3	33.7
52/51 (L) 眼窩示数	4	83.1	4.1	3.0	89.8	8.0	87.1	4.0	92.6	5.0	89.2	4	87.1795	48	84.0	70	82.0	17	84.2	2	81.5
54 鼻幅	3	26.3	2.5	3.0	23.4	8.0	24.7	4.0	25.4	5.0	24.4	7	25.1429	48	24.5	70	24.4	24	25.0	2	22.0
55 鼻高	3	47.7	0.6	3.0	48.3	8.0	50.1	4.0	51.8	5.0	51.6	4	49.5	48	49.4	70	48.5	25	47.2	2	49.0
54/55 鼻示数	3	55.2	5.2	3.0	48.4	8.0	49.4	4.0	49.2	5.0	47.0	4	50.5577	48	50.0	70	51.0	24	53.0	2	45.2
M50 前眼窩間幅	3	16.3	3.1	3.0	14.6	8.0	16.2	4.0	16.3	5.0	17.3	-	-	48	16.3	70	16.4	25	17.0	1	14.0
F 鼻根横弧長	3	20.3	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	19.1	1	17.0
50/F 鼻根湾曲示数	3	80.7	13.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	89.0	1	82.4
M57 鼻骨最小幅	4	6.8	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	48	7.8	70	7.0	25	7.5	-	-

Martin No.	稲荷谷 ⁽⁶⁾ (近世)		天福寺 ⁽⁷⁾ (近世)		牧野家 ⁽⁸⁾		北部九州 ⁽¹⁸⁾ (弥生)		土井ヶ浜 ⁽¹⁸⁾ (弥生)		西北九州 ⁽¹⁸⁾ (弥生)		津雲・吉胡 ⁽¹⁹⁾ (縄文)		福岡平野 三国地域 (古墳) ⁽¹⁶⁾		遠賀川流域 (古墳) ⁽¹⁶⁾		筑後 (古墳) ⁽¹⁶⁾		京都平野 (古墳) ⁽¹⁶⁾	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	14	164.1	38	174.7	3	167.0	86	177.0	32	176.0	15	178.1	46	176.1	9	173.9	6	171.7	4	174.3	14	177.6
8 頭蓋最大幅	15	135.8	38	133.5	4	133.8	84	138.4	32	138.1	15	139.3	49	141.5	8	137.0	8	135.1	3	136.7	16	138.7
17 Ba-Br 高	11	130.3	35	132.7	4	131.3	66	130.7	29	128.1	7	127.3	21	129.7	8	130.0	5	128.6	3	131.0	9	130.7
8/1 頭長幅示数	14	83.4	38	76.5	2	80.4	72	78.1	30	78.5	15	78.2	41	80.3	7	79.2	6	78.5	3	78.3	14	77.6
17/1 頭長高示数	11	79.5	35	76.1	2	77.7	62	74.1	28	72.8	7	71.2	20	73.6	5	73.7	5	75.3	3	74.3	7	74.2
17/8 頭幅高示数	11	96.5	35	99.4	3	98.0	56	94.9	29	92.8	7	92.5	20	91.9	5	95.4	5	95.5	2	97.1	9	93.6
45 頬骨弓幅	7	122.3	30	126.5	2	114.5	61	131.3	20	131.9	6	130.2	10	132.6	11	130.0	3	131.0	2	131.0	6	133.0
46 中顔幅	5	88.8	25	95.5	2	83.5	67	99.8	23	98.5	11	95.9	23	99.7	13	99.2	6	96.8	3	97.3	15	99.4
47 顔高	4	113.5	15	115.9	-	-	45	116.3	23	114.2	9	104.9	14	105.1	5	104.6	2	111.0	1	114.0	4	115.5
48 上顔高	5	66.2	22	68.8	1	67.0	66	70.1	22	68.3	12	60.9	17	62.0	13	64.2	5	67.5	2	67.5	13	67.5
47/45 顔示数 (K)	3	92.2	15	91.1	-	-	34	88.7	17	86.6	6	81.7	7	79.2	4	80.2	2	84.4	1	86.4	2	83.5
47/46 顔示数 (V)	3	127.6	15	120.9	-	-	39	116.7	21	115.9	9	109.5	13	106.8	5	105.1	2	114.1	1	117.5	4	113.4
48/45 上顔示数 (K)	5	53.6	22	54.3	-	-	49	53.7	17	51.8	6	47.6	7	48.0	11	49.3	3	51.4	2	51.5	5	51.7
48/46 上顔示数 (V)	5	74.5	22	71.8	-	-	57	70.2	21	69.3	11	63.5	14	62.3	13	64.8	5	70.1	2	69.6	13	68.0
51 眼窩幅 (左)	6	41.7	30	40.5	2	39.5	66	41.6	24	40.3	10	41.1	22	41.7	13	40.4	5	41.0	3	41.7	15	41.5
52 眼窩高 (左)	6	36.3	30	34.3	1	35.0	65	34.1	25	33.3	10	31.2	14	32.6	13	33.0	5	34.2	3	33.7	16	33.9
52/51 眼窩示数 (左)	6	87.2	29	84.8	1	89.7	62	82.0	24	82.6	10	75.9	13	78.0	12	81.6	5	83.5	3	80.9	15	81.5
54 鼻幅	7	25.9	26	25.3	1	24.0	72	26.6	20	26.0	12	26.6	27	25.4	11	24.9	5	24.6	3	26.3	13	25.5
55 鼻高	7	48.9	28	49.9	2	49.0	71	49.8	23	49.0	12	46.3	21	44.9	12	47.7	5	48.8	2	49.0	12	48.6
54/55 鼻示数	7	52.9	26	51.0	1	48.0	69	53.5	30	53.0	12	57.4	20	56.1	11	52.6	4	50.4	2	55.2	12	52.7
50 前眼窩間幅	7	16.3	-	-	2	14.0	73	18.3	16	19.1	9	17.4	23	18.3	-	-	-	-	-	-	-	-
F 鼻根横弧長	7	18.5	-	-	-	-	70	20.2	16	21.1	-	-	10	22.1	-	-	-	-	-	-	-	-
50/F 鼻根湾曲示数	7	88.9	-	-	-	-	70	90.5	16	90.8	-	-	10	80.9	-	-	-	-	-	-	-	-
57 鼻根最小幅	5	7.7	-	-	-	-	74	8.2	15	8.3	8	11.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Martin No.	中津平野 (古墳) 18)		玖珠盆地 日田盆地 (古墳) 18)		佐賀平野 (古墳) 18)		肥後 (古墳) 18)		西諸県地域 (古墳) 18)		えびの盆地 (古墳) 18)		吉母浜 (中世) 21)		西南日本 (23) (近代)		西南日本23) (現代)		関東24) (現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	4	178.3	7	179.6	3	175.7	5	171.4	4	176.5	23	175.1	26	176.4	57	172.8	42	172.8	82	170.8
8 頭蓋最大幅	2	132.5	12	137.7	1	136.0	5	138.0	3	142.7	21	138.0	26	132.0	57	134.0	42	133.8	82	135.9
17 Ba-Br 高	1	125.0	10	129.0	4	134.3	3	130.3	5	130.8	27	132.1	25	133.0	57	131.3	42	131.5	81	132.5
8/1 頭長幅示数	2	75.1	7	76.1	1	76.8	3	80.0	-	-	17	78.6	26	74.9	57	77.6	42	77.5	82	79.7
17/1 頭長高示数	1	70.2	6	71.8	2	73.0	3	75.1	3	73.6	19	76.0	25	75.4	57	76.0	42	76.2	81	77.7
17/8 頭幅高示数	1	95.4	9	93.5	1	92.6	2	97.8	1	89.7	19	96.2	25	100.7	57	98.0	42	98.4	81	97.7
45 頬骨弓幅	2	129.5	8	132.1	3	136.0	3	132.0	-	-	26	131.0	26	128.3	57	123.9	42	124.3	84	124.9
46 中顔幅	3	98.7	12	97.0	4	102.0	5	97.0	4	99.3	26	98.0	27	98.6	57	93.4	42	93.6	84	93.5
47 顔高	2	115.5	7	109.4	1	114.0	6	108.3	6	109.5	24	106.8	18	111.5	14	112.9	10	113.0	84	115.0
48 上顔高	3	62.7	12	64.6	3	69.7	6	63.5	7	61.4	33	63.2	19	66.5	55	68.2	48	68.6	83	67.1
47/45 顔示数 (K)	1	86.9	4	80.0	1	85.1	3	77.6	-	-	19	81.5	18	86.3	14	90.8	10	90.5	84	92.2
47/46 顔示数 (V)	2	113.8	7	111.6	1	123.9	5	110.1	3	106.9	20	109.5	18	111.5	14	119.0	10	118.3	84	123.3
48/45 上顔示数 (K)	1	52.5	7	47.5	1	49.3	2	43.6	-	-	24	48.4	22	51.6	55	55.0	40	55.1	83	53.8
48/46 上顔示数 (V)	2	63.9	11	66.9	2	70.7	4	65.0	3	60.9	25	64.6	22	66.5	55	72.9	40	73.2	83	72.0
51 眼窩幅 (左)	2	42.0	12	39.8	4	42.0	4	41.3	7	40.6	29	41.4	25	41.1	57	40.5	42	40.7	84	41.1
52 眼窩高 (左)	2	33.5	12	32.8	6	33.5	6	32.5	7	32.6	30	33.2	25	33.9	57	34.0	42	34.0	84	33.8
52/51 眼窩示数 (左)	2	79.8	12	82.4	4	80.5	4	78.3	7	80.4	29	80.1	26	82.7	57	83.9	42	83.7	84	82.4
54 鼻幅	2	27.0	10	25.8	4	25.3	6	26.5	8	26.4	35	25.7	25	25.9	57	25.0	42	25.2	84	24.5
55 鼻高	4	45.8	11	48.7	3	47.0	5	45.4	9	46.2	32	46.7	25	48.6	57	48.6	42	48.7	84	49.0
54/55 鼻示数	2	57.7	10	53.0	3	55.0	5	58.3	8	58.0	31	55.1	25	53.5	57	51.4	42	51.9	84	50.2
50/5 前眼窩間幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	17.8	57	16.8	57	16.8	84	17.4
F 鼻根横弧長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	19.8	57	19.3	57	19.6	-	-
50/F 鼻根湾曲示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	90.3	57	87.3	57	88.7	-	-
57 鼻根最小幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	7.7	57	7.0	57	8.6	84	7.1



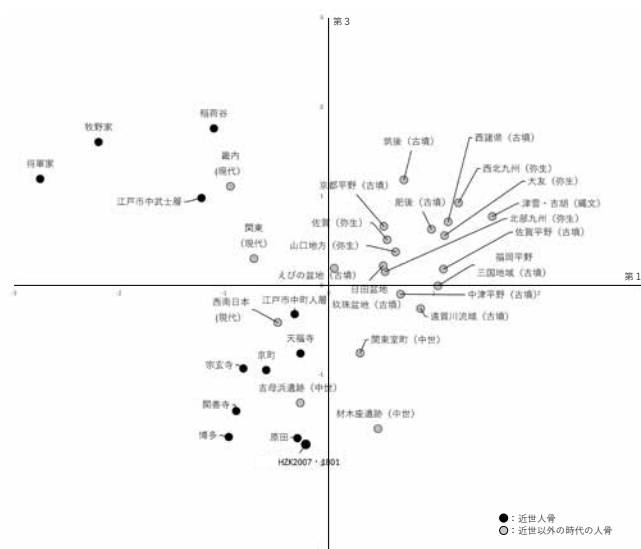
第1図 頭長幅示数／頭長高示数（男性）



第2図 頭長幅示数／上顔示数（男性）

が中世からおそらく全国的に長頭化し、江戸時代を通して一般庶民の間では頭型の変化が起こらずに長頭傾向を保つのに対して、武士層に属する人々が顔面部形質も含めていわゆる貴族的な形質へと変化した結果、短頭化していくことがわかる。

上顔示数（V）を縦軸に、頭長幅示数を横軸に示した図が第2図である。縦軸で85以上が過狭顔、75以上85以下が狭顔、65以上75以下が低顔、55以上65以下が過低顔である。津雲・吉胡（縄文）や西北九州（弥生）、大友（弥生）、西諸県（古墳）などのこれまでの研究で低顔と指摘されている集団は短頭に傾く中頭を示す。北部九州の弥生時代集団のような高顔性が指摘されている集団は上顔示数が70前後で頭型は中頭傾向を示している。しかし、江戸時代の短頭傾向を示す武士階級の諸集団は狭顔、將軍家は85以上の過狭顔を示し、高狭顔性と短頭化が極めて特徴的である。一方で、箱崎遺跡を含む福岡県出土近世人骨および江戸の早桶に埋葬された町人層は長頭であるという共通する特徴に加えて狭顔ではないという点で、武士階級の諸集団とは一線を画することができる。1集団ではあるが早桶に埋葬された人々、すなわち江戸市中の町人層も同じ傾向を示すことから、地域差というよりも階層に基づいてこのような形質の差が生じたと考えの方が現時点では蓋然性が高い。また、箱崎



第3図 頭蓋10項目主成分分析結果（男性）

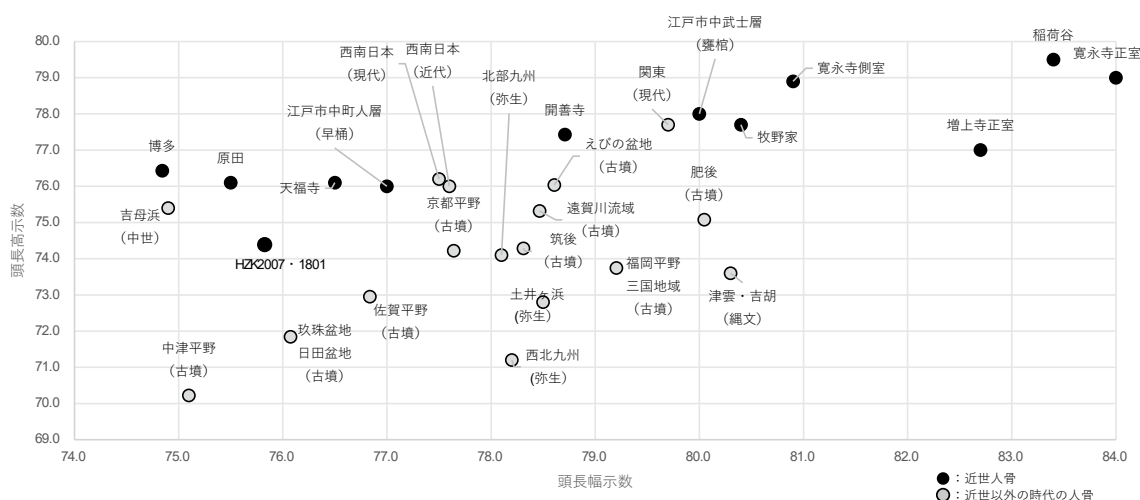
第4表 頭蓋10項目主成分負荷量（男性）

	1	2	3
最大長	0.44	0.53	-0.56
最大幅	0.23	0.37	0.81
バジオン・プレグマ高	-0.67	0.34	-0.35
頬骨弓幅	0.85	0.35	0.13
中顔幅	0.90	0.23	-0.12
上顔高	-0.58	0.70	0.07
眼窩幅	0.01	0.37	0.47
眼窩高	-0.84	0.26	0.18
鼻幅	0.84	0.11	0.00
鼻高	-0.79	0.48	-0.06
固有値	4.60	1.64	1.37
寄与率	46.03	16.40	13.74
累積寄与率	46.03	62.43	76.17

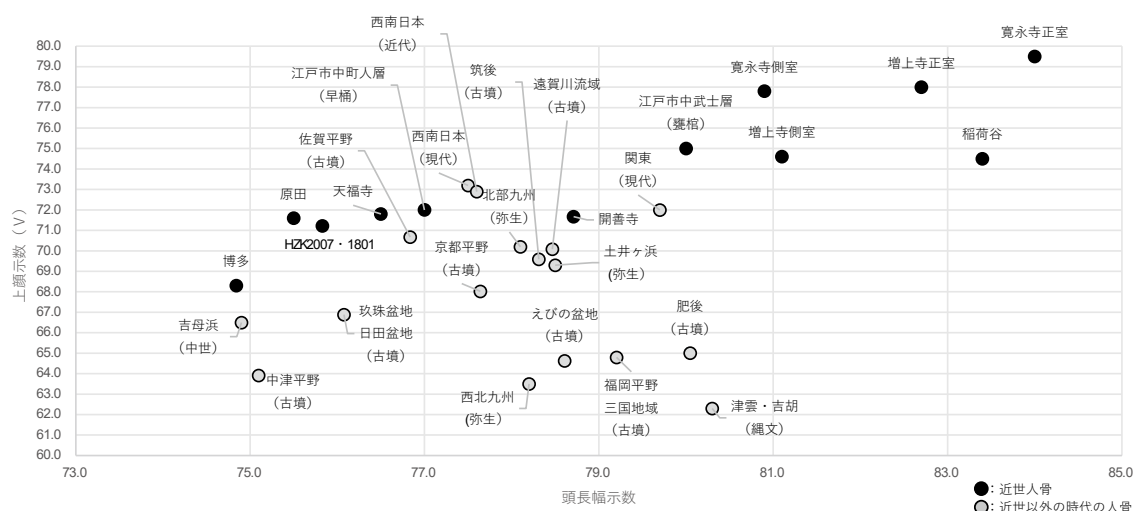
遺跡の男性の顔型は高顔傾向を示し（第2表）、江戸時代の集団で上顔高が70を下回る集団は存在しない。

次に頭蓋10項目（最大長、最大幅、バジオン・プレグマ高、頬骨弓幅、中顔幅、上顔高、眼窩幅、眼窩高、鼻幅、鼻高）で多変量解析を行った。男性の主成分負荷量を第4表に示す。第1主成分（X軸：固有値4.60、寄与率46.03%）は、バジオン・プレグマ高と上顔高、眼窩高、鼻高が負の相関を示し、脳頭蓋と顔面部の高径の値が大きいとマイナスの値が大きくなり、頭蓋最大長や最大幅、顔面部の諸幅径と正の相関を示すため、脳頭蓋の幅径や長径、顔面部の幅径の値が大きいとプラスの値を示す。第2主成分（固有値1.64、寄与率16.40%）は全項目で正の相関を示すため概してサイズファクターといえる。第3主成分（Y軸：固有値1.37、寄与率13.74%）は頭蓋最大長とバジオン・プレグマ高、中顔幅、鼻幅と鼻高と負の相関を示し、頭蓋最大幅、頬骨弓幅、上顔高、眼窩幅と眼窩高と正の相関を示すが、特に頭蓋最大長と頭蓋最大幅、バジオン・プレグマ高の相関が大きいことから脳頭蓋の形質を示し、長頭傾向が強いとマイナス、短頭傾向が強いとプラスの値を示すといえる。第1主成分を横軸に、第3主成分を縦軸にとり二次元展開した図が第3図である。顔面部の形質は、近世江戸は総じてマイナスの値を示す傾向にあり、高顔性が指摘されている弥生時代と比べてもその傾向は明瞭であるが、これは高径の値は大きく、幅径の値も小さいことと関連するだろう。脳頭蓋の形質に関しては単変量解析でも明らかになったように上位階層ほど短頭化傾向が強いことがわかる。

女性についても同様の検討を行った。まずは単変量で、第4図は横軸に頭長幅示数を、縦軸に頭長高示数を示している。男性と同様で横軸は80を超えると短頭、75以下が長頭であり、縦軸は70以下が低頭、75以上が高頭である。箱崎の女性は頭長高示数では中頭、頭長幅示数は中頭であることがわかる。頭長高示数について近世では箱崎の女性のみが中頭に属し他は高頭である。頭長幅示数については江戸時代の将軍家など身分の高い集団と畿内現代人は短頭傾向を示し、一方で福岡県から出土した近世人骨や江戸市中の町人層（早桶）の人々は中頭から長頭傾向を示すことがわかる。この点は男性と同じである。縄文時代の諸集団や弥生時代の諸集団、古墳時代の諸集団には地域的な傾向がなく、低顔の津雲・吉胡も高顔の北部九州弥生時代集団も中頭であり、古墳時代においても概ね縄文・弥生と同様で地域的な差は不明瞭である。しかし、これまで指摘されてきたように（中橋・永井 1985な



第4図 頭長幅示数／頭長高示数（女性）

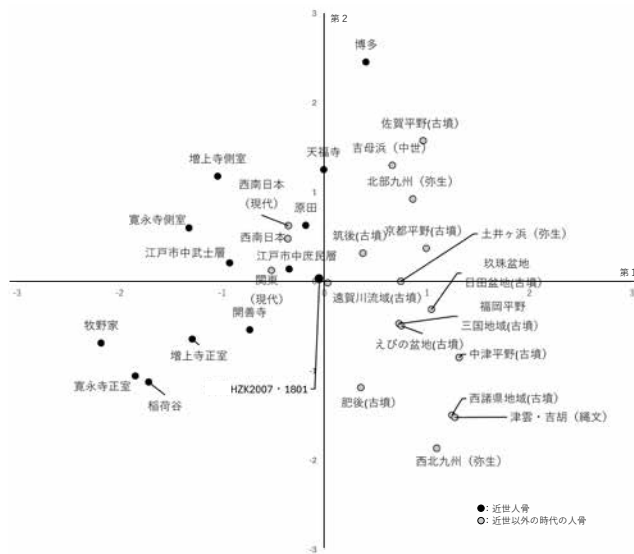


第5図 頭長幅示数／上顔示数（女性）

ど) 中世の吉母浜の女性でも長頭性が強まる。

上顔示数(V)を縦軸に、頭長幅示数を横軸に示した図が第5図である。縦軸で85以上が過狭顔、75以上85以下が狭顔、65以上75以下が低顔、55以上65以下が過低顔である。女性も男性と同様に、津雲・吉胡(縄文)や西北九州(弥生)、大友(弥生)、西諸県(古墳)などのようなこれまでの研究で低顔と指摘されている集団は短頭に傾く中頭を示す。北部九州弥生のような高顔性が指摘されている集団は上顔示数が70前後で頭型は中頭傾向を示している。しかし、江戸時代の短頭傾向を示す武士階級の諸集団は狭顔を将軍家の正室は75以上の狭顔を示し、高狭顔性と短頭化が極めて特徴的である。一方で、箱崎遺跡を含む福岡県出土近世人骨及び江戸市中町人層(早桶)は長頭であるという共通する特徴に加えて狭顔ではないという点でも、武家の女性とは一線を画する。女性においても地域差というよりも階層に基づいてこのような形質の差が生じたと考える方が現時点では蓋然性が高いだろう。

次に頭蓋9項目で多変量解析を行った。女性の主成分負荷量を第5表に示す。女性の場合は頬骨弓幅を計測できた個体が少なかったため、頬骨弓幅を除く9項目で分析を行った。第1主成分(X軸: 固有値3.45、寄与率38.29%)は、バジオン・ブレグマ高と上顔高、眼窩高、鼻高が負の相関を示し、



第6図 頭蓋9項目主成分分析結果（女性）

第5表 頭蓋9項目主成分負荷量（女性）

	1	2	3
最大長	0.88	0.20	0.08
最大幅	0.17	-0.50	0.84
バジオン・プレグマ高	-0.31	0.68	0.46
中顔幅	0.93	0.16	0.00
上顔高	-0.47	0.73	0.10
眼窩幅	0.43	-0.12	-0.13
眼窩高	-0.75	0.25	0.25
鼻幅	0.62	-0.11	-0.04
鼻高	-0.57	0.51	0.33
固有値	3.45	1.67	1.12
寄与率	38.29	18.55	12.42
累積寄与率	38.29	56.85	69.27

脳頭蓋と顔面部の高径の値が大きいとマイナスの値が大きくなり、頭蓋最大長や最大幅、顔面部の諸幅径と正の相関を示すため、脳頭蓋の幅径や長径、顔面部の幅径の値が大きいとプラスの値を示す。第2主成分（Y軸：固有値1.67、寄与率18.55%）は頭蓋最大長とバジオン・プレグマ高、中顔幅、上顔高、眼窩高と鼻高と正の相関を示し、頭蓋最大幅、眼窩幅と鼻幅と負の相関を示す。長頭傾向と高頭傾向、高顔傾向が強いとプラス、短頭傾向が強いとマイナスの値を示すといえる。第3主成分（固有値1.12、寄与率12.42%）は、眼窩幅と鼻幅と負の相関を示すが、相関も低いため、サイズファクターと言えよう。第1主成分を横軸に、第2主成分を縦軸にとり二次元展開した図が第6図である。

顔面部の形質は、女性においても近世江戸は総じてマイナスの値を示す傾向にあり、高顔性が指摘されている弥生時代と比べてもその傾向は顕著である。これは高径の値は大きく幅径の値も小さいことと関連するだろう。脳頭蓋の形質に関しては単変量解析でも明らかになったように上位階層ほど短頭化傾向が強いことがわかる。女性の場合は将軍家でも正室と側室で形質的な特徴が若干異なる傾向を示し、側室は江戸市中庶民層などと同じ象限にプロットされる点が興味深い。これは側室と正室とでは婚姻における選択範囲が異なることを示す可能性があろう。

男性においても女性においても近世の頭型については階層間で差があることが明らかになった。古墳時代から中世にかけて確認されている汎日本列島のみにみられる長頭性（中橋・永井1985）が、江戸時代の選択的婚姻と食生活の変化によって上位階層ではみられなくなり、しか

第6表 推定身長と比較（男性）

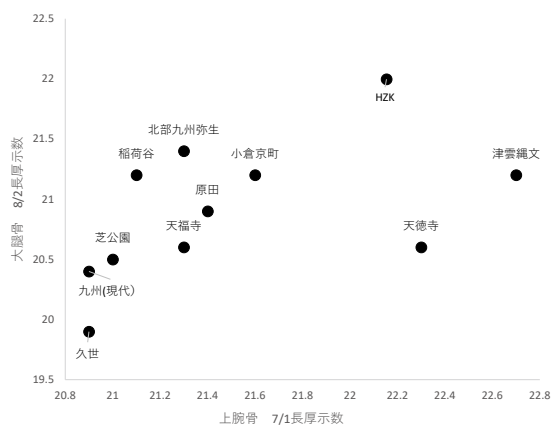
男性		N	M (Pearson 式) (藤井式)	
HZK	L	9	161.3	159.9
博多	近世	2	165.8	165.9
古野 (SX36)	(近世)	1	158.8	156.6
天福寺 ¹⁾	(近世)	24	159.4	157.4
原田 ²⁾	(近世)	30	160.4	158.7
稲荷谷 ³⁾	(近世)	12	157.9	155.4
藤田青木 ⁴⁾	(近世)	30	160.2	158.5
八丁堀三丁目II ⁵⁾	(近世)	13	159.3	157.3
天徳寺 ⁶⁾	(近世)	37	157.7	155.2
芝公園 ⁶⁾	(近世)	15	160.6	159.0
九州 ⁷⁾	(現代)	59	157.7	155.2
江戸時代前期 ⁸⁾	(近世)	—	—	155.0
江戸時代後期 ⁸⁾	(近世)	—	—	156.0
将軍・大名・正室・側室 ⁸⁾	(近世)	—	—	157.0
大門 ⁸⁾	(近世)	—	—	157.0
芝大門 ⁸⁾	(近世)	—	—	158.0
修行寺・円応寺 ⁸⁾	(近世)	—	—	155.0
明治時代 ⁸⁾	(明治)	—	—	155.0

1) 中橋 (1987)、2) 中橋・土肥 (2006)、3) 岡崎ほか (2004)、4) 中橋 (1993)、5) 梶ヶ山・馬場 (2003)、6) 加藤 (1991)、7) 阿部 (1955)、8) 平本 (2004) * 比較集団の身長は平均値より算出。

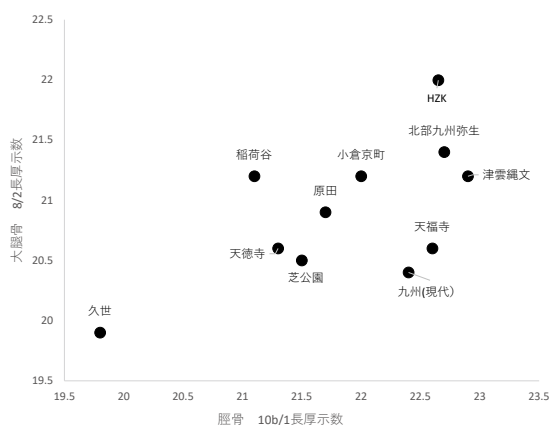
第7表 推定身長と比較 (女性)

女性	L	N	M	
			(Pearson 式) (藤井式)	
HZK		1	143.1	141.9
天福寺 ¹⁾	(近世)	18	146.9	146.5
原田 ²⁾	(近世)	12	147.3	147.0
稲荷谷 ³⁾	(近世)	8	147.1	146.8
藤田青木 ⁴⁾	(近世)	15	148.5	148.5
八丁堀三丁目Ⅱ ⁵⁾	(近世)	6	142.9	141.8
天徳寺 ⁶⁾	(近世)	19	145.6	145.1
芝公園 ⁶⁾	(近世)	13	147.2	147.0
将軍家(成人) ⁷⁾	(近世)	8	146.2	-
九州 ⁸⁾	(現代)	13	146.8	146.4

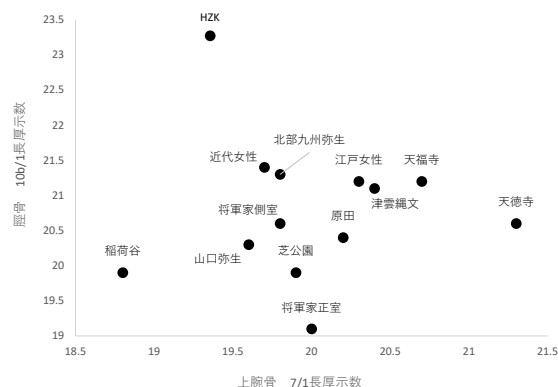
1) 中橋 (1987)、2) 中橋・土肥 (2006)、3) 岡崎ほか (2004)、4) 中橋 (1993)、5) 梶ヶ山・馬場 (2003)、6)・7) 加藤 (1991)、8) 阿部 (1957) 6) 馬場・坂上 (2012) * 比較集団の身長は平均値より算出。



第7図 上腕骨と大腿骨の長厚示数の比較 (男性)



第8図 脛骨と大腿骨の長厚示数の比較 (男性)



第9図 上腕骨と脛骨の長厚示数の比較 (女性)

し一般庶民層の間では継続するということを示している。ではこの短頭化はいつまで継続するのか。小浜 (1960) の生体計測や埴原 (1984)、中橋 (1987) でも短頭傾向が最も強いとされる近畿 (Kouchi 1983) では現代の近畿地方の男性も短頭化することが指摘されている。小浜 (1960) は近畿地方の強い短頭性を朝鮮半島からの渡来によって説明できると指摘し、これについて中橋 (1987) は検討の余地があると慎重な姿勢を見せた。江戸時代の近畿地方の人骨の検討事例が少ないため、上位階層の短頭化と近畿地方現代人の短頭化はその由来が異なる可能性はあるが、短頭化は外来因子よりも顎の脆弱化などの生活要因と選択的婚姻など内的な要因によって説明されるかもしれない。

また顔型も上位階層ほど狭高顔傾向を示すことも明らかである。縄文時代の低顔性は顔の低さだけでなく、顔幅の大きさが強い影響を与えていたが、その後、時代とともに顔幅が減少していき、中世の低顔傾向は主に顔幅がその要因であると指摘されている (中橋・永井 1985)。箱崎遺跡は男女ともに顔高も大きいが幅径も小さいため高顔傾向が強いが、上位層と比べると狭顔傾向はやや低い。この傾向は江戸市中庶民層も同様である。縄文時代と弥生時代を通して形成され古墳時代にも指摘された (Doi and Tanaka 1987) 顔型の地域差は、中世の低顔傾向が一般的になる (中橋・永井 1985) 際に不明瞭になり、地域性があまり見られないままに江戸時代になると高顔傾向が広がり、しかし、狭顔性という点で階層による区分が

目立つようになっていくのである。中世の資料が少ないために地域性が確認できないだけである可能性はあるが、弥生時代に形成された地域差、あるいはその二重性はその後の歴史の中で不明瞭になっていき、江戸時代においては地域性よりも階層に基づく頭蓋形質の差が顕著になっていく。江戸時代に強固に形成された階層性に基づく形質的な差異がその後現代日本人の形質の地域差などにどのような影響を与えたのかは今後の課題である。

米元・舟橋（2024）において、個体の頭蓋形質の分析を行った際に、HZK2007地点 ST109のみが徳川家重や家宣と類似する傾向を示した。将軍家に近似した結果が得られた要因として、計測項目がやや少ないという点と、HZK2007地点 ST109の脳頭蓋の最大幅が大きい・高狭顔傾向・眼窩のサイズが大きいという点を挙げている。この形質的な特異性と相関するような考古学的な所見は現段階では得ることが出来ていない。これまで庶民層の頭蓋形質で武士層に類する形質が発現している事例は、大野城市瑞穂遺跡出土人骨（米元・足達ほか 2022）や古野遺跡出土人骨（中井・米元ほか 2015）で確認されてきた。例えば古野の場合は総庄屋である高原家の主な墓域であり、有力層であるがゆえに庶民層とは異なる交流があった可能性が高いことも想定することができるなど、大野城市内に出土するこれらの集団の歴史的経緯や墓地を形成した集団の婚姻圏にこの特異性の要因があるのではないかと指摘した（米元・足達ほか 2022）。箱崎も街道沿いの宿場町でもあり、人馬継が行われる宿駅としての機能を有していた（有田 2018）。有田（2018）は近世中期以降、箱崎御茶屋も藩主の休息や遊興に用いられたことも指摘している。このような箱崎宿の役割によって武士階級に属する人が訪れ、場合によっては当地に葬られるなどといった出来事によって HZK2007地点 ST109のような形質的特徴をもつ個人が存在した可能性もあろう。しかし、Sakaue（2012）においても指摘されているように、早桶に埋葬された庶民層の中にもいわゆる貴族形質を示す個体も存在することから、庶民層の形質のヴァリエーションの1つに過ぎない可能性もある。このヴァリエーションがどのような頻度でどの地域にみられるのか、時期差はないのかなど、今後個体に着目してさらなる検討を行う必要がある。

4. 四肢骨の検討

四肢骨に関しては、各部位の傾向については米元など（2024）および米元・舟橋（2024）で詳述しているため、本稿では HZK1801地点と HZK2007地点を合わせ箱崎遺跡出土人骨全体の推定身長と比較（第6・7表）と骨幹部の比較のみを行う。推定身長について女性は最大長が計測できた個体が1体のみ（HZK2007）であるため米元・舟橋（2024）と同じ結果であるが再掲する。

大腿骨の長さから推定した箱崎遺跡の男性の身長は博多遺跡に次いで高い。女性は江戸市中の各集団と比較するとやや小さめの身長である。平本（1972・2004）は、縄文時代から明治までの身長の変化を検討した結果、古墳時代から近世にかけて平均身長が低くなっていく傾向を指摘し、さらに江戸時代の平均身長は、江戸時代の前期において男性の平均身長155cm、女性は143cm、後期の男性が156cm、女性は145cmであり、近代初期と同程度で、日本の歴史上最も低いと指摘している。しかし、箱崎遺跡出土人骨の男性含め、博多、原田、蓆田青木などの遺跡では平均身長は160cmを超える値を示す。平本（2004）で指摘された平均身長が近世において低くなる傾向は現時点では福岡県内ではみられない。金関（1962）によると縄文時代159.9cmであった平均身長は、弥生時代のいわゆる渡来的な形質の影響を受けて162.8cmと高身長化することが明らかになっている。さらにその後古墳時代に平均身長が下がることも指摘されているが、北部九州の古墳時代集団の平均身長は160.2cmである（高椋 2021）ため、古墳時代から近世までこの地域では平均身長が大きく変わっていないことがわか

る。当該地域の中世の人骨は、まとまった数発見されていないため不明であるが、関東方面で起きる低身長化が北部九州地域では起きていない可能性が高い。この低身長化は平本（2004）によって人口の増加に食糧生産（米の生産量）の増加が追い付いていないため、すなわち食料不足に起因する栄養不足のためではないかと指摘されている。この点を検討するためには飢饉などの影響がより大きかった東北地方の江戸時代人骨の身長を検討する必要があるが、低身長化は、食料難に加えて江戸などの大都市の人口密度や食糧生産に従事しないが故に飢饉の影響が大きいなど、都市の構造の結果であった可能性もあり、それに起因する低身長化が及ばない地域が、特に西日本においては、あったことを示すのではないかと考えられる。博多も高身長であることから年齢と性別の構成で述べたように、博多は江戸や京都・大阪ほど極端な都市化の影響を受けていない地域だった可能性が考えられる。

次に四肢の太さと長さの比を調べるために、上腕骨と大腿骨、脛骨の長厚示数を示している（第7、8、9図）。女性は大腿骨の長厚示数を算出できていないため、上腕骨と脛骨のみである（第9図）。箱崎遺跡出土人骨は上腕骨と大腿骨の周径が長さに比して大きく、太く頑丈であるという特徴を有する。男性の場合は特に大腿骨の周径が大きく、女性は脛骨の周径が大きいことから上肢よりも下肢のほうが頑丈な傾向を示すと言えよう。この四肢骨の形質的特徴の要因をさらに検討するため、以下に筋附着部の分析を行う。

5. 筋骨格ストレスマーカー

筋骨格ストレスマーカー（Musculoskeletal Stress markers：以下 MSMs）は、骨格形態から過去の人々の身体諸活動を再構築する方法の1つである。この方法は筋使用あるいは筋にかかる負荷が強ければ強いほど、その負荷に適応するために筋粗面の複雑性は増していくということを前提に、その複雑さの程度を基準としたスコアを用いて、全身にわたる各付着部位の評価を行い、各部位の使用頻度負荷の強弱を読み取り、そこから長期継続的な体の使い方を推察しようとする手法である。近年は Entheseal Changes（ECs）という用語が一般的であるが、本稿では本方法を初めて体系化した Hawkey and Merbs（1995）の基準に従っているため従来の MSMs という用語を用いた。スコア基準の詳細については米元（2012）に掲載されている。MSMs は、部位ごとにスコアを平均値化し、折れ線グラフで表記することで、各部位の筋附着部の発達のパターンを検討する。この折れ線グラフと MSMs スコアの個体の頻度を示す100%積上げ縦棒グラフをともに併記したものを本稿では MSMs パターンと呼ぶ。

本研究では四肢の19部位を対象とした（第10図）。対象とした集団は以下のとおりである。

〔近世〕（第11－3・5図）

- ・ 百姓層（原田遺跡）

時期：江戸後期－明治・大正（18世紀第4四半期－19世紀）

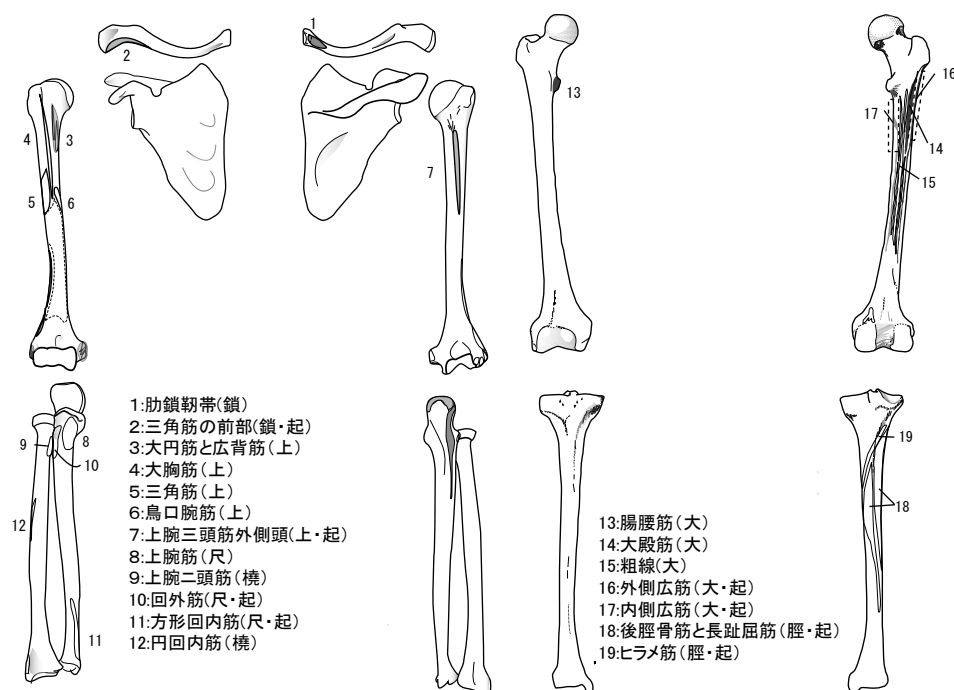
特性：福岡県筑紫野市所在の共同墓地出土人骨。時期は、江戸時代後期から明治に属する。筑前六宿の1つである長崎街道宿場町近郊の原田村の共同墓地である（森山 2003）。

- ・ 上位武士層 神代利経

時期：1805年没

特性：佐賀県佐賀市富士町宗源院に埋葬されていた肥前の戦国武将神代勝利の一族9代目当主。本資料は、江戸市中の多重構造墓の被葬者と同じ上位武士層に位置づける。

- ・ 上位武士層 久世家



第10図 MSMs 対象部位19部位

時期：1656－1786年

特性：福岡市材木町少林寺に埋葬されていた旧黒田藩の上級家臣である。先行研究において家老とされてきたが、福岡藩分限帳集成（福岡地方史研究会編 1999）によると上級家臣「大組」、役職は馬廻である。久世家は久世広見（53）、広明（71）、広澄（45）、広亮（60）を分析対象とした（括弧内は没年齢）。没年代は1656～1786年の江戸前期から中期の約100年間である。本資料は、江戸市中の多重構造墓の被葬者と同じ上位武士層に位置づける。

・ 江戸市中諸集団（上位武士層・武士層・江戸市中庶民層）

時期：17世紀後半以降19世紀

特性：現東京都の港区・新宿区を中心とする江戸時代江戸市中の寺院群である。対象とした遺跡は、正運寺・慶安寺・寛永寺護国院・自證院・修行寺・法光寺・圓應寺・發昌寺・天徳寺・崇源寺・正見寺・蓮光寺である。埋葬様式が身分の表徴であるという考古学的見解（谷川 1987・1990a・1990b・2004・2010、松本 1990）を踏まえ、出土寺院を問わず人骨資料を埋葬様式が示す階層ごとにまとめる。まず、全ての寺院の常滑製大甕の被葬者を武士階層に属する者としてまとめ、本稿では男性は江戸市中武士層、女性の場合は武家女性と称する。また、木炭・漆喰（石灰）床・槨木槨甕棺墓、方形木槨甕棺墓、円形木槨甕棺墓など多重構造墓を甕棺の被葬者よりも上位に位置する武士階層としてまとめ、男性は上位武士層、女性上位武家女性とする。久世一族や神代は多重構造墓とほぼ同じ階層と考えられるため、上位武士層に含める。

円形木棺と方形木棺の被葬者に関しては身元の分かる個体が存在しないため、身分の詳細は不明であるが、円形木棺は早桶と呼ばれる埋葬様式であり、被葬者は低禄の武士・都市下層民などを含む江戸市中の庶民層であると考えられる（西木 1999、谷川 2004）。円形木棺の被葬者群を江戸市中庶民層（早桶）とする。方形木棺は、別名堅棺や龕（がん）などと呼ばれ、他埋葬様式よりおくれて18世

紀の中頃に出現する墓制で、身分の詳細が不明であるがここでは江戸市中庶民層（方形）とする。

〔中世〕（第11-3・5図）

- ・ 主漁従農民（吉母浜遺跡）

時期：概ね15世紀（伊藤 1985a）。

特性：山口県下関市大字吉母に所在する吉母浜中世墓地から出土した人骨を対象とする（田中 1985）。

- ・ 揚浜式製塩民（沢田遺跡及び村松白根遺跡）

時期：15世紀－江戸前期

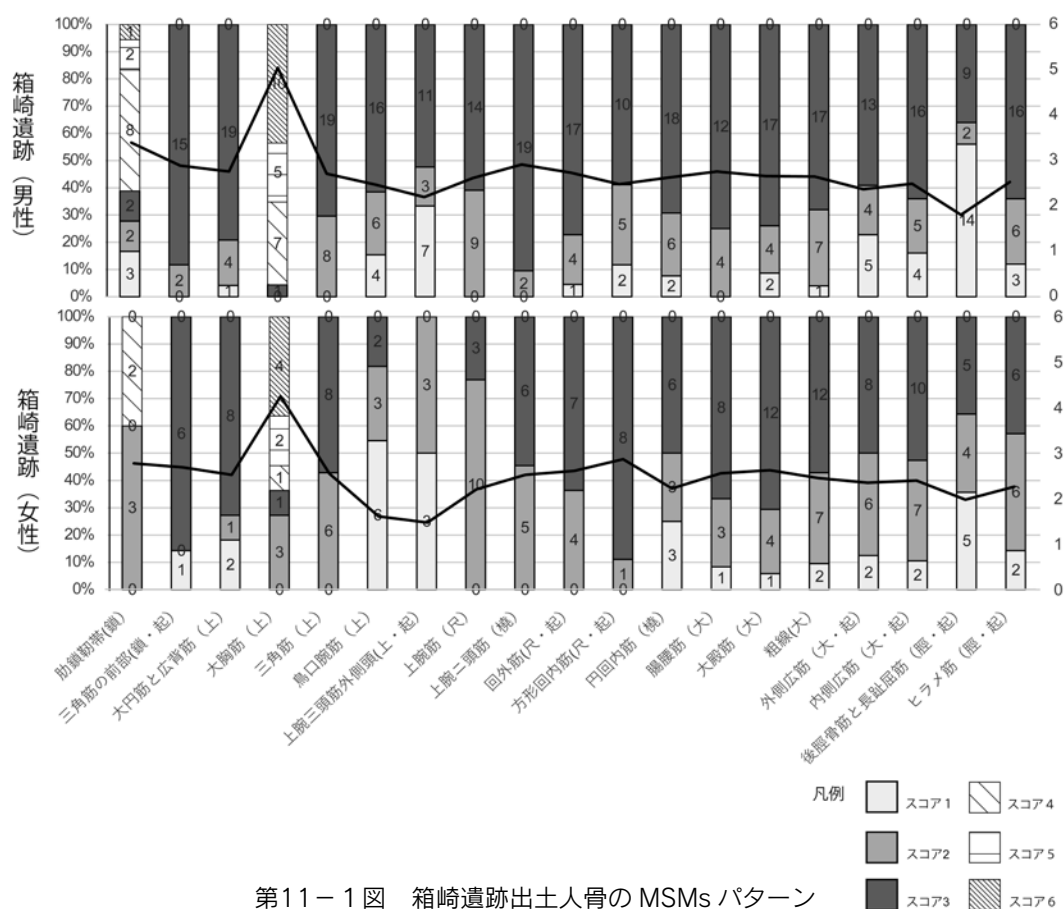
特性：茨城県那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚（現ひたちなか市）に所在する沢田遺跡（鯉淵・新井 1992）と、茨城県那珂郡東海村村松白根に所在する村松白根遺跡（芳賀・寺内 2005、皆川・井上 2007）から出土した人骨を対象とする。

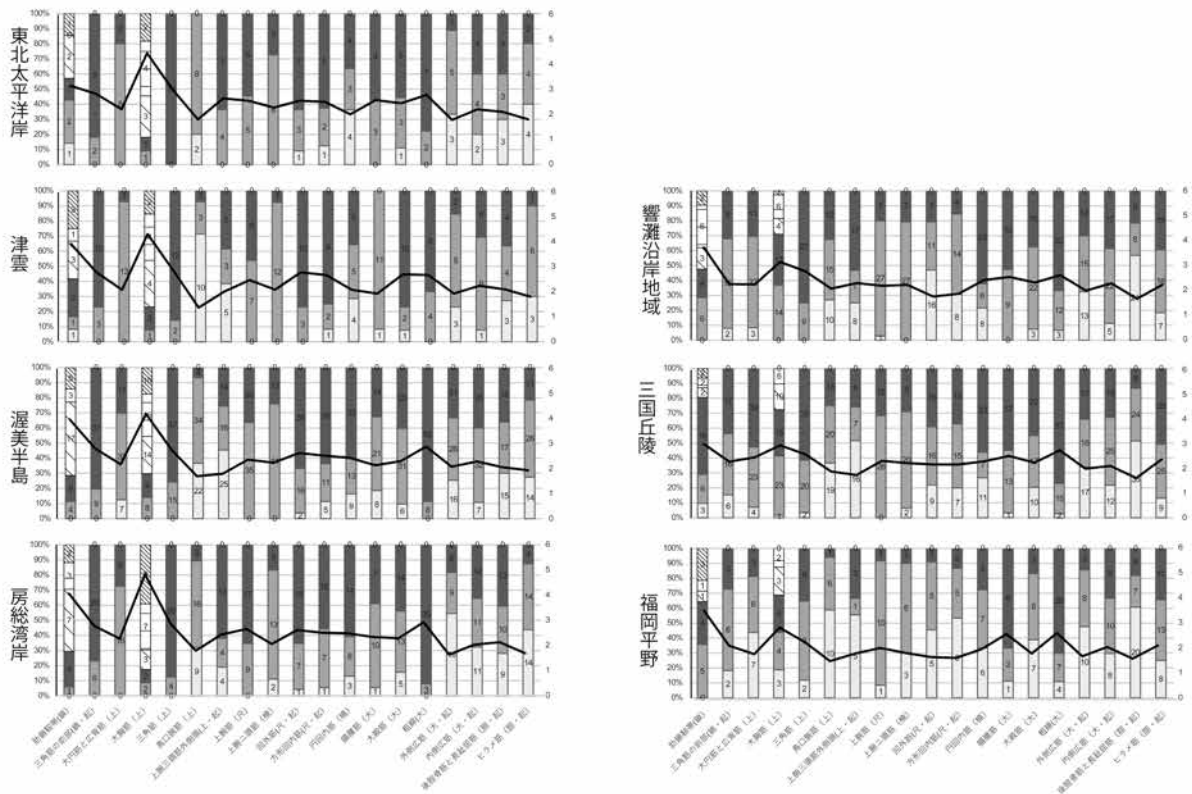
〔弥生時代〕（第11-2・4図）

水稻農耕の受容と展開という生業の大きな転換によって大きな変化が起きた北部九州地域・響灘沿岸地域（金関 1966；中橋・永井 1989；中橋 2005；田中 2014等）を対象としている。下記3集団では、米元（2016b）において、MSMsの地域差の検討がなされ、男性はヒラメ筋の発達を共通する特徴として示すが、響灘沿岸・三国丘陵の男性と福岡平野域の男性とではややMSMsパターンが異なり、福岡平野の男性はむしろ女性のパターンと類似することが指摘されている。

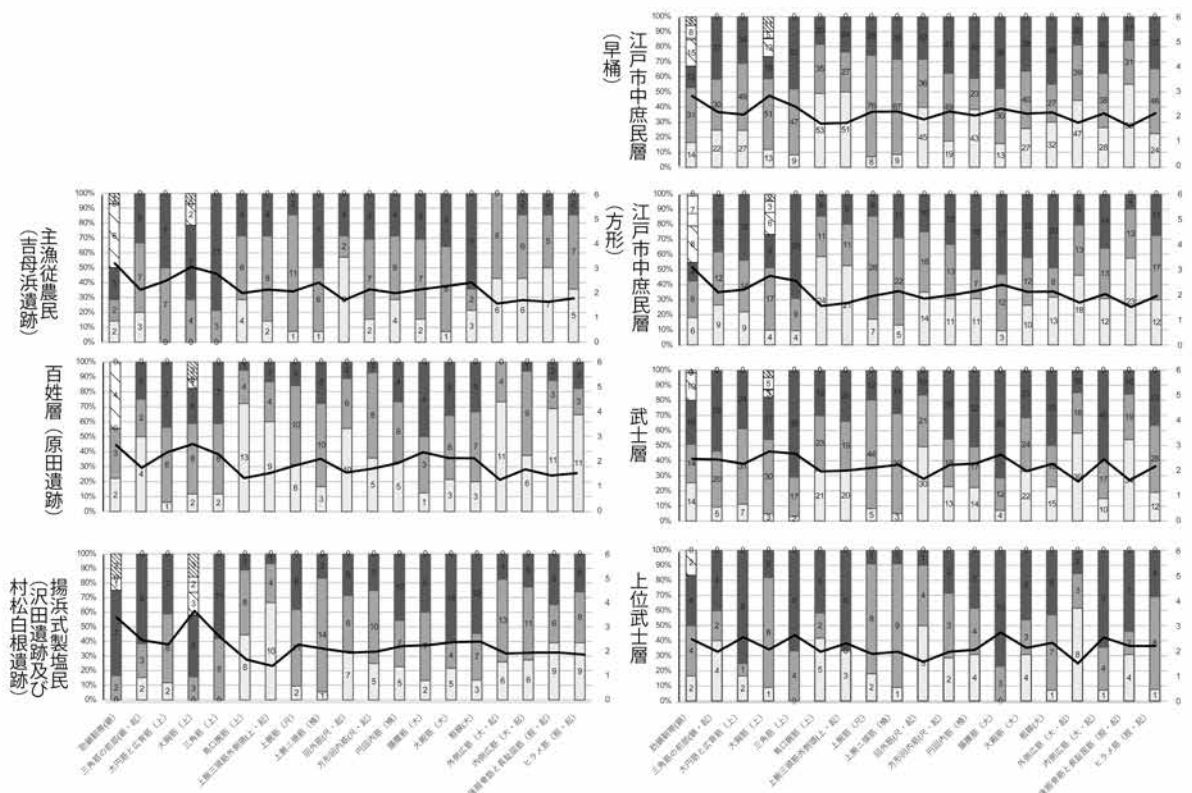
- ・ 響灘沿岸

時期：弥生時代前期～中期

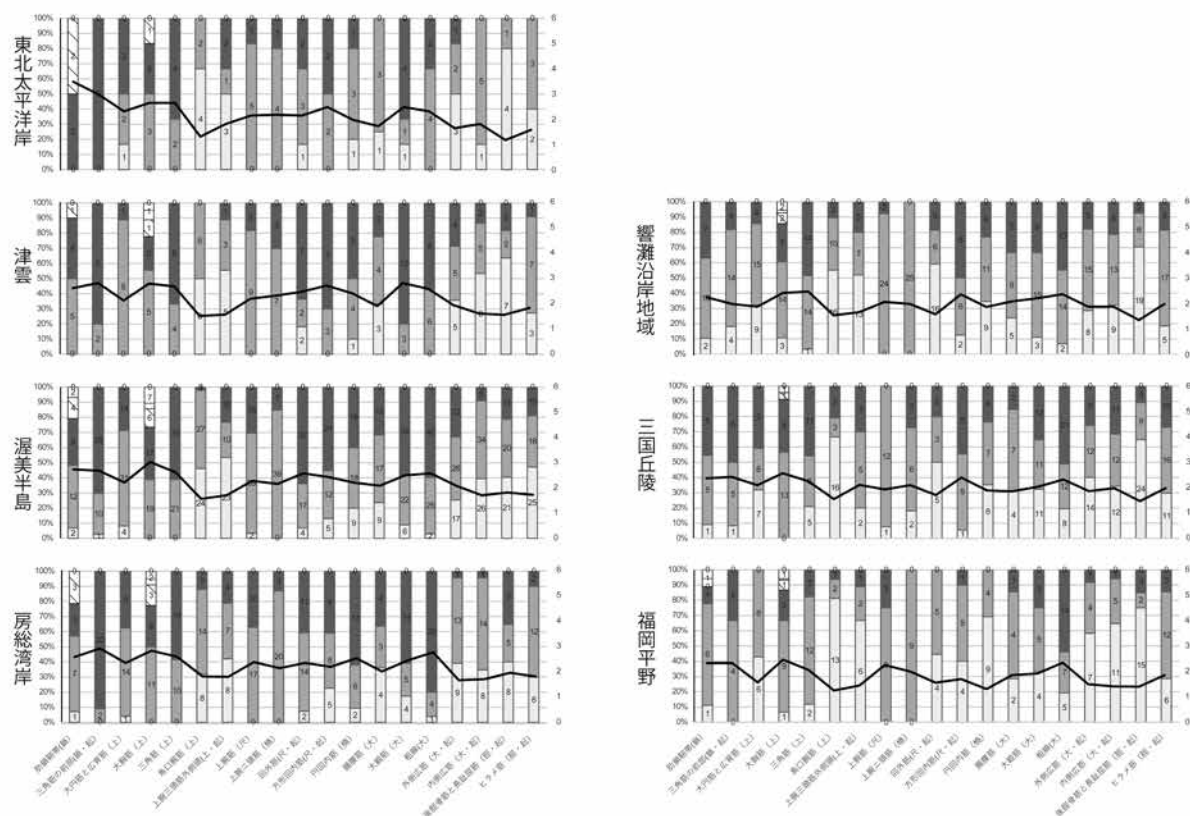




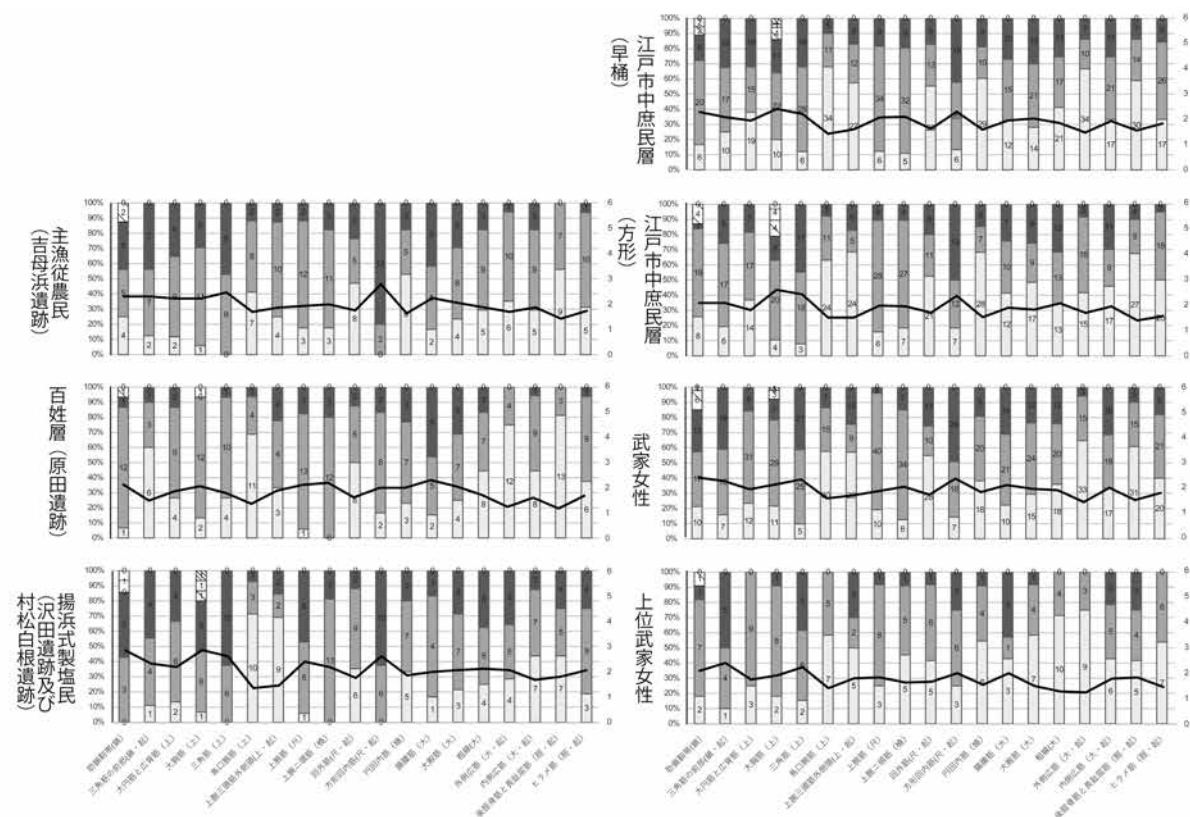
第11-2図 比較資料（縄文と弥生、男性）のMSMsパターン



第11-3図 比較資料（中世と近世、男性）のMSMsパターン



第11-4図 比較資料（縄文と弥生、女性）のMSMsパターン



第11-5図 比較資料（中世と近世、女性）のMSMsパターン

特性：響灘沿岸地域の土井ヶ浜遺跡と中ノ浜遺跡から出土した人骨資料を響灘沿岸としてまとめた。

- ・ 福岡平野

時期：弥生時代中期～後期前半

特性：金隈・蓆田青木・門田・豆塚山・西平塚・伯玄社・原・一の谷から出土した人骨資料を福岡平野としてまとめた。

- ・ 三国丘陵

時期：弥生時代中期～後期前半

特性：隈・西小田遺跡・横隈狐塚遺跡・永岡遺跡・ハサコの宮遺跡・池ノ上遺跡・横隈山遺跡から出土した人骨資料を三国丘陵としてまとめた。

〔縄文時代〕（第11－2・4図）

下記の4集団は、米元（2016a）において、MSMsの各地域的特徴が検討され、上肢ではいずれの集団においても大胸筋のスコアが極端に高いこと、下肢に関しては、粗線に付着する筋群や大殿筋の発達がかがえ、下腿では後脛骨筋と長趾屈筋の方がヒラメ筋よりもMSMsスコアが高い集団が多いことが指摘されている。地域間での差よりもむしろ共通点が多いことが時代的な特徴である。

- ・ 東北太平洋岸

時期：後晩期

特性：対象とした遺跡は仙台湾周辺や三陸海岸南部・大船渡湾岸に立地する。対象とした人骨出土遺跡は、中沢浜貝塚・大洞貝塚・田柄貝塚・宮野貝塚・二月田貝塚・貝鳥貝塚・西の浜貝塚である。

- ・ 房総湾岸（房総半島東京湾東岸）

時期：中期～後期中葉を主体

特性：東京湾東岸の大型貝塚形成地帯に位置する諸貝塚から出土した人骨を主体とする。奥東京湾と東京湾沿岸で細別する場合もあるが、今村（1989）の研究から石器組成に大きな違いがないことが指摘できるため、房総湾岸としてまとめた。対象とした人骨が出土した遺跡は、貝の花貝塚・子清水貝塚・中峠貝塚・山倉貝塚・高根木戸遺跡・姥山遺跡・加曽利貝塚・下太田貝塚・曾谷貝塚・堀之内遺跡・宮本台遺跡・六通貝塚・山倉貝塚である。

- ・ 渥美半島

時期：晩期

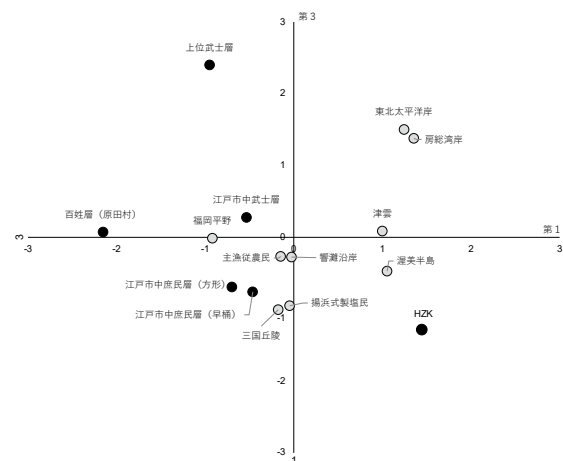
特性：渥美半島三河湾沿いに形成された大型諸貝塚から出土した人骨資料を用いた。対象とした遺跡は、稲荷山貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚・川地貝塚である。

- ・ 津雲

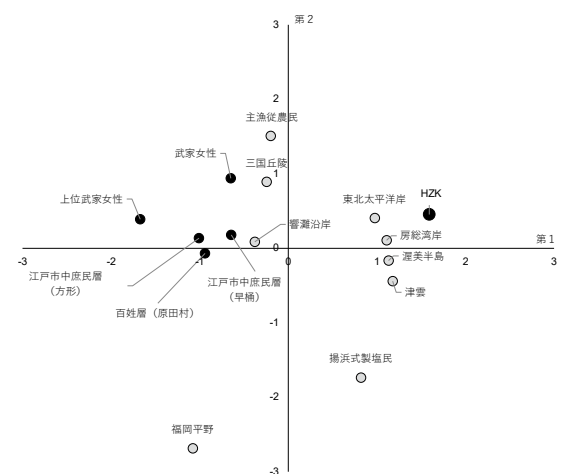
時期：晩期を主体とする。

特性：対象とした遺跡は岡山県最西端に位置する笠岡市東南の神島と大島中に挟まれた大殿州とよばれる扇状地上に位置する津雲貝塚である。

まず、MSMsパターンを検討する（第11図）。箱崎遺跡出土人骨の特徴は男性と女性共に概してスコアが高く、とくに大胸筋付着部のスコアが高い傾向を示し、近世各集団の中では突出している。肋鎖靱帯部のスコアも高く、この全身にわたるスコアの高さは縄文時代の各集団に匹敵するほどである。この縄文時代の各集団のMSMsパターンの形成に関しては米元（2020）で以下のようにその要因を考察している。「縄文の狩猟採集という生業は水稻農耕のような通年で生業の核となるような活動がなく（安室 1992）、環境にあわせて様々な活動を季節ごとに行っていたこと、基本的に平等な社会で、個人間に厳密な活動の区分が存在しなかったため構成員すべてが、多様な活動に従事した結果と考え



第12図 19部位のカテゴリカル主成分分析の結果 (男性)



第13図 19部位のカテゴリカル主成分分析の結果 (女性)

第8表 カテゴリカル主成分分析負荷量 (男性)

	1	2	3	4	5	6	7
肋鎖韧带 (鎖)	0.58	-0.54	-0.22	-0.39	0.28	0.31	-0.09
三角筋の前部 (鎖・起)	0.99	0.01	0.00	0.04	-0.12	-0.09	0.00
大円筋と広背筋 (上)	-0.10	0.56	0.01	0.56	0.41	0.07	0.44
大胸筋 (上)	0.93	-0.25	-0.17	0.04	0.08	0.17	-0.09
三角筋 (上)	0.68	-0.35	0.53	0.29	0.09	-0.12	-0.16
烏口腕筋 (上)	0.37	0.84	-0.11	0.23	0.27	-0.01	-0.15
上腕三頭筋外側頭 (上・起)	0.53	0.13	0.76	0.10	0.09	0.00	-0.33
上腕筋 (尺)	0.98	-0.05	-0.01	-0.10	-0.12	-0.08	-0.02
上腕二頭筋 (横)	0.47	0.20	-0.35	0.73	0.02	-0.12	-0.26
回外筋 (尺・起)	0.91	-0.13	-0.33	-0.03	-0.16	-0.12	0.05
方形回内筋 (尺・起)	0.82	0.01	0.14	0.12	-0.32	-0.36	0.25
円回内筋 (横)	0.77	0.35	-0.10	-0.35	0.37	-0.11	0.09
腸腰筋 (大)	-0.20	0.71	0.60	-0.18	-0.04	0.17	-0.19
大殿筋 (大)	0.76	-0.08	-0.10	0.31	-0.13	0.52	0.13
粗線 (大)	0.72	-0.13	0.25	-0.38	0.44	-0.22	0.14
外側広筋 (大・起)	0.73	0.30	-0.58	-0.09	-0.09	0.10	-0.10
内側広筋 (大・起)	0.31	0.83	0.19	-0.26	-0.30	0.02	0.13
後脛骨筋と長趾屈筋 (脛・起)	0.64	-0.03	0.65	0.01	-0.15	0.29	0.24
ヒラメ筋 (脛・起)	0.09	0.86	-0.34	-0.35	-0.09	0.03	-0.10
固有値	8.54	3.71	2.55	1.77	0.97	0.78	0.67
寄与率 (%)	44.97	19.51	13.44	9.30	5.13	4.10	3.55

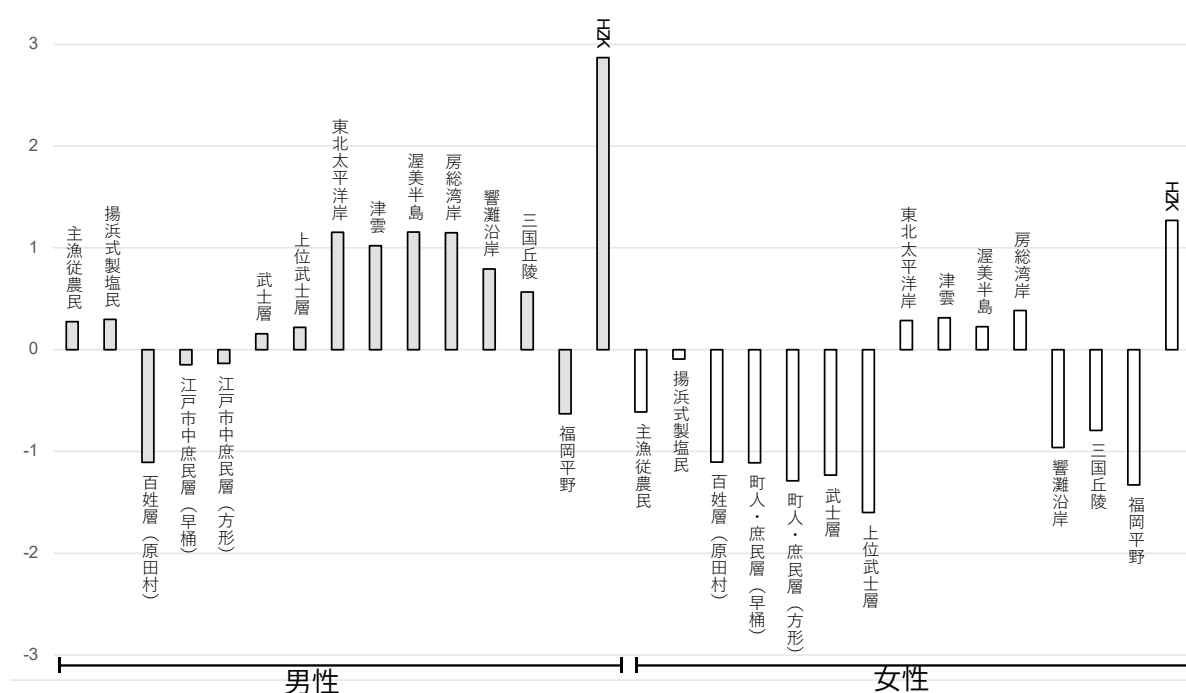
第9表 カテゴリカル主成分分析負荷量 (女性)

	1	2	3	4	5	6	7	8
肋鎖韧带 (鎖)	0.94	-0.18	-0.01	-0.16	0.13	-0.08	-0.18	0.02
三角筋の前部 (鎖・起)	0.71	0.12	0.16	-0.54	0.32	-0.17	0.18	0.07
大円筋と広背筋 (上)	0.83	0.41	0.06	0.22	0.04	-0.23	-0.13	0.16
大胸筋 (上)	0.96	-0.15	0.15	-0.03	0.15	0.00	-0.06	-0.11
三角筋 (上)	0.91	-0.12	-0.01	-0.23	-0.03	0.19	-0.26	0.02
烏口腕筋 (上)	0.37	0.85	-0.10	0.02	0.09	0.09	0.27	-0.21
上腕三頭筋外側頭 (上・起)	-0.30	0.63	-0.53	-0.09	-0.09	0.07	0.24	0.39
上腕筋 (尺)	0.59	-0.67	-0.34	0.26	0.03	0.04	0.15	-0.06
上腕二頭筋 (横)	0.79	-0.19	-0.24	0.05	-0.38	-0.32	-0.14	0.14
回外筋 (尺・起)	0.86	0.37	-0.17	-0.07	0.06	0.11	-0.26	-0.08
方形回内筋 (尺・起)	0.75	0.35	0.30	0.14	-0.12	0.34	-0.21	0.18
円回内筋 (横)	0.80	0.17	-0.40	-0.15	-0.24	-0.24	0.15	-0.10
腸腰筋 (大)	0.00	0.23	-0.61	0.68	0.07	0.13	-0.15	-0.25
大殿筋 (大)	0.89	0.00	-0.11	0.08	-0.42	-0.03	0.13	-0.03
粗線 (大)	0.82	-0.17	0.10	-0.26	-0.04	0.15	0.40	-0.19
外側広筋 (大・起)	0.69	-0.10	0.32	0.32	-0.01	0.50	0.20	0.15
内側広筋 (大・起)	0.04	0.59	0.69	0.26	0.00	-0.29	-0.03	-0.17
後脛骨筋と長趾屈筋 (脛・起)	0.45	-0.05	-0.29	0.19	0.81	-0.09	0.03	0.12
ヒラメ筋 (脛・起)	0.39	-0.25	0.33	0.72	0.00	-0.27	0.26	0.15
固有値	9.22	2.64	1.96	1.82	1.22	0.88	0.77	0.49
寄与率 (%)	48.51	13.91	10.32	9.55	6.41	4.61	4.07	2.60

ることができよう。これはスコアの低い個体の頻度が概して少なく、MSMs スコアが全体的に高いことから指摘することが出来る。すなわち、個体の MSMs スコアはその個体が生涯のうちにある程度反復して行い続けた様々な種類の諸活動の平均であり、専門的にある特定の活動をし続けるということがない場合、全身的にスコアが高くなり、それを集団ごとに平均値化すると、全体の中で占める割合が小さい個々人の特殊な活動はならされてしまい、その結果、他の時代と比べると地域集団間の MSMs 差は小さくなるのではないかと考えられる。」縄文時代の各集団との差異としては下肢の発達の仕方がやや異なり、大殿筋や粗線に付着する筋群にピークが確認されない点、後脛骨筋・長趾屈筋よりもヒラメ筋付着部のスコアが高い傾向にあるという点である。特に箱崎遺跡においては、女性も男性とほぼ同じようなパターンを示すという点が特異である。

MSMs パターンの類似と差異を総合的に検討するため、MSMs19部位を用いて、カテゴリカル主成分分析を行った (第8表、第12図)。第1主成分は、固有値が8.54で、寄与率が44.97%であり、第2主成分は、固有値が3.71、寄与率が19.51%、第3主成分は固有値が2.55、寄与率が13.44%、第4主成分は固有値が1.77、寄与率が9.30%である。

第1主成分は、大円筋と広背筋・腸腰筋と負の相関がみられるが、それ以外の部位とは正の相関が



第14図 カテゴリカル主成分分析の結果（男女）

第10表 カテゴリカル主成分
負荷量（男女）

	主成分負荷量 1
肋鎖靱帯（鎖）	0.80
三角筋の前部（鎖・起）	0.76
大円筋と広背筋（上）	0.85
大胸筋（上）	0.95
三角筋（上）	0.87
烏口腕筋（上）	0.79
上腕三頭筋外側頭（上・起）	0.59
上腕筋（尺）	0.81
上腕二頭筋（橈）	0.82
回外筋（尺・起）	0.88
方形回内筋（尺・起）	0.65
円回内筋（橈）	0.91
腸腰筋（大）	0.58
大殿筋（大）	0.86
粗線（大）	0.84
外側広筋（大・起）	0.81
内側広筋（大・起）	0.74
後脛骨筋と長趾屈筋（脛・起）	0.72
ヒラメ筋（脛・起）	0.73
固有値	12.01
寄与率（%）	63.19

みられる。第1主成分は、MSMs スコア全体の高低、すなわち MSMs スコアが総じて高い集団ほど正の値が大きくなると言えよう。第2主成分は肋鎖靱帯、大胸筋、三角筋、上腕筋、回外筋、大殿筋、粗線に付着する筋群（以下、粗線）、後脛骨筋と長趾屈筋と負の相関を、それ以外の部位と正の相関がみられる。第3主成分は肋鎖靱帯、大胸筋、烏口腕筋、上腕筋、上腕二頭筋、回外筋、円回内筋、大殿筋、外側広筋、ヒラメ筋と負の相関がみられ、大円筋と広背筋、三角筋、上腕三頭筋外側頭、方形回内筋、腸腰筋、粗線、内側広筋、後脛骨筋と長趾屈筋と正の相関がみられる。米元（2012）において、武士階層の MSMs パターンは下肢にその特徴が強く表れ、中でも腸腰筋と内側広筋の発達が著しいことが指摘されている。今回の分析においては、第3主成分がこのいわゆる武士的な傾向を示すため、第1主成分得点を横軸に第3主成分を縦軸にとり2次元展開した図が第12図であり、この結果から以下のまとまりを読み取ることができる。

まず、武士層と上位武士層は、第2象限に位置し、ほかの集団と MSMs の発達パターンが異なり、上位武士層の男性のほうが武士層の男性よりも他の集団との違いが顕著である。近世の百姓層は第2象限であるがほぼ線上に位置する。江戸市中庶民層（早桶）、江戸市中庶民層（方形）は第3象限に位置し、武士層とは傾向が異なることがわかる。縄文時代の各集団は、横軸の値が高く概してスコアが高いことがわかる。箱崎遺跡の男性は横軸で縄文各集団よりもわずかに値が高く、その著しいスコアの高さが示される。質的な差を示す縦軸においては、縄文時代の渥美半島の集団と同じ象限に位置するが、やや離れたところにプロットされており類似する傾向を示す集団が明確ではないといえる。

次いで箱崎遺跡の女性の検討を行う（第9表）。第1主成分は、固有値が9.22で、寄与率が48.51%であり、第2主成分は、固有値が2.64、寄与率が13.91%、第3主成分は固有値が1.96、寄与率が10.32%、第4主成分は固有値が1.82、寄与率が9.55%である。

第1主成分は、上腕三頭筋外側頭と負の相関がみられるが、それ以外の部位とは正の相関がみられ、MSMs スコア全体の高低、すなわち MSMs スコアが総じて高い集団程正の値が大きくなると言えよう。第2主成分は肋鎖靱帯、大胸筋、三角筋、上腕筋、上腕二頭筋、粗線、外側広筋、後脛骨筋と長趾屈筋、ヒラメ筋と負の相関を、大円筋と広背筋、烏口腕筋、上腕三頭筋外側頭、回外筋、方形回内筋、円回内筋、腸腰筋、内側広筋と正の相関がみられる。女性に関しては武家特有の MSMs パターンは男性ほど明瞭ではないため、今回の分析においては、第1主成分得点を横軸に第2主成分を縦軸にとり2次元展開した図が第13図であり、この結果から以下のまとまりを読み取ることができる。

武家女性と上位武家女性は第2象限に位置する。しかし主漁従農民（吉母浜遺跡）や三国丘陵、響灘沿岸、江戸市中庶民層（早桶）、江戸市中庶民層（方形）なども第2象限に位置するため、男性ほど他集団と明瞭に区分できるわけではない。しかし武家や上位階級に属する武家の女性は軸線上から離れるという点で特徴的である。一方、箱崎遺跡の女性は男性と同様に縄文時代の各集団に近く、それよりも概してスコアが高い傾向を示す。

女性のスコアの高さを示すために、男性と女性の値を用いてカテゴリカル主成分分析を行った。第1主成分は、固有値が12.01で、寄与率が63.19%、すべての値が正の相関を示すため、概してスコアが高いと+に値が大きくなる（第10表）。結果を棒グラフで示した図が第14図である。

いずれの時代の集団も男性は女性よりも概して値が高く、男女で傾向が近似するのは百姓層（原田村）のみである。MSMs のスコアに性差が存在し、その差の現れ方も各集団の行っていた諸活動によって異なることがわかる。女性は男性と比べるとスコアが概して低いわけであるが、縄文時代の各集団と箱崎遺跡の女性のみプラスの値を示す。特に箱崎遺跡の女性は縄文時代各集団の男性に匹敵する。箱崎遺跡の MSMs の特徴として男女ともに概してスコアが高いこと、特に女性のスコアの高さは顕著であると言える。

近世の箱崎は、筑前二十七宿の1つに数えられた宿場町であった（有田 2018）。この宿場町には、福岡藩主の領内巡見や街道を通行する諸大名や幕府役人の休泊に用いられたであろう御茶屋や網屋が存在した（有田 2018）。また、博多湾沿岸には博多湾の内海を漁場とする6つの浦があり、その1つが箱崎浦であった（梶嶋 2018）。梶嶋（2018）によると、箱崎浦の世帯数及び人口は天明5（1785）年には人口369人であり、網漁が中心で漁船は39艘、明治4（1871）年には人口が654人、漁船の数も明治3年には64艘と増加しており、この要因として分家による立網の網元の増加などが挙げられ、当地域において漁業活動従事者が多いことがわかる。さらに、鰯漁をめぐる箱崎浦と奈田浦の争論や地引網漁の漁場の確定などの記録も確認されており（梶嶋 2018）、また、鰯網漁・田作り網漁・かなぎ網漁・鯛網漁などが行われていた（高田 2002）。第一に挙げられている鰯であるが、江戸時代に入ると鰯が乾鰯や鰯粕として盛んに肥料として使われるようになり、鰯漁業が発達、専用の地曳網が各地に広がっていく（武蔵野美術大学生活文化研究会 1974）。漁法の分布によると、博多湾では地曳網ほか打瀬網漁も行われた可能性がある（武蔵野美術大学生活文化研究会 1974）。箱崎浦において漁船は確認されているが博多湾内での小漁が主である。さらに、水深が浅いため冬場は網漁を停止していたことも指摘されている（梶嶋 2018）。

さて、漕艇を伴う漁撈活動を行っていた諸集団が、汎世界的に共通する MSMs パターンを示すことは様々な研究で指摘されている（Hawkey and Merbs 1995; Stirland 1998; Steen and Lane 1998;

Eshed et al. 2004; Lieverse et al. 2009)。例えば中世の主漁従農民（吉母浜遺跡）においては、艀を主体とし櫂を併用する手漕ぎを行っていた可能性が高く、これら先行研究と共通する特徴として、肋鎖靱帯の発達、それに次いで大胸筋・大円筋・広背筋・三角筋が発達することを指摘しており、これは漕艇活動の際の肩関節の急速・反復的な回旋運動の結果が一因であると指摘した（米元 2012）。箱崎遺跡の人々に関しては肋鎖靱帯のスコアは確かに高いが大胸筋のスコアの方がそれよりも高いため、MSMs パターンとして主漁従農民（吉母浜遺跡）との類似性は低い。さらに、同集団では、上肢に負荷が偏る点や下肢の中では下腿より大腿骨に負荷が偏ることも指摘されている（米元 2012）。舟上でバランスをとる動作において腸腰筋や大腿粗線筋群、大臀筋は、上体や骨盤、股関節を安定させることに使用されるために、下腿の筋よりも大腿の筋のほうが発達し、その負荷は上肢と比較するとやや劣るものであった可能性がある。箱崎遺跡の男女の MSMs パターンに関しては上肢のほうが下肢よりも発達している傾向はあるが、下肢のパターンに関しては主漁従農民の吉母浜遺跡のような大腿骨に偏る傾向はみられない。

さらに、漁撈民の場合、近代に至るまで多くの漁撈民が、女性が舟に乗るという行為を禁忌とする（桜田 1980b）ことが指摘されており、この分業形態は、桜田（1980a）によって漁撈に従事する村落において一般的に見られる風習であると述べられている。さらに男女の分業が確立していた漁村では女性の多くは耕地を耕したり、背後農村への農繁手助（桜田 1980a）、また、海草を干したり、網引きの手伝いも行っていたと指摘されている（須藤 1988）。その他、女性が、男性によって獲られた魚を売る仕事を担当する場所も特に西日本には多かったと指摘されている（宮本・河野 1974）。高田（2002）においても福岡藩の各所に存在する浦では男性が漁をし、女性は商いに出る、干し鰯作りを担う、少女時代に農村に奉公に出るなどを行っていたことが指摘されている。このように一般的に浦では船に女性が乗ることを禁忌とすることによって生じる男女の活動区分が明瞭であり、このことと関連して漁撈活動に従事する集団の MSMs の性差は明瞭に析出される（米元 2012）。しかし、箱崎遺跡出土人骨に関しては MSMs パターンの男女差は明瞭ではない。

MSMs の結果から、まずその專業度の低さを指摘する。縄文時代の各集団と MSMs パターンやその全体的な負荷の強さが類似することから、おそらく箱崎遺跡の人々においても專業的な漁民ではなく多様な活動に従事した可能性がある。さらに中世の主漁従農集団である吉母浜と MSMs の傾向が異なることから漁法や対象とした魚種の差が考えられる。吉母浦では漕ぎ（手釣り）・延縄・網漁・磯見が行われていたと考えられており（伊藤 1985a・b）、外洋に出る頻度や釣りやほこ突きなどの漁撈活動を行っていたか、網漁がメインであったか等の細かい漁法の差も生じていると言える。箱崎浦において漁船は確認されているが博多湾内での漁撈が主であり、さらに、博多湾では伝統的に小漁が中心で、水深が浅いため冬場は網漁を停止していたことも指摘されている（梶嶋 2018）。船での活動負荷よりも網を引くなど男女の区分が出にくい行為による活動負荷の方が高い、冬場の網漁の停止時において漁撈活動以外の活動に男女ともに従事している、中には雇われの水夫として定着する者もあった、など漁撈活動の特殊性、浦内部における活動区分が生じており、墓地を共有する集団全体として漁撈への專業化がなされていなかった可能性はあろう。さらに、季節的な活動の変化があったことによって MSMs パターンの男女差が確認されなかった可能性も考えられる。

さらに、箱崎遺跡において女性の MSMs のスコアの高さが顕著である。スコアの全体的な発達傾向は比べられないほど低い、百姓層（原田村）の一つの特徴として MSMs スコアで男女がパターンはわずかに異なりつつもスコア全体としては拮抗している点がある（第14図）。このような傾向は、農業における労働の負荷の男女の均質さと、中でも田植えや脱穀を担うのは主に女性であり、田お

第11表 ハリス線の検討を行った集団

遺跡名	古野	原口	瑞穂	箱崎	原田
関連する家名	大庄屋 高原家	関・船越・安川家	不明	不明	
墓地の属する村名	乙金村		瓦田村	箱崎村	原田村
享和から明治期の村位※	中村		上村	—	上上村
現在の行政区	大野城市			福岡市	筑紫野市
女性	5	6	28	42	54
男性	4	11	27	65	66
不明	14	33	36	121	29
判定不能 (乳幼児・小児)	4	2	2	14	20
総計	27	52	93	242	169

※農業生産量に恵まれた村とされ年貢率が高くなる

こしを主に行うのは男性であるといった性に基づく分業に拠って生じている可能性が考えられよう。縄文時代や弥生時代の各集団や中世の主漁従農民（吉母浜遺跡）では男性と女性の MSMs スコア全体の差がみられるのに対して、原田遺跡では男性と女性の MSMs の全体的な発達に拮抗する傾向を示す。箱崎遺跡でも男女ともに著しい発達を見せる。一方で江戸市中に住む各階層の男女差は明瞭で、ほかの時代と大きく変わらない。この結果は、江戸時代における女性の労働への関わり方を考える上で重要な結果の1つとなる可能性がある。近世の女性史研究の中で菅野（1982）は、近世前期の小農家族内での女性労働は田植えと脱穀及び家事程度のものであり、19世紀以降に女性の農作業への多局面への関連が認められ、女性労働の社会的地位が上昇したと述べている。これに対し長島（1993）は、近世の農書では女性労働に関する記述が除外されることを指摘した。そして近世には稲作だけをみても男性のほぼ三分の二の割合で女性も作業に従事するようになり、その上で家事や畑作業などを行っていたことを指摘している（長島 1993）。また、『農業図絵』を検討し、近世の前期において、耕起作業や代掻き以外の仕事には女性も男性と同程度に関わり、さらに、家事の面では常に女性は男性をもてなす側であったため、田植え後の休日も給仕を行う女性の姿が描かれていることを指摘している。高田（2002）においても福岡藩の各所に存在する浦では男性が漁をし、女性は商いに出る、干し鰯作りを担う、少女時代に農村に奉公に出るなどを行っていたことなど、女性の労働の多様さとその関連性が指摘されている。近世百姓層の男女の MSMs が近似するという結果と合わせて箱崎遺跡の女性の MSMs スコアの発達の強さも、長島（1993）の指摘するような近世の性別役割分業に起因する可能性がある。漁撈活動も行っていた箱崎では女性が船に乗ることを禁忌とすることや、男女間の生物学的な性差に起因する発達度の違いによって男女間でスコア全体の差はあるが、一次産業に従事する集団の中で女性の労働が極めて重要かつ男性に匹敵するほど重いものになっていたことを示すのではないかと考える。

6. ハリス線（Harris Lines）

MSMs の検討から身体活動の負荷の高さが明らかになったが、その負荷の強さと関連する可能性がある栄養・健康状態を検討する。遺跡から発掘される古人骨の栄養・健康状態を明らかにするために、エナメル質減形成やクリブラ・オルビタリアなど様々な方法が用いられてきた。これらは一般的にストレスマーカーと呼ばれている。その中で、ハリス線（Harris Lines あるいは Park-Harris Lines）は長管骨の骨幹部または骨端部に生じる横線（transverse lines）として定義され（Eliot、

第12表 ハリス線の出現頻度

	古野		原口		瑞穂		箱崎	
出土人骨総数／観察可能個体数	27	7	52	11	93	17	242	33
N	7		11		17		33	
Present	1		2		6		16	
%	14%		18%		35%		48%	

Southern and Park 1927; Harris 1933)、通常 X 線画像で可視化される。その多くが2－3歳の段階で形成され、加齢的に減少して多くの場合消失する（Georgiadis and Gannon、2022、Hirata 1993、古賀 2002など）とされているが、成人でもなお残存して観察されるものも認められ（Hummert and Van Gerven 1985；猪口ほか 1998）、その出現頻度をもって集団の栄養・健康状態の考証に用いられてきた（Allison et al., 1974; Alfonso-MP et al., 2005; Alfonso-Durruty 2011; Nowak and Piontek 2002 など）。

ハリス線の発生要因としては、栄養障害（栄養失調、蛋白質、ビタミン、ミネラルの欠乏）（Steinbock 1976）、天然痘、肺炎などの病歴、食中毒、アルコール依存症、児童虐待（猪口ほか 1998）、全身発症型若年性特発性関節炎（Sifuentes Giraldo et al., 2016）、拷問、カスパー・ハウザー症候群（Khadilkar et al., 1998）、骨粗鬆症、副甲状腺機能亢進症／低下症、硬化症、脊椎症、放射線被曝、クッシング症候群、くる病、血管壊死、先天梅毒、パジェット病、白血病、壊血病、骨折などが挙げられている。Sajko et al. (2011) では骨成長が再開するとハリス線が形成され、軟骨の増殖と骨芽細胞活性の亢進が横線の肥厚と形成に寄与することが指摘されており、成長阻害線ではなく成長再開線とみる見解もある。動物実験によってハリス線の発生メカニズムが説明されている研究（Duckler and Van Valkenburgh 1998; Park 1964など）や、被虐待児の事例など臨床例（猪口ほか 1998）もあるが、健康児や健康ストレスの無い成長期の実験動物にも認められる場合があり、栄養状態というよりもむしろ成長期の影響を示すだけのものなのではないかという指摘（Papageorgopoulou et al., 2011；Alfonso-Durruty 2011）もあり、必ずしも要因が確定的ではないことにも注意が必要である。

古人骨を対象とした場合、残存状態の偏りなどの問題から個体の評価については難しい点があるが、集団間での栄養・健康状態の指標の一つとして用いることはできよう（Allison et al., 1974など）。日本の古人骨を対象にした研究では北條（1969・1985）、平田（1995）、古賀（2002）が挙げられる。Hirata（1993・1995）は一橋高校遺跡出土の江戸時代人骨の大腿骨を観察し、成人25%、小児62%に確認されたと述べ、当時の江戸の生活環境の劣悪さを指摘した。その他、古賀（2002）は西南日本出土の縄文時代から現代にいたる人骨683体を対象とし、その時代変化を明らかにした点で重要である。この研究では、縄文時代人骨の頻度が低く（30.8%）、弥生時代（36.5%）、古墳時代（55%）、中世（47.4%）、近世（52.6%）、現代（49.1%）と時代によって変化していくこと、特に古墳時代以降に高頻度でハリス線が確認されていることが指摘されている。中でも江戸時代（近世）は原田遺跡で56.1%、天福寺で49.1%と、一橋高校遺跡出土の古人骨のハリス線出現頻度（25%）と比べてもはるかに頻度が高い。この差については観察者間誤差を考慮する必要がある、あくまで予察としてはあるが、江戸時代の首都と地方都市の差、福岡藩における飢饉に対する対応の悪さの表れではないかと指摘している。これについてさらに検討するために、米元（2024）では大野城市域出土人骨についてハリス線の出現頻度を検討した。その結果、乙金村の墓地である古野遺跡・原口遺跡はハリス線の出現頻度が低く（14%・18%）、瑞穂遺跡（瓦田村）は高い（35%）ことを明らかにした。この結果から古野遺跡・原口遺跡は観察個体数が少ないために生じるサンプリングエラーの可能性もあるが、農

民（百姓）の階級分化の結果である可能性も指摘し、この点をさらに検討するためには福岡県内での資料の増加が必須であると述べた。そこで箱崎遺跡出土人骨のハリス線の出現頻度の検討を行った。比較資料としては大野城市内の3遺跡、筑紫野市の原田遺跡であり、各遺跡の男女比・年齢などの内訳は第11表に示したが詳細について米元（2024）を参照されたい。ハリス線の観察はNikon社のCT機器XF-H320（JP21H22水共生学）を用いた。対象部位は脛骨である。

箱崎遺跡出土人骨のハリス線の出現頻度を調べたところ（第12表）、48%と約半数の個体で確認された。これは大野城市の古野遺跡や原口遺跡、瑞穂遺跡出土の古人骨で確認されたよりも多い。古野遺跡は乙金村の大庄屋に就任した高原家係累の墓地の可能性が高く、原口遺跡は関・船越・安川などを苗字とする被葬者の名前が確認されており、とくに古野遺跡出土人骨のハリス線出現頻度の低さはその身分とも関連することが示唆されている。瑞穂遺跡の瓦田村は村位が高いことにより農作物が相対的にとれない年も多くの年貢を納める必要があった可能性が高く、一般農民層の生活が困窮していた可能性も指摘できる。一方で、原田遺跡のハリス線出現頻度56.1%（古賀 2002）は瑞穂遺跡よりも高い。これは観察した機械の解像度の差による可能性も捨てきれない。しかし、原田村は瓦田村よりもさらに村位が高い（上上村）が、天保4－9（1833～1838）年の原田村における難渋百姓（生活難に苦しんでいる百姓）は81家、仮成百姓（何とか暮らしていける百姓）は47家と記されており（近藤 1999）、（明治初期の時点で旧原田村は246戸）、この村の百姓の栄養・健康状態を正確に反映している可能性もある（米元 2024）。

箱崎遺跡は、この中では瑞穂遺跡（瓦田村）よりも頻度が高く、原田遺跡（原田村）よりも頻度が低いわけである。当地には博多湾を漁場とする箱崎浦が存在し網漁を中心とした漁業従業者が多く存在したことが知られる（梶嶋 2018）。古野遺跡や原口遺跡のような、相対的に身分の高い人々ではなかったことがわかる。原田村が特異にハリス線の出現頻度が高いかどうかは他の農村部出土人骨の検討を行う必要があるだろうが、箱崎村の人々の栄養・健康状態は相対的に悪く、これは漁撈活動を行いつつ季節的に異なる生業に従事した人々、さらに雇水夫などを含む集団の生活状態と百姓の人々の生活状態の違いと関連する可能性もあろう。

7. おわりに

本研究では、箱崎遺跡出土人骨（HZK1801地点・HZK2007地点）の年齢・性別構成および頭蓋形質、四肢骨形質、MSMs、ハリス線の検討を行い、集団的特徴を明らかにするとともに、他地域、他階層との比較からその社会的背景や形質的特異性について考察した。

年齢構成に関しては、未成人の割合が極めて低く、熟年から老年にかけての個体が多いという特徴がみられた。この傾向は、福岡県内の原田遺跡や博多遺跡とも共通しており、江戸市中の遺跡にみられる未成年の高比率とは対照的であった。こうした違いは、都市としての形成過程や社会的背景、さらには埋葬地の分離や墓地移転などの影響を受けている可能性が高いと考えられる。

頭蓋形質の分析においては、箱崎遺跡出土人骨（HZK）は男女共に長頭傾向と高顔傾向を示し、江戸市中の庶民層や福岡県内の近世集団とも共通する特徴を有していた。一方で、将軍家や大名家に代表される上位階層では短頭・高狭顔傾向が顕著であり、階層による頭蓋形質の差異が明確に認められた。これらの違いは地域差を超えて階層間で差が出ることから婚姻様式や生活環境、栄養状態の相違に起因する可能性が高い。また、HZK2007地点 ST109のように一部に上位階層に類似する形質をもつ個体が存在することから、庶民層の中にも形質的なヴァリエーションが一定程度存在していたこ

とも確認された。このようなヴァリエーションの出現は、婚姻圏の広がりや居住地域の歴史的背景、社会的交流のあり方とも深く関わっていた可能性がある。箱崎が街道沿いの宿場町としての機能を果たしていたことも、このような個体の存在と無関係ではないだろう。

MSMs に関しては、男性・女性ともにスコアが総じて高く、全身的に筋付着部が発達している可能性があらかになった。縄文時代の集団と同程度、あるいはそれ以上の身体的負荷が、日常的に加わっていたことを示唆している。さらに特筆すべきは、MSMs パターンにおける男女差が極めて小さいことである。一般に、MSMs 分析では男性のスコアが高く、明確な性差が見られることが多いが、箱崎遺跡では女性のスコアが非常に高く、縄文時代男性と同程度に達していた。これは、女性も男性と同様に、日常的に重い身体的労働を担っていたことを示している。以上の特徴から、箱崎集団は特定の生業に特化した「専門的」な集団ではなく、博多湾での漁撈を中心に、季節などに応じてその他の労働も行う、多様な労働に家族単位で携わっていた可能性が高い。特に労働における女性への偏重がみられ、これは、家父長制社会において一次産業に従事する集団中で女性の労働が極めて重要かつ男性に匹敵するほど重いものになっていたことを示すのではないかと考える。

最後に、箱崎遺跡出土人骨のハリス線出現頻度を分析した結果、48% と半数近い個体に確認された。この値は、瑞穂遺跡よりも高く、原田遺跡よりもやや低い。原田村が特異にハリス線の出現頻度が高いかどうかは他の農村部出土人骨の検討を行う必要があるだろうが、箱崎村の人々の栄養・健康状態は相対的に悪く、これは漁撈活動を行いつつ季節的に異なる生業に従事した人々、さらに雇水夫などを含む集団の生活状態と百姓の人々の生活状態の違いと関連する可能性を指摘した。

本研究を通じて、近世における人骨形質には地域性以上に階層性が色濃く反映されていたことが改めて確認された。江戸時代の社会構造や都市化の影響が個体の形態に及ぼした影響を、今後も広範な資料をもとに検討することで、現代日本人の形質的形成過程の一端を解明できる可能性がある。

謝辞

人骨の発掘および本報告を行うにあたり、九州大学埋蔵文化財調査室室長（当時）の宮本一夫先生、室長の辻田淳一郎先生、谷直子氏、九州大学総合研究博物館の福永将大氏、比較社会文化研究院の舟橋京子氏に多くのご配慮・ご助言を賜りました。深謝いたします。埋蔵文化財調査室員の方々には校正の際に様々なご助言を頂きました。心より感謝いたします。

また、本出土人骨のクリーニング作業に地球社会統合科学府基層構造講座の大学院生諸氏、人文科学府考古学研究室所属の学部生諸氏、共創学部所属の学部生諸氏に多くの協力をいただきました。記して謝意を表します。

〔参考文献〕

- Alfonso MP., Thompson JL., and Standen VG. 2005 Re-evaluating Harris Lines—a comparison between harris lines and enamel hypoplasia. *Coll Antropol* 29: pp.393-408
- Allison MJ., Mendoza D., and Pezzia A. 1974 A radiographic approach to childhood illness in precolumbian inhabitants of southern Peru. *Am J Phys Anthropol* 40: pp.409-415
- Alfonso-Durruty MP 2011 Experimental assessment of nutrition and bone growth's velocity effects on Harris lines formation. *American Journal of Physical Anthropology*, 145: pp.169-180
- 阿部英世 1955「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2 pp.121-166
- 有田和樹 2018「箱崎宿と箱崎御茶屋」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版、pp.102-121
- 安室知 1992「存在感なき生業研究のこれから」『日本民俗』190、pp.38-55

- 馬場悠男 1991「人体計測法 II 人骨計測法」人類学講座編纂委員会（編）『人類学講座』別巻1、雄山閣出版
- 馬場悠男・坂上和弘 2012「第4章第1節 寛永寺徳川將軍親族遺体の形態学的研究」寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団（編）『東叡山寛永寺 徳川將軍家御裏方靈廟』吉川弘文館 pp.223-394
- Brooks S., and Suchey JM., 1990 Skeletal age determination based on the os pubis: a comparison of the Acsadi-Nemeskeri Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5: pp.227-238
- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H., 1994 Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. *Arkansas Archeological Survey Research Series*, No.44. Fayetteville, Arkansas.
- Cardoso FA., Henderson CY., 2010 Enthesopathy formation in the humerus: Data from known age-at-death and known occupation skeletal collections. *Am J Phys Anthropol* 141 : pp.550-560
- Doi N., and Tanaka Y., 1987 A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Skulls Western Japan. 『人類学雑誌』 19-3
- Duckler GL., and Van Valkenburgh B. 1998 Exploring the health of late Pleistocene mammals: the use of Harris lines. *Journal of Vertebrate Paleontology*. 18 (1): pp.180-18.
- Eliot MM., Souther SP., and Park E. 1927 Transverse lines in x-ray plates of the long bones of children. *Bulletin of the Johns Hopkins Hospital*, 41: pp.364-388
- Eshed V., Gopher A., Galili E., and Hershkovitz I. 2004 Musculoskeletal stress markers in Natufian hunter-gatherers and Neolithic farmers in the Levant: the upper limb. *American Journal of Physical Anthropology*, 123 pp.303-315
- 現代日本人頭骨研究班（編）1983『現代日本人の地理的変異に関する総合調査』
- 福岡地方史研究会（編）1999『福岡藩分限帳集成』海鳥社
- Georgiadis A.G. and Gannon P.N. 2022 Park-Harris Lines. *Journal of the American Academy of Orthopaedic Surgeons*, 30-23: pp.1483-1494
- Goodman A.H., Martin D.L. and Armelagos G.J., 1995. The biological consequences of inequality in *prehistory*. *Rivista di Anthropologia (Roma)*. 73: pp.123-131.
- 芳賀友博（編）2005『茨城県教育財団文化財調査報告250：村松白根遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 浜野潔 2011『歴史人口学で読む江戸日本』吉川弘文館
- 埴原和郎 1984『日本人の起源』、朝日選書
- Harris H. 1933 Bone growth in health and disease. London: Oxford University Press.
- 蓮田賀子・舟橋京子・米元史織・米山玲緒・高橋寛宇 2025「博多遺跡第221次調査に伴う出土近世人骨の埋葬状態と形質の特徴」福岡市教育委員会（編）『博多遺跡群第221次調査IV区・V区・VIII区・IX区・XI区の概要』福岡市教育委員会、pp.225-276.
- 原田忠昭 1954「西南日本人頭蓋骨の人類学的研究」人類学研究発行所（編）『人類学研究1』 pp.11-51
- 原田昭一 2018「中世墓から近世墓へ—九州地方の所様相—」中世葬送墓制研究会（編）『中世墓の終焉と石造物—研究総括報告会発表資料集—』科学研究費基盤（B）「日本中世における葬送墓制に関する総括的研究」（研究代表者：狭川真一）、pp.119-137
- Hawkey DE. and Merbs CF., 1995. Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. *International Journal of Osteoarchaeology*, 5: pp.324-338
- 速水融 2000『歴史人口でみた日本』文春新書
- 平本嘉助 1972「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代変化」『人類学雑誌』第80巻第3号 日本人類学会、pp.221-236
- 平本嘉助 2001「江戸時代人の形質と構成」江戸遺跡研究会（編）『図説江戸考古学研究事典』柏書房、pp.146-151
- 平本嘉助 2004「江戸時代人の身長と棺の大きさ。」江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、pp.201-223
- Hirata K. 1993 Harris's lines femurs of Edo and Modern Japanese. *St. Marianna Med J* 21: pp.298-304
- 平田和明 1995「古病理学的ストレスマーカー」『聖マリアンナ医科大学雑誌』第23巻2号 聖マリアンナ医科大学医学部、pp.105-113
- 金関丈夫 1962 弥生時代人 日本の考古学3 弥生時代 河出書房 東京（金関丈夫 日本民族の起源 法政大学出版局、pp.98-114に再掲）

- 金関丈夫 1966「弥生文化における諸問題（弥生時代人）」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社
- 金高勘次 1928「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』43, pp.497~736
- 北條暉幸 1969「熊本県菊池郡七城村小野崎家型石棺（古墳時代）人骨について」熊本醫學會（編）『熊本醫學會雑誌』43巻1号 熊本醫學會事務所、pp.37-46
- 北条暉幸 1985『X線不透明横線（ハリスの線）による古代（縄文時代）から現代に至る人類生態学的研究（予報）』産業医科大学第一解剖学教室業績刊行会、pp.1-24
- Hummert JR., and Van Gerven DP. 1985 Observations on the formation and persistence of radiopaque transverse lines. *American Journal of Physical Anthropology*, 66: pp.297-306
- 井汲隆夫 1991「内部施設と葬法」新宿区南元町遺跡調査会（編）『發昌寺跡—社団法人金融財政事情研究会新館建設に伴う第2次緊急発掘調査報告書—』新宿区南元町遺跡調査会、pp.135-138
- 井之口章次 1977『日本の葬式』筑摩書房
- 猪口清一郎・塚本哲也・松丸信一・斉藤弘 1998「被虐待幼児の長管骨に見られた横線（Harris）」『昭和医学会雑誌』第58巻第6号 昭和大学学生会、pp.487-492
- 伊藤彰 1985a「Ⅰ. 吉母浜の概観 Ⅱ 遺跡の立地」下関市教育委員会（編）『吉母浜遺跡』下関市教育委員会、pp.4-10
- 伊藤彰 1985b「漁撈活動・葬制 Ⅶ. 生業と葬制に関する儀礼」下関市教育委員会（編）『吉母浜遺跡』下関市教育委員会、pp.226-245
- 伊東宏 1979「人骨改葬を伴う愛知県渥美町（高木）と旭町（浅谷）の両墓制」『葬送墓制集成』第1巻 名著出版、pp.277-280
- 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』六興出版、pp.61-94
- Jurmain R., and Villotte S., 2010. Terminology. *Entheses in medical literature and physical anthropology: a brief review [online]*. Document published online on 4 February following the Workshop in Musculoskeletal Stress Markers (MSM): limitations and achievements in the reconstruction of past activity patterns, University of Coimbra, July 2-3, 2009. Coimbra, CIAS-Centro de Investigação em Anthropologia e Saúde. [Accessed 25 June 2010]. Available at: http://www.uc.pt/en/cia/msm/MSM_terminology3.
- 梶嶋政司 2018「近世の箱崎浦と博多湾」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版、pp.94-101
- 梶ヶ山真里・佐宗亜衣子・大谷江里・白波瀬亜由実・阿部仁・馬場悠男 2003「八丁堀三丁目遺跡（第2次）出土人骨」八丁堀三丁目遺跡（第2次）調査会（編）『東京都中央区八丁堀三丁目遺跡—中央区八丁堀三丁目20番 宿泊施設建設に伴う緊急発掘調査報告書—』山万株式会社、pp.220-228
- 欠田早苗 1959「畿内人頭蓋骨の人類学的研究—現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について—」新潟大学医学部解剖学教室（編）『人類学輯報』第25輯 新潟大学医学部解剖学教室人類学輯報発行所、pp.53-83
- 菅野則子 1982「農村女性の労働と生活」女性史総合研究会（編）『日本女性史』第3巻 東京大学出版会、pp.63-94
- 加藤征 1991『江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究』平成2年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告
- 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦 2011「第7章1：東畑瀬遺跡9区から出土した人骨について」佐賀県教育委員会（編）『東畑瀬遺跡3 東畑瀬遺跡6G・7・9区—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6—』佐賀県文化財調査報告書190 佐賀県教育委員会、pp.218-239
- 河本美夫 1959「久世家歴代の頭骨に就いて：第2部頭蓋観察」金関丈夫（編）『人類学研究』第6巻第4号 九州大学医学部解剖学教室人類学研究所、pp.341-400
- Khadilkar VV., Frazer FL., Skuse DH, and Stanhope R. 1998 Metaphyseal growth arrest lines in psychosocial short stature. *Archives of Disease in Childhood*, 79: pp.260-262
- 鬼頭宏 1983『日本二千年の人口史』PHP 研究所
- 鬼頭宏 2007『図説：人口で見る日本史』PHP 研究所
- 古賀英也 2002「西南日本古代人のストレスマーカー 1, ハリス線について」『人類学雑誌』*Anthropol Sci.*, 110 日本人類学会、pp.71-87
- 小浜基次 1960「生体計測学的にみた日本人の構成と起源に関する考察」『人類学研究』第7巻、pp.56-65.
- Kouchi, M., 1983: Geographic variation in modern Japanese somatometric data and its interpretation The Univ. Mus. The Univ. Tokyo, Bulletin22.

- 金宰賢・田中良之 1993「笠松遺跡火葬墓出土人骨」大分県教育委員会（編）『笠松遺跡——一般国道10号線宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書（1）——』大分県教育委員会、pp.43-53
- 清野謙次・宮本博人 1926「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部 頭蓋骨の研究」『人類學雜誌』第41卷第3号 日本人類学会、pp.95-140
- 九州大学医学部解剖学第二講座（編）1988『日本民族・文化の生成2』九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版
- 近藤典二 1999「第4章第4節 街道と宿駅」筑紫野市史編さん委員会（編）『筑紫野市史下巻 近世・近現代』pp.289-434
- Lieverse A.R., Bazaliiskii V.B., Goriunova O.I., and Weber A.W. 2009 Upper limb musculoskeletal stress markers among middle Holocene foragers of Siberia's Cis-Baikal region. *American Journal of Physical Anthropology*, 138: pp.458-472
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. 1985 Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68, pp.15-28.
- Martin, R., Saller, K., *Lehrbuch der Anthropologie*. Fischer, Stuttgart. 1957
- 松下孝幸 1981「大友遺跡出土人骨の研究（1）大友遺跡出土の弥生時代人骨」呼子町教育委員会（編）『大友遺跡——呼子町文化財調査報告書第1集——』呼子町教育委員会、pp.223-253.
- 松下孝幸 1993「北九州市京町遺跡出土の近世人骨」北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室（編）『京町遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第59集 北九州市教育委員会、pp.177-248
- 松下孝幸 1995「北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨」北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室（編）『宗玄寺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集 北九州市教育委員会、pp.500-542
- 松下孝幸 2005「開善寺跡出土の近世人骨」北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室（編）『開善寺跡——デオデオ小倉本店建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告——』北九州市埋蔵文化財調査報告書第340集 北九州市教育委員会、pp.146-175
- 松本健 1990「江戸の墓制——埋葬施設にみられる武家社会——」『文化財の保護』22: pp.153-168
- 皆川修（編）2007『茨城県教育財団文化財調査報告284：村松白根遺跡』財団法人茨城県教育財
- 宮本常一・河野通博 1974「漁村と港町（対談）」宮本常一・川添登（編）『日本の海洋民』未来社、pp.82-101
- 武蔵野美術大学生活文化研究会 1974「日本の漁業——人と技術の分布・伝播——」宮本常一・川添登（編）『日本の海洋民』未来社、pp.209-235
- Mariotti V., Facchini F., and Belcastro MG., 2004. Enthesopathies- proposal of a standardized scoring method and applications. *Collegium Antropologicum* 28: pp.145-159
- 森田茂 1950「関東地方人頭蓋骨の人類学的研究」『東京慈恵医科大学解剖学教室業績集3輯』東京慈恵会医科大学、pp.1-54
- 森山栄一 2001「2. 原田宿と長崎街道. 第2部第7章近世」筑紫野市史編纂委員会（編）『筑紫野市史 資料編（上）考古資料』筑紫野市、pp.735-753
- 森山栄一（編）2003『原田第1・2・40・41号墓地 上巻——原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告——』筑紫野市文化財発掘調査報告書第77集、筑紫野市教育委員会
- 長島淳子 1993「働く農村の女たち——加賀『農業図絵』を読む」林玲子（編）『近世の女性』第15巻 中央公論社、pp.227-260
- 内藤芳篤 1971「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類學雜誌』第79巻 日本人類学会、pp.236-248
- 中橋孝博・永井昌文 1985「VI. 人骨」下関市教育委員会（編）『吉母浜遺跡』下関市教育委員会、pp.154-225
- 中橋孝博 1987「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」『人類學雜誌』第95巻1号 日本人類学会、pp.89-106
- 中橋孝博・永井昌文 1989「弥生人の形質、男女差、寿命」『弥生文化の研究1』雄山閣出版
- 中橋孝博 1993「福岡県筑紫野市、隈・西小田地区遺跡群出土の弥生時代人骨」筑紫野市教育委員会（編）『隈・西小田地区遺跡群——隈・西小田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報——』筑紫野市文化財調査報告書第38集 筑紫野市教育委員会、pp.1-47
- 中橋孝博、土肥直美 2006「第四章 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨」森山栄一（編）『原田第1・2・

- 40・41号墓地 下巻一原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書3一』筑紫野市文化財調査報告書第90集 筑紫野市教育委員会、pp.195-220
- 中井歩・福永将大・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・舟橋京子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之 2015「古野遺跡第2次調査出土近世人骨について」大野城市教育委員会（編）『乙金区画整理地内埋蔵文化財調査報告書 乙金遺跡群—古野第2遺跡調査—』大野城市教育委員会
- 中間研志 1991『奈良尾遺跡』福岡県教育委員会（編）今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第13集 福岡県教育委員会
- 中山なな 2017『近世墓にみる江戸の子供の生と死』早稲田大学大学院人間科学研究科 博士論文
- 西木浩一 1999『都史紀要37 江戸の葬送墓制』東京都
- 沼田文夫（編）1992『茨城県教育財団文化財調査報告77：沢田遺跡』財団法人茨城県教育財団
- Nakayama N. 2016 The relationship between linear enamel hypoplasia and social status in 18th to 19th century Edo, Japan. *International Journal of Osteoarchaeology*, 26: pp.1034-1044
- Nakayama N. 2019. Diachronic changes in linear enamel hypoplasia during the Edo period (1603-1867), Japan. *Anthropological Science*, 127: pp.27-38
- Nowak O., and Piontek J. 2002 The frequency of appearance of transverse (Harris) lines in the tibia in relationship to age at death. *Annals of Human Biology*, 29: pp.314-325
- 小野千吉郎 1987「久世家歴代の頭骨に就いて 第一部 頭蓋計測」『人類学雑誌』第95巻 日本人類学会、pp.89-106
- 岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之 2004「稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨」竹田市教育委員会（編）『国道502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』竹田市教育委員会、pp.262-323
- 岡美詠子・中橋孝博 1997『西新開遺跡—福岡県大川市所在遺跡の発掘調査報告書—』大川市文化財調査報告書第4集 大川市教育委員会（編）、大川市教育委員会
- 大野城市教育委員会（編）2017『薬師の森遺跡第43次・善一田遺跡第6・7次・古野遺跡第7次調査』大野城市文化財調査報告書第146集 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書19・乙金地区遺跡群19、大野城市教育委員会
- Papageorgopoulou C., Suter SK., Rühli FJ., and Siegmund F., 2011 Harris lines revisited: prevalence, comorbidities, and possible etiologies. *American Journal of Human Biology* 23: pp.381-391
- Park EA. 1964 The imprinting of nutritional disturbances on the growing bone. *Pediatrics*. 33 (5): pp.815-861
- Phenice J.W. 1969. A newly developed method of sexing the pelvis. *American Journal of Physical Anthropology* 30: pp.297-301
- 高田茂廣 2002「第7編 近世中期の郡・浦社会の支配と変化」西日本文化協会（編）『福岡県史通史編 [4]（福岡藩2）』、福岡県、pp.683-716
- 高椋浩史 2021「九州における古墳時代人骨の四肢骨形態の研究」岩永省三先生退職記念事業会（編）『持続する志（上）岩永省三先生退職記念論文集』中国書店、pp.407-426.
- 高椋浩史・米元史織 2023「第3章 なぜ人骨の形態に地域差が生じたのか」『市民の考古学18 古墳時代の親族と地域社会』同成社、pp.61-88
- Sakaue K. 2006. Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science*, 114, pp.59-64
- Sakaue K. 2012. Craniofacial Variation among the Common People of the Edo Period. *Bull Natl Mus Nat Sci. Ser D* 38: pp.39-49
- 桜田勝徳 1980a「Ⅰ. 漁人の世界」『桜田勝徳著作集 2 漁民の社会と生活』名著出版、pp.3-258
- 桜田勝徳 1980b「Ⅱ. 漁民の社会生活」『桜田勝徳著作集 2 漁民の社会と生活』名著出版、pp.259-358
- 坂田邦洋 1996『比較人類学』青山社
- Sajko S., Stuber K., and Wessely M. 2011 Growth restart/recovery lines involving the vertebral body: a rare, incidental finding and diagnostic challenge in two patients. *The Journal of Canadian Chiropractic Association*, 55: pp.313-317
- 須藤功（編）1988『写真でみる日本生活図引2 とる・はこぶ』弘文堂
- 鈴木尚 1985a『骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと』東京大学出版会

- 鈴木尚 1985b「江戸時代における貴族形質の顕現」『人類学雑誌』第93巻1号 日本人類学会、pp.1-32
- 鈴木尚 1956『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』日本人類学会（編）、岩波書店
- 鈴木尚・佐倉翊・林都志夫・田辺義一・今井義量 1962「東京都芝白金、旧海軍墓地に埋葬された江戸末、明治初年の日本人頭骨」『人類学雑誌』第22巻 日本人類学会、pp.47-62
- Sifuentes Giraldo W., Boteanu A. and Gamir Gamir M. 2016 Park-Harris growth arrest lines associated with systemic-onset juvenile idiopathic arthritis. *Austin Journal of Musculoskeletal Disorders* 3: p.1030
- Steinbock RT. 1976 Paleopathological diagnosis and interpretation: bone diseases in ancient human populations. Springfield Illinois USA: Charles C Thomas Pub Limited.
- Stirland A.J. 1998 Musculoskeletal evidence for activity: problems of evaluation. *International Journal of Osteoarchaeology* 8 pp.354-362
- Steen S.L. and Lane R.W. (1998) Evaluation of habitual activities among two Alaskan Eskimo populations based on musculoskeletal stress markers. *International Journal of Osteoarchaeology*, 8 pp.341-353
- T. Wingate Todd 1920 Age changes in the pubic bone. I. The male white pubis Volume3, Issue3 pp. 285-334
- 田口哲也 2009「関東の近世墓」『考古学雑誌』第93巻第3号 日本考古学会、pp.169-216
- 田口哲也 2013「村の墓」土生田純之（編）『事典 墓の考古学』吉川弘文館、pp.290-293
- 田中祐介 1996「IV 女狐近世墓地」大分県教育委員会（編）『机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群—九州横断自動車道（別府～大分間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 大分県教育委員会、pp.39-272
- 田中良之 1985「IV 層序と遺構 3 中世の遺構」下関市教育委員会（編）『吉母浜遺跡』下関市教育委員会、pp.31-100
- 谷川章雄 1987「第5章 第5節 自證院遺跡における墓標と埋葬施設」自證院遺跡調査団（編）、『自證院遺跡—新宿区富久小学校改築工事に伴う緊急発掘調査』東京都新宿区教育委員会、pp.188-194
- 谷川章雄 2004「江戸の埋葬施設と副葬品」江戸遺跡研究会（編）『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、pp.224-250
- 栃原博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」熊本醫學會（編）『熊本醫學會雑誌』31巻 熊本醫學會事務所、pp.607-656
- Ubelaker, D.H. 1989 *Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation* (2nd Edition). Washington, D.C.: Taraxacum.
- 吉澤悟 2013「火葬土坑・火葬場」土生田純之（編）『事典 墓の考古学』吉川弘文館、pp.252-253
- 吉田寛 1999『中尾近世墓地—国道10号線旦の原交差点拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県教育委員会（編）大分県教育委員会
- 米元史織・高椋浩史・李ハヤン・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩・舟橋京子・田中良之 2013「自然化学分析—福岡県大野城市原口遺跡第4次調査B区出土近世人骨について—」
- 大野城市教育委員会（編）『乙金地区遺跡群7～原口遺跡第1～4次調査～』大野城市文化財調査報告書110 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書7 大野城市教育委員会
- 米元史織・足達悠紀・松尾樹志郎・星野宙也・出見優人・植野律子・Bai Yang・Stephen Nguyen・James Loftus III・日高風海斗・森春奈・小高蒼大・吉村篤也・田渕朱莉・松村祐奈・舟橋京子 2024「箱崎遺跡（HZK1801地点）調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」谷直子（編）『箱崎遺跡—HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室、pp.1-54
- 米元史織・舟橋京子 2024「箱崎遺跡（HZK2007地点）調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」谷直子（編）『箱崎遺跡—HZK1801・2006・2007地点出土人骨編—』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集 九州大学埋蔵文化財調査室、pp.69-142
- 米元史織 2012「生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性」*Anthropological Science (Japanese Series)*、120-1, pp.15-46
- 米元史織 2016a「筋付着部の発達度からみる縄文時代の生業様式の地域的多様性」九州大学総合研究博物館（編）『九州大学総合研究博物館研究報告』第14号 九州大学総合研究博物館、pp.37-57
- 米元史織 2016b「筋付着部の発達度からみる弥生時代の身体活動の地域的多様性」田中良之先生追悼論文集編集委員

- 会（編）『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集 上』中国書店、pp.579-602
- Yonemoto S. 2016 Differences in the effects of age on the development of enthesal changes among historical Japanese populations. *American Journal of Physical Anthropology*. DOI: 10.1002/ajpa.22870.
- 米元史織 2022 「MSMs の時期的変遷からみる江戸時代武士の行動様式の確立」日本考古学協会（編）『日本考古学』第54号 日本考古学協会、pp.65-81
- 米元史織 2024 「近世大野城市域出土人骨の栄養・健康状態に関する検討：ハリス線について」九州大学総合研究博物館（編）『九州大学総合研究博物館研究報告』第21号 九州大学総合研究博物館、pp.53-66
- 米元史織・足達悠希・松尾樹志郎・植野律子・Bai Yang・Stephen Nguyen・小高蒼大・田渕朱莉・松村祐奈・舟橋京子 2022 「瑞穂遺跡 第7・8次調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴」
- 大野城市教育委員会（編）『瑞穂遺跡：第3・4・7・8・10次調査』大野城市文化財調査報告書 第200集 大野城市教育委員会、pp.184-208

IX 箱崎遺跡（HZK2006地点 A 区）調査出土馬について

菊地大樹^{1・2)}

1：蘭州大学歴史文化学院

2：金沢大学古代文明・文化資源学研究所

1. はじめに

福岡県福岡市東区箱崎遺跡 HZK2006地点 A 区は、2020年度に九州大学埋蔵文化財調査室によって発掘調査され、SX01より中近世に属すると考えられる火葬人骨とともに馬が1個体出土した。出土状況を見ると、馬は体躯の軸線を南北に向け、礫上の頭位は南を向き、胴部に向けてやや傾斜して右前肢は伸び、後肢は折り曲げた右側横臥の姿勢で人骨の上層に位置する。人骨との層序関係の詳細については、人骨の分析報告に記されていることから省略するが、馬骨と人骨は全く重なっておらず、埋葬または遺棄に時間差があることがわかる。馬の後頭骨から環椎や軸椎も含めた頸椎部分が認められず胴部と切り離された状態であるが、解剖学的位置関係から同一個体であると考えられる。以下に分析所見を報告する。

2. A 区 SX01出土馬

本遺構からは、右側横臥の姿勢で馬が1個体出土している。頭部と胴部をつなぐ頸椎が認められないうが、解剖学的位置関係から同一個体と考えられる。取り上げられた馬骨を確認したところ、下顎骨（左1）、肩甲骨（左1・右1）、上腕骨（左1）、橈尺骨（左1・右1）、中手骨（左1・右1）、寛骨（左1）大腿骨（左1・右1）、脛骨（左1）が各1点ずつ、そのほか上下顎遊離歯、胸椎と腰椎および頭骨、四肢骨や肋骨の破片も多数確認され、最小個体数は1個体となる。下顎犬歯（左1・右1）が認められることから、オスの個体であることがわかる。

骨の表面は荒れて関節部分は著しく欠損していたため観察は難しいが、部分的に残存する関節部などに解体痕や骨病変は認められず、残存する第二前臼歯（P2）前縁にも明確なハミによる摩滅痕も認められなかった。Driesch（1976）に基づく各計測値は第1表に示す。計測可能であった上腕骨（左）の残存長（GLC）は251.72mmであり、林田・山内（1957）および西中川・松元・本田（1991）から求められる推定体高はおおよそ135cmで中型馬の範囲に収まる。また、上下臼歯の歯冠高計測値から推定される年齢は10～12歳の壮齢馬であった。

3. おわりに

箱崎遺跡 HZK2006地点 A 区 SX01より出土した馬を分析した。箱崎遺跡は砂洲上に形成されていることから、一般的な酸性土壌に立地する遺跡と異なり骨の保存状態は比較的良い。馬骨は発掘調査時に丁寧に取り上げられており、胸椎や腰椎の保存状態を鑑みても頸椎部分だけが先に朽ちたとは考え難く、下層より出土した集積人骨の出土状況を考えると、馬が埋葬または遺棄された後に、頸椎部分が偶然掘り込まれ、人骨が葬られた可能性が想定されよう。人骨の分析報告（谷編 2024）でも指

摘されているように、馬の前後肢ともに基節骨以下が認められない現象が意図的なものかどうかは、馬の西側に展開する浅い掘り込みとの関係も含め考える必要がある。当該遺構（SX01）では多数の火葬または土葬人骨とともに壮齢のオス馬が遺棄されており、当時の箱崎遺跡における家畜利用の様相を考えるうえで大変興味深く、今後の出土事例の増加に期待したい。

参考文献

- 谷直子（編）2024『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告11 箱崎遺跡―HZK1801・2006・2007地点出土人骨編―』九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集
- 西中川駿・松元光春・本田道輝 1991「V. 遺跡出土骨同定のための基礎的研究―とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較―」『平成2年度文部省科学研究費（一般研究B）研究成果報告書 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部、164-188頁
- 林田重幸・山内忠平 1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第6巻 鹿児島大学農学部、146-156頁
- Driesch, A. von den. 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. *Peabody Museum Bulletin* 1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

第1表 HZK2006地点A区SX01出土馬計測値

計測点	計測値	計測点	計測値
上顎臼歯列長（L）	155.94	上腕骨（L）GLC	251.72
下顎臼歯列長（L）	159.66		

歯種	計測値			歯種	計測値		
	歯冠長	歯冠幅	歯冠高		歯冠長	歯冠幅	歯冠高
上顎第二前臼歯（P2）	35.48	21.15		下顎第二前臼歯（P2）	29.48	17.01	
上顎第三前臼歯（P3）	26.83	24.29	34.05	下顎第三前臼歯（P3）	26.55	16.44	28.03
上顎第四前臼歯（P4）	25.68	25.26	35.42	下顎第四前臼歯（P4）	24.29	18.41	37.05
上顎第一後臼歯（M1）	22.45	25.82	24.91	下顎第一後臼歯（M1）	23.16	16.85	
上顎第二後臼歯（M2）	23.76	24.49	36.57	下顎第二後臼歯（M2）	24.31	16.31	
上顎第三後臼歯（M3）	24.91	22.29	39.52	下顎第三後臼歯（M3）	29.86	14.42	

単位（mm）



下顎骨 (L)



肩甲骨 (L)



上腕骨 (L)



橈尺骨 (L)

第1図 HZK2006地点 A 区 SX01出土馬骨

X 中世の箱崎

伊藤幸司¹⁾

1：九州大学比較社会文化研究院

1. 箱崎津

箱崎は、博多湾のなかでも、都市博多からもっとも近くにある港町で、博多湾と多々良川河口の多々良潟とに挟まれて形成された砂州上にある。箱崎津の場所は、博多湾岸沿いに連なる箱崎松原側ではなく、多々良川河口の湾入部（「多々良潟」）に存在していたと考えられており〔柳田 1984〕、近年の発掘成果を踏まえた考古学的見地においても、多々良川に面した筥崎宮の東側附近（現在では宇美川に面した地点）が箱崎津の推定地とされている〔中尾 2018〕。箱崎津は、水軍などの軍事的な拠点として存在しており〔佐伯 2001〕、蒙古襲来に際しては、蒙古軍が軍船で博多湾から多々良川を遡上して箱崎津へ攻め入らないように、筑前国御家人と香椎地域を担当する豊後国御家人に対して、多々良潟に乱杭を打ちこむよう命令が出されている⁽¹⁾〔川添 1971：342頁〕〔伊藤 2018〕。箱崎には、硫黄などの貿易物資を保管する施設もあった⁽²⁾。天文5（1536）年秋、生松原十二所権現の大宮司である青木氏が、八石余の米を姪浜津から船で箱崎の東郷氏の蔵へ運んでおり〔吉良 2014〕⁽³⁾、箱崎津には一定程度の倉庫（蔵）が存在していたことがうかがわれる。水深の深い博多湾湾口部に面し、外洋船の沖止めに適した志賀島や能古島と比較すると、博多湾東の奥にある箱崎津は、一見すると貿易物資の保管場所として適していないように思われる。しかし、多々良川は福岡平野のなかでも水量の多い河川であり、河口部に大きく広がった水域が蒙古軍の軍船の遡上も考えられるような環境にあったことを考慮すれば、箱崎津は貿易物資の保管場所としても相応しかったと推測される。

中世の箱崎については、箱崎松原の様子が記されることが多い一方、町の様子について書かれることは少ない〔堀本 2013〕。箱崎松原については、早くも平安中期の和歌に詠まれ、『蒙古襲来絵詞』では竹崎季長一行が松原のなかを進む様子が描かれるほか、『海東諸国紀』（朝鮮、申叔舟、1471年成立）や『日本風土記』（中国、侯継高、1592年頃刊行）など海外の書籍でも取り上げられている。「白砂青松」とよばれ、それを愛でるための青松亭が設けられていた箱崎松原は、筥崎宮の社領となっており、松が「筥崎松」とよばれる御神木として位置づけられる一方⁽⁴⁾、卒塔婆が立てられる供養の場（葬送の場）でもあった〔林 2013〕。現在、米一丸地藏堂には嘉元元（1303）年11月日のものなど19基の板碑や石造九重塔があるが、ここは都市箱崎の北東境にあたり、これより先の砂州は葬送の場であったと推測される。九州大学箱崎キャンパス跡地にかかる発掘調査でも、当該付近から中世前期の墓が確認された。その近隣には、還國寺や勝楽寺という寺庵があった。還國寺（地藏堂）は、平重盛が南宋の育王山に砂金を送った際に、大陸から入手した地藏像が祀られるとの伝承がある⁽⁵⁾。重盛の逸話は、『平家物語』にも金渡の話として登場するが、その真偽は定かではない。ただし、箱崎には南宋由来の石仏が恵光院に現存しており、大陸由来の地藏があったとしても不思議ではない。勝楽寺は、戦国期には連歌師宗祇も訪れた禅寺である。禅寺は、葬送の地との境界に建立されることが多い。箱崎には、米山弁財天社の至徳2（1385）年7月日の板碑など8基、勝楽寺には永和4（1378）年4月8日の板碑など5基が各々あるように、多くの中世の板碑が現存する。

鎌倉末期の博多聖福寺にいた鉄庵道生^{てつあんどうしやう}が、博多湾岸の八箇所の名所を詠んだ「博多八景」には、箱

崎のことを表現した「箱崎蚕市」がある。「行き尽くす松陰の沙鷺の路、路頭尽く処は到るに江湄なり、東辺では売りおわり西辺では買う、落日の晩風が吹く酒の旗」の七言絶句であるが、箱崎松原のなかの道を通り抜けたところにあるという「江湄」⁽⁶⁾を多々良川河口の畔と解釈すれば、まさに「江湄」は位置的にも箱崎津のことを示している。すなわち、「箱崎蚕市」とは箱崎津における養蚕の道具も商う市場の様子を表現したものであり、その近隣には酒場もあったことがわかる。

2. 筥崎宮をめぐる諸勢力

箱崎は、筥崎宮の存在を抜きにして考えることはできない。都市箱崎は、筥崎宮の誕生を画期として発展していったと考えられるからである。筥崎宮は、10世紀前半に筑前国穂波郡の大分宮を遷座して創建されたという。延長5（927）年の『延喜式』神名帳に「那珂郡 八幡大菩薩筥崎宮一座 明神大」との記載⁽⁷⁾があることから、少なくともこれ以前には存在していたことがわかる。筥崎宮の遷座は、石清水八幡宮・宇佐弥勒寺と大宰府官人の動きによって実現した。その背景には、大宰府官人の大陸貿易への志向があったとされているが、それ以上に重要なのは、当時の日本において新羅来寇の危機感があり、それを祈禳する「異賊降伏」の側面もあったことを忘れてはならない〔川添 1981：62頁〕。いずれにせよ、以後、筥崎宮は宇佐宮や石清水八幡宮の影響を受け、10世紀後半には大宮司の存在も確認できる⁽⁸⁾。『今昔物語集』巻26では、都の人も驚くような莫大な富を得ていた筥崎大宮司・秦定重の姿が記されている。しかも、大宰帥平惟仲は府貫首（集団のなかでの最上首の意）であった秦定重の邸宅で死去していることから、大宰府と秦氏との親密な関係もうかがうことができる。秦定重の孫にあたる則重は、筥崎宮の神官でありながら、大宰大監ともなっていた〔太宰府市 2003：837～844頁〕。秦氏は、博多湾の港町である箱崎・筥崎宮を拠点としつつ、大宰府の府官として、日宋貿易に関わっていたと推測される。

保延6（1140）年、筥崎宮・香椎宮および大宰府の大山寺（内山寺・有智山寺）の大衆・神人が、大宰府を焼き打ちした事件⁽⁹⁾を契機として、筥崎宮や香椎宮は一時的に大宰府の支配下に入る。この時期、仁平元（1151）年には、大宰府検非違所が500余騎の軍兵を率いて、宋人王昇後家以下1600家の資財雑物を運び取り、筥崎宮に乱入するという筥崎・博多大追捕が起こった⁽¹⁰⁾。これは、追捕側に筥崎宮権大宮司経友・兼仲がいることから、日宋貿易をめぐる筥崎宮内の主導権争いに大宰府が関与したのではないかとされている〔川添 1981：64頁〕。また、博多津唐房にいたと思われる宋人王昇後家とともに箱崎・筥崎宮がセットで追捕されていることから、箱崎・筥崎宮が博多津唐房の宋海商と関係が深かったことをうかがわせている〔石井 1988〕。

その後、大宰府の支配から摂関家領を経て、実質的に平氏の管理下に置かれていたと思われる筥崎宮の周辺では、栄西が、後に筥崎大宮司の秦氏の氏寺・今山妙徳寺となる筥崎今山別所に貿易経営の拠点を構えて、重源が推進する阿育王山（南宋寧波郊外）の舍利殿建立事業の材木輸出に関わったとされる〔渡邊 2010：20～21頁〕。栄西にとって箱崎の地は、都市博多の宋海商との結びつきを確保できる絶好の場であったといえる。しかし、文治元（1185）年に筥崎宮は石清水八幡宮に返付された。栄西は、文治3（1187）年に2度目の入宋を果たし、建久2（1191）年に天童山千仏閣（南宋寧波郊外）の修造事業を請け負って帰国するが、箱崎の良弁という僧侶との対立もあり、箱崎の地を離れ、貿易経営の拠点を石清水八幡宮の影響のない香椎に設けた〔渡邊 2010：21～22頁〕。

建保（1217）5年、大宰府から派遣された使者が、筥崎宮社家雑掌とともに、綱首秀安から免物や運上物として唐物を收取・差し押さえしようとしたところ、秀安は神埼庄留守と結託して、これを拒

否しようとした。これに対して、翌年、宮崎宮が両者を捕らえて処罰するように訴えた。同年9月には、宮崎宮留守行遍とその子息光助らが博多津において大山寺神人博多船頭張光安を殺害したため、大山寺の本寺である延暦寺衆徒が朝廷に嗾訴するという事件が発生した。延暦寺は、石清水八幡宮の権別当兼宮崎宮検校である宗清（行遍はその代官）の引き渡しと、「墓所の法理」にもとづいて張光安殺害の地である博多津と、宮崎宮の延暦寺領化を主張した⁽¹¹⁾。状況からすれば、秀安と張光安とは同一人物、あるいは秀安は光安の関係者と推測されている〔佐伯 1988〕〔渡邊 2012ab〕。結局、朝廷は殺害の下手人を禁獄することで両者の争いに決着をつけた。翌年には、神埼庄の庄官が張光安の死所である博多管内とその所領を神埼庄のものとするよう訴えたが、朝廷の対応は不明である。ところで、宮崎宮留守行遍らが殺害した大山寺神人博多船頭張光安は、「八幡神人」ともよばれる宮崎宮の神人でもあった〔渡邊 2012a：327頁〕〔大庭ほか 2008：76頁〕。博多綱首が、日本国内の多様な権門と接触していたことがわかる。いずれにせよ、張光安は八幡神人でありながら、この事件では大山寺神人として宮崎宮側によって殺害された。張光安は、博多綱首として宮崎宮・大宰府・大山寺・神埼庄と各々取引する関係にあったが、その過程で発生したトラブルによって取引関係者から殺害されたことになる。そして、それが大山寺の本寺である比叡山と、宮崎宮の支配者である石清水八幡宮とのトラブルに発展したのである。このように、宮崎宮をめぐるのは、比叡山と石清水八幡宮をはじめとするさまざまな勢力の対立があったが、都市博多の宋海商との密接な関係がある宮崎宮の存在形態を考慮すれば、その根底には大きな利潤を生み出す日宋貿易をめぐる主導権争いがあったといえる。

3. 宮崎宮と博多綱首

宮崎宮には、建保4（1216）年の時には、宋人の献上した2部の唐本一切経があった⁽¹²⁾。同6（1218）年には、宋人が宮崎宮から貢祖を免除された田地26町を与えられており、その対価として宋人は宮崎宮に唐鞍・唐絹等の唐物を上納する義務を負っていた⁽¹³⁾〔川添 1981：64頁〕。

張光安殺害事件によれば、宮崎宮と宋海商との交渉は、検校一留守のラインで行われていたことがわかる〔渡邊 2012a：286頁〕。張光安は、宮崎宮のみならず大山寺の神人としても活動していたが、日本の寺社に両属する宋海商は張光安のみではなかった。なかでも、博多綱首謝国明の存在は重要である。

宮崎宮と密接な博多綱首で、鎌倉中期に活躍した謝国明は、宗像社領小呂島^{おろのしま}の給主として得分権（地頭職か）をもち社役を勤仕するのと同時に、宮崎宮にも社役を奉仕するなどの帰属関係にあった。円爾を開山として博多に承天寺を開創する際、謝国明は宮崎宮領であった野間・高宮・原村（平原^{ひらばる}）を購入し、承天寺へ寄進することで新寺の経済的基盤を確立した〔川添 1987〕。毎年正月11日、承天寺とその末寺の僧侶たちが宮崎宮に参拝するという、宮崎諷経（聖一国師報賽式）が現在でも継続して行われている。その理由は、南宋からの帰国中、海難に遭遇した円爾が、宮崎宮の加護で救われたことに対するお礼参りということになっている〔筑紫 1932〕。八幡神を航海神として崇敬した入宋僧・入元僧たちにとって、宮崎宮は航海安全を祈念する神であった。ただし、実際は、承天寺が創建時に宮崎宮領を寄進してもらったことに対するお礼参りの可能性もある〔川添 1987〕。そもそも、承天寺が創建された都市博多の東端という場所は、宮崎宮の影響力が大きく及ぶ地域であった。都市博多の東側（石堂口）と東南側（辻堂口）を、宮崎宮が所領として掌握していたからである。博多の町の一部をかすめる形で社領那珂西郷を領有していた宮崎宮は、博多の東南・東の出入口という要衝も支配していたことになる。このありようは戦国期には弱体化するが、博多の都市民の宮崎宮に対す

る信仰は産土神^{うぶすながみ}として、その後も継続した〔佐伯 2012〕。

また、正応2（1289）年の「筥崎宮造営材木目録」⁽¹⁴⁾によれば、犬防といわれた筥崎宮大神殿の玉垣は堅槽西崎の所役で維持されていたが、その領主は「御分通事」であった博多綱首張興と、鳥飼二郎船頭という日本名をもった博多綱首張英であった。鳥飼は筥崎宮領であり、近隣には円爾が開山し、承天寺の末寺となっている海蔵寺がある⁽¹⁵⁾。箱崎、博多の事例と同じく、博多湾岸における筥崎宮と承天寺の密接さを物語るものといえよう。

筥崎宮と承天寺の関係で特筆すべきは、やはり鎌倉末期の新安沈没船の事例であろう。新安沈没船は、元応元（1319）年火災で焼失した京都東福寺の再建の資を求めるために、東福寺と東福寺末寺の博多承天寺、筥崎宮らが参入して仕立てられた東福寺等造営料唐船であった。日元貿易の利潤をもって東福寺を再建するという使命を帯びて、南山士雲が京都から承天寺へ下向しており、承天寺が末寺として本寺の再建活動に協力するという構図がみられる一方、承天寺も元応2（1320）年の博多火災で焼失した可能性があり⁽¹⁶⁾、承天寺にとってもみずからの再建の資を求める意味合いがあったといえる。また、筥崎宮も延慶3（1310）年の火災で焼失したまま再建がなかなか進まないという状況にあったため、密接な関係にある承天寺が推進する貿易船に、筥崎宮の勸進聖教仙を乗船させた。しかし、この勸進船は、至治3（1323）年6月頃に慶元府（寧波）を出航して博多へ向かう途中、現在の韓国全羅南道新安郡付近の海上で沈没してしまう。この船には、海から引き上げられた陶磁器・銅銭・紫檀木以外にも唐物をはじめとする大量の貿易物資が満載されていた。日元貿易船の実態を物語る好例であるだけでなく、東福寺・承天寺・筥崎宮が行った貿易の規模を知り得ることができる唯一の事例である〔川添 1993〕〔村井 1995〕〔佐伯 2003〕。

4. 蒙古襲来と箱崎

箱崎津は、水軍などの軍事的な拠点として存在していた〔佐伯 2001〕。文永の役に際して、竹崎季長が箱崎津に参集し、箱崎松原のなかを博多に向けて移動する場面から『蒙古襲来絵詞』が始まっているのも、箱崎津の軍事的な性格を物語っている。

文永の役（1274）では、モンゴル軍の戦火によって筥崎宮も被災したといわれている。その際、筥崎宮の神官等は、ご神体を宇美八幡宮に避難させようとしたが、入れることができずに、「上山極楽寺」に安置した。ただし、現在、筥崎宮にあった仏教文物を伝える恵光院には、平安・鎌倉期の仏像も多くあり、蒙古襲来時の筥崎宮の被害の有無はよくわからない。少なくとも、筥崎宮は文永の役以前の文永2（1265）年の段階で、すでに火災で神殿などが焼失し⁽¹⁷⁾、その再建が進められていた。文永の役では、モンゴル軍の統率が乱れ矢が尽きたことなどから、長期滞在することなく退却し博多湾から姿を消した。しかし、こうした状況に対して『八幡愚童訓』では、筥崎宮から30人ほどの白装束の人が登場し、矢先を揃えてモンゴル軍を攻撃すると、モンゴル軍は博多湾へ逃れたが、神軍の威徳によって大風で吹き沈められたと語られている。八幡神の神威の喧伝のために作られた『八幡愚童訓』に記されることなので真実とはいえないが（大風雨は実際にあったものの、それがモンゴル軍の撤退理由ではない〔石井 2000：56～57頁〕）、蒙古襲来という歴史的事実を巧みに利用しようとする筥崎宮の姿をみてとることができる。

文永の役後、被災した筥崎宮は亀山上皇の理解を得て復興の造営が進められた。亀山上皇は、国家安泰を祈念して、紺紙に金泥で「敵国降伏」と記した宸筆も筥崎宮に寄進している（「宮寺縁事抄」）。現在、筥崎宮の楼門に掲げられる「敵国降伏」の扁額は、筥崎宮に伝えられる宸筆の文字をかたどっ

たものであり、三韓征伐をしたという神功皇后を祀る筥崎宮のシンボリックな光景となっている。また、筥崎宮の境内にある奉安殿には、20世紀初頭に福岡市の東公園に設置された銅像亀山上皇立像の鋳型を取るために作成された木像（高さ6m、重さ約1t）も安置されている〔國生 2011〕。蒙古襲来を契機として語られる、筥崎宮と亀山上皇との密接な関係を示すものといえよう。

鎌倉幕府は、文永の役後、博多湾岸に石築地を構築し、九州の御家人に対して本格的に異国警固番役を賦課した。箱崎地区の石築地は、現在の箱崎松原から地蔵松原沿いに設置されたが、それを築造したのは薩摩国の御家人である。箱崎の石築地は、大正年間に砂州の先端部分にあたる筥松地区で発見された後〔武谷 1922〕、平成末期の九州大学箱崎キャンパスの移転に伴う発掘調査でも新たに遺構が発見されている。また、15世紀に箱崎松原を訪れた宋希璟^{ソンヒギョン}の『老松堂日本行録』によれば、「倭人言う、辛巳東征の時、高麗人戦亡の地なり」と記されている。辛巳年＝弘安4（1281）年であることから、弘安の役において、箱崎松原の石築地を挟んで日本軍とモンゴル・高麗軍の攻防があったことがわかる。また、箱崎地区の異国警固番役は、嘉元2（1304）年に制度変更があるまでは、石築地と同様、薩摩国の御家人が担当した⁽¹⁸⁾。異国警固番役は、鎌倉幕府滅亡まで継続されたため、鎌倉後期の箱崎には常に一定数の九州の御家人が滞在していたことになる。

2度の蒙古襲来後の博多湾における警戒態勢は、異国警固番役のみではなかった。弘安10（1287）年、少貳経資は多々良潟に乱杭6本を打ち込むよう指示をしている⁽¹⁹⁾。これは、軍船で博多湾から多々良川へ遡上され、軍事的拠点としての機能がある箱崎津を襲撃されないようにするための防禦策、あるいは多々良川へ侵入したモンゴルの軍船を壊滅させるための仕掛けと考えられる。おそらく箱崎津は、蒙古襲来の際、博多湾から多々良川へ侵入したモンゴルの軍船によって襲撃されたのではなかろうか。少なくとも、多々良川をモンゴルの軍船が遡上する可能性があったからこそその対応策であったことは間違いない。博多湾岸では、姪浜のある室見川河口にも乱杭が打ち込まれている〔伊藤 2021：59頁〕。

異国警固番役以外の課役としては、鎌倉後期に幕府が肥前国御家人に「筥崎社放生会辻固」に勤仕するよう命令している⁽²⁰⁾。こうした九州武士に対する課役は、鎌倉幕府滅亡後の南北朝期に至っても、新たに博多に設置された鎮西管領（九州探題）によって博多警固番役として引き継がれる。博多警固番役と密接に関連するものには、「箱崎内夜廻」、「箱崎前浜灯炉堂」辻固・宿直など、箱崎にかかる多様な番役もあった〔佐伯 2009〕。

5. 箱崎と博多

康正2（1456）年、筑前守護である大内氏の奉行人が、門松と祇園会以下の作物^{つくりのもの}に使用する目的で、筥崎松の御神木を伐採することを禁止する命令を出している⁽²¹⁾。この禁制は、15世紀中葉には櫛田神社において祇園山笠が行われていることを明示するものとして知られているが、同時に博多の人びとが祇園会の作物のために箱崎松原の松を伐採していたこともわかる。箱崎松原の御神木利用を禁止する命令は、以後、何回にもわたって出されていることから、博多湾岸の人びとの御神木利用は続いていたといえよう。

中世前期では筥崎宮と博多綱首との密接な関係があったが、中世後期においても筥崎宮と海商の関係は継続していた。その代表が、筥崎宮の油座神人として活躍した博多商人奥堂氏^{おくのどう}である〔佐伯 1998〕。奥堂氏は、都市博多の博多浜にある方1町の屋敷に居住し、畠1町5段半をもつ商人といわれている。応仁度遣明船では、一号船（幕府船）の1000貫文衆として奥堂右馬大夫と奥堂五郎次郎、

500貫文衆として奥堂右馬大夫の名が確認できるなど、一族が日明貿易に関与していた⁽²²⁾。筥崎宮に帰属しつつ、日明貿易に関与するという姿は、中世前期の博多綱首のありようと重なる。

箱崎には、朝鮮通交をする箱崎商人がいた。丁亥（1467）年、筥崎宮に帰属する「筑前州筥崎津寄住臣藤原孫右衛門尉安直」という人物が、朝鮮へ使者を派遣し、漂流人を送還している⁽²³⁾。同じ年には、やはり筥崎宮に帰属する「筑前州筥崎津寄住藤原兵衛次郎直吉」が朝鮮人漂流民を送還している⁽²⁴⁾。この時期の朝鮮へは、世祖の王権を賛美することを目的とした瑞祥祝賀使が日本から大量に派遣された。いわゆる「朝鮮遣使ブーム」とよばれる現象が起こった背景には、篡奪することで国王となった世祖が、みずからの王権を荘厳化するような瑞祥の発生を喧伝したことに乗じて、偽の瑞祥祝賀使を大量に派遣し、朝鮮から利益を得ようとする対馬宗氏の思惑があった〔長 2002〕。そのため、ほとんどの瑞祥祝賀使は実態がない偽使であった。箱崎商人である藤原安直・直吉も、実際に朝鮮通交を行ったのか否かはわからない。ただし、彼らは実在した箱崎商人である可能性が高い。なぜなら、『海東諸国紀』によれば、箱崎在住の藤原直吉は博多商人佐藤信重の兄の息子だとされている。佐藤信重は、博多富商定清の娘婿で、大友氏領博多息浜^{おきのほま}の代官を担った実在する博多商人（息浜商人）である。朝鮮との関係は深く、文明2（1470）年には年1船の歳遣船定約を結び、翌年には受職人にもなっている〔佐伯ほか 2006〕。しかも、博多商人が琉球国王使名義の使節（偽琉球国王使）をフレキシブルに創出できるように画策し、朝鮮側に割印制を導入させた佐藤信重は〔橋本 2005〕、いわば博多における偽使派遣勢力の代表格であったといえる。こうした博多息浜商人佐藤重信の親戚が箱崎にいたとしても何ら不思議ではない。

このように、箱崎をめぐる商人には、箱崎商人と思われる藤原安直や藤原直吉と、都市博多を拠点とする博多商人がいた。博多商人には、筥崎宮の神人として宗教的に結びつく奥堂氏がいる一方、箱崎商人である藤原直吉と族的結合を形成する佐藤信重のようなものがいた。こうした貿易商人の存在が、都市としての箱崎の経済を活性化させたであろうことは想像に難くない。そこで、箱崎の経済規模を端的に示す次の史料を確認してみたい。

『正任記』文明10年10月17日条

一、為京都御礼物已下御用、自筥崎地下千貫文、自当津博多千貫文可進納之由、各先捧請文云々、文明10（1478）年、応仁・文明の乱で失地した北部九州を回復した大内政弘は「筥崎地下」と博多に、各1000貫文を賦課したことがわかる。1000貫文は、筑前一国の年貢の半分、段銭の3分の1に相当するという〔佐伯 1984〕。箱崎は、都市博多とともに、1000貫文という臨時の負荷に耐えうるだけの資本力をもっていたことがわかる。こうした箱崎の姿は、都市博多を除く博多湾岸の港町のなかでは抜きん出た存在であったことを示している⁽²⁵⁾。それゆえ、戦国末期、都市博多が戦乱によって焦土化し、都市機能を一時的に喪失するなか、天正15（1587）年豊臣秀吉が北部九州へ下向し九州が平定されると、彼は箱崎に拠点を構えて、箱崎において九州大名の所領配分を行い、キリシタン禁令を發したのである。

〔附記〕

本稿は、拙著『中世の博多とアジア』（勉誠出版、2021年）第1部第1章第4節の記述に、拙稿「中世の箱崎と東アジア」（九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版、2018年）の一部を組み合わせ再構成したものである。

註

- (1) 「中村令三郎氏所蔵文書」2号（『新修福岡市史』資料編中世②）、「生桑寺大般若裏打紙文書」年月日未詳（『大分県史料』25-70号）。
- (2) 『戊子入明記』疏璜事。
- (3) 「青木文書」10号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (4) 「田村文書」37号（『新修福岡市史』資料編中世①）。
- (5) 『筑前国統風土記』巻18糟屋郡表、『筑前国統風土記拾遺』巻39糟屋郡上・箱崎村。
- (6) 「江」は大きな河川、「湄」は岸辺や畔のこと（『漢辞海』）。
- (7) 『延喜式』巻10。
- (8) 『類聚符宣抄』天元2年2月14日付け太政官符。
- (9) 『百練抄』保延6年6月20日条。
- (10) 『宮寺縁事抄』筥崎造営事・文治2年8月15日付け中原師尚勘状。大追捕事件にかかる当該史料に「唐坊」が登場することが指摘されている〔渡邊誠 2012b〕。この「唐坊」を箱崎の唐坊とする見解があるが〔服部英雄 2013〕、漢文の構成からすると博多津の唐坊を示していると考えられる。
- (11) 『太宰府・太宰府天満宮史料』巻7（太宰府天満宮、1971年）建保6年9月21日条、是歳条。
- (12) 「石清水文書」4号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (13) 「石清水文書」筑前筥崎宮寺調所結解（『鎌倉遺文』2533号）。
- (14) 「石清水文書」54号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (15) 『筑前国統風土記附録』巻38・早良郡上・鳥飼村条。
- (16) 新安沈没船の木簡に「釣寂庵」という承天寺の塔頭の名前が登場することを考えれば、火災で被害を受けたのは承天寺全体ではなく釣寂庵であった可能性もある。
- (17) 「石清水文書」244号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (18) 「比志島文書」1～6号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (19) 「中村令三郎氏所蔵文書」2号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (20) 「福田文書」6～8号（『新修福岡市史』資料編中世②）。
- (21) 「田村文書」37号（『新修福岡市史』資料編中世①）。
- (22) 『戊子入明記』。
- (23) 『世祖実録』13年7月丁亥条、『海東諸国紀』筑前州・安直条。
- (24) 『海東諸国紀』筑前州・直吉条。
- (25) 『海東諸国紀』筑前州条では、「州に博多有り。或は覇家臺^{はかた}と称し、或は石城府と称し、或は冷泉津と称し、或は筥崎津と称す」と記される箇所がある。博多の異称として、覇家臺、石城府、冷泉津の言い方は存在するが、博多と筥崎津は別の港町である。ゆえに、『海東諸国紀』の記載は不正確である。しかし、朝鮮側に筥崎津が博多の異称として勘違いされるということは、それだけ博多湾における筥崎津の存在の大きさを示しているものとして評価することもできよう。

〔引用文献一覧〕・五〇音順、副題略

- 石井 進 1988 「『宮寺縁事抄』にあらわれた博多」『神道体系月報』74、神道大系編集会
- 石井 進 2000 『鎌倉びとの声を聞く』NHK 出版
- 伊藤幸司 2018 「中世の箱崎と東アジア」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版
- 伊藤幸司 2021 『中世の博多とアジア』勉誠出版
- 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）2008 『中世都市・博多を掘る』海鳥社
- 長 節子 2002 「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像」九州大学朝鮮学研究会（編）『年報朝鮮学』8
- 川添昭二 1971 『注解 元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 川添昭二 1981 「古代・中世の博多」『中世九州の政治と文化』文献出版、初出1975
- 川添昭二 1987 「鎌倉中期の対外関係と博多」九州史学研究会（編）『九州史学』88・89・90、九州史学研究会
- 川添昭二 1993 「鎌倉末期の対外関係と博多」大隅和雄（編）『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館

- 吉良國光 2014「中世の姪浜について」福岡市史編纂委員会（編）『新修福岡市史 資料編中世②市外所在文書』しおり 福岡市
- 國生知子 2011「「元寇紀年碑」の建立」『市史研究ふくおか』6、福岡市博物館市史編纂室
- 佐伯弘次 1984「中世後期の博多と大内氏」『史淵』121、九州大学大学院人文科学研究院
- 佐伯弘次 1988「大陸貿易と外国人の居留」川添昭二（編）『よみがえる中世1 東アジアの国際都市 博多』平凡社
- 佐伯弘次 1998「中世の奥堂と綱場」『博多研究会誌』6、博多研究会
- 佐伯弘次 2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』9、博多研究会
- 佐伯弘次 2003『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
- 佐伯弘次 2009「南北朝時代の博多警固番役」九州大学大学院人文科学研究院（編）『史淵』146、九州大学人文科学研究院
- 佐伯弘次 2012「中世都市博多の総鎮守と筥崎宮」九州大学大学院人文科学研究院（編）『史淵』149、初出1997、九州大学人文科学研究院
- 佐伯弘次ほか 2006「『海東諸国紀』日本人通交者の個別的検討」『東アジアと日本』3
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足」『筑紫史談』25、筑紫史談会
- 太宰府市史編集委員会（編）2003『太宰府市史』古代資料編、太宰府市
- 筑紫頼定 1932「八幡筥崎宮と聖一国師」『都久志』4、都久志刊行会
- 中尾祐太 2018「考古学からみた箱崎と博多湾」『九州史学』180、九州史学研究会
- 橋本 雄 2005「朝鮮への「琉球国王使」と書契一割印制」『中世日本の国際関係』吉川弘文館、初出1997
- 林 文理 2013「博多湾の松原」『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 堀本一繁 2013「描かれた中世博多の風景」『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 村井章介 1995「中世における東アジア諸地域との交通」『東アジア往還』朝日新聞社、初出1987
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」中山平次郎『古代乃博多』九州大学出版会
- 渡邊 誠 2010「後白河法皇の阿育王山舍利殿建立と重源・栄西」『日本史研究』579、日本史研究会
- 渡邊 誠 2012a「十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御厨」『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版、初出2010
- 渡邊 誠 2012b「大宰府の「唐坊」と地名の「トウボウ」」『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版、初出2006

XI 近世の地蔵松原

梶嶋政司¹⁾

1：九州大学記録資料館

1. 地蔵松原の濫觴と地蔵・地蔵堂の由来

初代福岡藩主黒田長政は、領内の砂原へ松を植え、松原の育成を奨励したと言われている。近世における地蔵松原の景観は、長政の松原育成奨励策の命をうけた、博多「町中」により植えられた松が繁茂して、形作られたものであった（近藤 1998：789頁）。

地蔵松原の濫觴について、『黒田家譜卷之十四 長政記』（貝原益軒編 1688）は、慶長十五年の事項に、「又箱崎の東にひろき沙原の空地あり。今年博多の町中におほせて、松をたて植させらる。竹森清左衛門是を奉行す。年をへて後しげりさかへて廣き松原となる。其地に地蔵堂あり。依て地蔵松原と称す。」⁽¹⁾と記している。この記述から、博多町人による松の植樹が慶長15（1610）年にはじまっていることがわかる。

一方、『筑前国続風土記』（貝原益軒編 1688）では、「地蔵堂 松原附」の項目中に「此邊は砂原にて、松樹はなかりしを、長政公慶長十六年家臣竹森清左衛門に命じ、博多の町中より、松を植させられしか、其後ほどなく松原となれり。地蔵堂ある故、地蔵松原と云。」⁽²⁾とあり、博多町人による松の植林の年次は、慶長16（1611）年となっている。『黒田家譜卷之十四 長政記』の慶長15年説とは一年の違いがみられるので、ここでは両論を併記しておく。

つぎに、地蔵松原の由来となった地蔵と地蔵堂についてみておこう。『筑前国続風土記』では、「此地蔵佛は小松重盛公、育王山に砂金を送られし其帰船に載せ来りし佛也と云伝へたり。地蔵堂は寛永八年に 忠之公是を建立し玉ふ」⁽³⁾としており、地蔵は、「小松重盛」すなわち平重盛が、中国の育王山に砂金を送り、その帰りの船で請来されたものであるとの伝承を紹介している。地蔵堂については、二代藩主黒田忠之が寛永8（1631）年に建立したものであった。

近世後期の国学者・青柳種信は、『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信編 1837）のなかで、「地蔵堂 地蔵松原に在。此所の庵を北山重盛院還國寺と云。赤幡坊に属す。今は修験者庵主也」⁽⁴⁾と述べている。この記述によれば、地蔵堂には北山重盛院還國寺という庵があり、赤幡坊に属していたが、同書が編纂された19世紀の前半の時点で、修験者が庵主となっていたようである。『筑前国続風土記拾遺』ではこのほか、「堂後に野石の高五六尺斗巾四尺斗なる有。南無阿弥陀佛、左に觀世音菩薩、右に大勢至菩薩、貞和二年と彫たり。左方に沙門祐慶等の文字有。其餘ハ滅して見へす。同堂の西方に古き石塔数多有。其内に五重石塔有。基座石に尼五人の名、左石ハ文安五年十一月二十一日と有。又一石に高式尺石面に塔形を彫て、下に尼妙居正平廿一春、中に梵字一ツ有。是を里人ハ米一丸か愛妾傾城村雲か墓と云フ。（中略）五重塔ハ昔堂後の藪の中に在しを、近代爰に移せしと云」⁽⁵⁾と、地蔵堂の周辺の石造物についての詳細な考証が行われている。

旧福岡藩士で明治期に郷土史家として活躍した江島茂逸は、「箱崎町歴史上ノ大要」（『江島茂逸雜纂』五、九州大学附属図書館所蔵）のなかで、地蔵堂と地蔵について次のように述べている。全文を紹介しておこう。

将軍地藏

箱崎町字地藏松原ノ入口竹藪ノ中間に一の堂宇あり、石材ノ仏体安置、薬師等ノ諸仏ヲ合祭ス、縁由ニ云フ、昔時ハ小松山重盛院還國寺ト称シ、旧赤幡坊ノ附属ニ係ル、本尊将軍地藏菩薩、相伝フ、小松内府重盛卿、平家ノ将来ヲ憂慮シ、豫メ平家一門ノ冥福ヲ祈ラントテ、宋國育王山ヘ砂金三千両ヲ寄附セラル、然ルニ平家没落ノ後、彼国ヨリ地藏菩薩之石像一体、及ヒ弥陀經ヲ彫刻シタル碑石一個、(此ノ弥陀經ノ碑石ハ、今宗像神社ノ境内ニ現在ス、)ヲ贈リ来リシモノタリト言ヒ伝フ、其後筑前ノ國主黒田忠之ヨリ堂宇ノ側ニ護摩堂、及客殿ノ建設ニアリシカ、今ハ廃絶シテ、一ノ堂宇ノミ存セシノミ、今ノ松原ハ國守ヨリ黒田家士竹森清左衛門ニ命シ、植立シメラル右ノ縁故ヨリシテ地藏松原トハ称セシナリ

江島は、地藏を将軍地藏と称して、小松重盛こと平重盛が宋の育王山へ砂金3,000両を寄附したこと、平家没落後に宋より地藏菩薩の石像が、弥陀經を彫刻した石碑とともに請来されたものであるとの伝承を紹介している。また、黒田忠之は地藏堂の側に護摩堂と客殿を建立したが現在は廃絶して地藏堂のみが残っていること、昔は小松山重盛院還國寺と呼ばれ、赤幡坊に属していたことなどについても述べられている。そして、江島の時代には、地藏堂に諸仏が合祭されていたようである。

2. 地藏松原の変遷

明治政府では農商務省が、明治37(1904)年頃に旧福岡藩の山林制度に関する調査を実施していたようであり、その際に集められた地藏松原に関する記録が『字地藏松原山林ニ関スル証拠書類』(九州大学付属図書館付設記録資料館古文書・古記録部門所蔵旧玉泉館古文書)として一冊に纏められ、現存している。ここでは、『字地藏松原山林ニ関スル証拠書類』をもとに、近世から近代にかけての地藏松原の変遷を追っていきこう。

第1表は、文化3(1806)年の箱崎村に属する松林の一覧である。文化3年の箱崎村御山改の記録自体は残っていないが、明治3(1870)年9月の調書に引用されているものである。

この表によれば、19世紀初頭の箱崎村では、「御山」として、38,700坪におよぶ「地藏松原」・「地藏松原古新立」のほか、「御茶屋境」(210坪)、「白浜之内新立」(1,750坪)、「八幡宮社内」(15,000坪)、「八幡宮」(15,000坪)があった。「御山」のうち、松が群生していたのは「地藏松原」・「地藏松原古新立」と「御茶屋境」であったようである。「御山」とは、福岡藩において、藩が統制・保護していた松原を含む領内の山林のことである。箱崎村に属す地藏松原の大部分は「御山」として管理されていたことがわかる。

他方、「地藏松原之内」1,500坪は「一光寺預り証拠山」とあり、「地藏松原之内新立」4,500坪については「百姓証拠山」であった。証拠山とは、武士や領民のうち希望する者へ、藩が野山の専有を認めて山林を育成させたものである。地藏松原の一部分は、一光寺や百姓によって育成された松林であった。箱崎村には、このほか、「宮山」の「天満宮」200坪や、「座主坊預り証拠山」の「浜松原」5,000坪、「村中植立証拠山」の「白浜吹寄」5,828坪余があった。

第2表は、明治5(1872)年の箱崎村抱の山林の一覧である。第1表で示した内容から66年が経過した明治初期の箱崎村の松林の様子がここからわかる。第1表と対比すると、面積の単位は坪ではなく、町・反・畝・歩である。坪と町・反・畝・歩を換算してみると、松原の面積に増減はないことが確認できる。ただし第2表の「地藏松原之内中新立」の6反(坪換算1800坪)については、第1表には見られないものであり、ここが、文化期から明治期の間に新たに植林された松林であった可能性も

第1表 文化3年の箱崎村抱御山改

地名	山の種別	坪数	木種
地蔵松原	御山	32,500坪	松立
地蔵松原古新立	御山	6,200坪	松立
御茶屋境	御山	210坪	松立
白浜之内新立	御山	1,750坪	
八幡宮社内	御山	15,000坪	
八幡宮	御山	15,000坪	
天満宮	宮山	200坪	松雑木
浜松原	座主坊預り証抛山	5,000坪	
地蔵松原之内	一光寺預り証抛山	1,500坪	松立
地蔵松原之内新立	百姓証抛山	4,500坪	松立

(典拠)「字地蔵松原山林二関スル証抛書類」(玉泉館文庫)

(備考) 外に「村中植立証抛山」の白浜吹寄5,828坪6合がある。

第2表 明治5年の箱崎村抱御林

地名	山の種別	反別	松木	松苗木	雑木	備考
地蔵松原	御林	10町8反3畝10歩	8,900	16,800		内3反3畝 墓所
地蔵松原古新立	御林	2町 6畝20歩	4,200	1,500		
御茶屋堺	御林	7畝	45			
白浜新立	御林	5反8畝10歩	75			内3反3畝 新家床
八幡宮社内	御林	5町	320	250	140	宮山
御宮ノ前	御林	5町	309		1	御寄附山
天満宮宮山	御林	6畝20歩	4		24	社森
浜松原	御林	1町7反	980	340		座主坊元証抛山
地蔵松原ノ内	御林	5反	480	150		一光寺元預り山
地蔵松原之内中新立	御林	6反	4,200	1,530		御証抛山
地蔵松原之内浜新立	御林	1町5反	1,700	3,900		御証抛山
白浜吹寄	御林	1町9反4畝8歩6厘	620	2,400		箱崎村中証抛山

(典拠)「字地蔵松原山林二関スル証抛書類」(玉泉館文庫)

考えることができる。このほか、「浜松原」については第1表と第2表を比較すると、100坪ほど面積が増えているようである。

第2表で注目しておきたい点は、明治初期における地蔵松原の松木と松苗木の本数がわかることである。「地蔵松原」10町8反3畝10歩(32,500坪)には8,900本の松と16,800本の松苗木が育成されていた。松の大きさは「長五間〆壱間迄、目通六尺五寸〆八寸廻迄」とあることから、松の高さは約2メートルから10メートルほど、「目通」とは、幹周りのことであろうか、2メートル弱から2.4メートルほどであったと考えられる。高さ10メートル、幹周り2メートルを上回る松の樹齢がどれくらいであるかを想定できれば、地蔵松原の松の植え替えの周期などもわかるのかもしれない。明治5年時点では、苗木の数の方が倍近くとなっており、比較的低木の松林の景観であったのかもしれない。なお、松8,900本のうち、3,600本は節が曲がった木であった。

「地蔵松原之内浜新立」においても、松木1,700本に対して、松苗木が3,900本ほど育成されており、苗木の方が多。しかし、それ以外の「地蔵松原古新立」、「地蔵松原ノ内」、「地蔵松原之内中新立」は、松苗木よりも松木の本数が上回っている。

最後に地蔵松原の墓所について言及しておきたい。第2表の「地蔵松原」の備考欄にあるとおり、地蔵松原には3反3畝ほどの面積の墓所があったようである。しかし残念ながら、それがどの場所にあったかについては、文献史料からは確認することができない。なお、第2表の典拠史料については、本文末に（史料A、史料B）として全文を翻刻掲載している。

3. 地蔵松原の用益

ここでは、旧稿（梶嶋 2018：7－8頁）をもとに地蔵松原の用益についてみておきたい。次の史料は、延宝3（1675）年3月13日付で、箱崎村庄屋清兵衛・百姓与兵衛等四名から箱崎代官の尾江小兵衛へ宛てて出された口上書である（九州大学付属図書館付設記録資料館古文書・古記録部門所蔵旧玉泉館古文書）。この口上書は、地蔵松原と馬出濱松原の松の落葉の用益について述べているが、以下では地蔵松原を中心に見ていきたい。

御理り申上ル口上書之事

一箱崎地蔵松原不残、馬出濱松原落松葉、先年ハ町之者惣請仕居申候処ニ、貴様当村へ御懸り被為成候而、所之者請候而勝手可然候ハ、被仰上ケ御請可被下由被仰候、所之百姓請候而ハ山遠キ所ニて落松葉取かへ、こへ仕ため、万殊外勝手能御座候通申上候付、御公儀へ被仰上ケ、所之百姓ニ惣請被仰付被下、去年迄六年請来申、殊外勝手能御座候而有難奉存候、然所ニ当年ノ改、又々御請申上度と申上候処ニ、御直段衆被仰候ハ、当年ハ町之者共請度由申候、定而直段も指上ケ可申候、百姓共左様ニ仕候哉、右之ノ直段上り、請問敷候哉と被仰候、直段上り候而ハ少々不勝手ニ奉存候条、右之様ニ被仰付被下候様ニ御理り被仰請可被下候

一銀高五百式拾七匁五分ハ 但壺ケ年分落松葉御運上銀

内

銀四百六拾七匁七分ハ 地蔵松原分

同五拾九匁八分ハ 馬出濱松原分

右御請申上ニ付、壺ケ年ニ小松五千本宛枯シ不申様ニ植付申候、其上松露御台所御用之刻御留置被為成候間、山留兩人ニて中々留申儀難成御座候付、松請之者共せいたう仕申事

延宝三年

三月十三日

箱崎村庄や

清兵衛（印）

同村百生

与兵衛（印）

同

藤兵衛（印）

同

源七（印）

同

甚七（印）

尾江小兵衛様

これによれば、地蔵松原の松の落葉は、昔は博多町人が引き取っていたこと、箱崎代官尾江の計らいにより、昨年までの過去六年間は、箱崎村の百姓たちが受け取って来たことがわかる。箱崎村は、「所之百姓請候而ハ山遠キ所ニテ落松葉取かへ、こへ仕ため、万殊外勝手能御座候」とあるように、「山」から離れているので、耕作地の肥料とするために刈敷を採取することが困難であったと思われる。そこで、地蔵松原の「落松葉」を「取かへ」、つまり交換して「こへ」（肥）を集めることができると便利であることを主張しているのである。箱崎村にとって、地蔵松原の「落松葉」は、それを「こへ」と交換して肥料を得る手段として貴重なものであったと考えられる。

この口上書では、再び箱崎村が、地蔵松原の「落松葉」を受け取りたいと上申しているが、博多町人も「落松葉」の引き取りを希望していること、落松葉の値上がりなどが指摘されており、箱崎村にとっては厳しい状況のようである。

ここで箱崎村が提示した地蔵松原の落松葉を取得するための条件は、年間に「落松葉御運上銀」を467匁7分納めるというものであった（なお、馬出濱松原分は銀59匁8分）。箱崎村は運上銀を上納して、「落松葉」を採取する権利を得ることを求めているのであるが、それに加えて、年間5,000本の松の苗木の植樹や、「御墓所御用」の「松露」の確保についても申し出ている。以上から、17世紀後半における、地蔵松原の用益の一端を垣間見ることができよう。

註

- (1) 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『黒田家譜』第1巻（文献出版、1983）474頁。
- (2) 伊藤尾四郎校訂『筑前国続風土記』（文献出版、2001）394頁。
- (3) 『筑前国続風土記』394頁。
- (4) 広渡正利・福岡古文書を読む会校訂『筑前国続風土記拾遺』下巻（文献出版、1993）19頁。
- (5) 『筑前国続風土記拾遺』下巻19頁。

〔引用文献〕

近藤典二 1998「近世前期の山林」『福岡県史 通史編 福岡藩（1）』福岡県、787-805頁。
梶嶋政司 2018「地蔵松原の落松葉」『記録資料館ニューズレター』12、九州大学付属図書館付設記録資料館 7-8頁。

第2表の典拠史料

(史料 A)

「御山

壬申九月改之分

御縣庁ニ相調候分此通ニ候也」

粕屋郡

箱崎村

地蔵松原平場ニ御座候、海辺

一御林反別拾町八反三畝拾歩

内三反三畝

墓所

残而拾町五反拾歩

榜示 東壺作畑限 南古畑限
西古新立御林限 北農甚次郎藤三郎貞吉証拋山限
此木数八千九百本
此訳
松木八千九百本 但長五間の壺間迄目通六尺五寸の八寸廻迄
内三千六百本 節曲り木
外松苗木壺万六千八百本

同村

地藏松原古新立平場ニ御座候海辺

一御林反別貳町六畝貳拾歩

榜示 東御林堺限 南御林堺の古畑限
西一光寺堀切堺 北□甚次郎□ 山中新立限
此木数四千貳百本 (農)

此訳
松木四千貳百本 但長貳間迄目通貳尺五寸の同八寸廻迄
内千三百八十五本節曲り木
外松苗木千五百本

御茶屋堺平場ニ御座候

一御林反別七畝歩

榜示 東壺作畑限 南御茶屋堺限
西波打限 北一光寺墓所通切

此木数四拾五本

此訳
松木四拾五本 但長六間の壺間迄目通五尺五寸の八寸迄
内五本 節曲り木

ノ

同村

白浜新立平場ニ御座候

一御林反別五反八畝拾歩

内 三反三畝 新家床
残而貳反五畝拾歩
榜示 東浦分家床限 南不浄水溝切
西不浄水溝切 北

此木数七拾五本

此訳
松木七拾五本 但長三間の壺間迄目通三尺三寸廻の八寸迄
内拾五本 節曲り木

合反別拾三町五反五畝拾歩

内 三反三畝歩 家床
三反三畝歩 墓所

右ハ糟屋郡箱崎村抱御林明細書上申候処相違無御座候以上

明治五年壬申四月

箱崎村山見ケメ

多田善一（印）

組頭

清水與三（印）

光吉七郎（印）

庄屋

黒木太郎（印）

御縣庁

御中

（史料 B）

粕屋郡

箱崎村

八幡宮社内平場ニ御座候

一御林反別五町歩 宮山

榜示 東南北 通筋限

西 玉垣ノ外角敷石限

此木数四百五拾本

此訳

松木 三百弍拾本 但長七間ノ壱間迄目通壱丈ノ八寸廻迄

内 百弍拾本 節曲り木

雑木 百四拾本 但長三間ノ壱間迄目通弍丈ノ八寸廻迄

内 九拾弍本 節曲り木

外松苗木 弍百五拾本

同村

御宮ノ前平場ニ御座候海辺

一御林反別五町歩 御寄附山

榜示 東馬場筋ノ往還限 南圓墓坊門前ノ龍神社池限

西汐井通ノ古畑限 北元放生堂壱作畑限

此木数三百拾本

此訳

松木 三百九本 但長四間ノ壱間迄目通六尺五寸ノ八寸廻迄

内 三拾本ハ節曲り木
雑木 壺本 但長三間目通八尺廻

浜松原平場ニ御座候海辺

一御林反別壺町七反歩 座主坊元証拠山

榜示 東御寄附山堺ハ古畑限 南那珂郡堺限

西松立限 北不浄水溝切

此木数九百八拾本

松木 (

松木 九百八拾本 但長五間ハ壺間迄目通五尺ハ八寸廻迄

内 三百九本 節曲り木

外 松苗木三百四拾本

天満宮山平場ニ御座候海辺

一御林反別六畝貳拾歩 社森

榜示 東畑限 南浦分家敷限

西往来限 北元御茶屋ノ前通限

此木数貳拾八本

此訳

松木 四本 但長四間半ハ貳間迄目通六尺ハ貳尺廻迄

内 貳本 節曲り木

雑木 貳拾四本 但長貳間ハ壺間目通壺丈ハ八寸廻迄

内 拾五本 節曲り木

ノ

地藏松原ノ内平場ニ御座候海辺

一御林反別五反歩 一光寺元預り山

榜示 東一光寺堺ハ古畑限 南ハ御林限

西松立限 北堀切限

此木数四百八拾本

此訳

松木 四百八拾本 但長四間ハ壺間迄目通三尺ハ五寸ハ八寸迄

内 百五拾本 節曲り木

外ニ松苗木百五拾本

ノ

地藏松原之内中新立

一御林反別六反歩

農 王丸利三

御証拠山

農 辺田善平、一木甚蔵、山口久五郎、日高甚作、一木久平、藤野七平、池田久平、梅津弥七、白水久作、城戸善五郎、梅津伊之助、松井吉平、川辺久五郎、木村又吉、王丸利三

榜示 南東 古新立御林限
西北 甚次郎藤三郎貞吉証文山限

此木数四千式百本

此訳

松木 四千式百本 但長式間〆壱間迄目通式尺五寸〆八寸迄
内 千三百八十五本 節曲り木
外松苗木千五百三拾本

地藏松原之内浜新立平場ニ御座候

一御林反別壱町五反歩

御証拠山

農 矢野甚次郎、吉村藤三郎、児島貞吉

榜示 東中新立農十九人証拠山限 南ハ御林〆堀切限
西ハ村中証拠山吹寄限 北名嶋川口鯨次摩限

此木数千七百本 但長式間〆壱間迄目通三尺〆八寸廻迄

内

千百本 節曲り木

外苗木三千九百本

ノ

箱崎村中

証拠山

白浜吹寄

一御林反別壱町九反四畝八歩六厘

榜示 東北 甚次郎藤三郎貞吉証文山浜新立限
西南 一光寺証拠山堺〆白浜松立限

此木数六百式拾本

此訳

松木 六百式拾本 但長式間〆壱間迄目通式尺五寸より八寸廻迄
内 四百廿本 節曲り木
外松苗木式千四百本

奥ノ反別拾四町九反五畝拾四歩

此木数八千七百六拾八本

此訳

松木八千七百六拾八本
雑木百六拾五本

内 松木三千五百拾六本 節曲り木
雑木百七本

外 八千五百七拾本 松苗木

ノ

右ハ粕屋郡箱崎村抱御林明細書上申候処相違無御座候以上

明治五年壬申四月

箱崎村山見ケノ

多田善一（印）

組頭

清水與三（印）

光吉七郎（印）

庄屋

黒木太郎（印）

御縣庁

御中

XII 箱崎遺跡からみた元寇防塁

宮本一夫¹⁾

1：九州大学総合研究博物館

1. はじめに

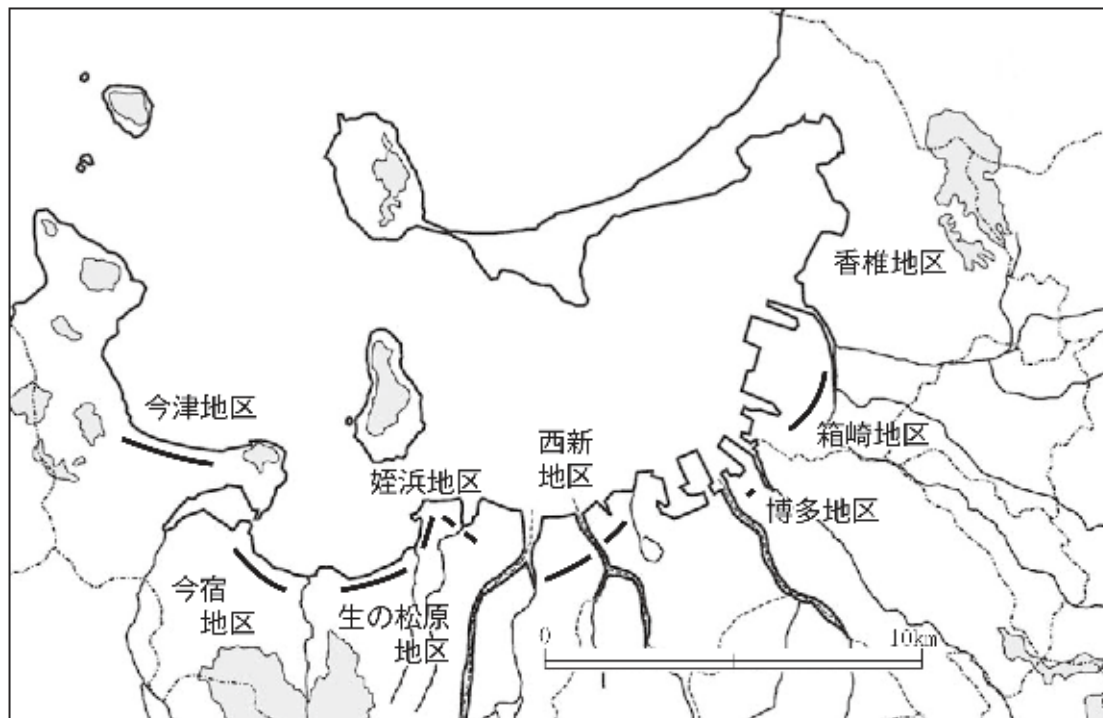
1274年の文永の役では、元・高麗の軍勢が博多や箱崎に攻め入り、博多や箱崎は甚大な被害を被ったとされる。翌年には、鎌倉幕府は元の再度の来襲を予想し、異国警固番役の制度を改め、九州各国に3ヶ月ごとに担当国を代えながら異国警固の任に就かせた。さらに1276年には、鎌倉幕府は、警固のために九州各国の守護に分担して防御施設としての石築地（元寇防塁）の構築を命じた。半年間という短期間での構築は、分担した国ごと（第1表）に構築法が異なったようで、発掘調査によって分

第1表 元寇防塁と分担国

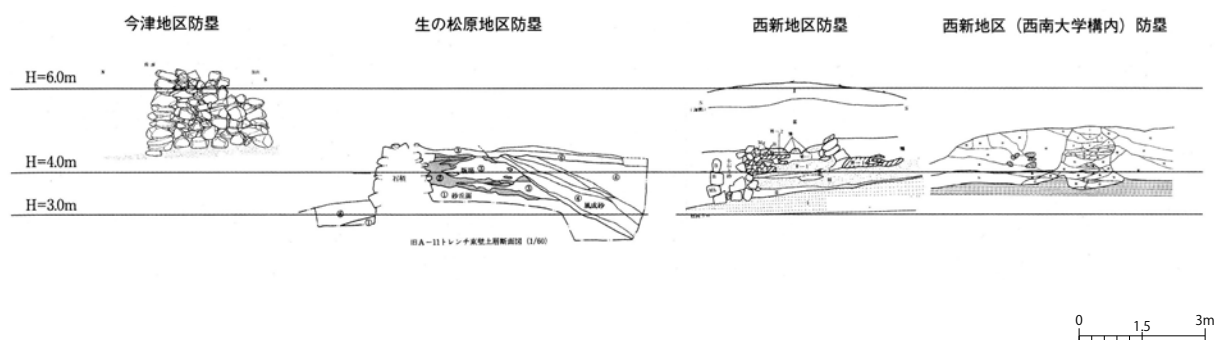
分担地区	分担国
香椎	豊後
箱崎	薩摩
博多	筑前・筑後
西新	不明
姪浜	肥前
生の松原	肥後
今宿	豊前
今津	大隅・日向

かった石塁の構築法は場所によって異なっている（第1図）。

元寇防塁の発見は、1912年に九州大学の中山平次郎によって、九州大学の馬出キャンパスから箱崎キャンパス、さらに地藏松原墓地にかけて列状の盛り上がりが確認され、元寇防塁の可能性が指摘されたことに始まっている（岩永 2018）。翌1913年には福岡日日新聞社の主催のもとに、今津地区の元寇防塁が初めて発掘調査されている。1920年には、西新地区で西新尋常高等小学校生徒により元寇防塁が発掘されている。これらの発掘は、戦前の国威発揚のもとに行われたものであった。同じ1920年には、武谷水城



第1図 元寇防塁の残存地点



第2-1図 元寇防塁の断面比較

による箱崎の地蔵松原での発掘によって石塁が発見され、元寇防塁と考えられた。こうして1931年には、今津から地蔵松原までの10ヶ所の元寇防塁が国史跡に指定された。ちょうど弘安の役（1281年）後650年の節目の年であった（堀本 2018）。しかし、こうした元寇防塁の存在は、戦後には忘れ去られていった。1968年になり、九州大学文学部考古学研究室の鏡山猛を団長とする考古学、国史学、土木工学などの研究者による今津地区や生の松原地区の発掘調査により、初めて元寇防塁の存在が科学的に明らかとなったのである（福岡市教育委員会 1969）。その後、今津地区、生の松原地区、姪浜地区、博多地区、西新地区、箱崎地区で、福岡市埋蔵文化財課による発掘調査によって元寇防塁遺構が確認されている（藏富士編 2019）。

2. 元寇防塁の発掘事例

（1）今津地区

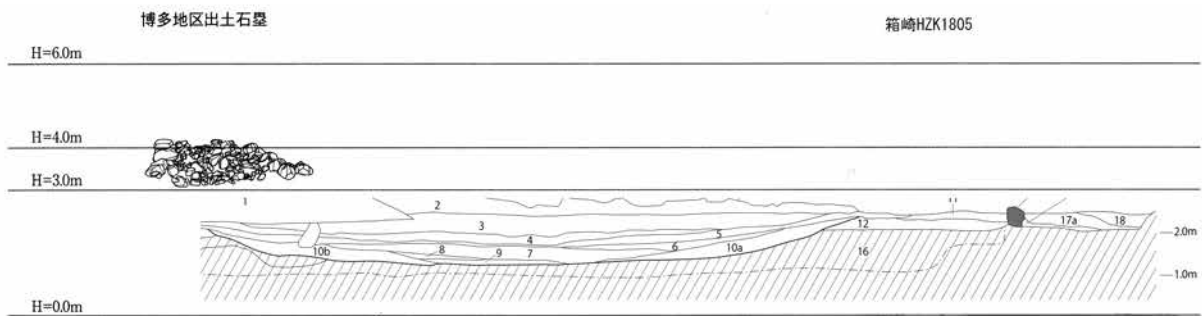
砂丘列の頂部に断面台形の防塁（前面高さ3m、後面高さ2.5m、基底部幅3～4m、上面幅2.5m）が築かれている（第2-1図）。また石積みが海側の前面と陸側の後面の両面に積み上げられ、その間は砂が充填されている。前面の石積みは残存高2.6m、後面の残存高1.45mで、基底面幅3.1m、上面幅2.5mの断面台形をなす（藏富士編 2019）。石の積み方は、一定区間ごとに積み方と石材に違いが認められる。例えば花崗岩の石材と玄武岩の石材が接線を以て明確に区分できる。これは、防塁築造を賦役する分担国内の御家人ごとに築造がなされた結果であると考えられている。

（2）生の松原地区

砂丘頂部をやや掘り込んで石積みを行い、残存高約1.5mで、基底面幅1.5m、上面幅1.25mの石が充填された石積みである（第2-1図）。石積みの背後には、花崗岩風化粘土と砂を交互に版築状に叩き締めている。その背後は、砂丘傾斜面に沿って風成砂層が堆積している。前面は比較的幅の広い石積みで、後面は土を版築状に積み上げている（荒牧編 2001）。

（3）西新地区

元寇防塁第3次調査は、1920年に調査された元寇防塁の再調査地点である。海側の前面の石積みは基底面が約1m幅で前面と背面で石が積み上げられ、その間に小石と砂が充填されている（第2-1図）。後面の石積みは一段で積み上げられ、前面と後面の石積みの間の約2m幅は、粘土層（Ⅱ層）とブロック状の粘土を交えた砂層（Ⅲ層）、良好な粘土層（Ⅳ層）で充填されている（福岡市教育委



第2-2図 元寇防塁の断面比較

員会編 1970)。

元寇防塁第8次調査(西南大学構内)の元寇防塁は、砂丘基盤の上に粘土を貼り地盤を安定させ、海側の前面と後面に石積みを行い、その間に粘土が充填される。さらに石積みの背後の幅50cmを空けて土塁が築かれている(第2-1図)。土塁の幅は2~3mで、最大残存高約1mをなす(大塚編 2002)。

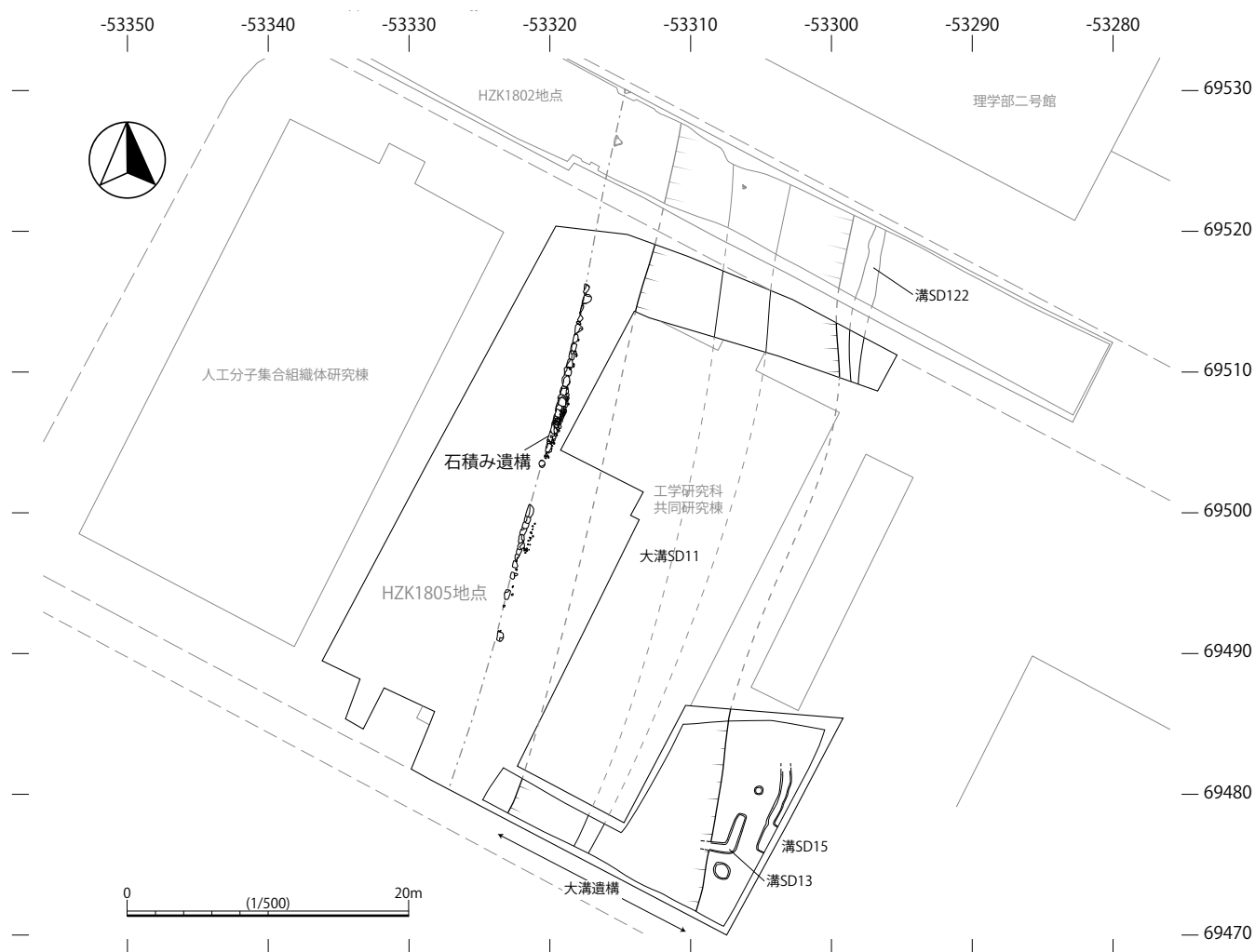
(4) 博多地区

博多遺跡群第111次調査(博多小学校内)で明らかとなった石積み遺構は、海側の前面と後面に一辺50cm以上の大きな石を積み上げ、その間をやや小さな石で充填して積み上げている(第2-2図)。石積み幅は3.3~3.5mで、最大残存高は1.3mをなす(佐藤編 2002)。

以上のような元寇防塁遺構は、調査地点で構造が異なっている。これは、第1表に示したように、防塁築造の分担国の違いによるものであろう。一方で、防塁遺構の基底面の標高は3~4mに収まっており(大塚 2013)、元寇防塁は博多湾に面した砂丘列の頂部に築造されていることを示している(第2-1・2図)。

3. 箱崎キャンパス跡地の元寇防塁

箱崎キャンパス跡地の元寇防塁は、2016年から九州大学埋蔵文化財調査室の発掘によって発見された。場所は中央図書館前南地点(HZK1603地点)であり、海側に積石が1段から3段の一系列に積み上げられ、石積みの背後には控え積みの石を持たず、砂質土で土塁が作られるものであった。この時点では、防塁の背後に大溝が控えていることは分からなかった。この発見の前に行っていた理学部2号館前南地点(HZK1601地点)の調査では、大溝が発見されていたが(第2-2図)、その段階では防塁に伴うものではなく浜堤列と浜堤列の間にある自然の落ち込みであると考えられていた。その後、2017年の理学部構内の発掘(HZK1701地点)で、石積遺構の背後に大溝が存在することが明らかとなり、2016年(HZK1603地点)に見つかった自然の落ち込みと考えられていたものが大溝であると考えられるようになった。さらに2018年の理学部2号館前南地点(HZK1802地点)の石積遺構と大溝が連続した地点で行った大溝部分のジオスライサー調査で、大溝が自然の落ち込みではなく人工的に掘られたものであることが明確となった。箱崎キャンパス跡地の元寇防塁は、砂丘列の頂部の海側前面に一系列の積石を積み上げ、その背後は砂で土塁状に固めて防塁を築き、その背面に幅約6~



第3図 箱崎キャンパス HZK1805地点

15m、深さ約1mの大溝が掘られたことが構造上の特徴であり、他地区のものと異なっている。

この大溝が発見された契機は、大溝内に陶磁器などの遺物が入った黒褐色の腐植土があった点にある。腐植土が大溝に埋積していない工学部2号館地点や農学部地点・中央図書館前南地点では大溝の検出は難しく、断面観察によってやっと可能になるものであった。また、元寇防塁の年代を特定したのも、この大溝の堆積年代からである。理学部2号館南地点（HZK1802・1805地点）の大溝（第3図）では、大溝が使用されていた段階の堆積土には13世紀～14世紀の土器が含まれていたのに対し、その上層の大溝廃棄後の埋積土には13世紀～15世紀の遺物が含まれていた。また、防塁廃棄後に14世紀後半～15世紀前半の土師器鍋を使った火葬土坑が作られており、防塁の廃棄年代が確定している（福永 2022）。元寇防塁は1276年に築造されているが、箱崎地区の元寇防塁は1277年に完成し、その後、鎌倉末期（1333年）まで補修管理していた文献記録がみられる（佐伯 2018）。したがって、元寇防塁の大溝が掘削され使用されていた年代は13世紀後半～14世紀前半であり、大溝が埋没した年代、すなわち元寇防塁が使用されなくなった年代が、14世紀後半以降ということになる。こうした年代は、大溝内の炭化物から測定された放射性炭素年代とも矛盾はみられない。

一方で、理学部周辺以外で発見された大溝には遺物が全く含まれていない。したがって、大溝の存

在を前提に土層から搜索する以外には、その発見は難しいものということができる。箱崎キャンパス跡地以外の元寇防塁で大溝が発見されていないのは、一つにはこうした溝内の腐植土や遺物が存在しないことに起因する可能性があるであろう。さらに重要なことは、こうした遺物が大溝使用時や大溝埋没時に存在していることは、遺物出土地点周辺において、元寇防塁が存在した時期の遺物包含層、すなわち遺構を含む人の居住の存在が示唆されるのである。理学部構内では残念ながら住居遺構などは検出されなかったが、区画溝（SD122・15）が発見されている（第3図）。同時期に元寇の恩賞として筑前国早良郡比井郷に領地をもらった渋谷氏は、ここに居館を構えている。その遺跡が柏原Ⅹ遺跡中世居館址であり、居館の周りには区画溝を設けている（山崎編 1987）。このような建物を囲む区画溝が、理学部周辺の元寇防塁付近で見つかった区画溝であろう。すなわち、区画溝を含む居宅に隣接した元寇防塁の大溝には、それと同時期の遺物が埋没しているのである。このことは、理学部構内やその周辺では元寇防塁が構築維持されていた段階で、建物の存在など人が居住していたことを意味している。箱崎地区の元寇防塁を構築して警固に当たっていたのが、薩摩国である。記録によれば、年に3ヶ月は異国警固に当たっており、その段階での居住地が必要であったであろう。区画溝内の居宅は、こうした薩摩国の御家人達の警固のための居住地であったと考えられるのである（宮本 2022）。

14世紀後半になり、理学部地域は元寇防塁の廃絶とともに火葬墓が作られるなど、人里離れた土地となる。一方で、箱崎キャンパス跡地南端の工学部2号館では、15・16世紀には元寇防塁や大溝を壊して、町割りや居宅を囲む区画溝が作られており、中世箱崎の町並みがこの地点まで延びてきたことが明らかとなっている（宮本 2022）。

4. 発掘調査からみた元寇防塁

元寇防塁は、地区（分担国）ごとに構築方法が異なり、構築法は大きく4種類に分けうる。

I類：石塁のみからなるもの（今津地区、博多地区）。

II類：前面と後面に石積みを行い、その間を粘質・砂質土や小礫を充填するもの（今津地区、西新地区）。

III類：前面の石積みのみで、後面は粘質土や砂質土で土塁を形成するもの（生の松原地区、西新地区（西南大学構内））。

IV類：前面一列の石積みで、その背後の後面は砂質の土塁で固め、さらに背後に大溝を持つもの（箱崎地区）。

箱崎地区の元寇防塁は他地域の元寇防塁と違い、海側の前面にのみ石積みが設けられ、後面の陸側には大溝が掘られている。大溝については、防塁を超えてきた敵の騎馬や兵の防御機能も考えられるが（岩永 2020）、それより構築時に、大溝を掘った土で土塁を積みあげることで普請期間を短くし、突貫工事的な構築を可能にするものであったであろう（福永・齋藤 2021）。『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の石築地は、7段ないし8段の石積みからなっている。中央図書館前南地点（HZK1603）で発見された3段の積石が高さ90cmを測るところから、おそらく2mの積石が存在したものと思われる。裏込めの積石もなく砂質土を積み上げた土塁は持ちが悪いところから、高さ2mに達せない低い防塁であったという解釈もある（福永・齋藤 2021）。しかし、裏込石の存在からも（宮本 2022）、高さ2mの積石を築くことは可能であったであろう。他地区の防塁と同じように、防塁前面に高さ2m程度の石積みを築くことに意味があったのである。

理学部構内調査地点（HZK1701地点）時のジオスライサー調査により、箱崎キャンパス跡地では

9世紀～12世紀頃に風成砂堆積物の形成が始まり、浜堤が発達した13世紀後半の段階に、浜堤列上に元寇防塁が構築されたことが明らかとなった。浜堤の高さは、他地区の浜堤より低く海拔2～2.5mである（第2図）。積石があった防塁部分は浜堤列頂部の高い位置に築かれ、それから汀線まで20～30m幅の砂浜があったと考えられている（福田ほか 2018）。他地区の防塁を含めて考えると、元寇防塁の基底面が海拔2～4mという浜堤列の高さの上に、さらに高さ2mの石積みの構築は、海側からみれば4～6m程度の高い防塁が存在していたことになる。こうした防塁が博多湾全体に連なっていたとすれば、博多湾に入った元軍にとって大いなる脅威となったことであろう。

弘安4（1281）年の弘安の役の時には、元・高麗軍は壱岐から志賀島に入るものの、海の中道から東に向けて進軍し長門に向かった。これは、鎌倉の御家人達が志賀島に向けて海上から攻め入ったとともに、博多湾を巡って存在する防塁が大いなる阻みになったと考えることができる。博多湾を巡る石塁が累々と存在することに防御的に大きな意味があったのであろう。そして、弘安の役後も元の襲来を恐れた鎌倉幕府は、鎌倉末期まで防塁を維持・修理する賦役を九州の御家人に課したのである。

参考文献

- 荒牧宏行（編）2001『国史跡元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集、福岡市教育委員会
- 岩永省三 2018「中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第1集、125-145頁
- 岩永省三 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第4集、164-174頁
- 大塚紀宜（編）2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集、福岡市教育委員会
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、302-317頁
- 藏富士寛（編）2019『元寇防塁調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1382集、福岡市教育委員会
- 佐伯弘次 2018「箱崎の元寇防塁と薩摩」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第1集、92-98頁
- 佐藤一郎（編）2002『博多85—博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集、福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会（編）1969『今津元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第2次考古学的調査—』福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会（編）1970『西新元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第3次考古学的調査—』福岡市教育委員会
- 福田正宏・下山正一・市原季彦・森貴教・谷直子 2018「九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第1集、108-124頁
- 福永将大 2022「箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用史」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査報告第7集、111-127頁
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第5集、180-197頁
- 堀本一繁 2018「史跡元寇防塁地蔵松原史跡指定地について」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査報告第1集、99-107頁
- 宮本一夫 2022「総括と展望」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査報告第7集、193-202頁
- 山崎純男（編）1987『柏原遺跡群Ⅲ—柏原 K・L 遺跡・中世居館址と中世水田の調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集、福岡市教育委員会

XIII 箱崎遺跡埋蔵文化財調査を終えて

宮本一夫¹⁾

1：九州大学総合研究博物館

1. はじめに

九州大学埋蔵文化財調査室（以下、埋蔵文化財調査室と略称）は、1978年に九州大学春日原地区（現、筑紫キャンパス）の建物新営に伴う埋蔵文化財調査を担当する九州大学春日原埋蔵文化財調査室として始まった。2000年には全学の埋蔵文化財を対象とする九州大学埋蔵文化財調査室となった。しかし、伊都キャンパスの統合移転地に関しては、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が2000年から埋蔵文化財調査を担当し、土地の造成後に九州大学が移転地を取得することとなった。一方で、埋蔵文化財調査室では、春日原地区での発掘調査が1998年に終了し、2007年に担当助手の退職と共に一時閉室となった。同年には、学術研究員1名を採用して春日原地区埋蔵文化財調査の整理調査が続けられることとなった。

2005年から伊都キャンパスへの統合移転が始まる一方、売却予定の箱崎キャンパスで試掘調査を進めてきた福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課（以下、福岡市埋蔵文化財課と略称）は、旧応用力学研究所生産研本館の箱崎キャンパス東南部を中心に中世箱崎遺跡が広がることを明らかにした。そのため、福岡市埋蔵文化財課との協議により、九州大学が箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を実施することとなった。2015年に、九州大学埋蔵文化財調査委員会の決定により、九州大学埋蔵文化財調査室を改編し、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を中心とした調査組織を構築した（宮本 2018）。助教2名（後には准教授1名、助教2名）を採用し、2016年から箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を始めた。さらに、2017年から整理調査のために学術研究員1名を採用し、発掘調査報告書を刊行してきた。2021年度末には箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査が終了し、助教1名で整理調査を行ってきた。これまで、箱崎遺跡に関しては12冊、御供田遺跡に関しては総括報告書を2冊、塩原遺跡に関しては1冊の総計15冊の報告書を刊行してきた。本書は、最終報告書として、箱崎遺跡の調査を総括したものである。

2. 調査の経過

（1）元寇防塁の調査

大正2（1913）年には当時九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎は、九州帝国大学工科大学敷地内（箱崎キャンパス）で、博多湾汀線とほぼ平行して走る土手状の隆起を元寇防塁跡と考えた（中山 1913・1984）。しかし、近年の福岡市埋蔵文化財課の試掘では、元寇防塁跡の手がかりは得られず、元寇防塁は既に消滅しているものと思われた。こうした中、九州大学埋蔵文化財調査室で、2016年5月～6月に、箱崎キャンパス内での箱崎遺跡の広がりを探るために最初に行った発掘調査が、理学部2号館前南地点（HZK1601地点）の調査である（第1図）。この段階で溝状遺構SD01を検出したが、当初、東西方向に走る2列の浜堤の間の谷部にたまった12世紀～15世紀の遺物包含層である可能性が考えられた。結果的に、このSD01の埋土②は元寇防塁の大溝であることが、後に判明する。

元寇防塁跡と判明した最初の調査は、2016年8月～10月に行ったHZK1603地点の調査である（第1図）。この調査の端緒になったのが、2016年5月19日の中央図書館前南地点（HZK1603地点）に隣接する東西方向の舗装道路の北端部でのガス配管切り替え工事に伴う福岡市埋蔵文化財課の立ち会い調査で発見された長径最大60cmほどある大型礫であった。大型礫は南北方向に続いて配列している可能性があり、元寇防塁の石積みである可能性が考えられた。そこで、HZK1601地点の調査終了後、2016年8月22日から大型礫発見の直ぐ北側の空き地（HZK1603地点）を発掘調査した。その結果、防塁の石積み遺構が発見され、最も良好な遺存状態で3段の積石部が確認された。2017年2月～3月には、HZK1603地点の北側に連続するHZK1604地点（第1図）を発掘調査し、石積み遺構の連続部分を確認した。

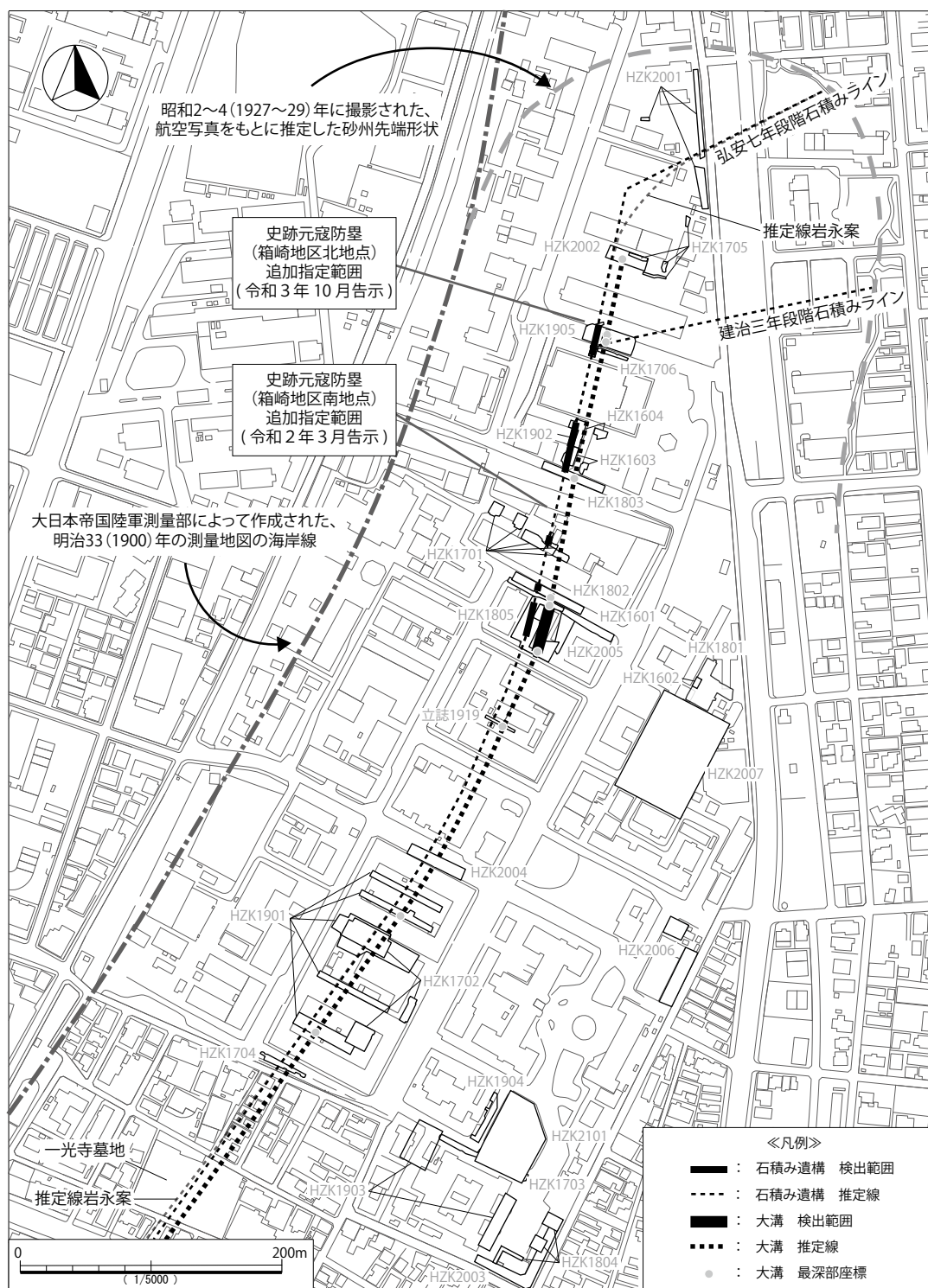
2017年5月～7月調査のHZK1701地点（第1図）は、理学部内で想定される元寇防塁の存在地点である。この調査では、元寇防塁の石積みが土塁の海側のみに築かれ、陸側には溝状遺構が掘られていることが判明した。一方、この溝状遺構に関しては、HZK1601地点の溝状遺構も含め人工的に掘られたものか、あるいは列状をなす浜堤列間の谷部であるかが問題となった。これに関しては、2018年にHZK1601地点に隣接して設定したHZK1802地点（第1図）調査時に行ったジオスライサー調査の結果、人工的に掘られた大溝であることが判明した（市原・下山 2019）。また、ジオスライサーの土壌調査により、防塁が築かれた基盤の土層は、宇美川からの堆積物によって12世紀代に形成されたものであることが判明した。また、石積みから海側に30mの地点が元寇当時の海岸の汀線であると考えられた（福田ほか 2018）。

2018（平成30）年度と2019（令和元）年度の元寇防塁関係調査地点は、HZK1802、HZK1803、HZK1805、HZK1902地点（第1図）である。この内、HZK1803地点とHZK1902地点は中央図書館前南地点、HZK1802地点とHZK1805地点は理学部2号館前南地点の調査である。前者は、中央図書館前南地点で元寇防塁を最初に発見したHZK1603地点の南側の続き部分のHZK1803地点と、HZK1603地点とHZK1604地点の間に位置する防音講義室のHZK1902地点で、元寇防塁遺構を確認するための調査を行った。後者の理学部2号館前南地点では、2016年の第1回調査であるHZK1601地点で発見された大溝、ならびに2017年の理学部中庭地点HZK1701地点で発見された石積み遺構・大溝の元寇防塁遺構が、北に向けて連続することを確認した。

2017年に行った工学部2号館のHZK1702地点ならびにHZK1704地点（第1図）では、石積み遺構を含む防塁部分は既に破壊されていることが明らかとなった。また、2017年～2018年にかけて行った創立五十周年記念講堂、工学部3号館での試掘調査では、後世の攪乱部分が多く、遺跡はほとんど残っていない状態であった。そこで、2018年には、HZK1601地点の北隣にHZK1802地点を設定し、石積みと大溝を発見した（第1図）。一方で、工学部3号館内の試掘では建物基礎構築などによる破壊で元寇防塁は発見されなかった。そこで、HZK1802・HZK1601地点南側の工学部工学研究科共同研究棟と人工分子集合組織体研究棟の間の通路部分に元寇防塁遺構が存在するかを確認するために、HZK1805地点での発掘調査を行った。この部分の元寇防塁遺構は通路部分にかかっていたこともあり、遺存状況がよく、長さ26mに渡って1段の石積み遺構が連続して存在していた。

（2）集落遺跡の調査

箱崎キャンパス跡地東南部の箱崎遺跡は、調査対象外の箱崎サテライト（旧工学部本館など国の登録有形文化財指定地域）を境に遺跡環境を大きく異にしている。箱崎サテライト以南は、建物や井戸など集落環境を示す遺跡群であるのに対し、北側は中世から近世にかけての墓地遺構が展開している。



第1図 箱崎キャンパス跡地における元寇防塁推定線とトレンチ配置図

2017年度に HZK1703 地点、2018年度に HZK1804 地点、2019年度に HZK1903 地点と HZK1904 地点、2020年度に HZK2003 地点、2021年度に HZK2101 地点を発掘した (第2図)。これらの地点の箱崎キャンパス跡地東南部は、古代末期から中世の集落遺跡である (宮本 2023)。古代末期から中世にかけて箱崎遺跡の居住域が宮崎宮周辺を中心にして、次第に北側の箱崎キャンパス東南部の箱崎サテライト

(旧工学部本館などの国の登録有形文化財指定地域)まで拡大している。これらの地点では、井戸、掘立柱建物、土壙墓や板碑などが出土している。

(3) 中世・近世墓の調査

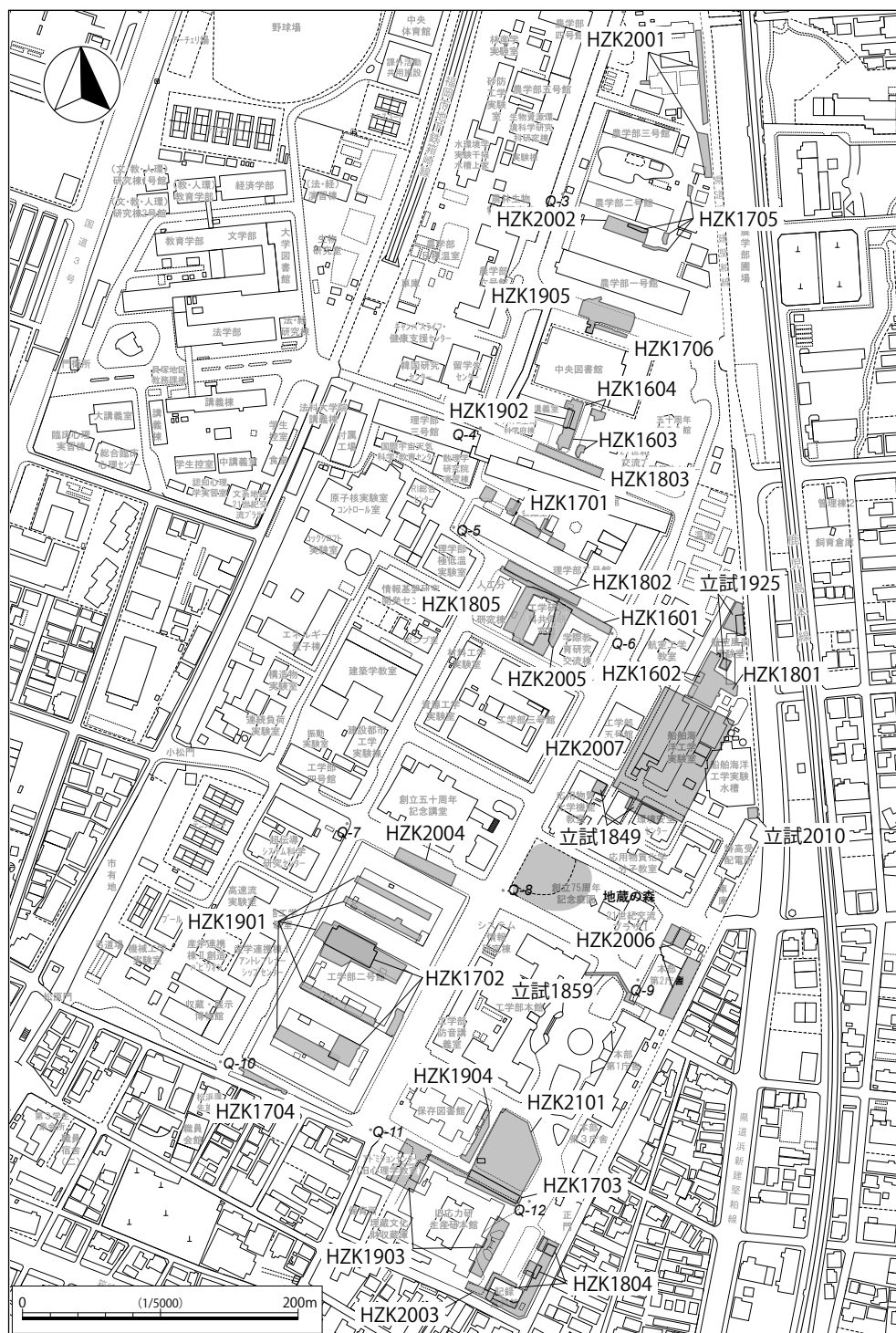
2016年8月の船舶海洋工学実験室周辺の試掘において、近世～近代の甕棺3基と人骨が検出された。当初、試掘主体の福岡市埋蔵文化財課は、本調査ではなく工事掘削時における慎重調査の判断を下した。これに対し、九州大学埋蔵文化財検討ワーキンググループならびに九州大学埋蔵文化財調査室では、近世甕棺と人骨の遺存状態ならびに明治33(1900)年測量図を元に、この地点に良好な近世墓地が存在する可能性があると判断し、学術調査としてHZK1602地点の発掘調査を2016年8月に実施した(第2図)。また、2018年5月～11月にかけて行ったHZK1801地点は、多くの桶棺墓や甕棺墓からなる近世墓地であり、しかも人骨の遺存状態が良好なものであることが明らかとなった。また、2019年2月に旧工学部本館と本部第一庁舎をつなぐ配電線路改修工事のための試掘調査(立試1859地点)では、中世の貿易陶磁器や土壙墓が発見され、この地点に中世墓地が存在する可能性が高まった。さらに2020年11月～2021年3月に発掘を実施したHZK2006地点では、中世の木棺墓とともに火葬土坑が多数検出された。このように、地蔵の森から北側の船舶海洋工学実験室周辺までは、中世から近世あるいは近代の墓地が続くことが明らかとなった。また、HZK1801地点の南側に隣接したHZK2007地点で、2021年2月～2022年1月まで発掘調査を実施した。HZK1801地点に続く桶棺墓や甕棺墓とともに、HZK2007地点南端では、小型木棺墓と火葬土坑を検出した。

3. 遺構の変遷

箱崎キャンパス跡地の遺構は、大きく3地点に分かれる。一つは箱崎キャンパス跡地を南北に貫く元寇防塁である。また一つは箱崎キャンパス跡地東南部の地蔵の森や旧工学部本館以南の箱崎キャンパス跡地東南部に至る集落遺跡である。これらの集落遺跡は12世紀後半～13世紀前半の第1段階、13世紀後半～14世紀前半の第2段階、14世紀後半～15・16世紀の第3段階に分かれる。古代末期から中世にかけて箱崎遺跡の居住域が筥崎宮周辺を中心にして、次第に北側の箱崎キャンパス東南部の箱崎サテライト(旧工学部本館などの国の登録有形文化財指定地域)まで拡大していった。この居住域の拡大とともに、その北側に古代末期から中世の墓域が広がっていた。近世になると、箱崎の集落域は宿場町として筥崎宮周辺に収束し、さらにその周りに農村や漁村が散在していた。元禄6(1693)年に唐津街道が整備され、街道は箱崎村の中心を通り、箱崎キャンパス跡地の南側で東に折れ曲がるように整備された(本書第V章 福永論文)。この折れ曲がった街道より北側の箱崎キャンパス跡地は、荒蕪地であり松原が広がっていた。さらに、地蔵の森北側には人里離れた近世墓地が営まれていたのである。

(1) 古代末期(平安時代末)～中世前期(鎌倉時代)前半：12世紀後半～14世紀前半

箱崎キャンパス跡地は、古代前半まで海浜部であって、宇美川や綿打川などからの土砂の堆積によって砂州が次第に北側に延び、12世紀前半の平安時代末期になって初めて土地環境が安定していく。その地形環境は、箱崎の砂州と多々良川河口の背後に控える湾によって、天然の良港を形成しており、博多と並んで日宋交易の拠点となっていた。10世紀前半に筑前国穂波郡の大分宮を遷座して筥崎宮が創建された。筥崎宮の秦氏が、箱崎を日宋貿易の拠点としたのである(本書第X章 伊藤論文)。12世



第2図 箱崎キャンパス跡地における埋蔵文化財調査地点

紀後半に天然の良港を元に中国人商人が居住する中華街が形成される。安定した箱崎の砂州が延びる箱崎キャンパス跡地まで、中世箱崎遺跡が広がっていくのである。

HZK1702地点で発見された碇石は、その形態や大きさから宋・元代の大型船の碇石である可能性が推測されている（森 2019）。これら碇石が浙江省から福建省の石材である可能性が化学分析により

示されている（鈴木ほか 2001）。一方、博多綱首などと呼ばれる中国人商人が、12世紀～13世紀にかけて箱崎にも居住していたことが知られていた（佐藤 2013）。また、筥崎宮と関係するとされる大型貿易船（新安沖沈没船）が寧波から日本に向かって出発したのが、元亨3（1323）年である。すなわち、碇石の出土は、そうした宋や元の商人たちが、寧波から船出した大型貿易船に乗って箱崎までやって来ていたことを物語る資料である。

この段階の箱崎キャンパス跡地は、掘立柱建物と井戸を中心とした集落遺構が旧工学部本館南側まで延びてきている。その段階に、貿易陶磁器などを副葬した木棺墓がその北側に形成され始める（第3図）。この集落遺跡第1段階は、調査区の箱崎遺跡の砂州が安定して遺跡の範囲が箱崎キャンパス跡地東南部まで延びる段階である。箱崎遺跡の居住域が北側に延び、さらにその北側に墓地が営まれたのである。

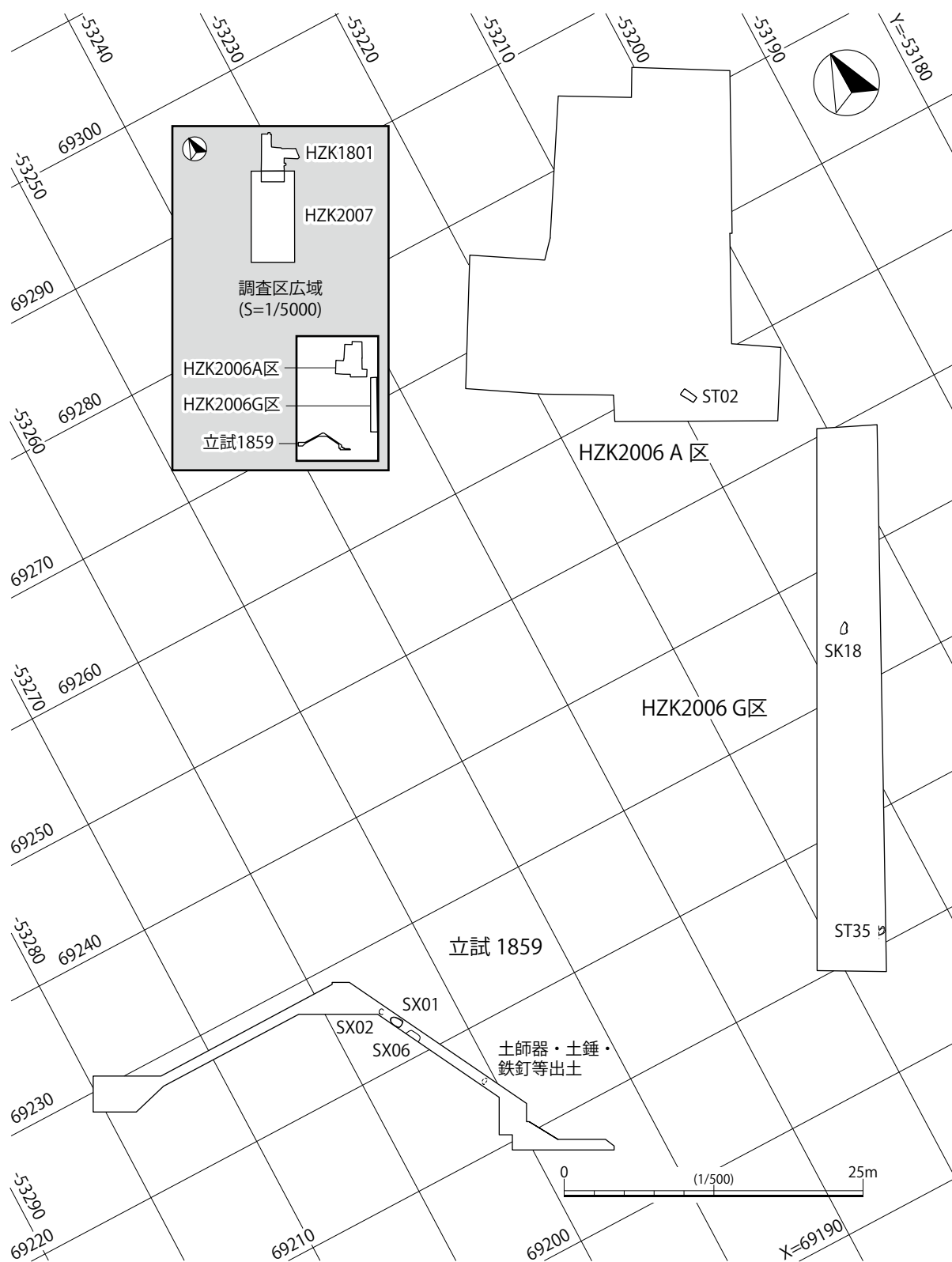
箱崎キャンパス跡地の木棺墓・土壙墓は、立試1859地点と HZK2006地点 A 区南端・G 区から発見されている（第3図）。小型の土壙墓 ST02は、頭部側に12世紀中頃～13世紀初頭の龍泉窯系青磁碗1点と土師皿4点が副葬されていた。また、立試1859地点の SX01から人骨が出土しており、土壙墓をなす。付近からは、12世紀後半の白磁皿4点、13世紀前半の龍泉窯系青磁碗1点が出土している。これらが SX01の副葬品である可能性がある。このように、本部第二庁舎付近は、古代末～中世前期（集落遺跡第1段階）の木棺墓地であった。さらに、この時期の木棺墓は、旧工学部本館西側で福岡市教育委員会が発掘した箱崎遺跡第102次調査でも、3区 ST3115・3116と5区の ST5040で3基の木棺墓が確認されている（本田編 2023）。

（2）中世前期後半（元寇防塁期）：13世紀後半～14世紀前半

13世紀後半～14世紀前半の第2段階は、元寇防塁の存続時期に当たる。元寇防塁は、HZK1603地点の発掘調査により確認された。そこでは、防塁の石積み遺構が最も良好な遺存状態で、積石部3段が確認された（第4図）。石材直下から発見された土師皿や土壙内の放射性炭素年代から、建治3（1277）年に薩摩国の御家人によって築造された元寇防塁跡と判断した。さらに、HZK1603地点の北側に連続する HZK1604地点（第2図）を調査し、石積み遺構の連続部分を確認している。

HZK1701地点（第1図）の調査によって、元寇防塁の石積みが土壙の海側のみに築かれ、陸側には溝状遺構が掘られていることが判明した（第5図）。一方、この溝状遺構に関しては、HZK1601地点の大溝遺構も含め人工的に掘られたものか、あるいは列状をなす浜堤列間の谷部であるかが問題となった。これに関しては、2018年に HZK1601地点に隣接して設定した HZK1802地点（第1図）調査時に行ったジオスライサー調査の結果、人工的に掘られた大溝（第5図）であることが判明した（市原・下山 2019）。この大溝の基盤層が12世紀～13世紀であり、基盤層を掘り込んだ大溝の最下層には12世紀～13世紀の遺物が、さらに大溝の埋積土には13世紀後半～14世紀前半の遺物があり、14世紀後半の段階に大溝が廃棄されたと考えられる。したがって大溝の存続時期が13世紀前半～14世紀後半であり、文献では建治3（1277）年に築造され鎌倉幕府滅亡の元弘3（1333）年まで存続していた箱崎における元寇防塁の存続年代（佐伯 2018）と対応したものであることが判明した。これにより、大溝も元寇防塁の一部であることが明らかとなった。また、ジオスライサーの土壌調査により、防塁が築かれた基盤の土層は、宇美川からの堆積物によって12世紀代に形成された砂州であり、その上に防塁が築かれていることが判明した。また、石積みから海側に30mの地点が元寇当時の海岸の汀線であると考えられた（福田ほか 2018）。

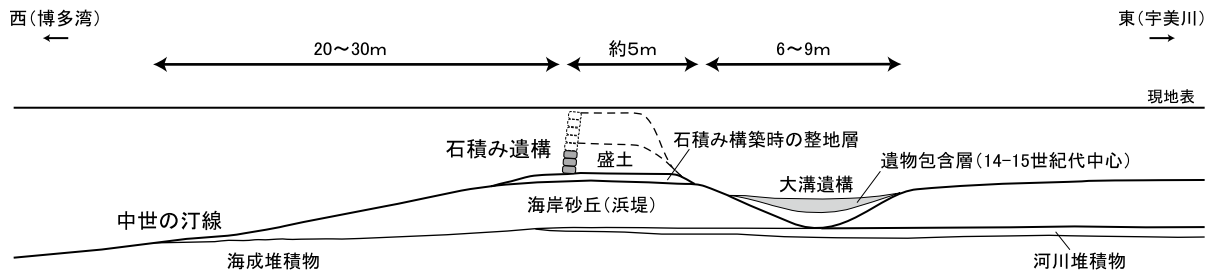
このような調査成果から、箱崎キャンパス跡地の元寇防塁が、12世紀～13世紀代には安定した砂州



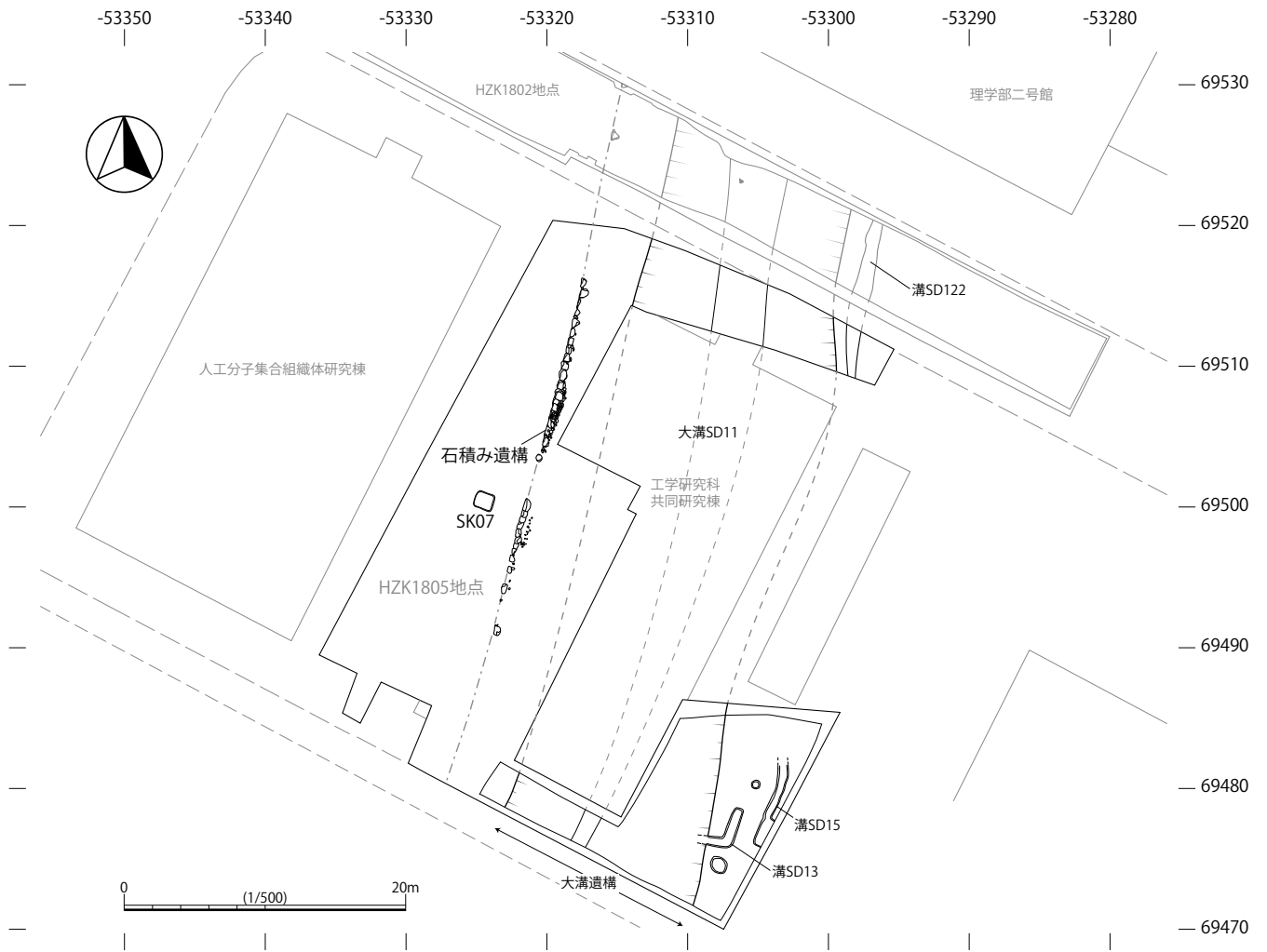
第3図 HZK2006・立試1859地点の木棺墓と土墳墓



第4図 HZK1603地点出土元寇防塁跡



第5図 元寇防塁の模式断面図

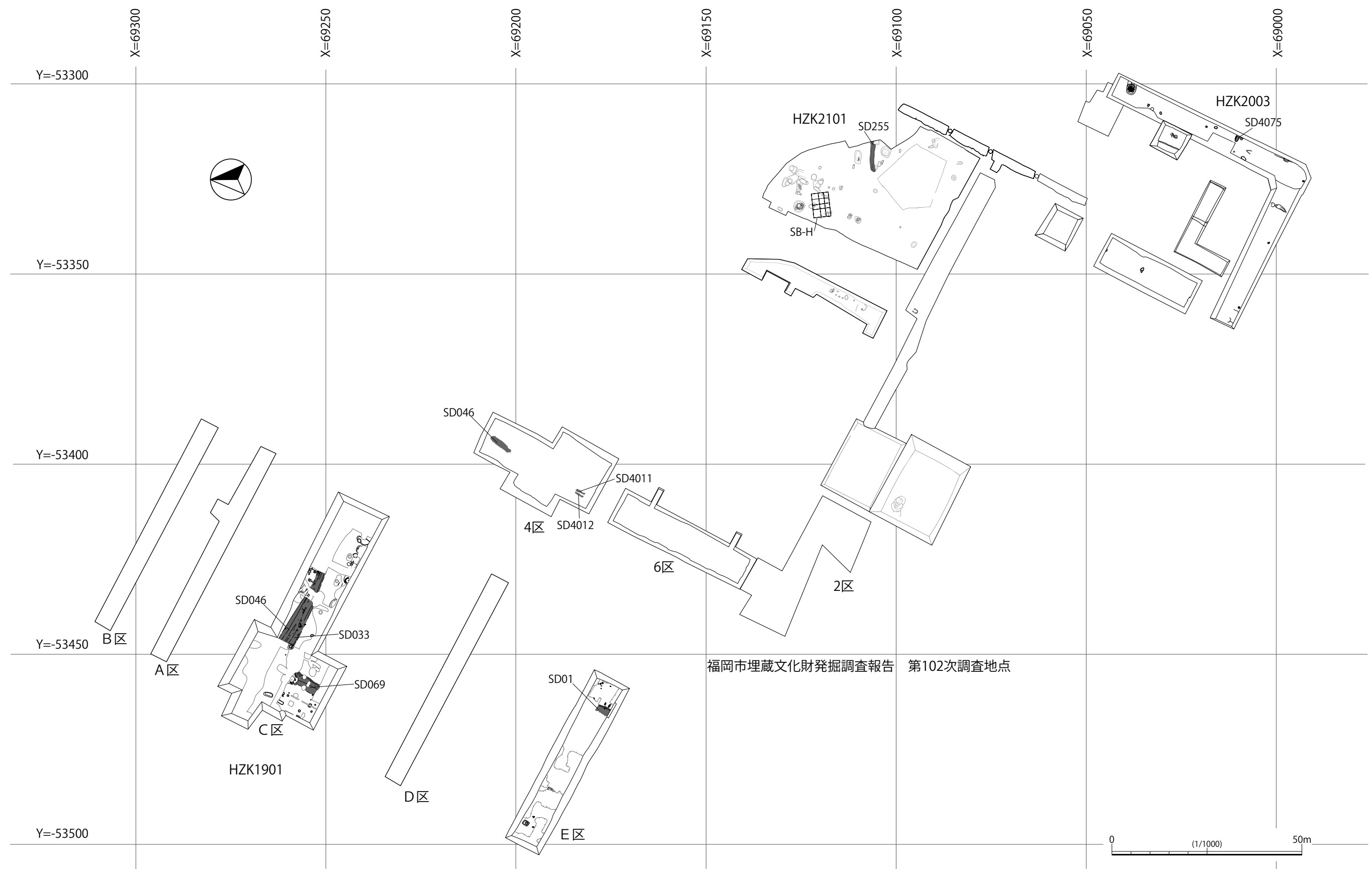


第6図 HZK1805地点の元寇防塁と区画溝

上に土塁を築き、海側には石積みが築かれていることが明らかとなった（第5図）。石積みはHZK1603地点で発見された3段の石積みが約90cmの高さを測り、『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の防塁が7～8段築かれている様子から復元すると、約2mの高さに積み上げられていたと考えられる。一方で、石積みの背面は、幅約5mの砂による盛り土で支えるのみである（第5図）。石積みのこうした脆弱な構造から、石積みはせいぜい4～5段程度のものと考え、高さ1.5m程度と推定された（福永・齋藤 2021）が、裏込石の存在からも約2mの高さに盛り上げることも可能である（森 2018）。この石積みの石材は、多々良川河口の隣接した地域から持ち込まれている（足立・田尻 2018）。大溝は、防御的な機能とともに土塁の土盛りのために短期間で土を確保する意味もあったと考えられる。このように、汀線から約30mの海側に石積み築き背後は土塁で突き固められ、陸側に幅6～9mの空堀である大溝を掘った元寇防塁が存在することが分かった（第5図）。こうした構造は、博多湾に広がる元寇防塁でも特異である。また、箱崎遺跡と同様に、石積みの基底面に面を揃えた大型の礫を立てるものは、今津地区の元寇防塁第12次調査2区でもみられる（藏富士編 2019）。このように、担当した国ごとあるいは御家人ごとに、その地域の土地環境に応じて創意工夫がなされ、博多湾岸を巡る壮大な元寇防塁が築かれたのである（本書第XII章 宮本論文）。

2018年には、HZK1601地点の北隣にHZK1802地点を設定し、石積みと大溝を発見した（第1図）。さらに、HZK1601地点に隣接する工学研究科共同研究棟と人工分子集合組織体研究棟の僅かな空間地にHZK1805地点を設定したところ、石積みが1段ではあったが25m以上連続して続いていることが判明した。そして、その背後に幅14～15mの大溝SD11が発見された。また、大溝の陸側には区画溝であるSD15やHZK1802地点の溝SD122が発見された（第6図）。大溝の使用時の堆積土には、13世紀～14世紀の龍泉窯系青磁や白磁などを中心とした貿易陶磁器が含まれるのに対し、大溝の廃棄後の埋土には13世紀～15世紀の遺物が含まれている。すなわち、建治3（1277）年の築造から元弘3（1333）年の鎌倉幕府滅亡までの約50年間は、元寇防塁が維持されていたことを示している。大溝の使用時の13世紀～14世紀の遺物は、防塁の維持管理されていた時期を表している。また、防塁の陸側で発見された区画溝（第6図）は、これら防衛の任にあった武士たちの居宅を囲む区画溝であったと考えられる（宮本 2019）。また、防塁の海側ではHZK1805地点で火葬土坑SK07が発見されており（第6図）、火葬土坑SK07には、14世紀後半～15世紀前半の土師器鍋が使われていた。この火葬土坑は元寇防塁が廃棄された直後の14世紀後半～15世紀前半段階に作られたものである（福永・齋藤 2021）。この火葬土坑の存在は、鎌倉末期まで元寇防塁が機能していたが、南北朝以降から室町時代初期にかけて元寇防塁が廃棄されたことを意味している。したがって、この地点付近には元寇防塁廃棄後の生活痕跡がなかったことを示している。このように、区画溝とともに大溝内に貿易陶磁器を含めた13世紀～14世紀の遺物が多量に出土したHZK1701地点からHZK1805地点の防塁の陸側には、防塁使用時の生活空間が存在していたと考えられる。それは、防塁を覆勘していた薩摩の御家人たちの居宅が区画溝に囲まれて存在していたと想定される（宮本 2019）。

一方で、中央図書館北側でも元寇防塁遺構が発見された。2017年に発掘調査を行ったHZK1706地点で検出した1段分の石積み遺構である（第1図）。また、2019年に調査を実施したHZK1905地点は隣接するHZK1706地点北側から農学部1号館前までで、石積み遺構の延長部分を確認するとともに、防塁に伴う大溝も発見することができた（第1図）。さらにHZK1905地点に延長した石積み遺構からは、石積みの背面に東西方向に走る背面石列が検出された。さらに、2020年に調査を行ったHZK2002地点では防塁は破壊されていたが、大溝の位置を確認することができた。大溝はHZK1905地点からHZK2002地点の大溝まで一直線である。また、2020年に行った地蔵松原指定地区における地中レー



第7図 中世箱崎遺跡第3段階の区画図

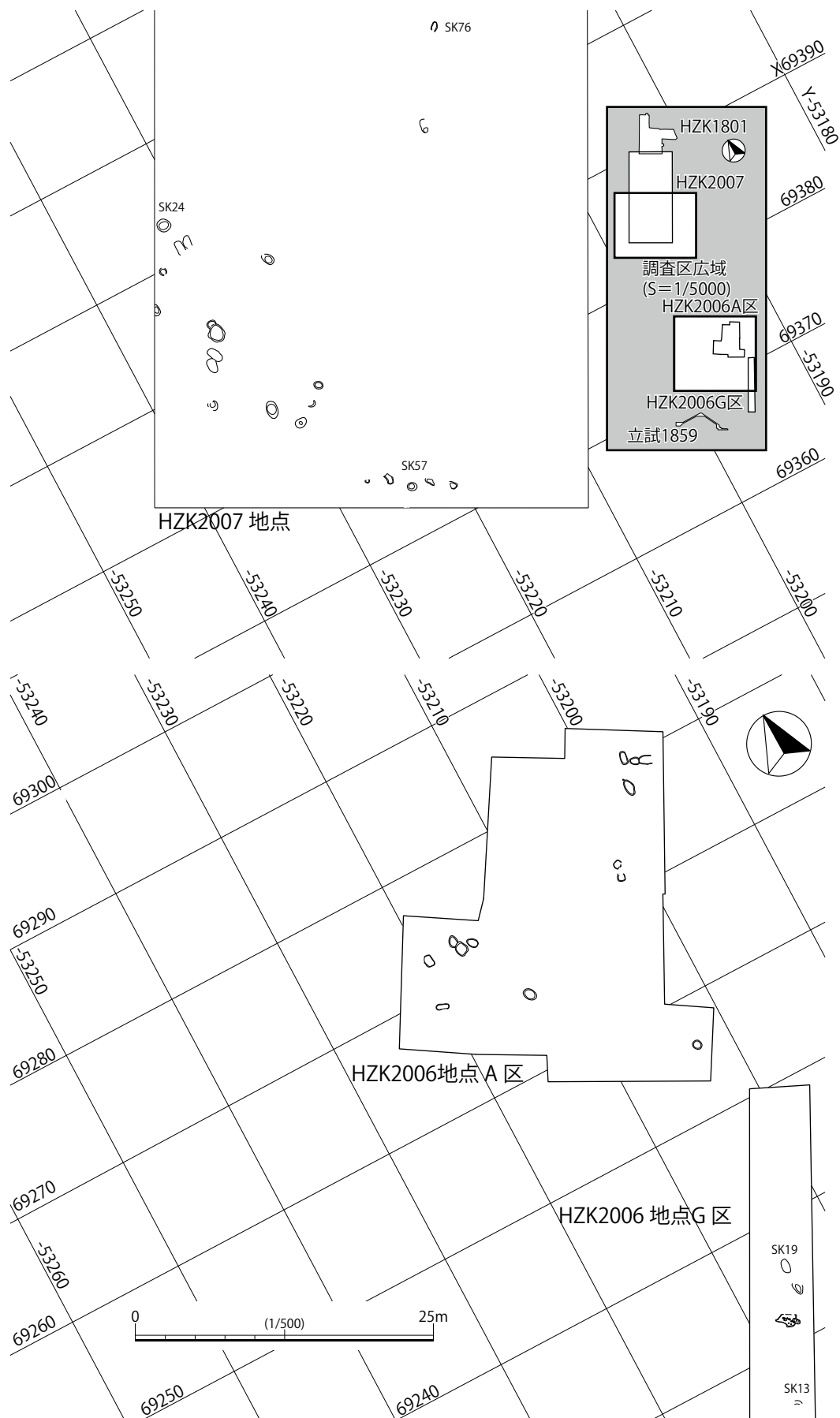
ダー探査の結果、その方向が「箱崎町地蔵松原元寇防塁附近図」の「防塁露出ヶ所」とほぼ同じ位置であるところから、東西方向の防塁が存在すると考えられた。そして、この方向が HZK1905 地点で発見された背面石列とほぼ同じ方向であることが注目された。HZK1905 地点の背面石列は、石積み遺構に直行して積まれたものではなく、約 135° に開くものであり、意図的な積み方の方向性がある。そこで、まずこの背面石列の位置が、建治 3（1277）年の防塁完成時の北端と考え、さらに HZK2002 地点の大溝を越えたところから北東方向に折れ曲がり、地蔵松原の石積みに繋がるものと考えられた（第 1 図）。これは、薩摩国御家人比志島佐範の箱崎石築地 5 丈 1 尺 4 寸を勤仕した覆勘状が建治 3（1277）年と弘安 7（1284）年の 2 回出ているところから、追加築造か完成後の修理があったと解釈されること（佐伯 2018）を根拠とする。建治 3（1277）年に背面石列まで防塁が作られ、さらに弘安 7（1284）年に増築されて地蔵松原まで延びたと想定したのである（福永・齋藤 2021）。また、この 8 年の間に箱崎の砂州が発達したものと考えられる。台風災害（鹿島ほか 2022）などの自然災害がこうした砂州の形成をもたらした可能性もある。あるいは、須恵川側からの土砂の流出が急激に元寇防塁の位置する砂州を発達させた可能性があり（本田 2022）、防塁が増築された可能性がある。一方、こうした二段階の変遷を考えることなく、HZK2002 地点の大溝付近からカーブを描きながら地蔵松原へと繋がっていくという見解もみられる（岩永 2022）。

この段階の、木棺墓・土墳墓は、元寇防塁とは別に前代以来の箱崎遺跡北辺に広がる墓葬として位置付けすることができる（第 3 図）。HZK2006 地点 G 区 ST35 は、13 世紀後半～14 世紀前半の白磁碗 1 点と白磁皿 4 点が副葬された木棺墓であり、集落遺跡第 2 段階の木棺墓である。HZK2006 地点 G 区 SK18 は発掘時の所見では土坑と判断されたものであるが、土坑内部から人骨片が出土していることと、土坑の肩部近くから 14 世紀初頭～14 世紀後半の龍泉窯系青磁碗が出土していることから、この段階の土墳墓と考えられる。

（3）中世後期（室町時代）：14 世紀後半～16 世紀

こうした状況が大きく転換するのは、中世後期の 14 世紀後半～15・16 世紀の集落遺跡第 3 段階の HZK2101 地点から HZK2003 地点である。この段階では、元寇防塁が維持されず、区画溝や建物の方位が変化し（第 7 図）、都市区画が変わるとともに、瓦葺建物などの建物群が作られている。この瓦葺建物は、礎石建てのものであるが、礎石がすべての柱穴にみられないことから、その存在に否定的な見解もある（本書第 III 章 福永論文）が、礎石は廃棄後に除去される可能性も高い。建物周辺の瓦の存在からも、瓦葺建物のための礎石建造物であると考えられる。HZK2006 地点から HZK2003 地点では、板碑が遊離した状態で出土している。それら板碑の年号は、文和年間（1352～1356）、応永年間（1394～1428）、宝徳 3（1451）年、享禄 5（1532）年といった 14 世紀後半～15・16 世紀の集落遺跡第 3 段階のものである（谷 2026）。同時期の板碑は、地蔵松原から移されたとされる勝軍地蔵堂板碑にも認められる（福岡市教育委員会文化財整備課編 1992）。このような板碑の出土からも、瓦葺建物は江戸時代以前の北山重盛院還國寺あるいは勝軍地蔵堂の堂宇である可能性がある（本書第 IV 章 谷論文）。また、それら瓦葺建物の堂宇は、旧工学部本館東側の HZK2003 地点から HZK2101 地点でも建造されたと考えられる。これらの遺構がある箱崎キャンパス跡地東南部では、集落遺跡第 1 段階・第 2 段階と同様に、この段階においても井戸が同じ位置に作られ続け、持続的に使用されている（本書第 III 章 福永論文）。これは、地下水脈の位置が中世において一定していることと関係し、それを利用した居住空間があったことを示している。

さらに、元寇防塁があった工学部 2 号館においても、HZK1901 地点 C 区で元寇防塁の大溝を切っ



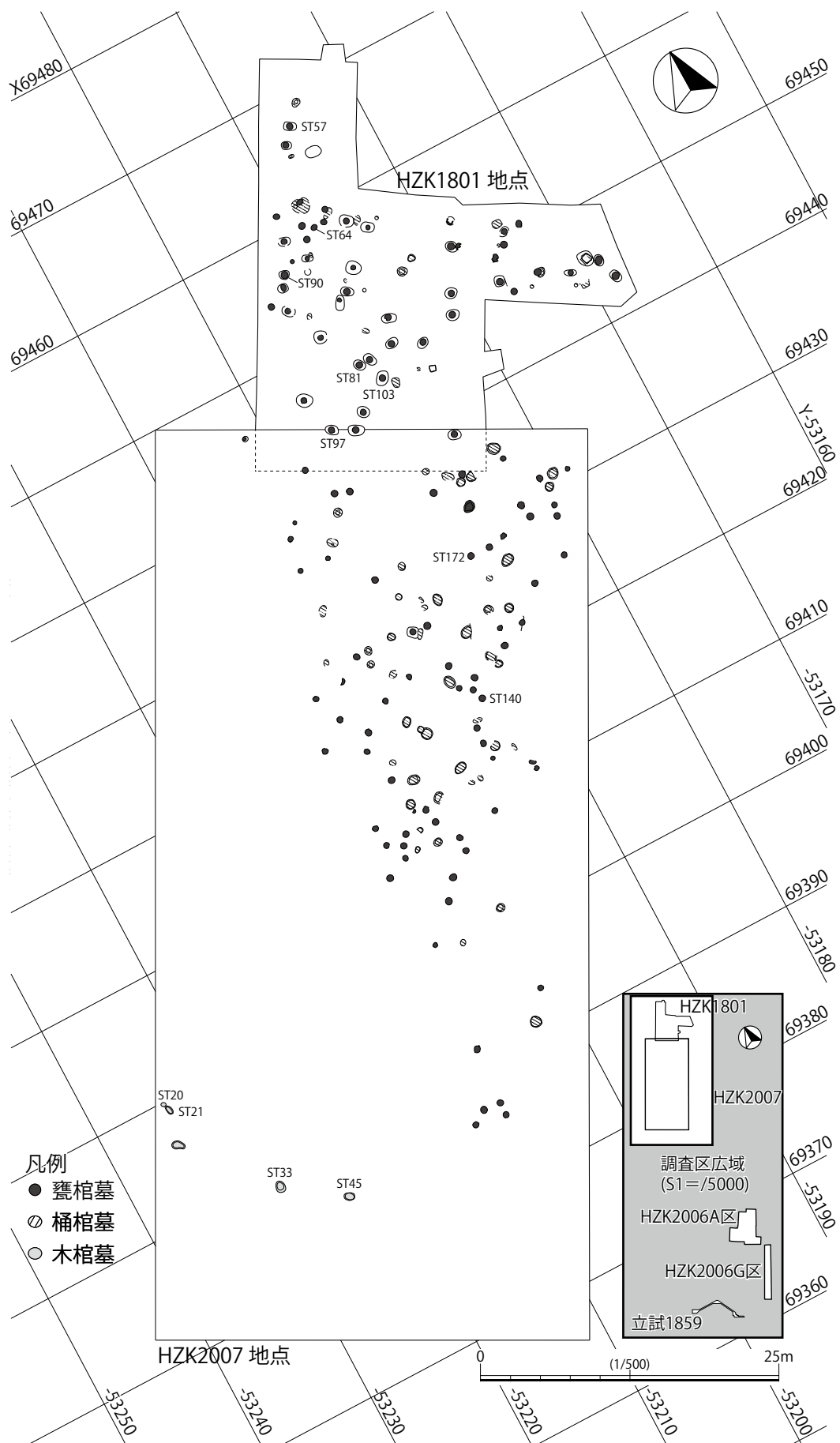
第8図 HZK2006・2007地点の火葬土坑

て作られた15世紀～16世紀の区画溝のSD033・046が検出されるとともに、同時期の区画溝がC区のSD069で、E区のSD01で検出された（第7図）。15・16世紀には、工学部2号館のHZK1901地点C区までの元寇防塁が削平され、建物を囲む区画溝や町割に相当する区画溝が作られ、中世箱崎の街並みがこの地点まで延びてきたことが明らかとなった。これらの区画溝は、箱崎キャンパス跡地のHZK2101・HZK2003地点の区画溝SD4075、さらに福岡市埋蔵文化財課が担当した第102次4区SD046・4011・4012でもほぼ平行あるいは直交の方向を示しており（第7図）、一貫した都市区画での都市設定があったと考えられる。一方、箱崎キャンパス跡地のHZK2101地点のSD255や掘立柱建物SB-Hはこれらとは方位を異にしている。

一方で、この段階の地蔵の森北側のHZK2006地点やHZK2007地点では火葬土坑が存在し、茶毘に付す火葬場となっている（第8図）。墓域そのものの存在は不明であるが、葬法を含めて中世後期は生活様式が大きく転換している。火葬土坑は、土坑内部に木炭と少量の火葬骨が検出されたものである。HZK2007地点の火葬土坑SK24の所見からすれば、1辺70cm程度の方形木棺の棺に納められた遺体を木棺ごと燃やす火葬場として用いられており、火葬後は拾骨され、蔵骨器などに納められて別の地点に埋葬されたものである。火葬土坑については、その構造から楕円形5類と円形2類に型式分類することができる（本書Ⅲ章 福永論文）。一方で、本調査区では埋葬地点は発見されておらず、埋葬地としての候補地は地蔵の森周辺などの未調査区が挙げられるが、箱崎遺跡の外に持ち出された可能性もある。

火葬土坑は、HZK2006地点とHZK2007地点南西部に分布している。HZK2006地点で17基、HZK2007地点では22基が検出された。これら両者の間は約80m離れており（第2図）、この間にも火葬土坑が分布していた可能性がある。火葬土坑の分布からみると、北西方向から南東方向に列をなしていた可能性があり、少なくとも4列であった可能性があろう。さらに列の中でもHZK2007地点の南西部の列の中にもいくつかの塊状の分布が認められる（第8図）。こうしたまともりは、親族単位のまともりや時期差などの想定は可能であるが、炭化物の放射性炭素年代は必ずしも一定のまともった火葬土坑の時期を示しておらず（本書Ⅲ章 福永論文）、そのまともりの意味は不明である。また、土坑内に認められる土師器は、副葬品というより、火葬に際して何らかの祭祀的に供えられたものという意味合いがあると思われる。HZK2006地点G区のSK13とSK19の木炭の放射性炭素年代は、15世紀前半を中心とする年代に集中している（宮本 2025）。このほかの火葬土坑の炭化物の放射性炭素年代は、14世紀～15世紀前半に年代が集中している（本書Ⅲ章 福永論文）。HZK1805地点では、元寇防塁廃棄後の火葬土坑SK07（第6図）からは、14世紀後半～15世紀前半の土師器鍋が出土している。このような状況からも、火葬土坑は14世紀後半～15・16世紀を主体とする時期のものであろう。また、HZK2007地点の火葬土坑SK24（第8図）からは、北宋の治平元宝と明の永楽通宝の貨幣がそれぞれ1枚出土している。同じ地点の火葬土坑SK57から永楽通宝1枚が、さらにHZK2007地点南西部の火葬土坑の北端に位置する火葬土坑SK76では寛永通宝1枚が出土している。永楽通宝は初鑄が1411年で、日本では室町時代から江戸時代初期まで流通している。これらの火葬土坑の大半が、14世紀後半～15・16世紀の集落遺跡第3段階の時期に伴うものであると判断される（第9図）。

本遺跡近くの勝軍地蔵堂板碑は、最も古いもので貞和2（1346）年で、14世紀後半のものが主体であるが、最も新しいもので応永年間（1394～1428）のものがあり、14世紀後半～15世紀前半のものである。これらの一部は地蔵松原にあったと『筑前国続風土記拾遺』などに記載されている（福岡市教育委員会文化財整備課編 1992）。地蔵松原の正確な場所は不明であるが、本遺跡近くの旧工学部本館から地蔵の森あたりが候補に挙げられるであろう（宮本 2025）。14世紀後半～15・16世紀は、集落遺



第9図 HZK1801・2007地点の甕棺墓・桶棺墓・木棺墓

跡第3段階に相当するが、この段階はHZK2003・2101地点で瓦葺建物や板碑など寺院遺構が存在する可能性のある段階である（宮本 2023）。同時期の火葬土坑の南側に寺院遺構や板碑が存在することから、火葬土坑と寺院遺構は何らかの関係があると考えられる。

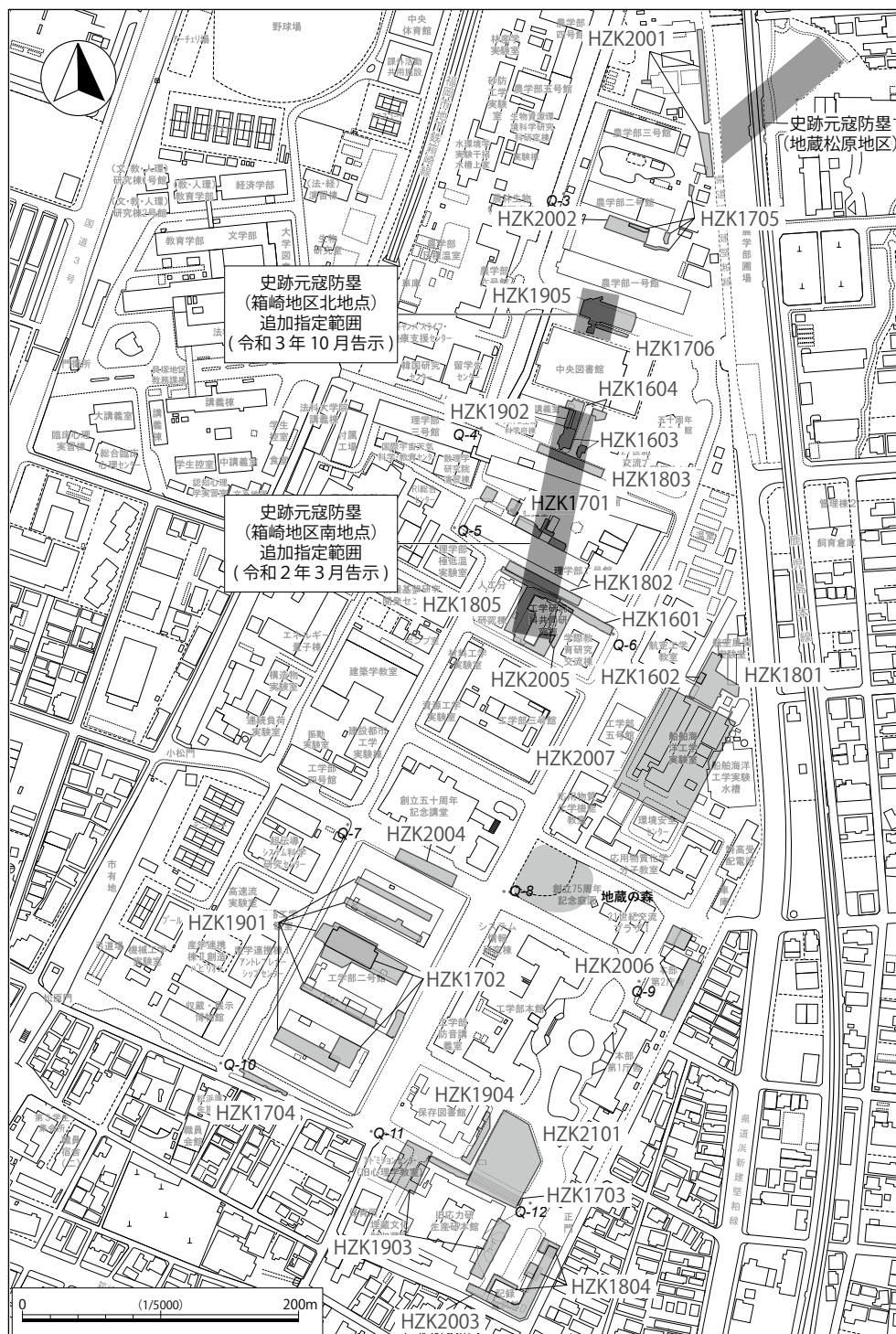
（4）近世

『筑前国続風土記』巻之十八糟屋郡表（貝原益軒編 1973）には、「地藏堂は・・・・箱崎の外北の方にあり。」「地藏堂は寛永八年に、忠之公是を建立し玉ふ。」「地藏堂ある故、松原と云。」とある。地藏松原の由来は、箱崎の北にあって地藏堂があるところからきている。寛永8（1631）年に地藏堂が箱崎の北に建立された記録から、旧工学部本館から地藏の森付近には、近世に寺院が存在していたことが考えられる（本書第Ⅵ章 谷論文）。その寺院は、比較的小さな堂宇であったが、石像物や薬師如来仏などの仏像が集められ合祀されていた。その中には、宋の地藏菩薩石像もみられた（本書第Ⅺ章 梶嶋論文）。中世の第3段階にあった箱崎キャンパス跡地東南部の寺院址にあった仏像がここに集められた可能性がある。黒田家第二代の黒田忠之がこの堂宇を寄進したのは、このような中世以来の寺院址と何らかの関係があったものと思われる。

こうした堂宇が作られる前の16世紀末～17世紀前半には、小型の土壙墓が火葬土坑の北辺域に作られていく（第9図）。HZK2007地点土壙墓 ST21からは頭蓋骨が出土しており、火葬土坑 SK20を切って作られている。土壙墓 ST21は火葬土坑 SK20を切って作られていることから、中世後期の火葬土坑より新しい墓葬である。また、土壙墓 ST21は長軸84cm と小型であり、屈葬の成人男性が埋葬されていた。また、木棺墓 ST33からは鉄釘が出土しており、墓壙の長軸は90cm と小型であることから、成人男性の被葬者が屈葬で埋葬されていたものと考えられる。土壙墓 ST45・33・31は、HZK2007地点の南西部隅で火葬土坑と重なりながら位置しており、桶棺墓と甕棺墓と分布域を大きく異にしている。したがって、これら小型の土壙墓は、中世後期の火葬土坑と近世の桶棺墓・甕棺墓の時期的に中間に位置する木棺墓と考えられる。これらは、中世末から近世初頭の土壙墓（木棺墓）の可能性があり、16世紀～17世紀前半のものであろう。中世後期の火葬土坑と近世中・後期の桶棺墓・甕棺墓の間をつなぐ位置に作られたものである。

桶棺墓と甕棺墓は、HZK1801地点と HZK2007地点のみに認められる。ここで桶棺墓としたものは、小型土壙墓を除く、立膝坐葬のものをまとめて坐棺の桶棺墓と見なしたものである。立膝坐葬には、平面形が正方形の正方形縦棺と円形の桶棺に分けられる（本書第Ⅴ章 福永論文）。HZK1801・HZK2007地点では、砂層のため坐棺の平面形態を把握することは難しく、必ずしもすべてが桶棺と断定できるわけではないことを断っておきたい。第9図に示すように、桶棺墓と甕棺墓は混在してまとまって分布している。HZK1801地点と HZK2007地点では、桶棺墓は77基以上、甕棺墓は117基以上が検出された。桶棺墓と甕棺墓にはともに、六道銭として初鑄が1636年の寛永通宝が副葬されている。両墓制は概ね17世紀後半以降のものとなる。ここで発見された墓石の中で年号が連続する最も古いものは元禄9（1696）年であり、17世紀末のものである。本書第Ⅴ章の福永論文でも、甕棺の年代を型式分類と編年作成から17世紀後半～19世紀初頭と考えられているように、両墓制はおおむね17世紀後半～19世紀初頭のものであると考えられる。ただし、木棺墓が寛永通宝のみで鉄銭は六道銭にほとんど使われていないのに対し、甕棺墓は六道銭において寛永通宝に比べ鉄銭が多く使われている。これは、相対的に桶棺墓に比べ甕棺墓がより年代の新しい時期から造墓されていることを示している。

桶棺墓と甕棺墓はともに副葬品が、六道銭や土師皿以外に、キセル、鉢、毛抜、櫛がセットとなっている。これらの組み合わせにおいて、桶棺墓と甕棺墓における差異はみられない。また、男女の性



第10図 九州大学埋蔵文化財調査室全調査地点と史跡元寇防塁指定範囲

別による副葬品構成の差異も認められない。特殊な副葬品として七星板が挙げられるが、HZK1801地点のST57・64・81・90・97・103の6基の甕棺墓と、HZK2007地点のST172・140の2基の甕棺墓で出土している。いずれも判別できるもので18・19世紀の甕棺墓で、男性の被葬者が多い傾向にある。桶棺墓・甕棺墓地の中でも全体的に北側に分布しており、しかも甕棺墓である点からも近世墓地でも比較的新しい段階のものに副葬されたと判断される。七星板は、中国の儒教的葬祭と関係している

(藤澤 2016)。七星板は、18世紀中葉～19世紀中葉に用いられたとされる(水野 1995)が、本墓地でも18世紀～19世紀の甕棺から出土している。

地蔵の森付近に、寛永8(1631)年に作られた地蔵堂が存在する可能性が高いが、17世紀後半～19世紀の桶棺墓と甕棺墓は、地蔵堂建立後に対応している。17世紀後半の寛文期以降に、江戸幕府は檀家制度によりキリスト教禁教政策を推し進めて行く。本書第Ⅶ章の舟橋論文における古人骨の歯冠計測分析によれば、桶棺墓と甕棺墓は家族単位で設けられていた可能性が指摘されている。特定寺院に付属する檀家の墓地が、桶棺墓・甕棺墓群であった可能性が考えられる(宮本 2025)。その被葬者は、本書Ⅷ章の米元論文で行われた筋付着分析からみた結果、半農半漁の農漁民あるいは宿場町の荷駄の人夫などの下層階級の人々である。HZK2006地点 A 区出土の近世の馬骨(本書第Ⅸ章 菊地論文)が、荷駄に関係するものであれば興味深い。また、頭蓋骨の形質人類学的分析からは、武士階級とは異なる庶民層の形態的な特徴を示している(本書第Ⅷ章 米元論文)。箱崎の宿場町周辺に住む庶民の集団墓であったといえることができるであろう。

4. おわりに

古代末から鎌倉時代前半期の箱崎は天然の良港として存在しており、対外交易の拠点であった(本書第Ⅹ章 伊藤論文)。博多や箱崎を含めた博多湾岸が、東アジア交易の拠点であり日本の窓口であったのである。10世紀の筥崎宮の遷座に始まる箱崎遺跡は、12世紀末～13世紀前半には交易の拠点として中国人商人街として栄えた。この時期、箱崎遺跡の北側に延びる砂州も安定して、箱崎キャンパス跡地東南部まで、中世箱崎遺跡が広がっていく。箱崎キャンパス跡地の旧工学部本館より南側は居住地であり、それより北の地蔵の森以北は墓地空間が広がっていく。

居住地の集落遺跡では、古代末から中世にかけて大きく3段階の変遷が明らかとなっていた(宮本 2023)。居住地の北側の墓地もそれに対応して墓葬が形成されていたことが明らかとなった(宮本 2025)。集落遺跡は12世紀後半～13世紀前半の第1段階、13世紀後半～14世紀前半の第2段階、14世紀後半～15・16世紀の第3段階に分かれる。第1段階の12世紀後半～13世紀に地下水脈に応じて井戸が集中して作られ、近くには掘立柱建物が作られていく。この段階は、中国人商人街である箱崎遺跡の北辺域を形成していた。さらに集落の内部や北辺には、貿易陶磁器が副葬された木棺墓が作られている。

第2段階の13世紀後半～14世紀前半は元寇防塁が維持された時代である。元寇は、日本の服属や来貢を促し通商ルートを確保することを目的として元が起こしたものである(杉山 2005)。1274年の文永の役では、服属した高麗を使い箱崎や博多を攻撃した。その為、建治2(1276)年に博多湾に元寇防塁が建設されることとなった。箱崎の元寇防塁は、薩摩が賦役を担当し、建治3(1277)年に完成している。博多湾の他地区の元寇防塁とは違い、石積みの土塁とその背後に大溝を持つ特異なものであった。さらに、石積みも海側に積み上げるのみで砂で固めた土塁というやや軟弱なものであった。また、理学部付近では、防塁の陸側に隣接して区画溝がみられ、防塁の大溝の埋土には13世紀後半～14世紀前半の陶磁器が含まれており、ここに同時期の建物が存在したことを示している。元寇防塁は弘安の役(1281年)後も50年以上維持運営されており、警護するための宿営地が存在していたのであろう。そうした状況が、発掘調査を通じて明らかとなった。この第2段階の箱崎キャンパス跡地東南部は、第1段階と同じく引き続き井戸と掘立柱建物が若干存在し、中世箱崎遺跡の北辺域を形成していた。

こうした状況が大きく転換するのは、中世後期の14世紀後半～15・16世紀の集落遺跡第3段階である。この段階では、元寇防塁が維持されず、区画溝や建物の方位が変化し、都市区画が変わるとともに、瓦葺建物などの礎石掘立柱建物群が作られている。また、工学部2号館の付近まで中世箱崎遺跡が延び、元寇防塁を壊して区画溝が作られ、集落域が拡大している。HZK2006地点から HZK2003地点で出土した板碑の年号は、14世紀後半～15・16世紀の集落遺跡第3段階のものである。同時期の板碑は、地蔵松原から移されたとされる勝軍地蔵堂板碑にもみとめられる。このような板碑の出土からも、旧工学部本館西側の HZK2003・2101地点の瓦葺建物は寺院の堂宇である可能性がある。この段階に、地蔵の森北側の HZK2006地点や HZK2007地点では火葬土坑が存在し、茶毘に付す火葬場である。墓域そのものの存在は不明であるが、葬法を含めて中世後期は生活様式が大きく転換している。集落域が北側に延び、その北側に火葬土坑と重なりながら、小型土壙墓が中世末～17世紀前半までに作られ、墓域が北側に延びている。

さらに、その北側に築造されるのが、17世紀後半～19世紀の桶棺墓と甕棺墓からなる近世墓地である。17世紀後半には、旧工学部本館から地蔵の森付近に寺院が存在していた可能性がある。近世の箱崎は、筥崎宮周辺の宿場町として中世までの居住域が縮小している。そうした宿場町を中心とした住民、周辺の漁民や農民がこの寺院の檀家となり、檀家制度としてこのような近世墓地が創設されたものと考えられる。その近世墓地は、相対的に桶棺墓から甕棺墓へと葬法が移っていたものと考えられる。

以上のように、箱崎キャンパス跡地で発見された中世から近世の遺跡は、箱崎の地域史を語る意味でも重要な発見となっている。また、石積み遺構と大溝からなる元寇防塁遺構は、国指定史跡元寇防塁として保存されている。箱崎地区北地点と箱崎地区南地点の二つの地点の間には道路が建設され、さらに緑地帯を挟むことで、長さ約270m、幅27mの全体を見通せる遺跡空間が残される予定である(第10図)。今後はこの保存された歴史的空間が、福岡市経済観光文化局文化財活用部によって歴史公園として活用される予定である。また、2025年度末に九州大学埋蔵文化財調査室が解散した後、出土した遺物すべてが九州大学総合研究博物館へ移管される。総合研究博物館は、九州大学箱崎サテライトの旧工学部本館を拠点としてリニューアル・オープンする予定であり、元寇防塁出土遺物も博物館展示などに活用され、研究が続けられるものである。

参考文献

- 足立達朗・田尻義了 2018「石積み遺構構石材の岩石学的分析」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡— HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集 68-78頁
- 市原季彦・下山正一 2019「HZK1802地点におけるジオスライサーの調査成果」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡— HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点調査概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、118-130頁
- 岩永省三 2022「箱崎キャンパス地区の元寇防塁位置推定の変遷要因と元寇防塁を巡る諸問題」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、43-65頁
- 貝原益軒(編) 1973『筑前国続風土記』巻之十八糟屋郡表、名著出版、394頁
- 鹿島薫・福本侑・原口強 2022「地学調査から明らかとなった元寇における巨大台風災害」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、66-88頁
- 藏富士寛(編) 2019『元寇防塁調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1382集、福岡市教育委員会
- 佐伯弘次 2018「箱崎の元寇防塁と薩摩」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡— HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、92-98頁
- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて」『新修 福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』

- 福岡市 242-247頁
- 杉山正明 2005『中国の歴史01 疾駆する草原の征服者 遼 西夏 金 元』講談社
- 鈴木和博・唐木田芳文・鎌田泰彦 2001「鷹島海底遺跡から出土した花崗岩碇石の産地は中国泉州か？」『鷹島海底遺跡Ⅴ』鷹島町文化財調査報告書第4集 鷹島町教育委員会、64-69頁
- 谷直子 2026「Ⅱ 箱崎キャンパス出土の石造物」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告12 箱崎遺跡 補遺編』九州大学埋蔵文化財調査室報告第15集、16-52頁
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 中山平次郎 1984「箱崎の石塁」『古代乃博多』九州大学出版会、213-236頁
- 福岡市教育委員会文化財整備課（編）1992『福岡市の板碑』福岡市教育委員会
- 福田正宏・下山正一・市原季彦・森貴教・谷直子 2018「九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、108-124頁
- 福永将大 2022「九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁研究とその展開」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、180-192頁
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、180-197頁
- 藤澤信彦 2016「近世七星板の展開」『元興寺研究所研究報告2015—水野正好所長追悼論文集』元興寺文化財研究所、179-182頁
- 本田浩二郎 2022「箱崎遺跡の古地形復元」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区元寇防塁総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第7集、97-110頁
- 本田浩二郎（編）2023『箱崎68—第102次・第113次・第118次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1458集、福岡市教育委員会
- 水野正好 1995「紙魚思考（五）」『奈良大学紀要』第23号、139-148頁
- 宮本一夫 2018「九州大学箱崎キャンパス発掘調査の体制」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、1-4頁
- 宮本一夫 2019「元寇防塁遺跡調査の成果と課題」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、153-164頁
- 宮本一夫 2023「まとめと展望」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告7 箱崎遺跡—HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集、256-268頁
- 宮本一夫 2025「まとめ」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告10 箱崎遺跡—HZK1801—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集、104-125頁
- 森貴教 2018「2. 石積み遺構構築石材の調達について—裏込石の重量分析から—」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、79-81頁
- 森貴教 2019「中世碇石の基礎的検討—HZK1702地点出土碇石の位置づけ—」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、144-152頁

報告書抄録

ふりがな	はごぎいせき ちょうさそうかつほうこくしょ							
書 名	箱崎遺跡 調査総括報告書							
副 書 名	九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告13							
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	谷 直子(編)・福永将大・舟橋京子・米元史織・菊地大樹・伊藤幸司・梶嶋政司・宮本一夫							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所 在 地	〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10-1							
発行年月日	2026年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はごぎいせき 箱崎遺跡	福岡市東区 はごぎ 箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 30"	130° 25' 36"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
箱崎遺跡	集落跡・墓地	中世・近世						
要約	本報告書は、2016年度から2021年度に行われた九州大学箱崎キャンパス地区における発掘調査を総括するものである。このうち元寇防塁に関する総括は『箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書』としてすでに刊行されており、各分野からの優れた論考とともに、その成果をまとめられている。そこで、本報告書では、主に元寇防塁以外の箱崎キャンパス地区での調査成果について総括することとした。調査成果については考古学、人類学、日本史、動物考古学の諸分野の先生方からご寄稿を賜り、特に箱崎遺跡の中・近世に関し、新たな視点となる報告を行った。							

箱崎遺跡

調査総括報告書

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第16集

令和8年(2026)2月28日

発 行 九州大学埋蔵文化財調査室
福岡市東区箱崎6-10-1

印 刷 九州コンピュータ印刷
福岡市南区向野1丁目19-1

